平成29年度

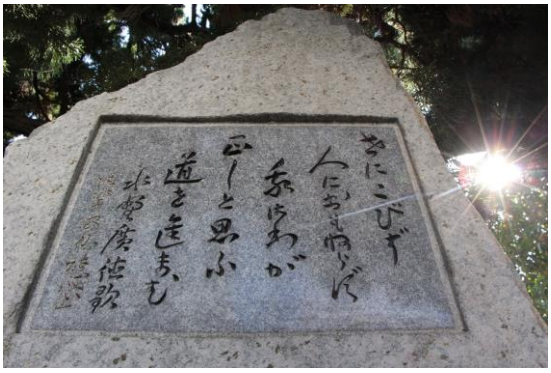
全国私立中学高等学校

全国私学教育研究集会愛媛大会

研 究 集 録

時代を先取りする私学

～こころざしは高く、根は深く～



会　期　平成２９年１０月１９日（木）・２０日（金）の２日間

会　場　松山全日空ホテル（愛媛県松山市）

主催　一般財団法人私学研修福祉会　　協力　一般財団法人日本私学教育研究所

実施　中国・四国地区私立中学高等学校連合会／愛媛県私立中学高等学校連合会

後援　愛媛県／松山市／日本私立中学高等学校連合会

目　　次

発刊のことば　1

実施概要　3

大会役員等一覧　4

全体集会　5

　開会式　6

　愛媛県私立学校活動紹介　１０

　報告　１１

　記念講演　１８

部　　会　３１

　私学経営部会　３１

　教育課程部会　６３

　法人管理事務運営部会　９１

　特色教育部会　１２２

　生徒指導部会　１５７

　学習及び進路指導育部会　１８３

参加者アンケート　２０６

参加者数　２１３

開催地・研究目標一覧　２１４

編集後記　２１６

発刊のことば

一般財団法人日本私学教育研究所所長　中　川　武　夫

平成29年度全国私学教育研究集会愛媛大会は、平成29年10月19日・20日の2日間、愛媛県松山市の松山全日空ホテルで開催され、全国から542名の教職員の皆様にご参加いただきました。

本大会は、愛媛県、松山市及び日本私立中学高等学校連合会の後援により、中国・四国地区私立中学高等学校連合会、愛媛県私立中学高等学校連合会及び一般財団法人日本私学教育研究所が実施いたしました。

本大会の研究目標は、「時代を先取りする私学～こころざしは高く、根は深く～」といたしました。グローバル化の急速な進行、AI（人工知能）の進歩に伴い、これからの教育は、子供たちに予想のつかない未来を生きていくための力をいかにして身につけさせるかが重要となります。本大会では、これからの教育、時代を先取りする教育を考えるためのヒントを多く提供することができたと確信しております。

初日の開会式では、吉田晋・当研究所理事長と中村道郎・実行委員長による挨拶、さらに、公務ご多忙にもかかわらず、中村時広・愛媛県知事の代理として原昌史・愛媛県副知事、野志克仁・松山市長の代理として梅岡伸一郎・松山副市長にもご臨席の上、ご祝辞を賜りました。最後に、新田光之助・九州地区私立中学高等学校協議会会長から次年度の鹿児島大会のご案内をいただき、開会式を終了いたしました。

開会式後の全体会では、愛媛県私立学校活動紹介として新田高等学校ダンス同好会の生徒による「ヒップホップダンス」の披露、日本私立中学高等学校連合会及び当研究所から「教育政策と私学情勢について」をテーマとして、現在進行している中央情勢等の報告を行い、最後に、俳人の夏井いつき様より、「「夏井いつきの句会ライブ～認めあう、伝えあう、俳句の力～」と題した記念講演をいただきました。記念講演は会場内の約500名が全員参加するアクティブ・ラーニング的な内容で大変好評でした。

2日目は、私学経営部会、教育課程部会、法人管理事務運営部会、特色教育部会、生徒指導部会、学習及び進路指導部会の6つの部会に分かれ、それぞれのテーマのもと、講演、実践・事例・研究発表、パネル・ディスカッション等が行われ、多大な成果を収めることができました。

この度、上記の研究成果等を集録にまとめました。各学校の今後の教育活動にお役立ていただければ幸いに存じます。

最後に、本大会開催にご尽力いただきました講師・発表者の方々、また本大会開催の2年前より企画を進めていただき、大会当日は司会・記録並びに運営に携わっていただいた運営委員の先生方に、心より御礼申し上げます。

なお、次年度の鹿児島大会は、平成30年10月25日・26日の2日間、鹿児島県鹿児島市・城山観光ホテルにて、「新時代に向けたさらなる私学の躍進」を研究目標に、6部会を設置しての開催を予定しております。鹿児島大会開催に向けて多大なご尽力をいただいております鹿児島県私立中学高等学校協会の皆様に御礼申し上げるとともに、全国からの多くの方々のご参加をお待ち申し上げます。

実　施　概　要

１　研　究　目　標　　時代を先取りする私学～こころざしは高く、根は深く～

２　会　　期　　平成２９年１０月１９日（木）・２０日（金）の２日間

３　会　　場　　松山全日空ホテル

４　参　加　人　員　　５４２名（募集５００名）

５　基　本　日　程

	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
						40 05	30				30
10月19日(木)				受付	開会式	全体会				教育懇談会	
						※	報告	記念講演			
10月20日(金)		部会		昼食	部会			閉会式	※は愛媛県私立学校活動紹介		

６　全 体 会

愛媛県私立学校活動紹介　「ヒップホップダンス」　　新田高等学校 ダンス同好会

報　　告　「教育政策と私学情勢について」
日本私立中学高等学校連合会　会長　吉田　　晋
一般財団法人日本私学教育研究所　所長　中川　武夫

記念講演　「夏井いつきの句会ライブ～認めあう、伝えあう、俳句の力～」
俳　人　夏　井　いつき

７　部　　会

１　私学経営部会　時代を先取りする学校づくり
２　教育課程部会　輝く未来を築くための私学教育の質的充実に向けて
３　法人管理事務運営部会　学校を取り巻くリスクとその対応
～坂の上の雲のまちからの発信～
４　特色教育部会　私学にこそできる特色教育の実践
５　生徒指導部会　いつでも、どこでも、誰でもできる声かけ生徒指導
６　学習及び進路指導部会　こころざし高く未来を拓く生徒の育成を目指して

大会役員等一覧

1．大会役員（順不同）

髙田　貢	一般財団法人私学研修福祉会 理事長／前学校法人工学院大学　理事長
吉田　晋	一般財団法人日本私学教育研究所　理事長／富士見丘中学･高等学校　理事長・校長
平方邦行	一般財団法人日本私学教育研究所　副理事長／工学院大学附属中学・高等学校　校長
山中幸平	一般財団法人日本私学教育研究所　副理事長／学校法人山中学園　理事長
中川武夫	一般財団法人日本私学教育研究所　理事・所長／蒲田女子高等学校　顧問
長塚篤夫	一般財団法人日本私学教育研究所　理事・全国集会総括責任者 順天中学・高等学校　校長
鈴木康之	一般財団法人日本私学教育研究所　理事・全国集会副総括責任者 水戸女子高等学校　理事長・校長

2．実行委員・指導員（順不同）

委員長

中村道郎	中国・四国地区私立中学高等学校連合会　会長 愛媛県私立中学高等学校連合会　会長／愛光中学・高等学校　校長

副委員長

山中幸平	中国・四国地区私立中学高等学校連合会　副会長 一般財団法人日本私学教育研究所　副理事長／学校法人山中学園　理事長

委員

村崎正人	徳島県私立中学高等学校連合会　会長／学校法人村崎学園　理事長
小野眞澄	香川県私立中学高等学校連合会　会長／香川県大手前中学・高等学校　校長
吉田圭一	高知県私立中学高等学校連合会　会長／明徳義塾中学・高等学校　校長
野田　修	一般社団法人鳥取県私立学校協会中学高等学校部会　会長 学校法人鳥取家政学園　理事長
大多和聡宏	島根県私立中学高等学校連盟　会長／開星中学・高等学校　理事長・校長
高月賢太郎	岡山県私学協会　会長／倉敷翠松高等学校　校長
田中清峰	広島県私立中学高等学校協会　会長／学校法人広陵学園　理事長
古田圭一	山口県私立中学高等学校協会　会長／学校法人早鞆学園　理事長
永井　博	愛媛県私立中学高等学校連合会　大会運営総括委員長／新田高等学校　校長
中川武夫	一般財団法人日本私学教育研究所　理事・所長　蒲田女子高等学校　顧問
長塚篤夫	一般財団法人日本私学教育研究所　理事・全国集会総括責任者 順天中学・高等学校　校長
鈴木康之	一般財団法人日本私学教育研究所　理事・全国集会副総括責任者 水戸女子高等学校　理事長・校長

3．運営総括委員・指導員（順不同）

委員長

永井　博	新田高等学校　校長

副委員長

谷本勝幸	帝京第五高等学校　校長

委員

渡部正治	松山聖陵高等学校　校長
谷本賢治	松山東雲中学・高等学校　校長
末廣久行	済美高等学校　校長
芳野敬三	聖カタリナ学園高等学校　校長
濱元一馬	今治明徳中学・高等学校　校長
窪田利定	済美平成中等教育学校　校長

全　体　集　会

１　日　　時　　平成 29 年 10 月 19 日(木)　13 時 00 分～17 時 00 分

２　会　　場　　松山全日空ホテル　４階　ダイヤモンドボールルーム

３　開　会　式

(1)　開会のことば

(2)　主催者挨拶

一般財団法人日本私学教育研究所　理事長　吉　田　　晋

(3)　実行委員長挨拶

中国・四国地区私立中学高等学校連合会　会長　中　村　道　郎

(4)　来賓祝辞　　愛媛県知事　中　村　時　広　様

松山市長　　野　志　克　仁　様

(5)　次期開催地区代表挨拶

九州地区私立中学高等学校協議会　会長　新　田　光之助

(6)　閉式のことば

４　全　体　会

愛媛県私立学校活動紹介「ヒップホップダンス」

新田高等学校 ダンス同好会

報　　告「教育政策と私学情勢について」

日本私立中学高等学校連合会　会長　吉　田　　晋

一般財団法人日本私学教育研究所　所長　中　川　武　夫

記念講演　「夏井いつきの句会ライブ～認めあう、伝えあう、俳句の力～」

俳　人　夏　井　いつき

５　全体集会運営委員・指導員（順不同）

委員長

谷　本　勝　幸　帝京第五高等学校　校長

副委員長

松　満　幹　生　帝京冨士中学・高等学校　校長

委員

満　尾　大　二　帝京第五高等学校　教頭

木　村　克　人　帝京冨士中学・高等学校　教頭

後　藤　善　明　帝京第五高等学校　教諭

谷　本　眞由美　帝京第五高等学校　教諭

平　井　一　博　帝京冨士中学・高等学校　教諭

和　田　和　美　新田高等学校　養護教諭

東　　美　和　愛光中学・高等学校　養護教諭

全体集会
開　会　式

開会のことば

運営総括委員長　永　井　　博

「松山や秋より高き天守閣」、郷土の俳人、正岡子規の句です。このところ天候が不順で、秋より高きというふうにはなっていませんけれども、晩秋の松山へようこそお越しいただきました。ただいまから平成 29 年度全国私学教育研究大会愛媛大会の開会式を行います。どうかよろしくお願いいたします。

主催者挨拶

一般財団法人日本私学教育研究所　理事長

吉　田　　晋

本日は、全国私学教育研究集会愛媛大会、600 名を超す皆さんにご臨席・ご出席いただきまして開会されますことをあらためて感謝申し上げます。皆さん本当にお忙しいところ、全国からありがとうございます。

また、公務ご多忙の中、原昌史・愛媛県副知事、実は原副知事は総務省からご出向でございまして、今年、香川県 JET プログラムを採用していただいた一番の立役者でいらっしゃいますが、そういう方に来ていただき、また、市からも梅岡伸一郎・松山市副市長にご臨席いただき、この開会式が開催されますことを本当に心より感謝申し上げます。「時代を先取りする私学～こころざしは高く、根は深く～」、まさに我々の思いがここに詰まった研究集会だと思っております。本大会のために、約 2 年半にわたりまして、中国・四国地区の私学協会会長の先生方、そして、何といいましても、担当県でございます愛媛県、中村会長を中心とした実行委員会の先生方に準備万端調えていただきましたことを、あらためてお礼申し上げるところでございます。

さて、この大会は、実は昭和 27 年に始まりまして、今年が 65 回目ということでございます。人間でいえば、今年から老人年金でございます。もう少し研修福祉会からの補助が増えてもいいのかなという思いもございますけれども、年に 1 回、こうして全国の私学の先生方に集まっていただいてこの研究大会を行うということは、私学の立場を大きく表に出す大事な場所だと思っております。

その中で、「時代を先取りする私学」という今回のテーマですが、今行われているいろいろな教育改革、その基は、はっきり言って私学だと自負しております。それも、それぞれの学校がそれぞれの建学の精神の下、特色ある教育を行う上で出てきた素晴らしい、そして一人ひとりの子供の未来、将来を見据えて、その夢や希望実現のために我々は最大限の努力をしている。だからこそ、私学に子供たちが来てくれていると思います。

まだまだ保護者の負担する公私間格差は大きいものがございます。これを是正して、子供たちがどんな学校にも、自分たちの希望する、学びたい学校に行くことができる。そしてそれを守ることが国の仕事だと思います。今、選挙が始まっています。選挙の中で、子供の教育のことは若干言われています。大学の給付型で誰でも大学に行けることができるようにするなどという話もあります。しかし、大学生はアルバイトもできます。高校以下の子

供たちはそうはいきません。この子供たちを守るのは我々だと思いますし、そして、何といっても日本の国は安全でなければいけません。

安全安心な国づくりをしていただける、そういった政党にしっかりと頑張っていただいて、子供たちにしっかりとした未来を見つけさせてあげてほしい、羽ばたかせてあげてほしい、そういう思いで、我々はこれからも教育をやっていく、そういう思いでございます。ぜひ、先生方皆さん、今回のこの 2 日間が有意義にものになりますことをお祈り申し上げまして、開会のごあいさつとさせていただきます。どうぞこの 2 日間よろしくお願い申し上げます。

実行委員長挨拶

中国・四国地区私立中学高等学校連合会
会長　中　村　道　郎

全国私学教育研究集会愛媛大会開催に当たり、中国・四国地区及び愛媛県私立中学高等学校連合会を代表いたしまして、ごあいさつを申し上げます。

まず初めに、7 月に発生しました九州北部豪雨により被災された皆さまに心よりお見舞いを申し上げますとともに、被災地の一日も早い復旧をお祈り申し上げます。

さて本日は、公務ご多忙の中を、中村時広・愛媛県知事の代理として原昌史・副知事に、野志克仁・松山市長の代理として梅岡伸一郎・副市長にご臨席賜りました。心よりお礼を申し上げます。

また、校務でお忙しい中を、全国各地からここ松山に大勢の皆さまにご参加をいただき、愛媛大会が盛大に開催できますことは大きな喜びであります。開催地区、中国・四国の私学を挙げて皆さんを歓迎いたします。

さて、今年、愛媛では 9 月 30 日から 10 月 10 日まで、第 72 回国民体育大会、「愛顔（えがお）つなぐえひめ国体」が開催されました。その余韻冷めやらぬこの松山で、全国私学教育研究集会の開催当日を、感動、喜び、生き生き、わくわくで迎えることができました。

また、今年は、松山が誇る俳人正岡子規の生誕 150 年という記念の年に当たります。「春や昔十五万石の城下哉」と城下町松山を詠んだ句、「初汐や松に浪こす四十島」と夏目漱石の小説『坊っちゃん』に登場するターナー島、正式名四十島を詠んだ句、いずれも正岡子規の俳句であります。現在、東温市にある坊っちゃん劇場では、正岡子規と夏目漱石が松山でともに過ごした 52 日間を描いたミュージカル『52days』が上演されています。本日の教育懇談会で、坊っちゃん劇場にお願いをして、『52days』の一部を上演していただくことになっておりますので、皆さまご覧下さい。

私立学校は、ヘレンケラーの名言「Life is exciting business, and most exciting when it is lived for others（人生は胸躍るものです。そして、最もわくわくするのは、人のために生きるときです）」という言葉にあるように、世のため人のために役立つ人材を輩出してまいりました。さらに、彼らに続く生徒たちを育成し、今後も、日本そして世界に役立つグローバル人材を育成するために、それぞれの学校のビジョンを持ち、常に Change と Challenge、変革と挑戦を重ねてまいりましょう。

本大会のテーマは、「時代を先取りする私学～こころざしは高く、根は深く～」であります。常に先頭に立って日本の教育を推し進めてきた私学が、全人教育の根をしっかりと張り、これからの社会が私学に寄せる期待に高い志を持って応えてまいりたいと思います。

最後に、本大会の開催に当たり、ご尽力いただきました関係各位の皆さまに深く感謝を申し上げますとともに、テーマ「時代を先取りする私学～こころざしは高く、根は深く～」の下で、2 日間の研究集会が実り多い機会になりますことをご祈念申し

上げまして、歓迎の言葉といたします。

来賓祝辞

愛媛県知事　中　村　時　広　様

（代理：副知事　原　　昌　史　様）

まず、全国から愛媛県に本日お集まりいただきましたことを心より感謝申し上げるとともに、歓迎させていただきたいと思います。先生方が私学の教育、これを担っていただいていることを感謝いたしますとともに、私自身もちょっと振り返ってみますと、中学、高校の青春の一番真っただ中のすてきな時間を私学で過ごさせていただきました。当時ちょっと残念だなと思ったのは男子校だったことなのですけれども、今となってはその仲間のほうの結束が固いので、非常にその点は感謝申し上げている次第でございます。

本日、本来であれば中村知事がこちらに参ってごあいさつさせていただくことを大変楽しみにしておったのですが、残念ながら東京のほうに出張しております。知事から、「是非」に、ということで祝辞を預かってまいりましたので、私のほうで代読をさせていただきたいと思います。

祝辞。平成29年度全国私学教育研究集会愛媛大会が盛大に開催されますことをお喜び申し上げますとともに、ご来県の方々を心から歓迎をさせていただきます。

平素、皆さま方におかれましては、私学の振興を通じ、学校教育の進展に多大なご貢献をいただいており、深く敬意を表します。少子高齢化に伴う生産年齢人口の減少、高度情報化やグローバル化の進展など社会を取り巻く環境が大きく様変わりする中、我が国が産業や研究開発といったさまざまな分野で国際競争力を高め、持続的に発展していくためには、未来を担う子供たちの多様な能力を伸ばし、可能性を開花させることが極めて重要であり、そうした基盤となる教育の役割はますます高まっていると考えております。このような状況の下、各私立学校では、建学の精神に基づき、個性豊かな教育活動を積極的に展開されるなど、その充実に努め、社会や時代の変化に対応できる人材を輩出されており、大変心強く存じます。

本県におきましても、私立学校経営の安定化や保護者負担の軽減を図るため、可能な限り私学助成を行っており、とりわけ昨年度から、自転車用ヘルメットの購入費用について県立高校と同様の補助を実施し、ヘルメット着用の促進を通じた生徒の安全安心の確保に努めているところであります。どうか皆さま方におかれましては、本大会を契機に相互の結束を一層強化なものとされ、我が国の将来を支える子供たちの輝かしい未来に向け、さらなる私学教育の振興にご尽力賜りますようお願いを申し上げます。

終わりに、本大会が実り多いものとなりますことを念願いたしますとともに、一般財団法人日本私学教育研究所ならびに各私立学校のますますのご発展と、皆さま方のご健勝、ご活躍を祈念申し上げまして祝辞とさせていただきます。

平成29年10月19日、愛媛県知事中村時広。

以上、代読であります。

本日は、ご盛会、誠におめでとうございます。

来賓祝辞

松山市長　　野　志　克　仁　様

（代理：副市長　梅　岡　伸一郎　様）

本日、本来でございますと、野志市長出席の上、皆さま方にごあいさつをすべきところでございますけれども、ただいま出張中でございまして、市長のほうから祝辞を預かっておりますので、私のほうで読ませていただきます。

祝辞。本日ここに全国私学教育研究集会愛媛大

会が盛大に開催されますことを心からお喜びを申し上げます。全国各地で私学教育に携わられる先生方、ようこそ、いで湯と城と文学の街松山にお越し下さいました。

今日我が国は、高度情報化、グローバル化、少子高齢化が急速に進み、政治経済も先行きの見えにくい状況にございます。また、教育界では、不登校やいじめの問題、規範意識の低下、確かな学力の定着向上、教職員の資質能力向上の課題が山積をしております。このような中、私学教育に携わる先生方には、学校の建学の精神に基づく教育実践により、世間に素晴らしい人材を出され、社会に大きく貢献されていることに深く敬意を表します。本研究集会では、「時代を先取りする私学～こころざしは高く、根は深く～」を研究目標に掲げられ、今後の私学の方向性を研究されますことは、とても意義深く心強い限りでございます。

松山市では、郷土愛や豊かな心を育むために、松山ゆかりの先人や伝統文化を素材とした小中学生向けの『ふるさと松山学』を発刊しております。これからも一人ひとりの笑顔を大切に、子供たちの幸せをどこまでも追い求める授業に取り組んでまいりますので、皆さまには、私学で学ぶ生徒たちのために、そして私学教育の発展のために、一層のご支援とご協力をいただきますようお願いを申し上げます。

さて、今年は、松山にゆかりのある正岡子規、夏目漱石の生誕 150 年の年でございます。子規は当時、松山で中学校の英語教師をしていた漱石と道後方面を散策し、道後温泉本館の三層楼に上がって周囲の景色を楽しんだといわれております。皆さまも、本研究集会の後には道後の街を散策され、新しくオープンいたしました道後温泉別館「飛鳥乃温泉（あすかのゆ）」にて疲れを癒やしていただくなど、松山の魅力を十分に体感していただければ幸いでございます。

結びに、本研究集会のご成功と、お集まりの皆さまの、ますますの御健勝、ご活躍をお祈り申し上げまして、お祝いの言葉といたします。

平成 29 年 10 月 19 日、市長野志克仁の代読でございます。

本日は、ご盛会、誠におめでとうございました。

次期開催地区代表挨拶

九州地区私立中学高等学校協議会

会長　新　田　光之助

お手元に実施案内速報というのがあると思います。この速報に主なものが書いてありますが、来年の 10 月 25、26 日に城山観光ホテルで行います。準備につきましては、鹿児島県の川島協会長を筆頭に皆さんで準備が着々と進められております。例年、協会長・事務局長会議を重ねて開催するということで多くの方に参加いただくようにしておりますが、来年度は重ねて開催できないということをお聞きしております。今日は募集人員 500 名を超える先生方にご参加いただいておりますが、ぜひ来年も多くの方に来ていただきたいと思います。

大河ドラマでもありますが、西郷隆盛に関する記念講演を行っていただいて、また、桜島を初めとした鹿児島の素晴らしい自然をご覧いただいて、お楽しみいただければと思います。今年同様募集人員を超えるほどの皆さん方の参加を希望していますので、どうぞよろしくお願いします。

閉式のことば

副運営総括委員長　谷　本　勝　幸

以上をもちまして、平成 29 年度全国私学教育研究集会愛媛大会の開会式を終了いたします。ありがとうございました。

全体会　愛媛県私立学校活動紹介

「ヒップホップダンス」

新田高等学校・ダンス同好会

新田高等学校及びダンス同好会紹介

新田高等学校・ダンス同好会　顧問　村　上　ゆう子

「ただ今より、生徒のダンスを披露させていただきますが、その前に少し新田高等学校とダンス同好会についてお話させていただきます。」

「新田高等学校は、1938 年に新田中学として設立されました。元々は男子校でしたが、1986 年に男女共学へと移行しました。現在は生徒数約 1600 名。普通科、工業科とあり、普通科にはスーパー特別進学、特別進学、総合進学の 3 コースがあります。」

「文武両道をモットーに大学進学の実績を上げる一方で、部活動もさかんで、今年もインターハイに男子 10 種目、女子 4 種目、合計で 91 名が出場しました。」

「ダンス同好会は、新田高等学校の部活動の中では、最も新しくできた部です。2002 年に設立されました。活動の内容としましては、ストリートダンスを中心にさまざまなジャンルのダンスを行っています。

「部員数は現在 45 名（女子 35 名、男子 10 名）です。戦績としては全国高等学校ダンスドリル選手権大会に 9 年連続で出場。今年度は男女混成 HIPHOP スモール編成で準優勝という成績をおさめました。」

「これから、皆様には 4 つの小作品を見ていただきます。最初の 3 つの作品は、この日のために生徒が作ったオリジナルの作品です。最後の作品は、愛媛が誇る「道後温泉」をテーマにした作品です。ストリートダンスとは少し趣を変えて、表現するということに挑戦をしてみました。どうぞご覧下さい。」

全体会　報告

「教育政策と私学情勢について」

日本私立中学高等学校連合会　会長　**吉　田　　晋**
一般財団法人日本私学教育研究所　所長　**中　川　武　夫**

日本私立中学高等学校連合会　会長　**吉　田　　晋**

私学助成は国の財源と地方交付税で賄っている。私立学校の公的補助は入学金と授業料を助ける意味で 910 万円以下の世帯に国の就学支援金と都道府県の授業料軽減で成り立っている。公立学校と比較すると公的補助の少なさがわかると思う。

明年度の私学助成関係予算は若干の増額をいただき、私立中学高等学校に対しては 35 億円増の 1,057 億円の経常費助成費等の補助金、施設等が 406 億円となっている。耐震化関連では、公立学校は 100%に近い状況にもかかわらず、私立学校については高等学校等で約 89%、大学で 90%と大幅に遅れている。

今回一番の目玉が「私立高等学校等 ICT 教育等設備整備推進事業」である。昨年は 12 億円だった。250 万円以上 4,000 万円以下の ICT に対する 2 分の 1 が補助されるが、限度がある。要求が多いため、今年要求しても出ない学校が出てくる。文部科学省が調査した ICT 環境整備の状況の推移を見ると遅れている。現在、教育用のコンピュータ 1 台当たりの児童生徒数は 6.2 人で、目標は 3.6 人に 1 台である。当初デジタル教科書の採用に伴って 1 人 1 台だったが、「学びの充実が期待される教科の一部について教科書に代えて使用する」という併用制になった。将来は AI の時代であり、ICT が必要である、デジタル教科書にすべきだと言っていた中央教育審議会・初等中等教育分科会の中のデジタル教科書に関する委員会がトーンダウンしたのはお金の問題であると思われる。「学びの充実が期待される教科の一部」、あくまでも副教材の位置づけのため、3.6 人に 1 台で良いとなった。授業の 3 分の 1 だけが使えばあとは構わないということである。

今、タブレットでは遅れている時代になった。海外の学校もノートパソコンの時代だ。キーボードが打てなければ CBT をこれから導入する中で全く使えない。海外ではタブレットは小学生までで、中学高校生はほとんどノートを使用している。そういうことをしっかりと考えていかなければいけない。

グローバルな視点に立って活躍する人材の育成では、SGH は増額されず、現在の 123 校を去年と同様 1 校も増やさない。一方で SSH は増えている。英語 4 技能と言っている国の大勢と全く違う状況がある。

就学支援金関係で一番大きなことは、私立小学校中学校に通う児童生徒への経済的支援に関する実証事業として 12 億円が組み込まれたことがあげられる。国公立の中高一貫校が入学試験を実施していて、その学校に入学して合わなければ通常の公立の中学校に移動できる。私立の中学校と全く同じである。私立中学校はお金を取られるが公立や国立は取られない。まず中学校で風穴を開けようと、当初は中学校の 590 万円以下の人に 12 万円ということで検討が始まった。そのあとに、小学校だけ支援がなくなるのはまずいと小学校が

入ったために 400 万円以下 10 万円になった。

国で教育費調査を行った結果、400 万円以下は 3.8%以下くらいだからと、文部科学省は 12 億円を要求した。今年 7 月から各県に調査を依頼すると全体の 6.6%、2 万 1,200 人が要求してきた。総額 21 億 2,000 万円だった。調べると 7 割程度が個人事業主で、3 割程度が親からの遺贈などで養育費をいただいているとか、親戚の援助を受けているというような人であった。1 割程度は本当に 400 万円以下でも私立学校で学ばせたいという人がいるかもしれない。また、今後は税制も問題になる。

高校就学支援金は安定してきた。だからと言って生徒数が大幅に増えているわけではない。ただ、東京都が 710 万円以下で 44 万 2 千円まで支援してくれた。大阪の 58 万円、京都の 60 万円という支援もあるが、全体で 118,800 円が、平成 22 年から変わっていない。これは当時の都立高校の授業料が基準になっている。これを上げると公立も増やさなければならないし、私学も増やさなければならないので変わっていない。ICT をはじめ新しい教育が加わってきている中で、私学は教育費をどのように捻出するかと言えば授業料値上げになる。高校就学支援金は少なくとも全国平均の 39 万円くらいはいただきたいということが我々の願いである。

文部科学省・初等中等教育局企画課長に質問状を出した。1 つ目が「国公立学校の意義と役割について」である。国公私立学校はともに我が国の次世代を担う子供たちを教え育むという目的は同じだが、拠って立つ基盤が大きく違う以上、創意工夫の範囲や限界もまたそれぞれの基盤の範囲であるべきと考えるという、公立学校の意義、国立学校の意義、私立学校の意義を質す質問になっている。①「公立高校の使命と地域の活性化」。公立高校で特色化した学校を作っているが、公立学校とは何なのか、文部科学省としてどう考えているのか。②「国立大学附属学校の存在意義と役割について」。各都道府県の教員養成系学部の附属学校として設置している小学校及び中学校は主に教育実習の場あるいは教育上の課題についての実験校と位置づけられているが、今は進学校になっているのではないか。2 つ目が「公立学校の生徒等の募集地域決定の根拠について」。3 つ目が「国公立中高一貫教育校の授業料以外の徴収について」、特色化した学校であるのになぜ一律で良いのか。4 つ目は「広域通信制高校の現状と見直し」である。

これに対する高等教育局大学振興課長と初等中等教育局企画課長からの回答が、「『公立学校における特色化等の取組』については、本来基本のものをやらなければいけない。ただその上で『各教育委員会においては地域のニーズ等を踏まえて各高等学校の特色化を推進しているものと承知しており、それぞれの地域の各公立高等学校の在り方については、設置者である教育委員会の権限と責任において決められるべき事項』」である。つまり、文部科学省は各教育委員会に投げているのだから教育委員会が自由にやっても良いということにしている。

国立大学附属学校の存在意義と役割については、今年の 8 月 29 日に「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議」が結論を出した。もともとは教員の採用も減ってきて、教職は大学院を出ないと取れないようにしようとした。ところが開放制教員養成制度により教員免許状が取得できる大学が多くある。我々は反対していた。文部科学省としては見直しをかけたが、会議では我々が言ってきたことと同じになった。

公立学校の生徒等の募集地域決定の根拠等について、初等中等教育局長は、「法令上禁止されているもの

ではないが、地域の実情等に踏まえて過当な生徒の獲得競争が行われないよう配慮することが重要」、鹿児島県に対しても「私学関係者と十分な意思疎通および必要な調整をしながら開校準備を進めていただきたい旨お願いしている」と回答があった。実は東京都と大阪府と福岡県で入試を行っているが、各教育委員会は何も聞いていない。鹿児島県の楠隼中学高等学校だけでなく、島根県の学校も数年前から募集し、全国から180 人くらい留学ということでやっている。広島にもできるようでいろいろなところで始まっている。本当に考えていただきたい。

国公立中高一貫教育校の授業料以外の徴収については、公立学校の授業については提供される教育の対価ではなくて営造物使用料という定義づけがあり、授業料という趣旨で金銭を徴収することができない形になっているが、授業料以外の名称ならば徴収できる余地はあると思う。特に公立中高一貫校については、特別の教育を実施していることを理由に付託金とか使用料等の名称で費用を取るべきなのではないか。そういう意味では設置者としてしっかりやって欲しいという思いがする。

「高大接続改革」で新しい話としては、「高校生のための学びの基礎診断の実施方針」がある。高大接続システム会議が始まった当初、この「基礎力テスト」は高校 2 年生時に行い、3 年生の推薦入試とか就職に使う試験と言っていた。ところが 180 度転換してしまい、はっきり言って今の小学校中学校の学力テストと同じものになってしまった。

「その他」として「運用開始から 3 年経過後を目途に実施状況について検証を行い」「次期学習指導要領への対応等の必要な措置を講じる」。今年度中に新しい学習指導要領ができるが、その次の 10 年後の学習指導要領のためにやるという。それなら今の学習指導要領は変えなくても良いではないか。私は今回も変わったと言い切れる状況と言えないと思っている。

「大学入学者選抜改革」については「受験生の学力の 3 要素について多面的・総合的に評価する入試に転換」する。そして平成 32 年度から「大学入学共通テスト」を開始して、英語の 4 技能と記述式を入れると名言をしている。

個別選抜においては「学力の 3 要素が評価されていない入試」を「新たなルールとして認定」して変わっていく、AO 入試・推薦入試において、小論文、プレゼンテーション、そして教科・科目に係るテスト、共通テストのうち、いずれかの活用を必須化する等、いろいろルールを変えて、選抜性の低い学校の無試験入試のようなものを無くそうとしている。

英語 4 技能については「学習指導要領との整合性」と言っているが、学習指導要領というのは最低基準である。今、語彙数でいうと 3,000 語くらいで、TOEFL や IELTS は 7,000 から 10,000 語は単語を知らないと無理であるが、それは別に自分たちでやれば良い。学習指導要領の通りにやっているとこの試験を受けることができないわけではない。

ケンブリッジ英検、IELTS、TOEFL は、国際的に通用する試験である。アメリカやヨーロッパの大学に行くときに、例えば C1 レベルがあれば英語は認められるという国際的レベルの試験である。それからケンブリッジ英検と英検は一生涯資格になる。TOEFL、IELTS、TEAP などは 2 年間の資格である。例えば高校 2 年生で 1 級を取得した子供は一生 1 級を持っている。この子供が高校 3 年生の 2 回までに試験結果を出さなければいけない。そのときたまたま体調が悪くて失敗したらどうするのか。こんな不公平はない。

それから機会均等の問題。大都市圏の子供たちは受験に行けるが地方の子供は行けない。そこで考えてみて欲しいのが CBT である。各学校に ICT 環境をしっかり整えて CBT で試験を受けられるようにすればみんな受験できるようになる。

費用的な問題で言うと、この認定試験の値段を下げさせるのは難しい。TOEFL も IELTS もケンブリッジ英検も世界共通なので、日本だけ安くできるわけではない。国が補助すればできる。今、東京都では私立学校 300 人まで 15,000 円を補助するとした。TEAP であれば 15,000 円で受験できる。TOEFL とか ILETS を受ける子供はそれに 7,000 円から 8,000 円を負担すれば受験できる。これだけでも全然違ってくる。この 4 技能を進めていかなければ日本は絶対に遅れていく。そういう意味でぜひ皆様にも理解いただき、県にしっかりと言っていかなければいけないと思っている。

「平成 33 年度大学入学者選抜実施要項の見直し係る予告」では、高大接続改革の最終報告を受けて、33 年度から一般選抜、総合型選抜、学校推薦型選抜というように変わる。

「1、2 科目で実施されている場合や記述式がない場合があるのでそれを見直せ」と大学にも厳しいことを言っている。実際に子供たち本人の資質とか、例えば部活動とかボランティア等を評価する、つまりアメリカやイギリスの入試を真似しようと思い、高大システム改革が進んだにもかかわらず、大学と公立高校の壁でだめになる。

私立高等学校は大学が入試を変えてもいくらでも生徒は入学してくるだろう。何も全員に英語 4 技能をやらせようとは思っていない。極端な言い方をすると、一番下の層はアルファベットも書けないが、98%が高校に入学してくる。全部の子供に TOEFL を受験させることは困難である。教員たちがそれを変えていこうとしないこともあるが、サポートしないということもおかしいと思う。子供たちのことを考えたときにこの 4 技能が必要だということで考えていかなければいけないと思っている。

「教育振興基本計画」も問題を多く含んでいる。人生 100 年時代を豊かに生きるために、また超スマート社会を生き抜くために、教育を通じて一人ひとりの可能性とチャンスを拡大しなければいけない。そのための 5 年間の政策課題が書かれている。まず「夢と自信を持ち、可能性に挑戦するために必要となる力の育成」である。そして 2 番目が「社会の持続的な発展を牽引するための多様な力を育成する」、3 番は「生涯学び、活躍できる環境の整備」をするために、「人生 100 年時代を見据えた生涯学習」、「職業に必要な知識やスキルを、生涯を通じて身につけるための社会人の学び直し」である。4 番は「誰もが社会の担い手となるための学びのセーフティネット」であり、「家庭の経済状況や地理的状況への対応」であるが、それには「教育へのアクセスの向上、教育費負担の軽減にむけた経済的支援」が必要である。ここではっきり経済的支援と言っているにもかかわらず、補助金を減らそうとしている。5 番が「教育改革推進のための基盤を整備」、これが我々にとって一番大事になる。教員の働き方改革である。ここで「専修免許状保持者の割合の改善」などと言っている。しかし、専修免許状を持っていれば良い先生というのであれば誰だって取るが、必ずしもそうではない。

「ICT 利活用のための基盤の整備」が徹底的に書かれている。「私立学校についても国公立学校の状況を勘案しつつ、ICT 環境整備を推進する」。ここで、私学が後回しになっていることを見落としてはいけない。先進的な教育を行っているのは私学である。先進的な教育を行っている学校に補助を出せば良いと思う。そ

してそれを拡げる。

教育振興基本計画の審議経過で「私立学校の振興は決定的に重要である」という言葉が入った。この言葉は確かに嬉しいが、その次に「寄附金収入その他の民間資金を自主的・積極的に調達するための環境の整備」、「経営環境の厳しい中、経営状況を的確に分析し、自主的な早期の経営判断を行うよう必要な支援を実施するなど、私立学校の教育研究環境の整備に向けた取組を推進することが重要」。重要と言いながら「寄附金で」と言っている。高等学校では寄附金を集めることは難しい。

寄附税制の中で、学校への寄附金は入学年度の 1 月以降でないと認められない。入学時の寄附金は免税対象ではない。私はこれを変えるべきだと思っている。

生徒数の推移については、22 年度に支援金が見直されたあと、実際に生徒数が増えているのかというと、第 1 学年の私立の生徒数の割合は平成 28 年度で 31.9%と 22 年度から 2%くらい増えている。ただし生徒数が変わっているので、実際には 6,000 人くらいしか増えていない。定員充足率で言えば私立は 86.5%が 89.6%になっただけで、中学は減る一方である。充足率が 100%になったならば支援金のおかげだと言われることはわかるが、今は決してそう受け取れない状況にある。

私立学校の独自性とは何のためなのか。それはこの 21 世紀を担う子供たち一人ひとりのためである。一人ひとりの子供は違う。国の言うように何でも平等、何でも均一ということをやっていると私学は終わってしまう。

一般財団法人日本私学教育研究所　所長　**中　川　武　夫**

教育改革などの状況を日本私学教育研究所ではどう捉えているか、それを各研修会にどう反映しようとしているのか、そのことにポイントを絞って報告する。

次期学習指導要領の中にカリキュラム・マネジメントと呼ばれるものがある。この言葉はアクティブ・ラーニングと同じように言葉だけが一人歩きしている感がある。私立学校にとってのカリキュラム・マネジメントは体裁だけを整えれば良いというものではない。その学校の創立者の思い、建学の精神を縦軸に、その時代の最先端の教育を横軸にして編みこむものだと思っている。それを実践していくときに各学校の建学の精神が生きたものであるのかどうか。創立者の気持ち・思いを、生徒も教員も学校関係者のすべてが共有し共感した上で、このカリキュラム・マネジメントができるものと思っている。この問題についてはあらゆる場面で先生方と共に考えていきたい。

新しい学びの世界は、教科のエゴ、教科のセクト意識に阻まれてはならないと思っている。学校によっては相変わらず教科セクト主義、教科の中だけで考えることから抜け出せない状況があるように思う。これらの問題は、例えば総合的な学び、CLIL（クリル）や PBL などで教科の枠を超えて総合的な学びの場を提供することを優先しなければならない。

新しい学びには評価も大切となる。生徒たちが自分の興味を念頭に学んでいくわけだが、その状況をどう

評価していくのか。例えばパフォーマンス評価とか、そのためにルーブリック表を作るなどさまざまな方法があるが、残念ながらまだ実践している学校が少ないということが現状である。当研究所の私立学校専門研修会・教育課程部会を中心としてこの問題を取り上げていきたい。

高大接続の改革によって大学入試が大きく変わっていく。大学入学共通テストの英語について文部科学省は 12 月中旬まで実施団体の申請を受け、本年度末に公表する予定である。今後とも私学の意向をしっかり反映させたいと思っている。

新しい試験を実施していくための実証事業の 1 つに、紙ベースで高校から大学へ送っていた調査書をデジタル化しようというデジタル調査書がある。これは関西学院大学とベネッセと富士通が組んだもので、先生方が作成する調査書をデジタル化することである。生徒たちは自分の学びを蓄積していき、出願に使うという実証の実験である。

これにはいくつかの問題がある。例えばこの事業に参加するには先生も生徒もベネッセ・ハイスクール・オンラインに登録しなければならない。そうならないように工夫し、オープンにしていろいろな事業者が参画できるようにしていると聞いている。最初の計画では公立高校だけが対象になっていたが、文部科学省有識者会議委員（高大接続改革）である順天中学高等学校の長塚篤夫校長が、私立学校が蚊帳の外にされてしまうと交渉し、私立・公立を問わず全国の学校に案内が送付されたという経緯がある。

もう 1 つの問題点は、生徒のほとんどが持っている端末はスマホであることから、生徒はスマホを使って参加することで進んでいるが、高校の現場ではスマホ使用禁止という指導をしている学校が多くある。これはいわゆるスマホ性悪説に立っているが、スマホは便利な端末であり、学びに上手に使っていこうという考え方がないとなかなか新しい取り組みができないと考えている。SNS なども含め、こうした点については各学校が実情に合わせながら、どう問題をクリアするかということも研修のテーマにあげていきたい。

グローバル教育、AI・人工知能の問題もある。グローバル化が進むことにより、いろいろな問題が発生している。例えば日本語で授業に参加できない生徒が急増している。東京オリンピック・パラリンピックを控えてさらに急増し、多国籍化が進むと思う。多国籍化が進めば、従来当たり前だと思っていたことへの見直しが必要になる。卑近な例ではクレヨンや色鉛筆で使っていた肌色という表記が消えて、ペールオレンジとか薄橙という表記に変わっている。これは 2002 年に韓国で、ガーナ人のグループが肌色という表記は人種差別だと国家の人権委員会に訴え、人権委員会から改善の勧告があって、韓国では変えた。日本ではそれほど問題にならなかったが、自主的に変えた。

校則についても考えていかなければならない。例えばイスラム教を信仰する女子の生徒は肌の露出を嫌う。宗教上の理由でピアスをする人たちもいる。学校としてもそういう視点から見直していく必要がある。

英語の 4 技能では英語教員の問題がある。我々の実施する英語教育の最新事情等の情報に関する説明会や講演の研修会には多くの先生方に参加いただいているが、プログラムに英語のワークショップをつけ加えると途端に参加者が減少する。英語の speaking に若干自信が持てない先生方が多いのではないかと感じる。そのような先生方も含めて、今後も英語の研修等を続けていき、現在開催している私立学校特別研修会・外国語（英語）教育改革特別部会をもっと進化させる形で実施したいと考えている。

グローバル化の問題、AI 等の関わりについては私立学校専門研修会・イノベーション教育（グローバル・

ICT 活用）研究部会等で取り扱っていく。同部会は、内容については学校にイノベーションを起こすものであればジャンルを問わない。開催場所も国内外を問わず一番良いと思う場所を考えている。昨年はアメリカのシリコンバレーとスタンフォード大学等に行き、STEM 教育を学んできた。次年度については実施内容が確定次第、先生方に案内を行う予定である。

教員のなり手が減少している。東京都の私学教員適性検査でも、今年はついに受験者が 3 万人を切った。教員になりたいと思っている人もまず公立ありきで、教職課程のある大学では公立学校教員の採用人数がステータスのような扱いになっている。我々としては私立学校の魅力を何とかして伝えていきたい。例えば私学フェアとか私立学校展とか熱気溢れるところに関係者を呼んで、少しでも私立学校の魅力をわかっていただく努力も必要だと思っている。

採用した先生方の育成については、全国各地の私立中学高等学校の管理職等の先生方に協力をいただき、初任者研修や中堅教員研修等を行っている。さらには次世代のリーダーの育成及びネットワークづくりを行うことを目的に、私立学校専門研修会・次世代リーダー育成部会を実施している。

教員免許状更新講習は毎年実施しているが、「どうせ受けるのであれば、私立学校関係者による私学のための内容のプログラムを」と考えて実施している。

今、政府では働き方改革についての検討が進んでいるが、ほとんどは人を増やすことに終始している。クラスの指導員を作るとか、教員事務の補助員を作るとか。私立学校ではなかなかそうはいかない。公立がそういう形を取るのであれば、もっと私学に補助をという活動は続けていかなければならないが、各学校としても学校での仕事の見直しが必要になる。不必要な会議や必要性の少ない書類の作成を見直す等さまざまな改善点が見えてくる。このような問題については、私立学校専門研修会・法人管理事務運営部会で重点的に取り扱っていく。

私どもでは毎年 30 人の委託研究員を募集、採用している。採用された先生方には、年度末に開催する委託研究員研究成果報告会で 1 年間研究を続けた成果を発表していただいている。現場ですぐに役立つ内容が多く、傍聴希望者がたいへん増えている。もっとオープンにして、先生方の研修の場として利用いただきたいと考え、今年度から研修会形式での開催を考えている。文部科学省補助事業のため、参加費は無料であり、興味ある部分だけ参加いただくことも可能である。

最後に、入試問題の著作権の問題が再びクローズアップされている。入試問題や授業で使うだけであれば問題ないが、それを過去問題集として配付したり、ネット上で公開したりすると著作権が発生する。アクティブ・ラーニングで用いる図表・グラフ・写真等も同じ扱いである。先般、公立学校の校長先生が「学校だより」にある方の文章を引用したことに対し、著作権を扱う団体が今後は法的手段に訴えるとかなり強い警告を発した。

実際問題として著作権者と学校が個別に交渉することはたいへんである。著作権利用等に係る教育 NPO 法人もあるので、このようなところを介せばかなり安価で交渉できる。現在 37 都道府県の 532 校がこの組織に入っている。日本私立中学高等学校連合会としてもこの組織への加盟を推奨している。

全体集会　記念講演

「夏井いつきの句会ライブ～認めあう、伝えあう、俳句の力～」

俳人　**夏　井　いつき**

本日は私学の先生方との句会ライブにしたい。一方的に話をするだけではなく、会場内の 600 人くらいの先生方が 5 分で俳句が 1 句できるようにしてお帰りいただくという実験を行いたい。

俳句というものが学校現場でどれだけ役に立つか。私は講演をしながら、そして実際に句会ライブを子供たちと行い、それを先生方に見ていただき、さらに教員の実技講習という形で、全国のすべての小学校中学校高等学校に句会ライブをできる先生が 1 人は必ずいるというようにしたいと考え、俳句の種蒔き運動という活動をかれこれ 30 年近く続けている。

最初に取り掛かったものが「俳句甲子園」という高校生の俳句の大会である。俳句甲子園は 5 対 5 の団体戦で、赤 5 人白 5 人、そしてほぼ体育会系のノリで行っている。先鋒、次鋒、中堅、副将、大将と、それぞれ大きな短冊に赤の句、白の句が出てくる。そしてそれぞれ相手の句に対して、改善点や良かった点を議論するのが俳句甲子園の一番大きな特徴である。

俳句甲子園を始めた頃は、その議論というものすら受け入れられなかった。俳句は 5･7･5 の文字だけで鑑賞すれば良いもので、議論すべきものではない、夏井某という人が高校生を集めて俳句の悪口を言わせ合っている大会だとかいろいろなことを言われたが、私はあまり心配していなかった。最初の頃は子供たちの俳句が恐ろしく下手くそだったので議論もたいへん未熟になってしまっていたが、作品が良くなっていくと議論も必然的に良くなっていく。

今年 8 月が 20 回目の大会だった。作品のレベルが文学と言えるところまできたという実感が強くなった。今年の最優秀賞になった句が、「旅いつも雲に抜かれて大花野」である。西行も旅をし、芭蕉も旅をし、古今の俳人たちはみんな旅をした。そして今の若い人たちもいろいろな意味で旅をしている。「花野」は秋の季語である。秋の草花が咲き乱れている美しい花野に佇んで、少年たちは旅をしながら、旅というのはいつも頭上の雲に追い抜かれていくことだなと。悠々とした時間と空間、それから古今の俳人の人たちへの敬意も含んだ本当に見事な句だと嬉しく思った。そういう句ができる高校生がどんどん育ってきている。そしてそういう句をめぐって議論をすることは本当に楽しいと思ってくれる高校生が育っている。

俳句というのはもともと勝負がつくものではない。だからこそ敢えて点数をつけて勝負をする。そこで初めて論点が生まれる。なぜ負けたのだろう、なぜ勝ったのだろう。子供たちが俳句としっかりと取り組んでいく、俳句の中身、言葉の奥を読むきっかけとして勝敗というものを使わせていただいている、それが俳句甲子園という大会である。

点数や順位をつける手法を、私は今「プレバト！」というテレビ番組でも使っている。あの番組はタレン

トさん・芸能人のみなさんが俳句の「は」の字も知らないでやっている。だから、日本語として意味の通じないものが「才能なし」。誰でも考えますよというのが「凡人」。そして詩のかけらが少しでも見受けられるというのが「才能あり」というように仕分けをして番組を展開している。

あの番組を始めて、言葉のメカニズムというものを私は初めてきちんとわかってきたような気がしてきた。日本語の助詞の効果、語順の効果、映像をどうやって生み出すのか。たった 17 音だが、映像の編集と同じようにどこでカットを切り替えると読み手の脳の中に鮮やかに映像が再生されていくのか、いろいろなことをあの番組のおかげで勉強した。

あの番組におけるもう一つのありがたいことは、出演者の中にジャニーズ系の若い方々がいらっしゃる。特待生とか名人になっている Kis-My-Ft2（キスマイフットツー）の若いメンバーが、何かを学ぶということをものすごく真剣に頑張って、テレビの画面でもって「学ぶってカッコ良い」とか、「努力するってイケてる」ということを小学生・中学生・高校生の子供たちにストレートに自分の体を使って訴えてくれている。本当にありがたい、嬉しいことだと思っている。

彼らは「俳句をやりだして自分のものの見え方が変わってきた」と言っている。いつも通っている道筋だから自分の眼球には映っていたはずなのに、朝、自分の家からどこかまで行くその道すがら、こんなにたくさんの花があった、植物があった。風とか雲とか空にも季語という名前がある。この家のこの角のなんだかわからない花、これが金木犀か。こういう匂いがするのか。眼球には映っていたけど認識していなかったということを彼らは初めて知るようになっている。

彼らの生活は嬉しいことばかりではない。辛いことしんどいこと、それこそが俳句のタネとして自分の中にある。そういう生の気持ちを吐き出したときに、なぜか夏井先生は「ワンランク昇格！」と言ってくれる。脳の中でこれカッコ良いかなと思ったことを出したら「現状維持」と言われる。結局自分の体験というものを生の形で生の言葉で表現できるということがすごいのである。あの子たちがそういうことを言ってくれる。

私はそういう思いを全国の小学校・中学校・高校の子供たちに、言葉と心、心を育てるために言葉を育てる。言葉を育てることで心がさらに豊かになる。こういうことを伝えようとして日本中を歩き回っている。

しかも俳句は国語科の 1 単元ではない。教育活動全部とリンクできる奥行き、懐を持っている。例えば文化祭、運動会、入学式、卒業式、すべての学校行事が季語になっている。理科の観察というものは俳句を写生するときの観察眼を育てることと全く同じである。修学旅行に行った。原爆ドームを見た。そこには「原爆忌」という季語がある。学校教育活動の真ん中に俳句という芯を 1 本通すだけで、すべてのものが組み合わされて大きな車輪になっていく、私はそう考えて、子供たち、そして先生方に俳句の普及運動、俳句の種蒔きを行っている。

ただ、そういう話をいくらしても先生方は思った以上に保守的である。「そうは言っても自分が作ることも難しいのに子供たちが作れるわけがない」とか。もっとすごい逃げ口上は、「子供たちは若くて感性がきらきらしているからできるが、私は感性が錆びついているからできない」とか。そのようなことを言うと、教員として給料をもらうことに問題があるのではないかと私は思う。今日は先生方のそういう思い込みをぶち壊すために、ここに立っている。

ここからは、先生方と一緒に俳句の簡単な作り方やってみたいと思う。この作り方なら、日本語が喋れる

人であればどなたでも、3 歳くらいからもうできる。どなたでも私の言う通りにやると 5 分で 1 句俳句ができる。5 分で 1 句、1 日 1 句俳句を考えることで、脳の前頭前野の血流がすごい勢いで動いて認知症予防や認知症治療になるという科学的データすらある。

俳句というのは季語と 5・7・5 という 2 つのシンプルなルールで出来上がっている。ただ、5・7・5 は厳密に考える必要はない。俳句をゆっくりと楽しんで認知症予防にしようかと思っているくらいの方々は、ぴったり 5・7・5 になったらカッコ良い、1 音くらい多くても 1 音くらい少なくても気にしない、これが大事なところだ。季語も、「季重なり」はタブーではない。名人になってくると季語が 2 つあるいは 3 つ入っていても素晴らしい句はいくらでも存在する。私は、俳句が作れるかどうかわからないと言っている人たちを「裾野」と呼んでいるが、チーム裾野の人たちは 1 句 1 季語にしておいたほうが失敗しにくいという、愛の教えだと考えて欲しい。

俳句の頭の 5、真ん中の 7、最後の 5 は、それぞれ「上五」、「中七」、「下五」と言う。全部足して 17 音。ところが 5 音分くらいは季語に取られるので、17 引く 5、自分の脳で実際に作るのはたった 12 音分くらいである。

例えば今日は時折冷たい雨が降る。季節は秋。もうこれが季語になっている。「秋の雨」と言った瞬間に、俳句という文学作品の約 3 分の 1 が勝手に出来上がっているという仕掛けになっている。こんな文学はどこにもない。要は、「秋の雨」と上五に入れると、中七・下五、12 音分くらいを何かつぶやける人であれば、俳句が自動的にできてしまう。先に 5 と 7 で何か 12 音つぶやいておいて、下五に「秋の雨」と入れても結果は同じである。要は 12 音喋れるかどうか、ぴったり 12 音でなくても良い。

句会ライブ

夏井氏 : 私の説明をここまで聞いて、「そんなこと言ってもまだ自信ない」という方はいらっしゃいますか。まだ自信のない方を使って実験します。お手伝をお願いします。お名前教えて下さい。

Y氏：Y．Kと申します。

夏井氏：Kさん。俳句は下の名前で呼び合います。私のことは、俳句集団「いつき組」の組長なので組長と呼んでも良いし、いつきちゃんでも良いです。Kさんは俳句まったく自信ないですか。

Y氏：全くないです。小学校以来作ったことがないです。

夏井氏 : 今、3 フレーズくらいベラベラッと喋りました。最初に何を言いましたか。「自信は全くない」。「秋の雨自信は全くありません」。だいたい 5・7・5 で季語が 1 個入る。チーム裾野の最低ラインに入ってきた感じです。最後は何とおっしゃいましたか。

Y氏：小学校以来、作ったことはありません。

夏井氏：「秋の雨作ったことはありません」。最低ラインの 2 句目がこうやって増産されていくわけです。でもここら辺はまだ俳句として鑑賞するほどのものではありません。質問します。何か答えて下さることが俳句のタネになっていきます。何を聞きましょうか。個人情報ですけど、結婚していますか。奥様はどういう方ですか。

Y氏：見た目はすごく優しそうな女性です。

夏井氏：「見た目はすごく」、ちょうど 7 です。「優しそう」と。「見た目は少し優しそう」。これもう俳句のタネです。ここにどのような季語を入れるかで、本当に優しいのか、本当はとてつもなく恐ろしいのか、取り合わせる季語によって決まってきます。例えば「秋うらら」という季語があります。秋だけど春のようにうららかでお天気が良い。「秋うらら見た目は少し優しそう」。こうするとそれほど人間関係はギスギスしないでしょう。「見た目は少し優しそうだけどときどき怖いときもある妻です」くらいの感じです。ところが「秋の風見た目は少し優しそう」。空気変わりますね。どう変わりますか。

Y氏：秋の風ですから、冷たい風が吹きそうでもありますし。台風が来るかもしれない。

夏井氏：「少し」と言いながらここからあとの展開はひどい方向に行くのではないか、そんな感じになります。この作り方はどんな季語を取り合わせるかというだけの問題になります。奥様は、秋うらら系ですか、秋の風系ですか、もっと冷たい秋の雨系ですか。

Y氏：「秋の風のような」です。

夏井氏：これでKさんの 1 句ができました。「秋の風見た目は少し優しそう」。この句で、あのテレビのおっかない先生に褒められたとご報告下さい。Kさんに拍手をお願いします。これが取り合わせという、作り方の最も基本的な基本中の基本の型です。今日、練習していただくのはまさにこの公式です。俳句には型がたくさんあります。公式がたくさんあると言っても良いと思います。この公式は、5 音の季語と、季語とは関係のない 12 音のフレーズを合体させるだけです。12 音のフレーズを私は「俳句のタネ」と呼んでいます。子供たちに説明するときに、他の人が書きそうもない、オリジナリティの高い俳句のタネが良い俳句のタネだよと説明すると、大体「なるほど」と言ってくれます。今日この後、皆様で実際に行いますが、600 人の中で決勝に残れるのは 7 人だけです。なぜかというと賞品が 7 つしかないからです。その 7 人に残るためのコツが 3 つあります。1 つ目は、この取り合わせの型を使うときには俳句のタネから先に作る。これが一番大事なコツです。先に季語を決めると季語に脳が引っ張られていくのです。「秋の風ひやひや吹いて冷たいね」とか、どうでも良い句になるのです。2 つ目のコツは、自分の作った俳句のタネの中に何か季語のような言葉が入っていたらそれを外して別な言い方に変える。これも大事なポイントです。季語は後で選ぶので季語が 2 つになってしまうということです。3 つ目のポイントは、どんな季語を選ぶかということ。さきほどKさんが見事に自分の妻の季語を選んで下さいました。自分の作った俳句のタネが楽しそうな優しそうなタネであれば、楽しそうな優しそうな季語を選ぶ。例えば「秋うらら」。そして寂しそうで切なそうで辛そうで人生を儚んでいるようなら「秋の風」のような。そういうものを選ぶだけ。これだけのコツです。

それでは今日のテーマは「守りたいもの」そして「変えたいもの」。自分の人生のなか、生活のなか、守っていきたいもの、守っていきたいこと、守っていきたい人、いろいろなものがあると思います。逆に、これは変えたい、変えないといろいろなことがうまくいかない、そう思われることを 12 音で書いて下さい。皆様のお手元には季語が書いてあるワークシートも渡してあります。今は秋ですので秋あたりの季語で、自分の俳句のタネに見合った季語を選んでいただいても結構です。それでは私の時計で、5 分で 1 句、賞品 7 つを目指してやってみましょう。スタート。

なかなか思いつかないという方は、今朝起きたところから自分の行動とか言動とか、あるいは日常生活の

朝起きたところから自分の行動・言動を脳の中で巻き戻していくとよろしいかと思います。

今この机の上に並んでいるのが入賞作品です。少しご紹介します。例えばこのような感じです。「秋の昼初めての句ドキドキと」。この初心な感じ、女子高生みたいな句ですね。Ｎ．Ｋさん。Ｎさんに拍手を送って下さい。

こういう句も面白いです。「秋の空いつもと逆の立場です」。こっちで偉そうなふりして言っているのに、逆の立場で無理強いされている。こういうことも正々堂々皮肉れるのは俳人としてセンスがある方だと思います。Ｓ．Ｔさん、上手い。

例えばこういうくだらないネタも俳句になります。「秋の朝すぐにポケモンさわってる」。たぶんこれは変えたいものだと思うのですが、守りたいものですか。Ｍ．Ｊさん、どちらですか。

Ｍ氏：変えたいものです。

夏井氏：もうそろそろやめたほうが良いな。ここでよく告白できますね。はい拍手。

この人は切実です。「そぞろ寒そろそろ変えたい洗濯機」。早く変えろよと言いたいです。Ｏ．Ｋさん、なぜあなたはこのような生活苦を語っているのですか。洗濯機が買えないのですか。お金がないのですか。

Ｏ氏：洗濯機を 10 年以上使っていて、そろそろ良いものに変えたいと思いました。

夏井氏：変えなさい。お金がないなら校長に訴えなさい。どこの学校ですか。

Ｏ氏：愛媛県の高等学校です。

夏井氏：校長先生はいらっしゃいますか？

校長先生：はい。

夏井氏：校長先生、頼みますよ。この 2 人に拍手。

この場で勇気あるなというのもあります。顔が見たいです。「秋の朝微笑み返す君がいた」。何を言っているのでしょうか。M．Ｓさん。案外若いですね。これは何事ですか。新婚ですか。

M氏：新婚ではありませんが、先生が先ほど朝の様子というふうに、出張前の今朝の様子を少し。

夏井氏：奥さんはやっぱり秋うらら系の奥さんですか。

M氏：春系です。

夏井氏：のうのうと言いましたね。拍手。

こういう俳句もあります。発表して良いのでしょうか。「責められる校長先生冬隣」。学校の秘密を喋って良いのでしょうか。Ｎ．Ｙさん、何事ですか。

Ｎ氏：隣に校長先生が座っていますが、職員会議のたびに先生方からいつも責められています。変えたいわけではないのですが。

夏井氏：守りたいのですか。

Ｎ氏：守りたいわけではないのですが、心の中でいつも頑張れと。たいへん良い人なのです。いつも頑張れと応援しています。

夏井氏：良いじゃないですか。句会ライブのすごいのはまさにこういう場面です。恐らくＮさんはいつもそのように責められる校長先生が可哀想だなと思いながら、でも面と向かって言うと、おべっか使っているようで言いにくい。それを公衆の面前で俳句にして叩きつけることで自分の気持ちを校長先生にきちんと伝える。俳句というのはコミュニケーションのツールでもあるわけです。この 1 句の入賞によって、あの 2 人の友情はさらに深まる。拍手。

こんなもので良いのかという例がもう 1 つあります。「秋の朝自分ひとりで起きましょう」。社会人として「どーよ」というレベルです。「起きろよ」と言いたいです。Ｃ．Ｓさん、起きられないのですか。これは自分に向かっての言葉ですか。妻に向かっての言葉ですか。

Ｃ氏：自分です。

夏井氏：そうでしょうね。「ひとりでおきましょう」が全部ひらがなで書いてあるのも切ないです。なぜ起きられないのですか。

Ｃ氏：もう少し寝たいなという気持ちと、あとは優しいお嫁さんが必ず起こしてくれるので甘えている感じです。

夏井氏：結局なんだかんだ言いながらのろけているのですね。はい拍手。

これは愛媛県人としては嬉しいです。「秋の雨きりのない服買いに行く」。「きりのない服」上手いですよね。もう研究会なんてどうでも良い。きりのない服買いに行きたい。Ｅ．Ａさん、買いましたか。

Ｅ氏：いいえ、この後です。

夏井氏：買って下さい。はい拍手。

ここらあたりから良い句を紹介していきます。と言うと今までは何だったのでしょうか。

上手いですね。「乙女らの歌声伝う秋の空」。乙女らの歌声を守っていきたいのでしょうね。Ｅ．Ｋさん、

「才能あり」です。拍手。

「夏の朝ロードバイクで下る坂」。最後の坂の印象がはっきりと出てくる。Ｓ．Ｓさん、「才能あり」です。拍手。

「天高し土つかむ瞳輝く」。5・7・5 を裏切っていますが勢いがあります。Ｉ．Ｓさん、お上手です。拍手。

「ただ一人時が流れる秋の山」。秋の山に佇んでおります。Ｈ．Ａさん、お上手。拍手。

「秋の朝背筋を伸ばす恩師の声」。恩師の心とともに生きる。Ｓ．Ｋさん、お上手です。

「鰯雲こども心で空を見る」。子供たちは心で受け止める、心で見る。もう根っからの教員です。Ｎ．Ｋさん、お上手です。

これも良いですね。「きらきらと童が笑う秋の空」。童というのが古風ですね。Ｍ．Ｔさん。童と言いつつ若いですね。

「秋の暮れ茶色の猫が待つ広場」。Ｆ．Ｓさん、お上手です。拍手。

「秋の雲サインコサイン上の空」。Ｋ．Ｈさん。数学の先生ですか。なるほど。

あと１つ。「革命を日々模索しつつ秋の宵」。革命を起こそう。学校でしょうか。家庭でしょうか。Ｍ．Ｔさん、学校ですか、家庭ですか。一応学校ですか。拍手。

このスクリーンの中に決勝に残った 7 句が仕込まれています。

１つだけルールがあります。句会ライブの掟です。決勝に残った句が出てきたときに、自分の句だということを自分でバラしたらその瞬間に失格になります。名前がわからない状態で選ぶというのが、俳句の世界が守っているとても大事な平等性・匿名性・ゲーム性。この 3 つがあるから、子供たちにとって非常にワクワクしたものとして俳句は受け入れられるのです。

まずは１句目です。「秋うらら 5 人１匹いつまでも」。

2 句目です。「ままならぬ己が甘さよ鰯雲」。

3 句目です。「咳ひとつ揺れるヘチマの幾千万」。

4 句目です。「秋深し今なぜここに座ってる」。

5 句目です。「ギター弾くこれから先も文化の日」。

6 句目です。「秋の雨知らない街語り合う」。

最後です。「秋の宵眠りの前にウイスキー」。

それぞれ守りたいのか変えたいのか、微妙なものもありますが。さあ、どれを優勝させるかは、みなさんの胸先三寸です。「これが好き」という句が決まった人、手を挙げて合図していただいて良いですか。どれですか。

会場Ａ：「ままならぬ己が甘さよ鰯雲」。

夏井氏：何が良かったですか。

会場Ａ：鰯雲というのはちょこちょこちょこちょこ。それがたぶんその人の甘さになる。

夏井氏：おっしゃる通りだと思います。これは鰯雲という季語と取り合わせたのが良いですね。それ以外が良いという方いらっしゃいますか。どれがお好きですか。

会場Ｂ：1 番目の句で「秋うらら 5 人 1 匹いつまでも」。

夏井氏：どういうところが好きですか。

会場Ｂ：不倫、不倫と騒がしい。家族を大事にできないのであれば結婚するな、ということです。以上。

夏井氏：そうなのですか。中年の主張大会のような感じですね。世間は本当に不倫、不倫と騒がしい。5 人 1 匹いつまでも大事にしようじゃないかと。5 人 1 匹というところがね。1 匹は犬ですかね、猫ですかね。

会場Ｂ：犬です。

夏井氏：そうですか。決めつけてくる方ですね。「5 人 1 匹」、「己が甘さ」と、1 句目 2 句目が出てまいりました。それ以外の句が好きだという方いらっしゃいますか。Ｋさんどうですか。

Ｋさん：私は「ままならぬ己が甘さよ鰯雲」

夏井：なぜですか。

Ｋさん：自分と重ね合わされる感じなので。

夏井氏：どこか甘いのですか。作者と一緒に今晩良い酒が飲めますよ。それ以外の句が好きという方はいないですか。

会場Ｃ：「ギター弾く」の句です。

夏井氏：「ギター弾くこれから先も文化の日」。なぜこれが良いのですか。

会場Ｃ：いつもギターを弾いているので、似ているかなと思いました。

夏井氏：毎日が自分にとって文化の日であると。ギターも弾けないやつらは文化の一つもわからないやつらだ、というような感じなのでしょうか。それ以外はどうですか。

会場Ｄ：「咳ひとつ揺れるヘチマの幾千万」

夏井氏：何が気に入ったのですか。

会場Ｄ：「ひとつ」と「幾千万」の対比とか。音があって揺れている情景が目に浮かぶようできれいだなと思いました。

夏井氏：今の語りは素晴らしいです。この句の大事なポイントを見事に押えられて、お見事だと思いました。後方の方でどなたかいらっしゃいますか。

会場Ｅ：同じです。

夏井氏：同じでも聞かせて下さい。

会場Ｅ：「咳ひとつ」の句で、理由も全く同じです。

夏井氏：理由も同じですか。

会場Ｅ：ひとつと幾千万と取り合わせが目に浮かぶ。

夏井氏：これは数詞を 2 つ入れてくるというところも粋です。また後で解説しますが、なかなか難しい句を見事にお語りになってありがとうございます。他の句が好きという方いないですか。

会場Ｆ：「秋深し今なぜここに座ってる」。

夏井氏：何が気に入りましたか。

会場Ｆ：来し方の行く末を、秋深い中でゆっくり考えるという、その情景が好きです。

夏井氏：今ここで俳句を作らされているという不満ではなく、人生のなぜ今俺はここに存在しているのだろ

うと、むしろ哲学的な句であると。素晴らしいですね。さあ、あと 2 つ。誰かお願いします。
会場G：最後の句がよかったと思います。私もウイスキーは大好きですが、寝る前に飲むウイスキーなのか、もしかすると秋なので夜長つい飲みすぎて、ずっと飲んで寝るということなのか、私もそうしたいなと思いました。
夏井氏：眠りの前と言いながら、寝なかったらずっと眠りの前ですからね。「なんぼでも飲むぞ」と。これは変えたいのか守りたいのかどっちなのだろうという気もします。「知らない街語り合う」、これ誰か 1 人くらい言ってあげてくれませんか。作者がたぶん寂しい気持ちで世を儚んでいると思います。お願いします。
会場H：さすが全国大会。全国私学教育研究集会愛媛大会で、松山はこんな町なのだと語り合う人たちがいるのではないかと思いました。
夏井氏：すごいまとめです。もうこれで大会が終わっても良いくらいのまとめでした。ありがとうございます。

こうやってそれぞれの句を見ていくと、最初たいした句じゃないと思っていた句が人の話を聞いてみると案外良かったなと思い始めたりします。子供たちとやる句会ライブもまさにこの、揺れ動いてみんなで俳句を読み解いていく、語っていくところがとても大事なところです。同じ 1 句なのに違う読みがどんどん出てきた時に、俳句の 17 音というものが持っている世界が多岐に渡っているという事実に驚いてくれます。それもまた楽しんでくれます。

俳句に正解はありません。このあと作者が出てきて、実はかくかくしかじかでしたということが正解ではないのです。俳句は出された字面がすべて、いろいろな人がいろいろなように読むことはその作品を豊かにすることだと考えないといけないのです。全国で俳句を熱心にやって下さっている学校に行きますと、ときどき子供たちに俳句を持たせて、これはいついつどこそこでどういうふうに思って作りましたというような俳句集会を行っている学校がありますが、あれはとても勿体ない。むしろ作者でない子たちが俳句を語り合う、深め合う、そこが大事なところなのです。

そろそろ決めましょう。今日、600 人の総意をどうやってまとめるのかというと、うちのマネージャーという名の夫は、どんな大きな音でも小さな音でも微妙な音でもどっちが大きいかを瞬時に聞き取る能力を持っています。これから私が 1 句ずつ読んでまいりますので、これを優勝させたいというところで拍手をして下さい。よろしいですか。

1 句目、「秋うらら 5 人 1 匹いつまでも」。これを応援したい人、拍手をどうぞ。OK。

2 句目、「ままならぬ己が甘さよ鰯雲」。これを応援したい人、どうぞ。OK。

3 句目、「咳ひとつ揺れるヘチマの幾千万」。これを応援したい人、どうぞ。OK。

4 句目、「秋深し今なぜここに座ってる」。これを応援したい人、どうぞ。OK。

5 句目、「ギター弾くこれから先も文化の日」。これを応援したい人、拍手をどうぞ。OK。

6 句目、「秋の雨知らない街語り合う」。これを応援したい人、どうぞ。OK。

最後、「秋の宵眠りの前にウイスキー」。これを応援したい人、どうぞ。OK。

今日は 1 位、2 位、3 位がわかれば良いのです。なぜかというと、1 位、2 位、3 位とそこから後ろは賞品が少し違うから、ただそれだけです。それでは第 3 位をお願いします。

マネージャー：「咳ひとつ揺れるヘチマの幾千万」。

夏井氏：そして第２位です。

マネージャー：「秋うらら５人１匹いつまでも」。

夏井氏：そして第１位。

マネージャー：「ままならぬ己が甘さよ鰯雲」。

夏井氏：ということでした。では後の４つを紹介していきます。私が簡単に俳句を解説して、「作者、お立ち下さい。どうぞ」と言って、作者だけが立ちます。ご協力をお願いします。

それでは問題の「秋深し今なぜここに座ってる」。私たちは今日こうやって無理矢理５分で１句作らされるという状況下でこの句を読んでいますから、「来なけりゃよかった。なぜ今ここに俺は座っているんだろう」そういう笑いが起こった。ところがさっき見事に、これは哲学的な意味があるのではないか。なぜ自分はここに存在して座っているのだろうか。秋の深さ、秋の思いの中に座っていると。字面だけ読んだら非常に格調の高い、心に哲学を抱いた人だという読み方もできるわけです。作者、お立ち下さい。どうぞ。どちらからいらっしゃいました。

Ｆ氏：大阪から来ました。

夏井氏：お名前は。

Ｆ氏：Ｆ．Ａです。

夏井氏：Ａさん、一体これはどういうことでしょう。

Ｆ氏：生徒と一緒にいてたいという気分です。

夏井氏：研修会より、学校にいたかったのですか」。

Ｆ氏：どちらか言うと私自身、もともと違う仕事をしていて教員になったのですが、それは基本、生徒と一緒に勉強するということを楽しくやりたいということがあって、いま担任が持てない状況になっているので、担任をしたいなということを考えながら歌いました。

夏井氏：さりげなく校長に文句を言っているわけですね。校長先生は今日来ていないのですか。

Ｆ氏：来ていません。

夏井氏：そうですか、だから堂々と言えたのですね。

Ｆ氏：はい。

夏井氏：このあと俳句を書いた紙をお返ししますから、学校に帰って、これでテレビのおっかない先生に褒められたって直訴したらどうですか。

Ｆ氏：「あと１年辛抱せえ」と言われます。

夏井氏：お見事です。賞品をお願いします。頑張れの拍手をもう一度お願いします。

「ギター弾くこれから先も文化の日」。ギターを弾く、私はこれから先も変わらず弾いていくという思いでしょう。最後「文化の日」という季語を持って来たところにこの人ならではの何か思いがあるのではないかという気がいたします。作者、お立ち下さい。

K氏：鹿児島から来ました。

夏井氏：お名前は。

K氏：K．Mと言います。

夏井氏：Mさん、ギタリストですか。

K氏：いいえ、認知症予防で指を動かすためにギターを弾いています。

夏井氏：文化の日という季語を取り合わせたのはなぜですか。

K氏：ギターは音楽なので音楽と文化はマッチするのかなと思ってこれを選びました。

夏井氏：お見事でした。認知症予防のためにギターと俳句もやっていただいたら嬉しゅうございます。拍手をお願いします。

「秋の雨知らない街語り合う」。「知らない街」のあとに1拍空白があります。知らない街に語り合うのか、知らない街を語り合うのか、1拍空けたことによって不思議な空間が生まれる。そこを作者が意図したのか、うっかり書き忘れたのか、これを作者に聞くのも面白いです。秋の雨がしっとりと降っております。作者、お立ち下さい。

T氏：島根県から来ました。

夏井氏：お名前は。

T氏：T．Sと申します。

夏井氏：これはどういう句ですか。

T氏：昨日着いて、初めて来た松山でたくさん飲んで食べたので、その表情を書いて、あそこの空欄は書き忘れです。

夏井氏：お酒を飲み過ぎただけだそうです。でもセンスのある言葉選びでした。拍手を送って下さい。

「秋の宵眠りの前にウイスキー」。もうこの句そのものをサントリーか何かに売りたいような1句です。秋の宵からゆっくりと飲み始めて眠りの前にという感じなのかもしれません。ウイスキーの色合いが秋という季節に似合うなと、秋のともしびも秋の陽もまたウイスキーの色ではないかと、そんなことも思いました。作者、お立ち下さい。どうぞ。これは1杯や2杯で済みそうもないお兄さんが立ち上がっております。

T氏：神奈川県です。

夏井氏：お名前は。

T氏：T．Sと申します。

夏井氏：Tさん。これはどのような句ですか。

Ｔ氏：いや、毎日飲んでいるので。
夏井氏：見ただけでそのような感じです。
Ｔ氏：痛風になりました。
夏井氏：そうですか。あなたの心の 1 句を大事に胸に抱いて持って帰って下さい。拍手をもう一度お願いします。

そして第 3 位が「咳ひとつ揺れるヘチマの幾千万」。これは俳句をやっている人ではないかと私は思っています。難しいことをやっています。1 つはさっきご指摘のあった数詞を 2 つ入れ込んできているという、「ひとつ」と「幾千万」。対比としてうまくやれているところです。もう 1 つは、「咳」は冬の季語、「ヘチマ」は秋の季語。季語を 2 つ入れながらどちらも成立させています。そしてさらにこれは、脊椎カリエスを病んでいた正岡子規の亡くなった日が「糸瓜（へチマ）忌」という季語になっていますが、その子規の糸瓜忌へのご挨拶を詠んでらっしゃる。俳句を 50 年やってらっしゃる人ではないかと思うのですが、ほとんどの人は意味がわかっていないから第 3 位になったのではないか、そんな気がいたします。今日の第 3 位、見事な技でございます。作者、お立ち下さい。
Ｓ氏：横浜からまいりました。
夏井氏：お名前は。
Ｓ氏：Ｓ．Ｈです。
夏井氏：Ｓさん、俳句は何年やっているのですか。
Ｓ氏：昨年の「プレバト！」からやり始めました。
夏井：本当ですか。「プレバト！」見ている人はおっかなくて季重なりできないはずですけれども。敢えてやったのですか。
Ｓ氏：はい。本日、子規会館でこの情景を見て、自分が咳き込んでいたので、ヘチマがなっているのを見て。
夏井氏：素晴らしいです。「プレバト！」俳人が第 3 位。ただ、意図が伝わらない寂しい聴衆がいたということです。拍手。

第 2 位、「秋うらら 5 人 1 匹いつまでも」。これは先ほどの語りがよかったです。世の中は不倫、不倫と言っているが、たった 1 人の妻を大切にしろ、それができないなら結婚をするなと。あなたは大丈夫なのでしょうねと言いそうになりましたが。「秋うらら」のあとの「5 人に 1 匹」という光景が見えてまいります。「いつまでも」というところは言わずもがなな気分もありますが、ここが添えられるからこそのお人柄なのだろうと思います。今日の第 2 位です。作者、お立ち下さい。どうぞ。思わぬ若い人が。私、定年前のおじさんかと思っていました。5 人というのはご家族ですか。
Ｔ氏：そうです。
夏井氏：どちらから来ました。
Ｔ氏：高知県から来ました。
夏井氏：お名前は。
Ｔ氏：Ｔ．Ｔと申します。
夏井氏：Ｔさん、家族構成はどうなっているのですか。

Ｔ氏：妻、長男、長女、次女。あと猫１匹。猫です。
夏井氏：猫ですか。先ほどこの句が良いと熱く語って下さった方のお話聞いていていかがでした。
Ｔ氏：そこまで、不倫、不倫までは考えなかった。
夏井氏：自分の句を褒めてくれる人は嬉しいでしょう。これもまた句会ライブの大事なところです。これは堂々と家に帰って家族に自慢できます。「才能あり」です。お見事でした。
　そして今日の第１位、みなさんの総意で決まりました。「ままならぬ己が甘さよ鰯雲」。最後の「鰯雲」が良いとおっしゃった。まさにその通りですね。鰯雲は茫洋と広がっていきます。嬉しい感情も悲しい感情もそれから憤るような感情も実は引き受けてくれる。懐の深い季語でもあります。ままならぬ自分の甘さを噛みしめながら、でも頭上には美しい鰯雲が広がっている。この人は守りたいもの、変えたいものというものは、ずっと考えたときに結局己の心と向き合った、そういうことなのですね。今日の第１位、出てまいります。今まで以上の拍手でお迎えしましょう。作者、お立ち下さい。
Ｓ氏：東京からまいりました。
夏井氏：お名前は。
Ｓ氏：Ｓ．Ｒと申します。
夏井氏：俳句は多少なさっていますか。
Ｓ氏：昔ちょっとかじったことがあります。
夏井氏：昔ちょっとですか。
Ｓ氏：半月くらいです。
夏井氏：半月でもかじっていますものね。お見事でした。これはどういう思いですか。
Ｓ氏：深酔いをすることが多く、朝、アルコールがまだ残っていて、また失敗したなという。
夏井氏：「己が甘さ」はそういうことなのですね。でも今のあなたのお話でムチャクチャ切実に近しい思いを持った人が増えたのではないかと思います。さまざまな「己が甘さ」がありますが、最後一つ教えて下さい。「鰯雲」を選んだ理由は。
Ｓ氏：秋の空高いところ、その空間というか、そこのところで、自分を追い詰めない。でも少し許されるところもあってという気持ちが。
夏井氏：よくわかります。鰯雲を見ながら、なんで午前２時からもう１軒行ったのだろうというような感じもあるのでしょう。今日の第１位、なんと二日酔いのおかげでできたという、そんな１句でございました。拍手。
　ということで今日の句会ライブはこれでお開きではございますが、今日のような作り方で子供たちも簡単にできます。ぜひ教育の現場の中で俳句の活用の仕方ということでお手伝いができたら嬉しゅうございます。私は仲間といっしょに「日本俳句教育研究会」グループを作っておりまして、みんなで俳句の授業の成功例失敗例の情報交換をするホームページも作っております。ぜひご一緒に俳句を学校現場で上手に使っていただきたい。またどこかでお力になれたら嬉しゅうございます。今日はありがとうございました。

私　学　経　営　部　会

10 年から 20 年後には、AI（人工知能）やロボットなどの技術開発で、世界の職業の約半数が新しい職種に取って代わられると推定されており、現代の子どもたちの 65％が、大学卒業時には、今は存在しない職業に就くだろうとも言われている。

そのような将来に向けて求められるイノベーティブな人材は、生徒たちが本来持っている創造力などの優れた資質を、可能な限り伸ばそうとする教育から生まれるのではないか。

厳しい経営環境の中であっても、あらたな時代の変化を見極め、それぞれの建学の精神に立脚して、生徒たちの可能性を高めていく特色ある教育の展開に努めることが、時代を先取りする学校づくりの要諦であろう。

当部会では、講演と研究討議を通して、新しい教育を実現する人材育成と学校経営を探求する方向性が示され、それぞれの私学がどのように進むべきかを考える機会となることを期待したい。

1　研究目標　　時代を先取りする学校づくり

2　会　　場　　松山全日空ホテル　南館４階　エメラルドルーム

3　日　　程

	9	15	10	45	11	12	13	14	15	45	16	17
10月20日（金）	受付	開会式	講演Ⅰ		講演Ⅱ	昼食	パネル・ディスカッション				閉会式	

4　内　　容

講 演 Ⅰ

演　題「教育改革と新しい教育観　～高大接続改革などがめざす、教育の質的転換の方向性とその課題を探る～」

講　師　**長　塚　篤　夫**　　順天中学・高等学校　校長
文部科学省有識者会議委員（高大接続改革）

講 演 Ⅱ

演　題「建学の精神『自立協同』の進化と未来を拓く教育への取り組み」

講　師　**村　崎　正　人**　　学校法人村崎学園　理事長

パネル・ディスカッション

テーマ「時代を先取りする学校づくり」

パネリスト　**岡　　豊**　学校法人松山聖陵学園　理事長
愛媛日産自動車株式会社　代表取締役社長

實　吉　幹　夫　東京女子学園中学･高等学校　理事長・校長

真　城　義　麿　学校法人真宗大谷学園　専務理事

コーディネーター　**野　原　　明**　教育ジャーナリスト／元ＮＨＫ解説委員

５　**講師・パネリスト・コーディネーター**（順不同）

長　塚　篤　夫　順天中学・高等学校　校長
文部科学省有識者会議委員（高大接続改革）
村　崎　正　人　学校法人村崎学園　理事長
岡　　豊　学校法人松山聖陵学園　理事長
愛媛日産自動車株式会社　代表取締役社長
實　吉　幹　夫　東京女子学園中学･高等学校　理事長・校長
真　城　義　麿　学校法人真宗大谷学園　専務理事
野　原　　明　教育ジャーナリスト／元ＮＨＫ解説委員

６　**運営委員・指導員**（順不同）

委員長
渡　部　正　治　松山聖陵高等学校　校長
副委員長
河　野　大　助　松山城南高等学校　校長
委員
川　原　　學　松山聖陵高等学校　教頭
永　井　和　義　松山城南高等学校　教頭
西　岡　信　次　松山聖陵高等学校　教諭
髙　橋　慎　吾　松山聖陵高等学校　教諭
向　井　沙　織　松山聖陵高等学校　教諭
大　野　　仁　松山城南高等学校　教諭
竹　内　　強　松山城南高等学校　教諭

７　**専門委員・客員研究員・指導員**（順不同）

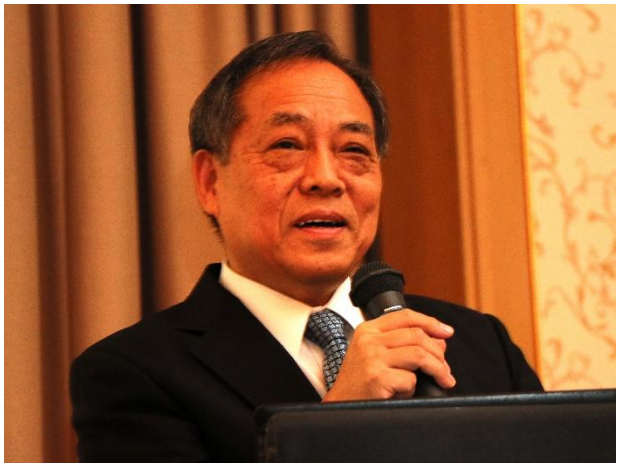
委員長
長　塚　篤　夫　順天中学・高等学校　校長
副委員長
鈴　木　康　之　水戸女子高等学校　理事長・校長
委員
實　吉　幹　夫　東京女子学園中学･高等学校　理事長・校長
木　内　秀　樹　東京成徳大学中学･高等学校　理事長・校長
梅　村　光　久　学校法人梅村学園　松阪法人分室長
摺　河　祐　彦　兵庫県播磨高等学校　理事長・校長
新　田　光之助　筑陽学園中学･高等学校　理事長・高校長
客員研究員
野　原　　明　文化学園大学杉並中学･高等学校　名誉校長
真　城　義　麿　学校法人真宗大谷学園　専務理事

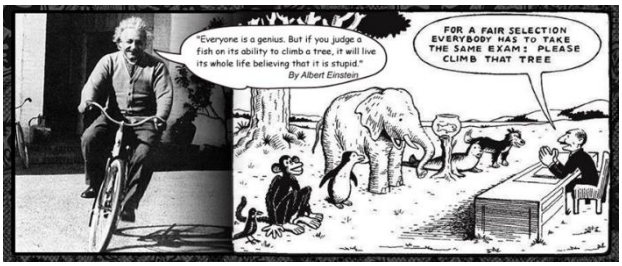
私学経営部会　講演Ⅰ

「教育改革と新しい教育観」～高大接続改革などがめざす、教育の質的転換の方向性とその課題を探る～」

順天中学・高等学校　校長

長　塚　篤　夫





アインシュタインはこのようなことを批判している。「君たちには公平にテストをするために同じ問題を出す。さあ、あの木に登ってごらん」。人を動物に例えているわけですが、このように同じテストでやれば誰が勝つかはじめからわかっている。教育の本質はそれではいけない。資質･能力をどうやって伸ばすか。それが 21 世紀の最大の課題である。

正解のない問題というものがある。2000 年頃から企業は採用選考の最終問題にこのような問題を出している。「富士山を動かすにはどうすれば良いか」。「五大陸のうち 1 つ無くすとすればどれを無くすか」。こういうことに解決策を出せる人材を、企業は膨大な費用と時間をかけて探している。そのような問題は大学入試にも反映されている。例えば「この絵を見て何を思うか述べよ」。正解のない問題の解決策を社会も必要とし、社会と結びつく大学はそういう問題をすでに出し始めている。この方向で教育の方法も変わっていく。

私の話は 3 つに区切ってお考えいただけると思っている。1 つは教育の現状と未来の話、2 つ目は高大接続のいわゆる新しい大学入試に関係する話、3 つ目が新しい指導要領が目指していく教育の質的な転換の方向性についてである。

トーマス・ローレンという人が、『日本の高校』という本を出した。「成功と代償」という副題がついている。文化人類学者としてのフィールドワークをして、日本の高校教育について客観的に書かれた本である。日本の中で最も改革を必要としているのが実は大学である。大学の教育が変わらなければ高校は変わらないと、彼は 40 年前に入試制度の改革を言ったのである。関西の 5 つの公・私立高校を 1 年間かけてフィールドワークをして、多様な高校を調べ、全体を言い当てている。

大学改革が必要だというのも高校改革が必要だというのも 40 年間変わっていない。この 40 年間、高校は大学への進学の準備期間とか、就職のための最終教育機関という位置づけで、中身は全然研究されていない。教育学者に言わせると、日本には中学校までの教育学の専門家はたくさんいるが、高校教育の専門家はいないそうだ。高校教育というのは学問的に研究されていない中で、制度だけあるという状態だ。特に高校教育

は多様化し、共通性がなくなり、まとまりのないものになってきた。高校教育の中に多様性と共通性をどう位置づけるかということが、議論されてきた最大のテーマであった。

日本の高校生は自分に自信がないという調査結果がある。高校生が決して不真面目であるとか、他国に比べておかしな高校生が多いとは思えないが、内面はあまり自分に自信がないということは確かなようである。他国があまりにも自己意識が強すぎるのかもしれない。

高校生の学校生活意識調査では、友達が重要というのが 51.9%。日本の子がいかに「友達命」であるかということがわかる。簡単に言えば友達の同調圧力、集団意識が強い日本人の大人の精神文化の反映だと言っても良いと思うし、友達を大事にするのは悪いことではないとも言える。6.5%しかいないフランスの子と較べると対照的である。受験が重要だというのは 3%しかない。つまりこれは必要悪くらいにしか思っていないと言えると思う。他国は受験に意味があると思っている。このあたりに真っ向から大学関係者も向き合わないといけない。

考えてみれば我々は先進国の学校教育の中ではかなり特殊である。部活を学校がやる、清掃を児童がやる、学年まとめて修学旅行に行く、文化祭をやる、体育祭をやる。欧米ではほとんど行われない。ホームルームもない。日本の教育の中で伝統的に培ったもので、小学校から高校まで教員があれもこれもやっている状況になっている。こういうことが良いか悪いか。やりすぎだ、働きすぎだと言われている。先進国と競争していくときに、我々の教育の中で何が大事かということをもっとしっかりと押さえていかないといけない。実はもう無理がきているのではないかという気がする。

それでも日本の高校生は世界的にいうと優秀である。2000 年以降、OECD が PISA テストを始めた。知識力ではなくて活用力の問題だが、日本の場合は高校 1 年生が 6,000 名くらい抽出されて 3 年毎に実施している。文系･理系のリテラシーなどを調べているが、ほとんど毎回トップレベルである。

同じように PISA では質問項目の中で、例えば科学に対する興味・関心に対して日本の子は楽しいと思っている割合は極めて低い。日本の女子高校生は世界の最低レベルである。科学はできるのに面白くない、ここが最大の問題である。これを何とかするのは探究しかない。探究というのは自分で学んでいこうとすること。面白くなろうとするプロセスである。受身ではなく、自分でやっていこうとするときに面白くなる。そのため次の学習指導要領に、理数探究などの探究的学びが入ってくるような流れになっている。

子供たちの未来について、「65%は今存在しない職業に就く」「47%の仕事が自動化される」「2030 年までには週 15 時間働けば済む」。などといわれているが、その通りかもしれない。

リチャード･フロリダという人は面白い本を書いた。日本では『クリエイティブ・クラスの世紀』と訳されている。20 世紀の 1 世紀の間にアメリカの一次産業、二次産業の労働人口比は下がってきた。三次産業のサービス産業、我々教育者はサービス産業だが、これも 80 年代から少し下がっていて、80 年代からクリエイティブ産業というものが急激に増えてきた。

日本の産業分類にはクリエイティブ産業というものはないが、経済産業省が抽出してみたところ、日本のクリエイティブ産業はせいぜいアニメ、あるいはロボットの一部あたりが成功しているだけでほとんど負けている。このクリエイティブ産業というものがこれからとても重要な鍵になる。我々の教育の中でもクリエイティビティがあるかないかによって下がるか上がるかが変わってくると言っても良いかもしれない。

レイ・カーツワイルという人が「シンギュラリティ」、技術的特異点という言葉を出した。彼は、コンピュータがこの半世紀の間、1 年半から 2 年の間で計算速度が 2 倍になってきたという「ムーアの法則」のまま行けば、2030 年頃には 10 万円のパソコンで人の頭と同じくらいの計算処理ができる、45 年頃には全人類の頭と同じくらいにはなるという指数関数的な計算をしている。カーツワイルという人は、スキャナーやシンセサイザーを作った発明家で、未来予測には定評がある。シンギュラリティの先、2045 年以降はどうなるかわからない。インターネット経由でも利用できる量子コンピュータに置き換えられて、計算処理のスピードが上がっているので、そういう時代がまもなく来るということは確かだと思う。

その AI の進化に応じて、マイケル・オズボーンが「47%の職業がコンピュータに置き換えられる」ということを言った。彼は置き換えられる職業と置き換えられない職業を分類した。教育はどうかというと、小学校の先生の教育は残るが、ドリル学習のようなものは残らない。すでに塾では数学の個別指導でその子によって出される問題が違うという AI を使ったドリル学習をしている。「AI 先生」が教育の分野に相当入って来ている。

特にアメリカでは、会計士、弁護士、医師という、日本でも 3 大資格の分野が AI 化されると心配されている。会計士は特にそうである。弁護士も膨大な判例や法律を割り出すにはコンピュータのほうが速い。医師もそうである。東大で使っているコンピュータは医師では発見できないものを発見するものになっている。

オズボーンは、残る仕事の資質は 2 つだけ、創造性と社会性だと言う。ロボットは自ら新しいものを創れない。人との関係性についても、与えられたプログラムにおいて思いやりのような反応はできるかもしれないが、一人ひとりのことを思いやる、命を賭けて子供を守るということはしない。人間が感性として必要なものはこの社会性だ。創造性と社会性がいかに重要かということはほぼはっきりしてきていると思う。

高大接続改革というのは大学入試、高校教育、大学教育の 3 つの三位一体の改革だと言われている。社会と大学との関係、大学入試においては学力 3 要素を多面的に評価する、この「多面的に評価する大学入試」がキーワードになる。高校ではその学力 3 要素を育成しておかないと入試で評価されない。

学力とは何かということを、学校教育法の 10 年程前の改正で定義した。学力は知識など、ペーパーテストで測れるものだけではないという学力観を、きちんと整理しようというのがこの学校教育法の学力 3 要素の定義であった。3 要素をやっていなかったら法律違反でもあることになる。

3 要素の最初に知識・技能というものがある。2 番目に思考力・判断力・表現力・その他というものがある。その他の能力も含んで第 2 の要素である。3 番目に主体的な態度だ。なぜ思考力・判断力・表現力なのか。これは「課題を解決するために」である。思考力・判断力・表現力などをつけて課題を解決するということがポイントになる。そのための第 2 要素である。

課題解決が実は社会の、あるいは企業活動の最大の問題である。最初に正解のない問題というものを紹介したが、あのような課題をどう解決するかが大事で、そのための思考力等である。ここを我々は忘れないようにしたいと思っている。

冒頭に申し上げたように、日本の高校、中学校、小学校はいろいろなことをやっている。それを評価しようということである。幅広い活動を通して身についている資質・能力を多面的に評価してあげようというのが、本来の日本らしい高校と大学の接続を考えるときに特に必要なものだ。

学力を評価する方法の最初は、今で言う共通テスト。テストは共通テストだけで、あとはいろいろな生徒の活動を見ることで評価するということが文部科学省的な考え方に則った方法論である。

この大学入学希望者学力評価テストが共通テストになった。この中に文字数限定で記述問題を入れることが決まった。2 つ目に、自らの考えに基づいて論を立てて記述させる評価方式がある。国立大学ではすでに個別入試で 4 割が記述問題をやっているが、国立大学は完全にやることになる。私立大学もいわゆる難関といわれている、関西で言えば関関同立、首都圏で言えば MARCH といった大学は記述問題をやることを約束しているようである。その他に生徒自身の行った諸々の活動をもっと見ようということで、多面的・総合的評価の入試に変わるというのが今回の基本である。

国立大学のほうは多面的・総合的評価の、現状で言う AO・推薦で 30%を目標にしているが、現状でも、各国立大学は AO・推薦を結構やっている。

一般入試は従来の筆記試験だけで良いのか、一般社団法人国立大学協会の人たちはそうは思っていない。というのは、大学の認証評価制度の中で学力 3 要素を一般入試でも評価しているかどうかが問われることになっている。一般入試でも調査書を見るとか、生徒の活動報告書を見るなど、何らかの形で 3 要素を見ないと大学としての評価が下がるので、各大学は真剣にその方策を考えていくことは確かなようである。私立大学のほうはまだまだという感じがする。

例えば四国地区の国立大学ではしばらく前から多面的評価の先進的な取り組みを研究している。四国地方は少子化が進んでいるから、大学と高校の連携が進みやすい傾向は、特に公立高校にとってはあると思う。一般入試の後期日程で生徒の活動、課題研究とか外部試験をどう評価するか、センターと併せた点数の配分などのサンプルを出している。多面的評価のための研究は各地域でそれぞれ進められていた。これを受けて文部科学省的にはもっと大々的に行っていくと考えられる。

大学入学者選抜改革の骨子にも多面的・総合的評価に転換するとある。これがキーワードである。記述問題が入るとか、英語の外部検定が入るのが大学入試改革の全体像ではない。

問題は個別選抜である。新たなルールでやると言っている。AO・推薦が今の中学 3 年生から新たなルールに変わり、名前も変わる。合格発表の時期も変わる。

記述問題は、答がいくつかある中で条件付きの問題と、全く見当もつかないような論文的な記述問題がある。創造性・独創性などを見ることができる記述問題は、センター入試には入れられないが、個別選抜には馴染む。私立大学のほうも、条件付きかもしれないが、記述問題も入れても良いと思う。

各国の共通試験はどの国でも記述問題をやっている。有名なのがフランスのバカロレア試験である。受験生全員がどれかを選んで 4 時間で解く。例えば文系では「欲望は本来際限がないのか」とか、経済系は「人は常に自分の欲望を知るか」。こういう問題を我々が預かっている高校生が書けるであろうか。これをやるには受験勉強も授業とリンクした形で本当に自分の考えを深めていくようなことをやらないといけないだろう。フランスの高校生が「友達命」ではなく、いかに自分の考えを持つかとつながる話ではないかと思う。日本の高校生は他の子がどう考えているかを考えていれば良いので、あまり自分の考えを持たなくて良い。大学入試でこのような問題が出ると、高校生はもっと考える、あるいは授業も考えさせるようなものになっていく可能性はあると思う。

記述問題についてはセンターが協力するとしている。各大学の個別選抜で採点ができるような問題や基準を提供するなど、とにかく記述問題をやるという話になっている。

プレテストの記述問題では、町おこしのようなかなり現実的、実践的な問題が出ている。高校生にとってもそれほど違和感はないかと思う。あるいは契約書のようなものが出されて、それについての考えをまとめられるかどうかが問われている。このテストは大学 1 年生にも行ったが、全然できなかったそうだ。受験勉強ではこういう問題に出会ったことがないのだろう。今年も 11 月にプレテストを行う。私立高校も参加することになっており、高校２年生が国語も数学も行うはずである。

記述問題以外のマークのほうも思考力型に変えるので従来のマークではない。一般的な評価で言うと、授業を変えないと難しいだろうと言われている。予備校関係の人たちも、予備校の受験勉強を変えないとこの記述問題の部分は回答できないという話になってきている。

プレテストは、今回、予定では 5 万人規模のものが 6、7 万人になって行う。来年は 11 月 10 日、11 日は確定していて、今年は高校で行うが、来年は大学で本番のようにして行う。大学側も新しいテストのやり方を試行している。

プレテストと言っているが、今の高校生が受験するときの模擬試験になるわけではないので、誤解を与えてはいけないということで、正式には予備調査という名前に変更するそうである。来年は高校 3 年生が対象になるとのことだ。各高校が、どの程度、生徒が解けるかとか、大学側も、このくらい取れればウチの大学に入れるとか入れないとかいう判断材料にもなると思われる。大学系列は相当参加してくるのではないかと推測している。

英語の 4 技能で、どの検定が認定されるのかという話は、あくまでも各外部検定の結果をセンターに出して、それを各大学に送ることができるかどうかだけの認定である。中身ではなくてシステムに乗れるかどうかだけの認定なので、例えば TOEFL を受けたら TOEFL がセンターに結果を送り、送ったものを各大学に出して良いと TOEFL が認めるかどうかということが認定の要件になってくる。今要件作りをしている。

英語は外部検定の導入で、ライティングとスピーキングでパフォーマンス評価が実現した。昨日の夏井いつき氏の句会ライブの「才能なし」「凡人」「才能あり」、あれがパフォーマンス評価である。この評価が外部検定によって実現する。

それから IRT・CBT による複数回受験がある。IRT というのは項目反応理論、その人によって出題が変わるものである。例えば TOEFL は、受験生のレベルに応じて問題が変わって、その問題を解けばこの人の達成度が明確になる。あらかじめ膨大な問題が用意されていて、受験生に応じた難易度がはっきりした問題が出題されるというものである。それにはコンピュータベースでやらなければいけない。そのため、外部検定ではコンピュータベースでやる試験が増えてきた。

これは複数回受験できる。何回やっても良いのは達成度が明確だからである。今までのセンター試験は、英語でも何でも点数を合計して上から順番で何人まで合格と決めていた、集団準拠型のテストであった。それを目標準拠型に変えるという意味で外部検定は意味がある。図らずも外部検定によって目標準拠を実現した。それから段階評価も言っていた通り、1 点刻みではなくなった。

しかし問題はある。4 技能検定は目的が異なっている。TOEFL はアメリカの大学で授業が受けられるレベ

ルかどうかを調べるものである。日本の大学でそれを必要とする大学や大学生がどのくらいあるだろうか。また、各検定の CEFR 段階は検証ができていない。各検定団体が CEFR に対応したスコアを出しているが、自己申告なので検証されていない。そのため 4 年間はセンターと外部検定を併用する。併用している間に外部検定の力とセンターで受けた子供の力がわかれば、各検定の 2 技能についてのレベルが詳細に確定できる。それで各検定のスコアや CEFR の対応関係が明確になる。ということが国のある意味の考えかと感じる。

大学の先生は英語を使って授業をやるのかという話だが、使わなかったら意味がない。英語のスピーキングを必要とする英語以外の授業をもっとたくさんやらなければダメである。

CEFR はヨーロッパの多言語地域で、どの言葉でもどの程度の言語使用能力があるかを表わすための調査を 20 年間かけて詳細に分析して総合したものである。単に 6 段階で大雑把という話ではない。相当緻密な研究を長期に渡って多言語について行った結果をまとめたものである。その中でも、どうしても英語が必要になってきたということは、それが共通言語的になってきたということである。

分かりやすくいえば、「才能なし」「凡人」「才能あり」が記述されているのがルーブリックである。CEFR はルーブリックで、何点とは書いてない。どんなことができるかが書いてある。ペーパーで測れない力は、こういう記述した形で段階を表示するしか評価法はない。

外部検定はどのくらい使われているか。今年の春の大学の入試では国立大学や私立大学の一般入試で 14%使っている。AO・推薦では 41%使っている。一般入試で使っている大学の 7 割方が B1 から B2 を求めている。それを加点にするとか、出願要件にするとか使い方はいろいろある。B1 レベルは英検（日本英語検定協会）でいうと 2 級である。

しかし、文部科学省が 26・27 年度に、公立高校 500 校の生徒 9 万人で行った結果、リーディングで B1 レベルに達しているのは 2.1%しかいない。スピーキングでは 1.2%しかいない。1 ないし 2%しかいないのに、各大学はそれを求めているという矛盾、乖離は大きな問題かもしれない。

指導要領上は中学 3 年生で英検 3 級を目指している。しかし 3 分の 1 しか英検 3 級に達しないまま高校に入ってくるわけだから、英検 3 級を取っていない生徒が B1 レベルに達するのは大変である。

英語力調査を全国学力・学習状況調査 100 万人レベルで行うとしていて、そのための予備調査を行った。6 万人のスピーキングの評価はひどかったというのはさておき、注目は、各学校で英語科教員がルーブリック項目で採点したことだ。生徒の音声を IC レコーダーで録音し、まず英語科の先生がルーブリック表を使ってスピーキングの評価をした。それをさらに、専門家として委託されている業者のほうでもう 1 回評価した。先生の評価と違った部分が出てきた。日本の公立中学校の先生は、スピーキングの評価はこうやるのかと初めてわかったという人がほとんどであった。英語の先生が最初にこれからの新しい教育の評価の方法を体験していくことになる。

3 番目は調査書等が変わることである。いろいろなものを評価しましょうということになる。調査書の内容が増える。今までの調査書はページ数が制限されていたが、ページ数は制限無しになった。それから調査書は電子化する方向だ。調査書等の電子化の中に e ポートフォリオというものが入っている。

調査書の改善と高校の運営方針について、「調査書の活用に当たり、・・・各高校が定める学校運営の方針および・・・内容や情報を、各大学が求めることをできる旨、実施要項に明記する」となった。各大学が、

実施要項に各高等学校の運営方針を求めると書くと、提出しなくてはいけないのである。学校の運営方針というのは、例えば生徒がそれぞれ活動したことについて、この子は主体性があるという評価をするときに、それはこういうことだということを明確に、高等学校ごとに決めたものを出す。そういう運営方針を求められたら提出しないといけない。各高校は準備しておかないと提出できない。

調査書では、例えば学年ごとにやっていた部活、生徒会活動などについて、陸上部主将であったとか、大会・コンクールに出た。それだけでも良いが、学年ごとに項目的に書くだけでは寂しい。「この子はこれによってこんな成果を上げた」ということを書かないと埋まらない。書かない場合は、「無い旨を書け」と書かれている。この子は何も無いとなると困るのではないか。今度入ってくる高校 1 年生から適用される。

活動報告書は生徒が書く。活動報告書だけではなくて、大学によっては学習計画書のサンプルも出されている。大学に入学してからどのような勉強をどのように行うつもりか、こういうものも評価するということである。

調査書は Web 化する方向だ。そのときに調査書に書いてある内容を e ポートフォリオという形で各生徒が証拠を併せて出せる仕組みを作ったのが、中川・日本私学教育研究所所長から紹介があった関西学院グループによる e ポートフォリオの仕組みである。10 月にシステムはオープンにされている。それ自体は無料で利用できるのだが、ベネッセなどはすでに持っている多くの生徒と先生たちの ID で対応しようとしている。

このデータベースに何を入れていくのかという話だが、主体性を見るということが主眼なので、色々な項目を高校や大学が調査をして、このようなやり方が考えられるのではないかということがモデル的に出されている。国立大学関係者も「これこそ大学入試改革だ」として、このシステムには非常に乗り気のようである。評価する仕組みができれば、国立大学も 3 要素の評価がやりやすいということである。

高校生は、1 年生から 3 年生まで自分でこの内容を、例えばスマホを使って入れる。スマホの良いところはどこでも記録を取れることである。スマホなどを利用した撮影、あるいは録音がない限り課題研究などの記録は十分できない。そういう意味ではスマホは非常に便利だ。今までは弊害ばかり見てきたが、その活用をどう考えるかという段階にきていると思う。

学び方を変えるということはすでにわかっている話で、昨日の夏井いつき氏の句会ライブは一方的講義をしない、デモンストレーションもするし、お互い話もするし、実際俳句も作る。そうすると忘れないという話である。深い学びということがあって、新しい学びは、いつき氏流に言えば、認める、伝え合うという句会ライブである。「認める」、名前を挙げていた。「記述をする」、俳句を書き、それを説明する先生もいた、作者が説明してくれていた。そのように行うことによって深い学びになるわけである。最初は「嫌だなあ」と思っていたプレッシャーも、終わりには積極的に関心を持てるような方向にいくのがアクティブ・ラーニングの方向性である。

今までは教育は教科書で、コンテンツベースでやっていた。その方法論が、実際には深い学びをしないと身に付かないということがわかってきたので、アクティブ・ラーニングをしようということである。新しい学習指導要領の本当の狙いは資質・能力の育成と評価だ。これに変わらざるを得ない。なぜか。世界中で、グローバル化の中で、求められる資質・能力が共通化してきた。汎用的な、世界中で通用する資質・能力がないといけない。日本人は日本の中だけでは仕事はできなくなる。

学習指導要領改定の方向性の中に「社会に開かれたカリキュラム・マネジメント」とある。公立学校も地域とか学校の生徒の実態に合わせたものに変えましょうというのである。公立の小中高を社会に開くということは、個別化する、独自化するということで、さらに言い換えると私学化するということである。もっと公立はそれぞれでやれと言っている。

何ができるようになるかという知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性、この 3 つの資質・能力の基本は実は学力 3 要素である。

世界中で汎用化されてきた資質・能力は、OECD が引っ張っているようであるが、実は Center Curriculum Redesign（CCR）というグループの考え方が OECD に影響を与えている。CCR の資質・能力観は 3 つ、乃至 4 つで、知識、スキル、人間性が中心にあり、もう 1 つ、メタ認知というものがある。冒頭の「世界の 5 大陸のどれを無くすか」という発想は、今までの発想や考え方を全部ひっくり返して、メタ認知化しないと対応できない。最終的にメタ認知化するということが重要なのである。これらを文部科学省的には 3 要素に対応させている。日本の教育行政の考え方は世界基準に一応合っているということになるのかもしれない。

OECD のコンピテンシー分類も、それぞれの国の資質・能力分類も CCR の考えに当てはめたほうがわかりやすい。アメリカ型では ACT21 というものが基本になっている。ここにも創造性と社会性があるが、アメリカ社会はこれからの時代に必要なものはわかっているようだ。オズボーン氏が言う通り、創造性と社会性が必要になってくるので、思考力・判断力・表現力・その他ではなく、創造性まで行かなくてはいけない。

英語は日本の課題である。他の国には英語が入っていないが、これを入れないと日本の場合には同じレベルにならない。世界に通用する汎用的資質能力に欠けることになる。

総合学習では探究ということを挙げている。探究というのは、課題の発見や分析、解決のプロセスであるが、教員にはそのような経験が少ない。まず教員が課題解決能力を持たない限り、生徒にこのようなことをさせるのは覚つかないと私は思っている。しかしやっていくうちにだんだん身についてくる。高校の次期学習指導要領案では、総合学習だけでなく、理科や社会科系を始めどの教科にも探究的学びが入っている。

ベネッセが昨年、全国の公私立高校の教育目標や建学の精神を分類した。しかし、これからの教育について、全ての学校が学力 3 要素を踏まえた資質・能力を目指すとなると、資質・能力観が同じになりかねない。私学はその 3 つの要素を踏まえながらも、それぞれの教育目標や建学の精神に対応する資質・能力を明確にしていかないといけない。私立は各校の建学の精神をもう一度見直して、これからの時代の資質・能力観に言葉を変えるなどしていかなければならないと思っている。

ルーブリック、難しいと思ったかも知れないが、挨拶のルーブリックの例を 1 つだけ挙げて終わりたい。一番低い子は「親しい友人や先生から声をかけられてもほとんど返事ができない」。一番良い子は「校内であれば外部からの来訪者にも積極的に笑顔で挨拶できる」。これは実は、幼稚園児や小学生のために作られたルーブリックだが、誰に対しても笑顔で挨拶できる大人もあまりいない。ルーブリックがあれば大人も子供も、こういうことができれば挨拶できるということだということが明確になるということである。そういうことから、子供たちに求めていく資質・能力をより明確にする方向がこれからの教育の方向であることをお伝えして終わらせていただく。

私学経営部会　講演Ⅱ

「建学の精神『自立協同』の進化と未来を拓く教育への取り組み」

学校法人村崎学園　理事長
村　崎　正　人

私には父が 3 人いる。恩師も 3 人いる。

父とは、実の父親、女房の父親、ドイツ留学時代の下宿先のお父さんのことである。

恩師とは、1 人目は、高等学校時代の校長先生で、千眼智見という先生である。私どもの徳島文理高等学校の校長もお願いした。先生は戦後の四国における最初の大僧正になった方である。高野山、真言宗、緋の衣である。私どもは仏教の学校ではないのだが、何かあったら真っ赤な衣を着て来る。

私は千眼校長に人間というものについてずいぶん仕込まれた。千眼先生は考え方が非常にユニークであった。先生は一人住まいで、奥様は和歌山のほうで暮らしており、お正月に 3 日間だけお宅に帰るが、あとは徳島文理中学・高等学校の校長として徳島に暮らしていた。

面白かったのは、味噌汁はどうやって作るか。と問われ、私は、お湯を沸かしてダシを取り、味噌は最後に入れる、煮立たせないようにすると答えると、「おまえ凡人だな。やはり凡人の子は凡人か」と。私の父の名前は凡人と書いてタダヒトと読む。「まずお湯を沸かす。そこに煮干と味噌を持って来い。煮干に味噌をつけて口の中で噛んで、お湯を飲んだら味噌汁ができる。そしたら煮干まで全部食べられる。」固定したものの考え方をするな、常にこのことを言われた。

2 人目は、私の大学時代の恩師である金井信一郎先生で、社会政策を学ばせていただいた。3 人目はドイツ留学時のルール大学ボッフムのマイヤードーム先生である。先生は経済、社会政策の学者であり、副学長になりその後学長にもなられた。また、シュミット、ブラント内閣の経済顧問でもあった。

さて、私は理事長として入学式、卒業式において建学精神「自立協同」のことを話している。そして卒業生には「照らし合いの精神」ということを必ず伝えている。お互いに照らし合おう。あなたたちが世界各地・様々な分野で活躍し、どこの出身だと聞かれたときに「徳島文理です。」と本学の名を高めることによって学園を照らしてくれる。同様に本学も常に一歩上を目標に研鑽し、みなさんを照らしていく、お互いを照らし合い切磋琢磨していこうと。

もう 1 つは、「安心と安全」について。まず、安心とは何かということである。保護者にとっての安心は、この学校に任せたら心配ないということに尽きると思う。私どもはたまたま進学校である。それぞれの生徒にどういう大学に行きたいと言われたとき、その個々の生徒についてあとどこをどう勉強させたら受かるか

ということを常に見ながら、一人ひとりの教育ということをやっていく。このようにきめ細かなわかる教育もやらないといけない。公立でもやっていると思うが、特に私学はやらないといけないと思う。徳島県の私立学校はたった 3 校である。私学に来る人は本当に少ない。平成 29 年の私立学校の生徒数は高等学校が 881 名、占有率は 4.5%である。私立中学校は 2 校あり、2.2%、425 名しか入学しない。全国で一番占有率が少ないのが徳島県である。これを何とか私は直そうと思って一生懸命やっている。そういう中で私学を経営しないといけない。どのように経営していくかと考えたとき、私学人として原点に立ち返るのが一番良いというのが私の考えである。

「安全」はと言うと、東南海地震ということが言われているが、その地震に対して学校にいたら安全だと。よそに逃げることはない。校舎の 4 階に上がったら心配ない。学校には 3 日分の水と食料品の備蓄ができている。建物は耐震化した。学校にいることが安全ということである。

耐震化と言うものは、ご存知と思うが、建物自体にはヒビは入るが、潰れないということである。だからもう一度建て直さないといけないかもしれないし、ヒビのはいった箇所を修繕したら良いだけかもしれない。

ここに校長先生も理事長先生もいらっしゃるが、自分の学校の総資産がいくらで、最低基準の学校、例えば小学校、中学校、高等学校それぞれ基準があるが、その最低基準の学校を造るにはどれだけ要るか。そのお金をちゃんと貯めているか。例えば私どもの土地・建物、機器・備品すべて合わせて総資産は約 1 千億円である。それに対して文部科学省基準の最低基準で全部計算すると 600 億円必要である。600 億円のお金持っているかと言ったら持っていない。これをどうするか。文部科学省は、そういうことが起こった場合、助けますと言った。

しかしながら、ある有名な私立大学の例をあげると、阪神大震災で校舎と体育館が潰れた。国立の神戸大学は直ちに復興したが、その私立大学は 3 年かかった。これを見たとき私は、私学はなかなか助けてくれないのだなと思った。

先生方は、自分の高等学校・中学校がどういう現状であるか、それを引き継ぐ人にきちんと教えていないといけない。そうしないと危機感がない。危機意識を持って、私学は自分で食っていかないといけないことを覚えて欲しい。

私は 28 歳で学園にはいり、翌年から学監として学園内の幼稚園、中学校、高等学校を中心に仕事を任された。35 歳では小学校創りをし、37 歳で理事長室長を拝命し、翌年には理事長代理となった。

平成元年、当時私が 41 歳の時、父の死去に伴い理事長を拝命した。それから約 30 年間にわたり理事長として現在にいたっている。

私の父は、満州・フィリピンと軍隊生活を 8 年間過ごした。フィリピンでは沼地を歩き回っていたので水虫がすごかった。ところがそれは主治医の誤診で、実は痛風であった。水虫だと思って一生懸命治療を受けた結果、肝臓、腎臓をやられ、最後は透析をするようになった。

私の父は私が 38 歳くらいのときから透析を受けていたが、父がだんだん弱ってきているのはよくわかった。医者から 30 分以内の範囲で移動させて欲しい、何かあったらすぐ連れて来て欲しいと言われていた。理事長は体の調子が悪いとは言えない。私は鞄の中に酸素ボンベを 2 本入れていつも父に付いた。やはり健康が一番である。健康でないと判断を間違うおそれがある。学校における安全という面でもそれが響いてくる

と、私は父のことを見ていて思った。

私は理事長を拝命した時に、次の 3 つのことを考えた。1 つは大学のすべての学部・学科に博士課程までつくるということ。2 つ目は、すべての建物を耐震化するという大事業だ。3 番目は学園の経営の安定化ということである。

私は 28 歳で学園に入り、ありがたいことにみなさんに可愛がられた。そして学外においては日本私立短期大学協会の運営問題委員会委員に就任し、学内においては主に大学の学部学科さらには大学院の設置に携わることになった。その折に、全国のいろいろな学校を見学する機会を得、ご教示いただいた。常に私は学園の安定ということを考え、どれだけの学校がどのくらいの金を持っているかということも聞いた。このことは留学中のドイツで学んだ。ドイツの会社の社長は、もし自分の会社が上手くいかなかったときのために、株式とは別に内部留保というものを持っている。

私は経営者として一番に考えていることは、生徒が 1 年間来なかったときに教職員を 1 年間食べさせるだけの金を持っておかないといけないということだ。父の時代は男子事務職員を雇おうとはしなかった。

なぜなら、もし学園が潰れたときに、家庭を持つ男は家族に飯を食わさないといけない。当時まだ女性は男性についていけばなんとかなるという時代であったから女子事務職員しか雇わなかったのであろう。

私が理事長になり男子事務職員も雇うようになったが、現在もまだ我々の学校が安定しているとは思っていない。

私は父のあとを継いでからいろいろなことで苦労をした。病気の父の代わりに教授会にも顔を出した。すると、中には、お前の言うことなんか聞いてやるかという先生もいた。またいろいろな難題・問題をぶつけてくる先生もいた。これらのことについて誠実に応えないといけないのだが、少し難しいと思えば、「時間を貸して欲しい」という言葉で乗り切ってきた。

先生方の学校の中には順風満帆の学校もあるでしょう。これから生徒が激減する時にどういうふうにやっていこうと考えている先生方もいらっしゃるだろう。そのときに、安定のための蓄積と、安心と安全ということを考えないといけないのではないかと思っている。

現在、私たちの学校は進学校である。この進学校にするにあたり、当時 28 歳だった私が千眼先生と考えて行ったことは、徳島女子高等学校の校名を徳島文理高等学校に変えて、高等学校を 3 つ持ったことである。1 校目は学園発祥の地、徳島文理高等学校（女子部）寺島校舎である。ここは徳島県私学の先駆として伝統ある女子教育を継承した学校であるとともに、学園本部の所在地である。単に学力だけでなく人間形成面に重点を置き個性を伸ばすことに力を注いだ学校である。

2 校目は、山城校舎、徳島文理高等学校女子部。これは千眼先生が、人間形成に重要な青年期においては女子別学の教育環境の中でこそ女子固有の資質の成長伸長がはかれるという考えからである。全国の進学名門校がそれぞれ男子校、女子校であるという理念のもと、3 校目が、現在の徳島文理高等学校であり当時は男子校としてスタートした。

3 校も持っているのは不経済である。男子校、女子校、両校において、少人数でしかも成績を上げないといけないという、14、5 人クラスでやっていたから大変であった。教員というのは 1 クラスに最低 2 人は要る。いや正確には 2.5 人くらい要るのではないかと思う。そういう計算をしたときにどれだけの人件費が必要か

すぐわかると思う。それでは大変だということで、私たちはまず寺島校舎を廃止し、山城校舎の女子部も男子校に統合し、現在の男女共学の徳島文理高等学校 1 校にした。それでもなかなか大変である。

先生方の学校では、きちんと学納金で人件費が払えているであろうか。私の学校は、恥ずかしい話だが、中学校は払えているが、高校は全然払えない。中高一貫にしても払えていない。しかし補助金をもらっているから、大丈夫な年と大丈夫でない年がある。生徒が増えたらその分人件費がでる。

それでは施設整備費はどうするのか。保護者の方から施設整備費としていただいているがとても足りない。校舎を建てたらすぐに何十億円という金が要る。それで、借金をしてやっていく。私はいつも「借金コンクリート」と言ってきた。借金というのは利息を考えたときに怖い。今では 1%以下で貸してくれるが、昔はだいたい 1 割と考えておけと言われていた。借金は怖い。しかしインフレだったらこれはいけるとか、そういうこともきちんと判断しないといけない。このあたりのことを先生方は安心と安全を考えながらやっていただけると有り難いと思っている。

私はいつも父が競争相手だった。一度だけ中学生の時に殴られた。そのことについては後でふれるとして自分が悪かったことだけはよくわかっている。

昔、私は高等学校の寮生と一緒に学校で飯を食い、別の部屋に親子 4 人で寝ていた。私は学校の中で育ったようなものだ。今はきちんと持ち家に住んでいる。

母親が一番苦労したと思う。朝起きて、寮生の食事を作り、寮母の役割も果たした。私立学校とはそんなものではないだろうか。村崎サイは、昭和 20 年 7 月、徳島空襲により校舎とともに直撃弾を受けて殉職した。私たちは校舎の中で生活していたから、それだけ愛情を持っている。そのときの生徒たちが来ると、よく「あのときどうだったなあ」と話すが、そういうことをしている先生方は大変少ないだろうと思う。私は公立高等学校に行っていたが、帰ってくるときは女子高の中に入っていく。女子ばっかりいる中に男 1 人、鞄持って入ってくるという生活をしていた。それが恥ずかしいとも思わなかった。

逆に言えばそれが私学の良いところではないか。経営者というのはそれだけの覚悟をもってやっているし、私の父を見ていて、それが良いところだったのではないかと思う。私は、いつも父が競争相手であった。私は年表を作っている。父は昭和 21 年に軍隊から帰り、直ちに学校の建て直しにかかった。その時々にどういう仕事をしたか。その年表に全部書いている。私は 28 歳から学校に入り父と一緒に仕事をしたが、私が 41 歳のときに亡くなったから、父の 41 歳は何を行ったのかを見る。父はあのときこれだけやったのだ。あれだけ借金が多いときにこれだけやってのけたのだというように、常に父と自分とを見比べる。常に父が競争相手だというのがそこにある。

自分の力だけではできないこともたくさんある。そこはブレーンの先生方、私のほうで言うなら、徳島文理中学・高等学校のことについては、校長先生と相談し、学園のことについては、事務局長と相談させてもらう。あるいは理事の先生たちと相談することもある。自分の周りのブレーンは固めておかないといけないと思う。

私の父は早稲田大学を出て、同大学の評議員に就任した。役員会というと百何人といる。そうすると決まるものも決まらない。役員は少ないほうが良い。私たちの学園の役員は 7 名である。評議員が 15 名だ。これも 5 名であったものを 7 名に、11 名だったものを 15 名に増やした。果たして増やしてよかったかなとは思

うが、やはり内部の人と外部の人を入れないといけない。外部からはいろいろと本当に親身になってやってくれる人を入れておかないといけないし、著名な方を入れたらあまり出てきてくれないし、言うことが大きくなるからそのような人はやめたほうが良いと思う。私の学校も著名な方がいるが、この人は銀行の方なので、経営的なことをちゃんと指導して下さる、そういう方を入れながら建学精神を守っていかないといけない。

私は先ほど言ったように学校で生活していた。それから、私は父と喧嘩して追い出されてしまった。その時に船に乗って大阪に行こうとしたが、間に合わず、今の自分がいる。船に間に合い、大阪に行っていたらどうなっていただろう。人間の運命というのは面白いものである。だから常々私は息子に言っている。親との喧嘩はするなと。私は喧嘩したからエライ目に遭った。ドイツから帰ってきて寝るところがない。土間にビール瓶のケースを括りつけてベッドにして布団を敷いて寝ていた。考えられるであろうか。喧嘩して家を出てしまうと大変な目に合う。だから息子には喧嘩するなよと言っている。

しかし、親子喧嘩をみていて助けてくれる人もいる。私どもの建築は西松建設に決まっている。設備は四電工。四国電力の子会社である。そこの施工主任の方が優しい人で、朝、8 時半になったら来て、寝ているところのケースを蹴り、「おい、起きろ」と。いつまで拗ねているのだということである。「飯食えないのだろ」。と声をかけてくれ、実際、金が無いから食えない。その人がモーニングサービスのある喫茶店に連れて行ってくれご馳走してくれた。私はあのとき初めてモーニングサービスを食べた。コーヒーかミルクを選び、それとトースト。美味かった。今でもその喫茶店は本部の近くに存在する。

今思えば、そういう経験はあとあとまで役立っている。だからダメだと思ったら放り出すのも 1 つの手だと思ったりもする。しかし放り出すときにはある程度の金は持たせて欲しい。本当にもう金がないという辛さ、これは辛い。

私の父が書いてくれた書について少し話す。まず昭和 42 年 10 月、私が二十歳のときである。「一人に耐えて本を読む」ということが書かれていた。大学生のときに私が読んでいた本を見て、「きちんとした文学書も読めよ。経済の本もきちんとしたものを 1 回読んでおけよ。お前は自動車部に入って車で走り回り、女の子と一緒にドライブするだけだろう」と。ドライブクラブと自動車部は違うと言ってもなかなか理解してもらえなかった。

次の年の昭和 43 年の 10 月に貝原益軒の言葉を書いた。「心は楽しむべし 苦しむべからず　身は労すべし やすめ過すべからず」。それは 21 歳のときだが、そのあと「お前は学校に入るのか入らないのか」と。

実は私は商社マンになりたかった。これはドイツに行っても諦めることができなかった。だから私はドイツに 5 年近くいた。総領事が大変可愛がってくれた。遊びに行くと商社マンの支社長がいる。支社長は大体 40 から 50 歳。若い人は 37 歳でやっている。当時はそれこそマダガスカル島まで飛行機を飛ばしてマグロを買い付けてくる。30 代、40 代の商社マンの人がマグロを買って来ないと日本にマグロが入らない。1 年が懸かっている。そういう、命を懸けるというのは大袈裟であるが、世界をまたに駆ける商社マン、これはやはり魅力がある。やりたいと思っていた。今でも諦められない気持ちはどこかにあるのだが、今さら 70 歳を越してやることはできない。

学校を継ぐのかどうするのかと言われたときに、まだ大学生だったから、「継ぎます」と言った。継ぎま

すと言ったときに書かれたのが、「大学を世界の大学にせよ」と。「コツコツ勉強せよ。易しいことではないけれど」。それは色紙ではなく、絵葉書に書いてあった。それを今でも机の前に置いている。

さて、私の学園の創立者は村崎サイと言って、小豆島の生まれである。家は醤油醸造業をやっていた。

父は文学者だったので、そのときの村崎サイの歌を創っている。「ふるさとの小豆島より四書五経 琴と車に乗りし祖母」。要するにお琴、芸術と四書五経、学問を持って来た。やはり人間は文化と文明の両方ができないといけない。たいへんな努力家だったと聞いている。

明治 28 年創立した学校は、私立裁縫専修学校。徳島とも村崎ともない。

学園創立者には子供がいなかった。縁あってサイの夫が勤めていた元郵便局の同僚の四男を養子に迎えた。名を福章という。そして、福章の妻は、サイが見初めた教え子の中村ミノルという女性であった。そこに生まれたのが私の父である。創立者とは全く血がつながっていない。私の母が村崎サイの姪である。そこで私は村崎サイと血がつながる。だから私は常に責任を感じている。小豆島に私の家の墓が全部あり、盆・正月は帰らないといけない。最近は忙しくて墓参りには行くが、なかなかゆっくり泊まってくることはできない。

今、私は何を思ってやっているかと問われたら、創立者の思いを受け継いでいるに過ぎないと答える。創立者村崎サイは学校を創った。なぜ創ったのか。一人ひとりを教育したいという思い。その思いを受け継いで私が歩んでいる。私たちの学園は、幼稚園、小学校、中学校・高等学校、短期大学、大学、それに大学院の博士課程まで持っている。しかしなかなか大変である。大変だ、大変だと言っても仕方がないので、常に前向きの考えを持っている。

前向きの考えだからと言って、前だけを向いていてもだめである。先生方に言いたいことは、ブレーンを持ちなさいということだ。ブレーンを持つことと、いろいろな人たちの話を聞いたら、やはりそこには良いことがある。その良いことをいかにして取り上げていくか。先生方は手帳を持っていると思う。私は手帳とともにメモ帳を持っている。常にメモを取る。

建学の精神は明治 28 年、1895 年学園を興したときにさかのぼり今年で 123 年になる。明治 28 年は日清戦争の終わった年で、日本はこのあと日露戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦、そして平和な時代が、今 72 年が過ぎようとしている。その間、日本の教育方針は教育勅語の時代 55 年を含めてずいぶん変わってきている。しかし、学園の建学の精神は変わらず一貫している。学園の進歩を支えてきたものは建学の精神である。この点が国公立の学校と最も違う点である。国公立の学校はその時々の時代の必要として学校づくりをやっているので、考え方によってさまざまである。しかしながら私立学校は変わらない。伝統と建学の精神の重みだと思う。その重みとともに、創立者のこころ、想いというものを具現化していかなければいけないと思う。

本学園の建学の精神は、創立者村崎サイが信念として唱えた「女も独り立ちができねばならぬ」である。明治 28 年に「女性の自立」を唱えるということはたいへんなことである。日本における女性参政権獲得は歴史をみてもわかるように、昭和 20 年の第二次世界大戦敗戦後である。サイの生きた時代に「女性の自立」を唱えるには相当な勇気が必要だったと思う。昔、婦人が守るべきとされた三つの事柄である「三従」では、女性は「生家では父に従い、嫁しては夫に従い、夫の死後は子に従う」そういう時代である明治 28 年 7 月

19 日に女性の自立を唱えて私立裁縫専修学校を創ったのである。

日本の女子の教育というものを見たときに、私が調べた限りでは、跡見女学校が明治 8 年、明治女学校が明治 18 年、3 番目が共立女学校で明治 19 年、明治 28 年創立のサイの私立裁縫専修学校の開校は 4 番目である。私たちの学校はそういう学校である。

しかし、徳島に学校を開いたものの、県民に女子教育の関心がなくその苦労は並々ならぬものであった。6 ヶ月間生徒が 1 人も来なかったのである。そして最初に来た待望の生徒は 54 歳の婦人であった。そのときに村崎サイが書いている。「教育とはじっくり長くやるものである。待ってやる」。である。今日では進学を考えるうえにおいても制度上そんなことはできない。「待ってやる」。やはりその人の能力、一人ひとりの個性があるのだから、その能力に合わせた教育をしなさいということである。これは考えさせられるところがあると思っている。

その村崎サイを教育したのがサイの父である。父は小豆島で戸長をしており、今で言う町長のようなものである。たいへん教育に熱心で、政府の学制発布が出されたのが明治 5 年だが、その翌年の明治 6 年には小豆島に小学校を設け、そこに姉とサイ本人を入れた。そのあと村崎サイはもっと勉強したいと、明治 13 年、17 歳のときに大阪の船場女学校で学び、明治 15 年には岡山の又新女学校で学んだ。その後高松の林竹堂塾で漢学を学び、愛媛県（当時の香川県は愛媛県）の第 1 号の女性教員の免許状を受けて小学校に着任した。その後、阿波の徳島県から呼ばれて大寺高等小学校で先生をした。当時、徳島は全国で 10 番目の都市であった。そこで学校を開いた。なぜ 10 番目の都市だったかというと、徳島には藍染めがあり栄えていた。世界の青は徳島の藍染でやっていたが、ドイツのバイエルン社の化学染料の進出により徳島の藍染の需要が激減し、それにともない次第に徳島も都市とはよべなくなっていった。

慶應義塾大学の第 6 代塾長の林毅陸先生は私どもの親戚である。父は早稲田大学に進学したが、東京の保証人は林毅陸先生であった。理事長室には福沢諭吉の言葉を林毅陸先生に書いてもらった書がある。「独立は協力より来り、自尊は克己より生ず」というものだ。独立は協力より、自尊は克己より。自分が偉いという人は誰も認めてくれない。そこには自分が努力して尊敬されるような、また謙虚な気持ちを持たないとダメだと、このことについても私は入学式・卒業式に述べている。

今、大学では 9 学部 27 学科持っているが、これはどういうところから持ってきたかというと、常に私は歴史というものを見ている。それは近代精神を見つけることだと思っている。西洋の中世は 5 世紀から 15 世紀。1000 年に渡って戦争ばかりやっていた。最初の 200 年は民族大移動の時代で、フン族の大移動。当時何が権威だったかというと、神と王者である。中世の終わりにこの 2 つを象徴するものが十字軍だ。聖地を奪還しに行く。このときに見たものは中世の精神に反対するもの。神に対しては知性が、王に対しては人間性である、ここから近代政治を貫く精神となる。

これを私は学園において具現化していっている。知性は何かと言うと科学である。本学で言うなら薬学部、理工学部、保健福祉学部。人間性は個性、個性を大事にしたのが芸術と文学である。文学部、音楽学部といえる。人間生活学部、総合政策学部、短期大学部もあるが、科学と人間性両方に亘り、こういう形を学内に配置しながら学校の経営を考えさらに新風を吹き込んでいく。

私どもの大学にパイプオルガンがある。なぜパイプオルガンがあるのか、そしてなぜ音楽学部なのか。フ

ィリピンで山下将軍は最後の陣地は教会に作る。教会には爆弾が落ちたことはない。日本軍が山の中に逃げて 2 万人死んでいる。自分の仲間が山の中に逃げたときに B29 に爆弾を落とされて死んでいく。パニックになる。そこで教会に逃げ込んだ。修道女達が小さなオルガンを聖堂に集めて弾いてくれた。それによってパニックが治まった。これが今で言うムジークテラピー、音楽療法である。日本で最初に音楽療法を持ち込んだのは私どもの大学である。音楽療法というのはそういうところから来ている。やはり人間というのは精神的なものが一番大きいということを私は言いたい。

そんなことで私どもは音楽学部を設置している。初代の音楽部学部長は私の父であった。精神的なことを言っても、音楽の専門家でないと大学の学部長として認めないと文科省の設置審議委員は言っていた。しかし「私がここにいるのは音楽によってである。精神的に音楽、パイプオルガンによって私が今ここにいるのだと。だからそれを認めないと言うあなたのほうが間違っている」と論争した。

やはり精神力というものをどうか先生方に持っていただいて、学校の運営に当たっていただけると有り難いと思う。私は学校経営にあたっては、ただ創立者の想いというものを具現化しているということだと思う。やはり建学精神というものをどれだけ大事にするかということにかかっているのではないか。それが唯一の思いであり、学校を発展させる原動力になっていくのではないかと思う。

私学経営部会　パネル・ディスカッション

「時代を先取りする学校づくり」

学校法人松山聖陵学園　理事長　**岡　豊夫**
東京女子学園中学・高等学校　理事長・校長　**吉　幹夫**
学校法人真宗大谷学園　専務理事　**真城　義麿**
教育ジャーナリスト　**野原　明**

野原：最初に、10 年 20 年先に求められる人間像というのはどういうものなのか。2 つ目に、そのときに教育というものはどう変わっていくのか、そして将来に向けて私学はどうあるべきなのかという話を進めていきたいと思う。今日、午前中までに AI やグローバル化でずいぶん世界が変わっていくだろうという話があったが、もちろんそのような話は常に考えながら進めていきたい。まず 10 年 20 年先に何が人間に求められていくかということについて最初にお三方に話を聞き、そのあと意見交換を行いたい。

岡：グローバル化、AI が 10 年 20 年でどのくらい進化するのかはわからないが、少子高齢化だけは間違いなく進むということである。社会・経済に与える影響で一番大きいことはやはり労働人口が少なくなることである。今までは人が増え、労働力が増え、賃金が上がり、消費が増え、また投資するという良い循環だったが、人口オーナス（onus）、人口が減っていく方向となる。労働力が減ることをカバーする対策として、1 つは AI やロボットを使って生産性をいまの 1.5 倍くらいに上げないといけないといわれている。業種によっては非常に可能性があると思う。もう 1 つは外国人でカバーする。海外からの技能実習生といった方々に来ていただき、労働力プラス消費してもらい、人が減った分を賄う。恐らく 10 年 20 年くらいのスパンだとそうなるのではないかと思う。

そのようなときにどういう人間像が求められるか。低成長期から超成熟期に向かうわけだから当然働き方が変わってくるわけで、若い人にとってはチャンスがあると思っている。年功序列が回らなくなるので若手がどんどん抜擢されていくだろう。そういうことで、悪いことだけではないので、中学校・高校の生徒にそのようなことを教えながら、変化に敏感になってもらう。今までの学校教育は効率的に教えて、画一的な均質的な教育が中心だったと思うが、これからは変化に敏感で、幅広いコミュニケーション力、英語はどうしても必要になると思っており、英語以外にもコンピュータと会話して情報を取る能力を持ち、

マニュアル人間・指示待ち人間では機械に取って代わられるために、そのような教育ではなく、今、感じている社会の中での不便さや非効率に疑問を持ち、それを改善できる、情報を持って改善していこうと興味を持って自分の道を考えていける、そういう人間像が求められるのではないか。

實吉：10 年先 20 年先の社会の変化としては、過去を振り返ってみれば、機械化、電力化、自動化、ここまで来ていて、今、人工知能 AI といわれているので、「知能化」というところに行くのだろう。それにどう対応した生き方ができるかということで人間像を考えていかなければいけないと思っている。

私がいつも話しているのは、私たちが育てている子供は未来からの留学生だということである。これからは非認知能力というものが問われてくるので、子供たちに関わるときに教師もこの部分を磨きながら、子供たちにここを人間力として身につけて欲しい。

「IB の 10 の学習者像」というものがある。即ち、挑戦する人、知識のある人、振り返りるできる人、コミュニケーションができる人、思いやりのある人、信念のある人、探究する人、バランスのとれた人、考える人、心を開く人である。子供たちに、こういう人となりになって欲しいというのが我々の提示する人間像だと思っている。

真城：私は今治港から船で 1 時間くらい行ったところにある小さな島の寺の住職をしていて、京都と行ったり来たりしている。会場の皆様方は 10 年前 20 年前をご存知なのでくらべてみると、変わったといえば変わったし、変わってないこともたくさんあると思う。私たちは変わるところが目につくが、むしろ変わらないのではないかなと思うところが結構ある。

民俗学者の宮本常一氏が、「だめになっていくことを進歩と誤解して、生きとし生けるものをみな絶滅に向かわせているのではないか」とずいぶん前にいっている。変化することが良くなっているのかどうかということもあると思う。例えば、車がどんどん自動運転になろうとしている時にむしろマニュアルのスポーツカーが人気になっていき、ハイレゾ（high-resolution）の一方でアナログのレコードやカセットの大ブームというようなこともある。便利で都合が良いだけでは生活者として面白くない、手応えがないということもあるのではないか。

2008 年 9 月 15 日リーマン・ブラザーズ・ホールディングスが破綻したが、その直前の 8 月末に東京で研修があったときに、研修の主催者との話の中で「アメリカはもう持たんぞ」と聞いた。「わからんけど引っくり返る」と。しばらくするとリーマン・ショックが起きた。その時に、今もうアメリカの経営者たちは社員を AQ で採るという。AQ というのはアドバシティ・クエシエント（Adversity Quotient）、逆境指数。つまり逆境に強い社員を採らないと持たないということである。逆境指数では一番下が「エスケープ（Escape）」、逃げる。その上が「サバイブ（Survive）」、自分だけ助かろうとする。真ん中が「コープ（Cope）」、それなりに対処する。その上が「マネージ（Manage）」、管理する。その上が「ハーネス（Harness）」、逆境を糧に成長する。何が起こっても嘘をついたり誤魔化したり逃げたり顔を背けたりしないで、一生懸命考える人間が一番大事になってくるのではないかと思う。

学校というところは評価ということと絶対切り離せないところだが、現代人は生まれてから死ぬまで評

価に晒されていて追い詰められていることが大きな問題だと私は思っている。評価を気にする人には、「人間を海に浮かんでいる氷山だと思って下さい」といっている。私たちが評価できるのは海面から出ている 1 割だけで、どのような人も 9 割は海面下にあって見えない。そこに尊いいのちの営みというものがあると思う。しかもそれが浮いているというのは海に支えられているということである。1 割の評価を疎かにするわけにはいかないが、それに振り回され、追い詰められていることからどう解放されるかが人間として大変だと思う。

野原：岡さん、経済界の方としていかがであろうか。

岡：経済でいうと合理性が主になる。企業もそうだが、特に人材に対して余裕がないので、経済は経済で合理性を目指してやっていくので、その兼ね合いというか、そのようなところが AI とかロボットとかで補完できると良いと思っている。

野原：今、機械とか AI に任せていけば良いという考え方がある。これは 1 つの流れとしては当然あると思うが、逆にいうと人間が AI に支配されたのでは何の意味もない。その意味で、これから先 AI 時代にどのような人間が必要なのかも 1 つの問題として重要になってくると思う。

真城：AI のできることとできないことをもう少しきちんと見ていかないといけないのではないか。不十分な情報や、情報といえない混沌とした中でどうすれば良いかということは AI が一番苦手なことではないかと思う。例えば産まれた赤子は言葉が話せるようになる前に親との人間関係とか母親が何を望んでいるのかとか、いろいろなことがわかる。そのようなところは AI がインプットできないところではないだろうか。先ほどの非認知能力のようなところで、私たちが AI に勝とうとは思わずに、AI が逆立ちしてもできないところを考えていく必要があると思う。

野原： AI を使いこなせる人間というのはどういう人間なのか。

實吉：ある人は、AI には読解力という分野ができないから、これからの子供には読解力だといっていた。どう読み解くかという意味では、人間が持っている感性が非常に大事であろうから、勝つ負けるではなくて、感性がどこまで豊かになっているかが人として生きていく上で必要なことではないか。

岡：私は専門家ではないので AI がどこまでできるかわからないが、例えば自動運転が少しずつ出てきているが、人間だから運転でミスして事故が起こる率が非常に高い。自動運転はそれを補完しようということでやろうとしている。ただ最終的には人間は自由に移動する要望があるので、AI で任せられなくて、スポーツカーのようなものはそちらへ行くだろう。ただ、物流、ロジスティックで使う車などは楽しいわけでもないから、高速道路を中心に機械にやらせたら良いということになる。そこのところは感性の部分もあり、使い分けるようになる。人間の欲望の方が強いわけだからそうなるだろうと思う。仕事でいうと、それをどう使いこなすかは人間がリードして、人間が楽に、幸せになるためにどう使っていくかは人間にしかわからないので、そこがこれからのビジネスチャンスになると思う。

野原：感性という言葉が出てきたが、もっといえば「感情的な何か」ということもあるだろう。色々なことが AI 化されて機械化されていった場合に、人間もきちんと平静な感情でコントロールすることがなければ、あちらこちらでいろいろな事故が起こると思われる。そういうものをコントロールできる人間というのは何かということが重要になってくるのではないか。

真城：方針を立てるとか、最終的にどこに行きたいかとか、人間が一生懸命考えないと、一人ひとりが考えないといけないと思う。教育というものはある意味、子供たちの誘導である。そこに大変怖いものがある。

戦前は何の疑いもなく戦場へというところまで教育した。いま私たちがやっていることもそのような心配があるということと、今この世の中で勝ち組になるために必要だと思ってやっていることが、コンピュータに隷属するような方向になっていないかというような、コンピュータより先へ行くというか、人間の側から AI に未来を提示していかないといけないと思う。

野原：今の話からだんだんと教育のほうに流れてきていると思う。そういう意味では 10 年先 20 年先に教育がどう変わっているのか、あるいはどう変わっていったら良いのかという話を進めたいと思う。

實吉：中川所長は話の中でシリコンバレーに行き、そこで示されたものが STEM 教育だと述べた。アメリカでは Science、Technology、Engineering、Mathematics がこれから必要なものだといわれている。ところがこれには感情、感性がない。これに Art の A を入れて、STEAM 教育と我々はいっている。このようなものもこれからの方向性という意味では大事ではないか。

CEFR の話だが、果たして私どもは日本人として日本語の「熟練した言語使用者」になっているかどうか。英語の頭になっていれば別だが、日本で生活することを基準にすれば、言語の力としては C1 レベルの日本語力が必要になる。むしろ国語という言い方をしないで日本語といって言語教育をしていく必要があるのではないか。このようなことが、これからの目指すべき方向としてあるというのが今の思いである。

真城：人類が集団で生活するようになって、そこにはすでに教育はあったと思う。そういうことでいうと、今はこうでないといけない、あの方が良いといっているが、長い間次世代を教育して集団や社会が継続していくように、ずっと続いてきた経験知のような教育の部分はもっと日が当たらないといけないのではないか。

こういう分け方が良いかどうかわからないが、教育の問題は大きく 2 通りあり、1 つは教育そのものの問題である。もう 1 つは教育における問題。今いろいろいわれている改革は全て教育における問題だと思う。それはそれで大事なことではあるが、改革がどれほどレベルアップしても教育そのものの、私学でいえば建学の精神のようなところをきちんとやっておかないといけないのではないか。

2016 年 10 月号のアメリカの『Foreign Affairs（フォーリン・アフェアーズ）』という世界中の外交官が読んでいる雑誌が、21 世紀の日本の教育を特集している。それは過去 30 年の日本の教育政策は 1 つ残らず失敗だったという特集である。Foreign Affairs がいっているのは、特に大学がズタズタだという話であるが、日本の大学教育の特徴は、前期産業社会に最適化した時代錯誤的な教育制度であって、クリティカル・シンキング、批判的思考とか、イノベーションとか、グローバル思考というものが欠落しているという。

そのときのグローバル思考とは、探究心とか、学ぶことへの謙虚さとか、世界各地の人々と共同作業をすることへの意欲ということが国際的な定義である。日本の教育制度は、今の日本の社会秩序の保持と、献身的な労働者の育成と、政治的安定のために設計されていると指摘している。

それから今年発刊の科学誌『Nature』3 月号も、「日本の自然科学教育の失敗について」という特集を組んでいる。それは大学の話だが、人口当たりの大学の論文数は、2002 年まで日本は世界 2 位だったが、

今は37位という状態である。アジアのほとんどの国に追い越されている。

それでもまだ文部科学省のいうことを聞き続けないといけないのかというのは、私の個人的な思いである。少なくとも私学は一応、文部科学省の顔を立てながら、どう独自にやっていくかという、これは次のテーマになるが、そういうことを考えないといけない。

それから最初にいった、経験知としての教育システムのようなことが大事で、例えば森信三さんのいった「時を守り・場を清め・礼を正す」とか、立腰（りつよう）教育とか、そのようなことが今こそ本当に大事なのではないかと思う。答えを出すよりも、問うとか、気づくとか、考えるとかということが大事であり、その問う力をどうつけるかという教育をしていかないといけないのではないか。

岡：20年後の教育をどう見るかということだが、恐らく今の通信や移動の手段は大変進化しているはずなので、例えば自動翻訳機で言葉を話せたり、そして移動も簡単になって、日本で仕事をすることと同じくらいに海外に通勤ができるかもしれない。そのようなことを考えると、今の15歳くらいの子供があと20年経ってどのような社会で働くかを私なりに考えてみたが、教育のグローバル化は必然ではないかと思っている。

例えば今の若い子でスマホを持っている子供と持ってない子供では情報量に大きな差があるのと同じように、20年後30年後に自動通訳ができて語学・言語ということはあまり意味がなくなるのかもしれないが、英語が喋れることによって得られる情報の量は相当あると思うので、やはり英語の教育は必要だろう。ただ英語は能力ではなくて1つの技能・スキルくらいになって、パワポ、エクセル、英語は大丈夫ですかと聞かれるくらいのハードルになるのではないかと思う。その準備を若い頃からやっていくことが必要であろう。

今、経済格差と言われており、日本の中ではアベノミクスが当たっているところと当たっていないところがあるが、もう1つは輸出してグローバルになっている企業、市場を大きく見ている企業と、ローカルだけでやっているところの差が非常に大きくなっていて、ローカルでもこれから10年後20年後には目を外に向けていく必要があると思うので、地方の中学校・高校でも教育のグローバル化というのは必要だろうと思っている。

私はグローバルには2つあると思っている。1つは普通に皆様が考えられる外なるグローバル化で、世界を見て日本で考えながら大きな目で見ていくということ。もう1つは内なるグローバル化で、平たくいえばインバウンドのようにお客様が外国人の場合もあるし、技能実習生のように同僚や部下が外国人ということがこれからは当たり前になってくると思う。東京に行って外資系の企業に行くということではなくて、身近で10年後20年後にはそういう社会になってくる。格好良い言い方だとダイバーシティ、国籍や人種や性別や年齢は関係なく受け入れていく、地方ではそうなっていくと思うので、そのようなことを見据えて教育をやっていく必要はあると思っている。

野原：3人の方にそれぞれのご意見を伺った。気になったのは、STEM教育からSTEAM教育へという話である。「A」Artということは美術とか音楽だけではなくて文学も哲学も含めたものだと私は理解したわけだが、そういうものがこれから先もっと必要になっていくだろうと思う。それを日本の今の教育が果たして教えているか、そういうものを学ぶ余裕なり時間を与えているかどうかということを考えると、本当に心配である。旧制の高等学校というものは一体どういうものだったのだろうか。もう一度思い出して、そこでやったものが人間教育にとっていかに重要であるかということを少し考えたほうが良いのではないか。

實吉：今、文部科学省は高大接続といっているが、学校教育法では、小学校、中学校、高校についてはどういう教育をすると決まっているが、大学はそれがない。高校と大学を接続させるという考え方が、戦後の学校教育法をつくった時に全く欠落しているのではないかと思う。そういう意味で、今の6・3・3・4の仕組み自体を変えることも含めてもう1度見直す必要がある。有識者会議でも必ず旧制高校の話は出てくるし、リベラルアーツといわれる部分を含めて、複線化するということもあるだろうし、そのようなことを制度的にいじっていくことも考えるべき時なのではないか。

野原：今、学校で学んでいる子供たちはまず大学に行くために受験の勉強をするが、大学に行くと今度は専門のことだけ勉強する。要するに「A」、アートの部分が全く欠落しているのではないか。その結果として先々人間の形成、人間性に大きな影響を与えているのではないかという気がする。

私が時々例にあげるこんな話がある。東京大学法学部を卒業して司法試験も受かったが、法曹界に行かず記者になろうとNHKに来たという大学生がいた。優秀な若者だろうなと興味を持って、「君、最近どんな小説を読んだ？」と聞いたら、彼は「私は小説のようなくだらないものは読みません」。つまり彼は六法しか読んでいない。そういう人間が育っていることにものすごく危機感を感じた。そういう専門馬鹿が多く育っているのではないか。そのような専門馬鹿にしないためにどのような教育をすべきなのかということが非常に大きな問題だと思っている。

真城：一昨年、真宗大谷学園の大谷大学の入学式に、理事長が行けないので代わりに祝辞を述べろといわれて行った時に、「大学に入って君たちは偏差値に一喜一憂する時期は終わった。これからは学びの質が変わる」という話をしたつもりであった。しかし後で知り合いの保護者に会った時に、「入学式で真城先生が『もうこれから先は勉強しなくても良い』といったと子供がいっていました」といった。つまりそのくらい勉強というものは偏差値を上げること以外に思いつかないのである。本当に危機である。

昔、アメリカのある高校を見学に行ったことがあるが、そこは3D評価、3次元評価をやっていて、X軸で基礎学力・知識を見て、Y軸でどのくらい応用できるかという応用力を見て、Z軸で姿勢を見る。日本では、やる気満々で必死で取った点数も、遊びながら取った点数も同じ点数にしか見てもらえない。それを3次元評価することによって「今回は点数に結びつかなかったが、よく頑張っていたことは見ていたよ」とか、「これだけの知識しかないけれどもよくそれでいろいろなことに応用しようとしているね」とか、褒める視点が3倍に膨らむ。

そういう評価1つをとっても、ただ1本の数直線の上のどこだということはそろそろ卒業しなければいけないのではないか。ただ、それがなかなか数字以外で格差をつけるのが難しいという問題にすぐいってしまい、記述ができにくいのと同じようなところで、我々の側がもう少し公平性とか数字の上下だけで決めるということで良いのかと考えなければいけないと思っている。教育というものは長いスパンでの問題である。効果が出るのははるか先だが、短期間の中での到達度で人生を決めさせているところが大変心配である。

野原：岡さん。毎年、大卒なり高卒なり新卒を採用されたときに、子供たちを見ていて感じるところがある

と思うがどうだろうか。

岡：私は中学校、高校、大学の教育の区切りというものをよく理解できていないのだが、例えば中小企業でもこれからは外国人を採用することもあると思っている。技能実習生を受け入れると、それを教えるために英語でコミュニケーションを取ろうとしたりする。そういうことで地方でもグローバル感覚を持った人が欲しいと思っている。

東京で海外経験があって英語も喋れる人はたくさんいるが、中小企業で採用することは難しい。そういう人を採用しようとすると社長より給料が高い。実際にマネジメントをやってくれるレベルのグローバルな人が地方にいないということである。私が高校のグローバル化と言ったのは、例えば外国語大学へ行ってアメリカやイギリスへ留学する人は今でもいるわけで、高校でみんながそれを目指すということではなく、例えば宗教の違いとか、この人には豚肉を勧めてはいけないというようなことから理解を進めるとか、そのようなことを体験しながらどんどん外国へ出て行き、そして外国の人を受け入れるハードルを下げていく。どんどんコミュニケーションしていく。そのような体験を中学・高校の時に多くして、将来的はそういう人たちと同じ目標に向かって改善活動を行うようなミドルマネジメントが輩出するくらいのところを地方の高校も目指すべきではないか。これから 20 年後 10 年後はそのようなニーズが広がるのではないかと思っている。

野原：最近日本の学生の海外留学率が減っているという話に関連して、村崎氏の講演で「放り出せば何とかなる」という話があったが、放り出すということを親ができなくなっている。自分から飛び出していく子供も少なくなっている。この辺りが問題ではないかと思うが、学校関係者の立場ではどうだろうか。

實吉：本校は女子生徒だけなので、とにかく外に行きたがる。女の子は積極的である。少し質問とずれるが、子供たちに自慢ができる大人がいなくなっていると私は思っている。1996 年にユネスコから出た学習の 4 本柱の内、learning to be―人間としていかに生きるかを学ぶにあたり子供たちが手本にする大人が見つからないのが実状だと思っている。子供から見てこういう大人になりたいという大人像が示せていない。核家族になっているので、見えるのはお父さんお母さん、兄弟がいれば兄や弟だけだ。自分と相対する他者が見つけられない世の中になっているために、逆に自分のことが見えないということがないだろうか。

野原：難しい問題である。家族の中の人間関係のようなものから出発しないと外に行ったときに人間関係が結べないということがあると思う。

真城：子供たちに面接をして「尊敬する人は」と言うと、「お父さん」とか「お母さん」と言う。本当に狭い世界での人間関係しか持っていなくて、昔のように地域の誰、あのおじさんとか言うことがない。学校の先生方も、もし無色透明、中立に立とうとされているとすると、それはほとんど魅力がないと思う。私が教師になった時に思ったのは、公平中立と透明には立たないでおこうということである。少なくとも本気でこう考えている人間がここに 1 人いるということを示して、生徒たちはそれに共感したり反発したりすれば良いと思う。

私が校長をしていた学校では、週に 1 回礼拝の時間に必ず自分の所属する学年の先生の話を聞く機会が何十年と続いている。教員は全員 15 分くらい、1 年に 1 回は何百人の前で話さないといけない。これがずいぶんいろいろと他の人生の追体験のようなところになる。あの先生はあのように考えていたのか、今ボランティアであのようなことをやっているのか等いろいろなことを聞く。毎年 1 年分を本にして全員に返しているので、他の先生の話も読むことができる。これを生徒同士でもさせようと思って、宗教立の学校

であるから宗教の授業があって、その冒頭に毎時間 2 人ずつ生徒の感話ということをさせている。そうすると彼があんなことを考えていたのかとか、彼女はそういうことがあったのだということで、とにかく他を認める多様性を大事にして欲しい、限られた範囲の中でできるだけたくさんの人に触れて欲しい、本当はいろいろな肌の色や職種や年代の人に触れて欲しいと思う。憧れとか尊敬とか、自分はあのような会話のできる人になりたいとか、あのような感性を持った大人になれたら良いとか、どうすればあのように生きていけるのだろうかということが、思春期ではかなり決定的になるのではないかと思う。教育する側があまり遠慮せずに、良い悪いではなく、手本ではないが見本として見せていくことがとても大事ではないかと思う。その辺りで、今、教師の評価も含めて、良い子でないと、先生も良い子でないといけないところが心配である。

野原：先生は、自分の専門の勉強だけではなく、いわゆるリベラルアーツ、もっと言えば世の中の変化について関心を持ち、新聞もよく読んでいないと、子供たちと話ができないと思う。ところが最近の若い学生たちを見ているとなかなか本を読まない、新聞も読まない。ニュースを何で知るのだと聞くと、スマホだと言う。あのようなものではニュースを知ったことにはならないと思う。テレビでも十分とは言えず、ニュースを深く知ろうと思うと新聞を読まないとダメだ。岡さん、若い社員を見ていてどうだろうか。

岡：家庭の教育もそうだが、職場でも情報源がスマホということはよくある。上司がいろいろ説明してもスマホの情報をそのまま信じてしまうこともある。これはトランプさんが言うフェイクニュースのように非常に危ういところがあり、どうしてこのような大事なことをスマホの情報で決めるのだろうというところもあり危うい感じがする。自分で学んで考えるという習慣をつけられるようにしていかないと、情報がどんどん多くなる分だけ危険だという感じは職場でもしている。

真城：若い方々は、今起こっていることをどのように見て、どのように受け取れば良いかということ、あるいはどう動けば良いかということに思いがあまり至らない。好きとか嫌いとか快とか不快とかという動き方になってしまう。今起こっていることを理解するためには歴史的なことがわかっていないといけないし、社会情勢がわかっていないといけないし、地理的なことも必要である。あるいは様々な法則や言葉等、いろいろなことが総合的に関係してくると思う。今は目的達成のための最短距離としての学習、つまり一番少ない投資で一番大きい成果を、というようなことで生徒や親や学校の先生も非常に効率主義的になっており、成果が出るか出ないかわからないようなことを見ている暇はないというところが、逆に一番成長を邪魔しているのではないかと思う。

野原：将来に向けて私学はどのような学校づくりをするべきか、ということで話を進めたい。その中には、教育としての私学が今後どうあるべきかという問題もあるだろうし、学校経営としてどうあるべきか、どうしたら良いのかということもあるだろう。

真城：私学というのは、こういう教育をしたいと言う創設者がいて、最初は生徒が来るかどうかよりも、とにかくこういう教育をしたいから共感する人がいれば来て下さいというところから始まったのだと思う。やりたい教育があって教育機関をつくり、教えたい人たちがいて学校になり、そこに固有の理念と具体的教育実践をつくりあげて教育を実現したいということである。それに対して、本来の姿はその理念や教育システムに共感した人たちがそこで学びたい、思春期の一時期をそこで成長したい、そこに身を置きたいということで始まっていくのが、私学の原風景ではないかと思う。

ところが経営ということを考えると、ニーズに応える教育をしないとこちらを向いてくれないというこ

とがある。私が校長の時に言っていたのは、まずニーズに応えますということを提示して、その上で入学してから後に、「あなたのニーズは本当にそれで良いの？」と言う、騙し討ちではないが、もう一度ニーズそのものを考え直してみませんかという、宗教の学校なのでそういうスタンスでやっていた。

大学時代に恩師に言われたことは、学校というところは世間の価値観と違わないといけないということだ。学校と世間の価値観が一緒になると、世間を批評的に見る、クリティカルに見ることができなくなっていくと思う。しばらくの間、学校特有の空気の中で、少なくとも校内では外の価値観に振り回されずにいられるということがいろいろな意味で大事だと思う。

私の学校には宗教の授業があるが、私学は必ず建学の理念のための時間を週に 1 時間くらいは設けるべきではないかと思っている。そこで静かに建学の理念を鑑として生徒一人ひとりが自分を見つめることがとても大事だろうと思う。言い方は悪いが一種のひきこもりと言うか、隔絶された部分が必要なのではないかと思う。

夏休みにある学校の教員研修に呼ばれて行ったことがあり、話をした後の質問の時に、教頭先生が、「我が校は文部科学省の言うことはほぼ全部やっている。グローバルもあれもこれも先取りして一生懸命やっている。それにもかかわらず、何もやってないように見える先生の学校のほうが沢山生徒が来るのはなぜだ」ということを訊かれた。その時に、「付加価値競争を追いかけると疲れ果てるだけではないか」と申し上げた。それも大事だが、やはり本体価値のところで、先ほどの村崎先生の話で言えば、安心・安全というか、ここは全日空ホテルだが、全日空のかつての客室乗務員の合言葉は、「安心・安全・あったか・元気」であったらしいが、学校だから、それにプラス何かということが必要かと思うが、学校が本当に生徒の居場所として、生徒たちがここで学びたい、ここでつながりたいということを支えるベース、場をきちっと提供していくことだと思う。

安心と言うのは、例えばここの絨毯の上にロープ 2 本で幅 50 センチの通路を作り、こちらの端からこちらの端まではみ出さないように歩きなさいと言われると、何のためらいもなく歩ける。ところが外に高さ 10 メートル幅 50 センチの塀のようなものを作って、同じ距離この上を歩きなさいと言われると、這ってでも怖くて歩けない。ペッパー君だったら同じように歩くだろうが、人間は同じ幅 50 センチでも、10 メートル上方だと歩けない。それは何が違うのだろうと言うときの安心である。

転んでも大丈夫、失敗しても大丈夫。変な言い方だが、安心して不安でいられる、そういう安心である。失敗しても自分が否定されない安心というようなことである。我々の学校の理念はそういうことなので、それはずっと続けるということである。

10 年くらい前からだが、卒業生が 18 歳で卒業し、2 年後に成人式があるが、京都市は会場が限られているので成人式に出るのは抽選になる。それで卒業生から、「せっかくの成人式だから自分の一番好きな場所でやりたいので学校を使わせてくれ」と申し出があって、「学校は場所を貸すだけで何もしないよ」と言うと、「いいです、私たちで勝手にやります」と言った。それが一種の恒例になって、卒業生の 6 割から 7 割くらいが集まって成人式を勝手にやっている。そういう安心できる場としての学校でありたい。

岡：私は、まさに、これから私学の時代が来るという感じはしている。高度成長期には公立高校、公立中学の教育のやり方が良かったのだと思う。均質で平等で効率的に多くの人を教えていくシステムとしては非常に良かったのだと思うが、これから超低成長で人口が減る中ではいろいろな生徒を受け入れていく時代になり、個性に合った教育をやってあげないといけない。そういう自由度があるのが私学だろうと思って

いる。先生は大変だと思うが、これからの私学は画一的な教育は効果が薄くなっていく。特にこれから大変革の時代が来る中では画一的な教育ではダメだということで、いかに一人ひとりの個性を伸ばしながら可能性を教えてあげられるかが、私立のこれから一番重要なことになるのだろうと思う。

ただその中で、子供目線ではなく、大人の目線であまりにも悲観しすぎているのではないかと思う。確かに経済はシュリンクしていって、英語を勉強しなくてはいけないとか、AI に勝たなければいけないとか、そういうこともあるかもしれないが、逆に子供たちの目線で言うと競争は間違いなく減っていく。人口が減るのだから大学も行きやすい、就職もしやすい。そして AI やロボットを使うということは、もともとロボットでできるような嫌な仕事はしなくて良くなるわけで、非常にチャンスはある。年功序列で何年もかかっていた昇進がいきなりやってくるかもしれない。そういうモチベーションを子供・生徒にしっかり教えてやって、学ぶことによるメリットをしっかり見せることで目標を持たせる、そして目標に向かって 1 つか 2 つでも成功体験をさせてあげられる教育がこれからは必要で、我々としても目指すべきではないかと思っている。

實吉：真城先生の発言を受けて、一つ二つ話したい。成人式の話があったが、私どもの学校も、中学で入ってくるので地域の成人式でも知り合いがいない。本学圏の学年で、近くにあるホテルで成人式をやっている。そのような学校に対する愛着というのか、学校を愛せる子供たちの学校にしたいと思っている。卒業式に私は、ここは母の学校と書く母校ではない、母の港と書いて母港と言う。船は必ずどこかの港に所属しているはずなので、君たちは東京女子学園と言う港の 1 艘の船だという言い方をする。

学校と世間の価値観は逆のほうが良いという話があったが、今、産業界からの要請を受けて学校教育の中身がそこに偏っているのではないか。かつて産業界は、社会人になるためのことを教えるのは会社に入ってから研修でやるから、もっと違う力をつけてくれという話であった。それは真城先生の言う社会と違う価値観のところに子供たちの身を置いて良いという話につながると思っている。

長塚先生の講演の中で、公立はこれから私学化していくという話があった。そういう意味では、どういう学校づくりをするのかである。私立学校の自主性・独立性だとしたら、何が自主性なのか、何が独立性なのかということをしっかりと捉えていく。それは、建学の精神と言ったり教育理念と言ったりするわけだが、私は、これも真城先生の話を受ければ、私立学校は「この指とまれ」だと思う。「この指とまれ」と指を出したら誰も止まってくれなかった学校では生徒は集まらないわけだから、この指をどう言葉としてうったえていくのか、あるいは映像として見せていくのかということかと思っている。

近くにいる人たちは本校の良いところを見ないで悪いところを見るものだから、近くの子供が来ないで遠くのほうから学校に来るという時期があった。けれども私立学校だからこそ地域に受け入れられる学校になる必要がある。近くの子供が通ってくれる学校づくりということも必要ではないか。公立は地域があって成立すると言うが、逆に私立もその地域あっての私立学校を目指していくことも必要である。

学校の共学化がずいぶん進んだ。男子校は比較的残っている学校はあるかと思うが、女子校はかなり共学化が進んでいる。やはり男の子と女の子では、左脳と右脳をつなぐ脳梁という部分が、男性は比較的小さくて女性は比較的大きい。そうすると言語能力、記憶の仕方、空間認知能力が違ってくると言われている。

例えば宿題でも、「これは今日のあなたの宿題、あなたのために作った宿題だ」と言って渡すと女の子はきちんとやってくる。世界史でいうと民族移動は、女の子は割とわからないが、男の子は比較的わかり

やすい。しかし女の子は文化史や政治は比較的得意なようである。それは学び方が違うからである。学び方が違うということは、どういうことを基準にした学び方をしていくかということが男の子と女の子では違うということだろう。女の子に「何言っている、馬鹿野郎」と大声で怒鳴ったら最悪である。男の子はこれくらいの声で叱らないと叱られているという意識がない。女の子は対面で叱るのではなく、むしろ隣において諭すように言うと心に染みていくという話もある。そういう意味で私どもは女子校であり続けようと思っている。

例えば、企業が不正をやると子供は見ているわけで、大人のしくじりが世間に晒されるたびに、子供たちから、「先生、どうしたら良いの」と聞かれる。あのようなことは子供たちの心にグサッと刺さる。きちんと中身をわかって伝えずに表面だけ伝えると、大人は信用できないというふうになってしまう。

野原：話が細かくたくさん出たように思う。1つは男女共学の話があった。私学にとって男女共学かあるいは別学か。この辺りについて少しお話をしていただきたい。

真城：私どもの学校も120年間くらい男子校で来て、共学に変えた。1997年から共学になったが、その7年前の1990年に21世紀委員会というものをつくり、21世紀に我が校はどういう教育であるべきか、ということを2年間くらいかけて徹底的に話をした。もちろん教育理念に立ち返って、教育理念の実践の形としてどうであるべきかということをもう1度見直そうというときに、男子だけというのは理念と違うのではないか、男女がお互いに違いを尊重しながら学び合う、刺激し合うことが大事なのではないか。一生懸命考えた結果、共学にした。迷った部分もある。男子校というのは、怖い女性がいないから来たという男の子も結構いる。経営上の問題ももちろんあるが、経営ということだけでは校内的に教職員として元気が出ないと思うので、建学の理念上の必然性ということを、少々こじつけでも良いから重ね合わせて、変えるなら変えるということであった。

野原：男子校が共学に変わった時にどのような女の子が来るのか、女子校が共学校になるときどのような男の子が来るのか、この辺りが非常に難しいと思うが、どうだろうか。

真城：私の経験で言うと、先ほどの實吉先生の話で海外に行くということと同じで、非常にチャレンジ精神のある女子生徒たちが来た。男2に対して女1という比率で入れてみると、それで大体5対5に見える。割とそのようなチャレンジ精神の子供が来てくれたためにいろいろなことがうまくいったと思う。

ただ、教職員のほうがむしろ心配しすぎで、今まで男子だけで、先ほどの實吉先生の叱り方では通用しなかったりするので、その辺りでしばらく先生方は心配していたというところはある。セクハラ研修は徹底的に行った。慣れてくると今度は多少ヒヤッとすることもでてくる。厄介だったのは、男子校のときは圧倒的に男性教員が多かったが、バランスを取るために女性教員を採用する。そうすると若い人は女性で年寄りが男性ということになってこれもまたバランスが悪い。教員間のセクハラも心配しないといけないということにもなる。

野原：実際に踏み切る時にそのようなチャレンジ精神を持った女の子が来るという予測はされたのか。

真城：予想してなかった。私は共学のスタートの年から校長になったので、準備の時期は学校にいなかったが、39歳で島の寺へ帰って4年間住職を務めていたが、突然43歳で校長になれと言われた。その辺りの苦労は十分にわかっていないが、いろいろあって始まったのは事実である。

野原：岡さんは男女共学や別学について何かお考えはあるか。

岡：本校は元々男子校で数年前に共学になった。先生方に訊くと、女子生徒が活躍しており、非常にアクテ

ィブで引っ張っていってくれる。逆にやんちゃな男の子は大人しくなって、そういうことでは良かったのではないかと思っている。世の中からすると恐らく女性の方が、これから議員さんも増やさないといけないし、会社の役員も何割は増やせというようになるから、チャンスは相当あると思うが、女性の方がアクティブなのかなと思う。男子生徒はそれに負けないように頑張って欲しいと思っている。

野原：共学の話はそこまでにして、今までの話でポイントとしてあがった独自性について、その独自性を生かせる学校とはどういう学校かということを考えてみたい。独自性はどういうものだと考えているか。

實吉：他と比べてないものを独自性と言うのであろうが、私学であれば、カリキュラムの中でもどこに比重をかけるかが必要なところではないか。今、英語の 4 技能と言われているが、本校はかなり前から 4 技能をやっていた。教科書を教える、教科書で教える、「を」なのか「で」なのかということがある。教育の内容の中に他と違う自分の学校のことを示していく、そこを強調してやっていくこともある。かつては私立のほうが施設設備は良くて公立は悪いと言われたが、今はもう公立のほうが施設設備が良くなっている部分があるから、私学としては苦しくなってきていると思う。ただ、公立は変えるのは大変であるが、私立学校は変えるのは割合楽で、理事長なり校長なりの決断で変えることができる。それは特色化を出す際の強みと思っている。

野原：今、教科書の話をされたが、数年前に灘高校の先生が文庫本の中勘助作「銀の匙」1 冊で 3 年間かけて国語をやったことがあって話題になった。私学の独自性の中には教科書をどう使うかということもあるのではないかと思うが、どうだろうか。

真城：そのようなことにブレーキをかけたのがかつての未履修問題だと思う。例えば何か一つの教材でずっとやるのは他が未履修になるのではないのかと、教育関係者は心配する。その決断ができるのかできないのかということである。国に管理された中でしか教育をやってはいけないのか。もっと大きな目的に向かって教材・方法はまかせて欲しいと言いたい。もう一度私たちがきちんと取り戻さないといけないところではないか。

　独自性ということと特色ということは同じなのか違うのか。特色は見える形で示していくことだと思うが、独自性というのはその学校に所属する生徒も教員も、それをプライドとすることができるような根拠というか、そういうものではないかと思う。それがうまく共有できて、その学校の中の教職員も生徒も、あまり「自分が」と言わずに学校の居心地が良くなるためのことをさりげなくする空気が生まれてきて、それが続いていくと良い循環になると思う。

野原：岡さんはどう考えているか。

岡：もちろん私学で独自性を出したいと思う。ただそうは言っても予算が限られていて、地域の特色とか歴史とかいろいろなものがあり、特色を出せそうだとは思うが、生徒はついてくるのか、先生がやりたがるかという制約はあると思う。ただもう一度、今いる生徒や保護者の求めるもの、先生がやりたいものをよく分析してみると、実はできる独自性というものはあるし、気づかなかったけれども他の学校にないところもあって、そういうものを磨いてみるところから始めてみるのが、一番可能性があると思っている。新たな設備で新たなものを目指すというと根づくまでに相当時間がかかると思うが、少しずつ学校の今あるファンダメンタルの中でできる独自性を一緒にやっていこうと思う。

野原：未履修問題という話があったが、未履修というのは、世界史をやらないのは学習指導要領に完全に反しているが、副読本を主にするのか教科書を主にするのかという辺りは決まりに反するとか反しないとい

う問題ではないので、その辺りはかなり独自性を生かすことは可能ではないかと思う。

学習指導要領の関係で言うと、とかく学習指導要領に書かれた通りにやらないといけないと考えてしまう。それぞれの学校で教育課程を組んでいくときに学習指導要領に反しているのではないかと神経質になる必要はないだろうと思う。そもそも学習指導要領の最初の文章からして、あれは要するに「それぞれの学校で柔軟に考えて良いよ」と宣言している。

しかし、学習指導要領にがんじがらめにされていると考える人が割合いるのではないかなと思う。そういう理解をしている限り、公立はともかく私立の場合は独自性も発揮できないだろう。その辺はどう考えているのか。

實吉：預かっている子供の学力差はあるわけで、例えば数Ⅰと言っても、数学のもとがわかってないから数Ⅰが何かわからないとすれば、数Ⅰの内容をやるのではなくてもっと前のことをやらないといけないという実態の学校もある。やはり中身のことだと思う。工夫だと思う。学習指導要領の中身をしっかり読んで組立てをどうするかということが大事なのであって、履修をしないのはいけない、日本の教育は履修主義で、習得主義になってないからいけないという言い方を我々の仲間はするわけだが、その範囲は履修しなければいけないと思う。

真城：本当の目的がどうかよりも、都道府県の私学担当の役人がどの程度しかわかっていないかということのほうが勝っていて、京都などは全員の時間割表と教員各自の時間割を全部出させて、つき合わせてごまかしてないか確認するというようなことをやっていた。今はかなり変わってきたが、その辺りは我々からすると無駄な努力と言うか、もったいないと思う。

逆に言うと、今、私が住職をしている寺の島の学校には教頭先生と担任の 2 人しかいない。「あなたたちはこれで本当に学習指導要領通りできると思っているのか」と行政に言いたい。未履修と言うのであれば、どのような僻地の子供でも学習指導要領通りの教育を受けられるようにする義務があるのではないか。

野原：今の学習指導要領は一種の法令である。省令だが、それを守らないということが大きな問題になってくるわけだが、その辺りで何か考えはあるか。

岡：今まさに弊社が国交省から怒られていることに近い。グローバルで言うと、あり得ないというか、そこまでしなくて良いが、国交省にお届けしたことができていなから怒られている。「安全は担保できている」と言うと、すごい勢いで怒られ、信頼できないとネットで叩かれる。怒られたら謝るしかない。

そこで私学のアロワンスをどれくらい見てもらえるのか私にはわからないが、教育は人が幸せになるためにやっていることなので、そうであればそういう個性でも良いと思って良いのではないか。そこを私学は上手くハンドリングして、日本を変えていくくらいになると良いなと思っている。

野原：私学の経営あるいは国庫補助、私学助成という問題にもふれたいと思っていたが、時間が来てしまった。参加いただいた先生方、これまでの話の中で、ここは面白い、ここは取り上げようということがあったら、ぜひ参考に取り上げてそれぞれの学校に活かしていただければ幸いである。

私学経営部会

「総　括」

松山城南高等学校　校長
河　野　大　助

みなさま大変お疲れでございました。

当部会は、「時代を先取りする学校づくり」という研究目標を掲げ実施いたしました。

午前中の長塚篤夫・私学経営専門委員長の講演Ⅰ「教育改革と新しい教育観～高大接続改革などがめざす、教育の質的転換の方向性とその課題を探る～」では、我々、私学を経営するものとして、大いに感銘を受けるとともに、講演資料の内容は大変重みがあり、今後の方向性へのヒントをいただいた気がしています。学校法人村崎学園の村崎正人・理事長の講演Ⅱ「建学の精神『自立協同』の進化と未来を拓く教育への取り組み」はまさに日本の教育に私学が存在する意味の根幹を指摘されたようでした。村崎先生の体験を、ユーモアを交えて、大変興味深く聞かせていただきました。我々私学は、創立されてから現在までの年数、または創立に至るバックボーンなど、積み上げてきた歴史はそれぞれ違っています。しかし、創立者や先人の熱い思いとユニークな発想など、建学の精神なくして、我々の目指す独自の私学教育は成り立たないであろうと改めて思い知らされました。同じ四国の私学として、「安心・安全」は大変参考になりました。肝に銘じたいと思います。ちなみに本校の歴史もアメリカからキリスト教宣教師として単身で松山にやってきた女性宣教師、ジャジソン先生が 1891（明治 24）年に創立した学校です。そのため、「女性の強さ」という点で大変親しみを感じました。

午後からのパネル・ディスカッションにおいても、会社経営のノウハウを幅広い見識で、学園経営にも生かしておられる、学校法人松山聖陵学園の岡　豊・理事長をはじめ、私学経営部会には欠くことのできない存在である、實吉幹夫先生、真城義麿先生の 3 人のパネリストと、コーディネーターの野原明先生のお話は、さすがに経験の裏付けの下にこそ語ることの出来る内容であったと感銘を受けました。大いに刺激を受けましたので、さっそく明日から前向きな取り組みにシフトチェンジをしようと思いました。大変感謝をしております。

最後に本大会の運営に携わっていただいた日私教研事務局のみなさまや、本県運営委員の先生方に深く御礼申しあげて総括とさせていただきます。

教　育　課　程　部　会

2016 年 3 月末に高大接続システム改革会議の「最終報告」がなされ、高等学校教育・大学教育・大学入学者選抜の一体的改革の具体策と、新たな時代に向けて子どもたちが身に付けるべき資質や能力が示された。そこには、学力の 3 要素、即ち、十分な知識・技能を基盤に、答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく能力（思考力・判断力・表現力）や、主体性を持って多様な人々と協働して学び、人生を切り拓く態度の重要性が挙げられている。

そして、同年 12 月 21 日の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」では、2020 年から 2030 年の社会と子どもたちの将来を見据え、学校教育の改善・充実に向けて、「何を教えるか」にとどまらず「何ができるようになるか」、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」という新しい視点からの豊かな学びとカリキュラム・マネジメントの実現等が求められている。

これらを踏まえて、主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニングの視点で）に関する基調講演と、高大接続改革や次期学習指導要領改訂についての講演を行い、実践発表では、ICT 活用教育、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業研究、及び学校改革について、三校の取り組みをそれぞれ紹介する。

当教育課程部会が、生徒たち一人ひとりの将来が輝くものになるよう、私学教育の質的充実の一助となれば幸いである。

1　研究目標　　輝く未来を築くための私学教育の質的充実に向けて

2　会　　場　　松山全日空ホテル　本館４階　ダイヤモンドボールルーム（Ｉ＋中）

3　日　　程

	9 15	10	11 45	12 45	13 45	14	15	16 45	17
10月20日（金）	受付	開会式	基調講演	講演	昼食	実践発表Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		閉会式	

4　内　　容

基調講演

演　題「アクティブ・ラーニングをどう理解し、組織的に実践するか
～教師と生徒がともに学び成長する学校へ～」

講　師　**山　田　剛　史**　　京都大学高等教育研究開発推進センター　准教授

講　　演

演　題「成熟社会に相応しい教育課程と学習指導要領改訂」

講　師　**淵　上　　孝**　　文部科学省初等中等教育局教育課程課　課長

実践発表Ⅰ

テーマ「教育環境の変化と対応～校内ＩＣＴ化へ向けた実践報告～」

発表者　**平　原　澄　夫**　　聖カタリナ学園高等学校　教頭

実践発表Ⅱ

テーマ「アクティブ・ラーニングの実践報告
～AL 授業タイプと国語と ICT の相性～」

発表者　**斎　藤　貢　市**　　芝浦工業大学附属中学・高等学校　教諭

実践発表Ⅲ

テーマ「21 世紀型能力の育成に向けて
～SMILE プログラムによる学校改革への挑戦～」

発表者　**浜　屋　　陽**　　開星中学・高等学校　教頭

５　講師・発表者・指導員（順不同）

山　田　剛　史　京都大学高等教育研究開発推進センター　准教授
淵　上　　孝　文部科学省初等中等教育局教育課程課　課長
平　原　澄　夫　聖カタリナ学園高等学校　教頭
斎　藤　貢　市　芝浦工業大学附属中学・高等学校　教諭
浜　屋　　陽　開星中学・高等学校　教頭

６　運営委員・指導員（順不同）

委員長
谷　本　賢　治　松山東雲中学・高等学校　校長
副委員長
藤　田　繁　治　新田青雲中等教育学校　校長
委員
三　浦　裕　治　松山東雲中学・高等学校　教頭
山　橋　史　仁　新田高等学校　教頭
越　智　聖　司　新田高等学校　教諭
松　原　　浩　新田高等学校　教諭
高　橋　裕一郎　松山東雲中学･高等学校　教諭
髙　橋　　結　松山東雲中学･高等学校　教諭
今　村　早　希　松山東雲中学･高等学校　教諭

７　専門委員・客員研究員・指導員（順不同）

委員長
清　水　哲　雄　学校法人鷗友学園　理事長
委員
鈴　木　　弘　香蘭女学校中等科・高等科　校長
北　村　　聡　京都外大西高等学校　校長
大多和　聡　宏　開星中学･高等学校　理事長・校長
客員研究員
助　川　幸　彦　学校法人村田学園　副理事長
山　本　与志春　学校法人青山学院　常務理事

教育課程部会　基調講演

「アクティブ・ラーニングをどう理解し、組織的に実践するか ～教師と生徒がともに学び成長する学校へ～」

京都大学高等教育研究開発推進センター　准教授

山　田　剛　史

大学でアクティブ・ラーニングを推進してきており、2年ほど前から京大の近くにある私立の東山中学・高等学校で、学習力強化プロジェクト特別委員という形で関わっている。毎月3回くらい行って研修会をしたり、組織的な展開についてサゼスションしている。その縁でいろんな中学・高校の授業を見させてもらっている。今日は大学での話をベースにしながら、中学・高校でのアクティブ・ラーニングはどう考えていけば良いかをいっしょに考える機会にしていただければと思う。

なぜ、アクティブ・ラーニングが必要になってきたのか。私としては、とにかく社会状況が変わる、それに伴って教育環境も変わり、求められている能力が拡張してきているということによるものだと思う。少子化は本当に切実な問題である。200万人いた18歳人口が数年後には100万人を切るという試算が出ている。単純に考えると子供たちを受け入れている学校が半分になるという話である。大学も同じで、維持しようと思うと、今まで大学に来ることができなかった子供たちを受け入れることで、なんとか大学の定員を埋めていくことになる。それでも定員に満たない大学は私学では5割以上である。

それに加えて、大学は、高校の先生方が育ててくれた子供たちを採って、4年間か6年間教育をして社会に送り出していくわけだが、その社会もまた激変している。特にAIやICTの技術革新の勢いはとどまるところを知らない。極端な話、もう人間は要らない、機械が取って代われるならそれで良いという議論が、議論のレベルでなくてもう実装されつつある。大手企業も機械で代われるからと大幅な人員削減を打ち始めている。

そういう中で大学生はどうなっているか。現実に私たちも苦しんでいる。言い方は悪いが、これまで大学に入ることができなかった子供たちを受け入れざるを得ない状態がある。そうすると本当に読み・書き・計算をゼロからやる大学もたくさんある。

学生も変わってきているにも関わらず、教育はどうなっているのかと言うと、教授が前で90分とうとうと話をして、それをただ聞いているという一方通行的な授業が多い。それで本当に社会を生き抜いていく力を身につけられるのかと言うとなかなか厳しいと思う。そういう中でまず大学でアクティブ・ラーニングが言われるようになり、その流れが高校・中学にも降りていったと考えられる。

AIやICTの革新の話では、セルフレジなどは今いたるところに見かける。便利だと思う一方で、パートタイムの雇用がなくなっていく。そういう部分でいろいろと置き換わっていく。銀行には案内ロボットが登場している。17ヶ国語くらいを話し、外国語で対応してくれる。自分で学習していくので、曖昧な言葉でも何を求めているかを判断して適切な場所にガイドしていく。そうなってくると人間の価値はどこにあるのか。

教育で言うと MOOC というものがある。世界中の大学の授業を無料で受けられる。インターネット回線

を通してアメリカのハーバードの授業に日本人が登録して 8 週間かけていっしょに授業を受ける。課題が出てそれに答えていく。掲示板上で世界中の学生とやりとりする。わざわざ大学に行って入学金と授業料を払ってひとつのキャンパスで学ぶ意味は何なのかが問われるようになってきた。もうこれで良いではないかという議論もある。

それに対して私たちは、いやそうではない、対面教育は大事だと言うのですが、その対面教育は、教授が前でずっと喋っているだけである。これなら別に電子データで良いではないかという話になってきている。

私たちは一生懸命知識を伝達することをやってきたが、知識伝達で言えばもうロボットのほうが上を行く。そうなると VUCA（ヴーカ）の時代といわれる、変動性・不確実性・複雑性・曖昧性の高い社会、つまり何をやればどういう答えがあるという線形の考え方でいかなくなってきている。原発の問題然り、もうすでに専門家が集まって議論するだけでは解決できない問題がたくさん出てきた。そういう状況で、私たちが育てている子供が本当にしっかり地に足をつけて活躍して次の世代をつくっていけるのかということを、私たちは本気で考えないといけない状況になってきている。

これは某国立大学で私が講義を行った工学部の 1 年生の 7 月頃の写真だ。みなさんが育てた子供たちが地方の国立大学に入学して 1、2 ヶ月でこういう雰囲気になる。一生懸命勉強している子もいるが、真横に私がいるのに堂々と寝ている学生がいる。

1 コマ 90 分の授業を 1 日 4 コマ 5 コマ、ある意味では垂れ流しをしていったい何が育っているのだろうかと思う。これでもまだみんな座って聞いているだけマシで、途中で出て行って帰って来ない学生とか、学級崩壊が起きている大学はたくさんある。ほっとけば良いという声もある。もう大学生だ、もう大人だから自己責任だと。だけど私たちは年取ったときにこの子たちに支えてもらわないといけない。この子たちに本当に私たちを支えようという覚悟があるのかと思う。

この状態を学生だけのせいにしているようでは、たぶん大学は学校としての形を保てなくなる。まず私たち自身が変わらないといけない。変わるときのひとつのチャンネル、ツールがアクティブ・ラーニングだと思い実践している。

世界の中で日本の大学生ほど自分で学ばない学生はないということが、いろんなデータから見えてくる。主体的に学ぶということが全然できていない。授業の中で先生に言われたらその場ではやる。でも自分でそれを授業の外に持ち出して主体的に学んでいる学生は本当に少ない。

その理由としてカリキュラムがタイトであることが挙げられる。管理的な部分がきつくなっているので、学生たちの自由時間が少ないという理由もある。経済的理由もある。アルバイトしないとやっていけない。しかし、アルバイトが深夜まで及んでその結果朝起きられなくて授業に出られない。それでついていけなくなって学校に来なくなって退学していく。こういう流れが蔓延化している。これをなんとか食い止めないといけない。

大学では、授業時間外学習という言い方をするが、授業時間外で学生が学ぶための仕掛け・仕組みを積極的に取り入れて、そのデータを各大学で取って、自分のところの学生はどれくらい授業外で学んでいるかを数値化しているが、なかなか増えない。京大でも同じである。

こういう状態は大学だけ、高校だけ、中学だけの問題ではなく、学校教育全体を通して、どうやって自分で学んでいく生徒をつくっていくのかという非常に難しい問題となっている。

そういう社会状況・社会情勢の中で、これからのカリキュラムに求められる能力は何なのかという議論は、関係省庁含めて国際的にも色々なところが提言している。そのひとつはここにあるようなもので、知識・スキル・人間性・メタ学習、と 4 つのドメインがある。当然知識というのはこれからも大学教育の中核であることは間違いないと思うが、それ以外にその知識をどうやって使うか。4C と言われる、クリエイティビティ、クリティカルシンキング、コミュニケーション、コラボレーションという力、スキル。それからキャラクタ

ーと言われる人間性まで射程に入れて生徒を育てていかないといけないと言われている。これらにいわゆる学力の 3 要素（資質・能力）がだいたいそのまま符合する位置づけになっている。

今までこういうスキルは学生自身が学外でいろんな活動をして身につければ良いという話だった。中学・高校は大学よりは学校行事が多いので、学園祭や体育祭でかなり養われると思うが、教科の中でもこの能力みを育んでいけるかを考えることが、アクティブ・ラーニング改革で求められているひとつの要素になる。

おそらく近々でいうと皆様の関心の的は、新入試だと思う。ただ、入試が変わるからアクティブ・ラーニングだというのは非常に狭い解釈だと思う。入試というポイントを軸にして高校教育、それにつながる大学教育、それらを立体的に改革するという趣旨の改革である。

ひとつは「主体的・対話的で深い学び」が入ってきていること。もうひとつは「カリキュラム・マネジメント」ということがある。今日、主任クラスの方が多いのは、おそらくこの部分をどうするかが喫緊の課題なのだと思う。それは私もいろんな中学・高校を見させてもらって感じるところだ。良い先生はたくさんいる。チャレンジしてアクティブ・ラーニングの授業をどんどんやっている先生もいる。でもなかなか学校全体に広がらない。

中学・高校は大学よりはフラットな組織なので、校長先生のトップダウンでいくのもひとつだと思う。しかし、そういうリーダーシップが機能していない学校もたくさんある。あとで紹介するが、私の関わっている学校では組織をつくり、七人衆のような先生を集めて勉強しているが、広がっているとは言えない。

そこにカリキュラム・マネジメントという発想である。単にアクティブ・ラーニングを普及させるだけではなくて、それをカリキュラムとして学校全体の中でどう位置づけていくのかということまで考えなければならない。大学でも正直厳しい。ただ、中学・高校のほうが動きは速いという感じはする。

教師の役割がこれから変わっていくという指摘がある。壇上で前を向いて「私の話を聞いてノート取れ」という状況ではなくなってくる。みんながどう考えているか、みんなが友達と話し合う中で新しい問題解決の方法を考えたり、自分にない知識を使っていったりする、そのために教員はどんな場をつくっていけば良いか。こういうふうに役割が変わってくるという世界的なデータもある。

アクティブ・ラーニングの定義が最初に出てきたのは 2008 年の学士課程答申という文科省の高等教育に関する答申で、これがある種の誤解を生んだ原因にもなっている。「一方的な講義形式の教育とは異なり」と書いてあって、それによって講義以外の別のことをやらないといけないと考え、私にはできませんという先生が続出する。講義しかやったことないからである。

それを、必ずしもそうではないという意味も含めて、私の同僚の溝上先生が 2014 年に定義をした。「書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」という定義である。認知プロセスというのは、ある物事に対して、覚えたり・関連づけたり・意味づけたりする、頭の中で起こっている知識のネットワーク化とか、経験と知識を結びつけたりということである。それ自体を外化する、外に出すということだ。

要するに、何らかの活動・経験があり、それに対する振り返りがセットになっている。振り返りも、自分の中でする振り返りと、他者、友達や先生に対して何らかの形で外に出す振り返りと 2 種類あるが、これがアクティブ・ラーニングを考えるときに核になってくる。ただ、これは溝上先生自身も限定的な定義としている。このあとで深い学びという議論に入っていくので、型としてのアクティブ・ラーニングの定義をもう少し超えていくものがある。

アクティブ・ラーニングの一般的な特徴としては、「聴く以上の関わりをしている」「スキルの育成に重きが置かれている」「高次の思考に関わっている」「何かの活動に関与している」「態度や価値観を探究する」、それらを含めて「ある物事を行わせ、行っている物事について考えさせる」という、先ほどの定義とエッセンスは同じで、何らかの活動・経験・行為と、振り返り・リフレクションが入っていることが必須要

件だと位置づけられる。

ただ実際にリフレクションまで含めてデザインされているアクティブ・ラーニングの授業は少ない印象がある。何かをさせている状況のまま 50 分が終わってしまう授業がたくさんあり、落とし込みがない。先生からの解説もなければ、生徒自身がその経験をその単元で習う知識と関連づけることなしに、ただ何かやってみよう、話し合ってみよう、意見を出してみよう、これがずっと続く。そうすると生徒は慣れてくる。テーブルを作って議論して、またアクティブ・ラーニングだという感じでだらだらと話していくのでは、意味がない。

私たちはそうならないように常に問いかけを変えていったり、形を変えたりしていかないといけないのだが、一方では私も中学・高校に行かせてもらうときには、いったんハードルを下げる。つまり先生方はアクティブ・ラーニングというのは今まで自分がやってきたものと全然違うものだと思っている方が多いので、実はそうではないというところから始める。先生方が普段やっているものもアクティブ・ラーニングと呼べると言っていったん安心感を与えるものの、それでもそう簡単ではないという部分も一方ではある。その両方をハブになっている先生方はうまく現場に伝えていかなくてはいけない難しさはあるが、まずは増えていかないといけないので、どんな形でも良いのでまず生徒に活動させてみる、振り返りをさせてみる。そこから体験していって、活動が少し浅い、どうやって深くしていこうか、というステップ・バイ・ステップで徐々に持っていくのが大事だと思う。

特に私立中高一貫校や進学校では、アクティブ・ラーニングは現行の受験制度の妨げになるのではないかという懸念があるようだ。覚えさせる知識量が多く、それを覚えさせないと現行の受験には適応できない。それで、コミュニケーションなどの汎用的な能力を育成するのがアクティブ・ラーニングで、知識の理解・伝達に関しては通常の授業をやっていくというように、二極的に捉えている方が多いが、アクティブ・ラーニングの狭い意味での目的は大きく 2 つある。ひとつは、いわゆる知識伝達型でやっている認知的領域の知識をアクティブ・ラーニングによってさらに上の次元に上げていく、知識の定着を促進する役割がある。

先生方は、教科書をここからここまでやらないといけないと、50 分全部先生のレクチャーで終わってしまうことがよくある。それで 100%先生として伝えられたとしても、生徒に 1 割くらいしか残らなかったとすると本当にそれでよかったと言えるのか。それは先生の自己満足に過ぎないのではないか。例えば知識の提供量を 7 割くらいに落としたとしても、3 割生徒に定着するのであればそのほうが良いわけである。

こういう話をすると、残り 3 割はどうするのかとよく言われる。そこはうまく授業外学習や自分たちで勉強することを取り入れたり、場合によっては ICT を使って時間がかかっていた部分を効率化したりして、その 3 割をしっかり学んでいく。そうやって学びの環境をデザインしていかないといけない。いずれにしてもアクティブ・ラーニングは知識を深化させていく、知識の定着度を高めていく役割がある。

加えて、知識だけでなく、態度や技能面に関してもアクティブ・ラーニングによって拡げていくという、2 つの方向性がある。

この両方を一気にやるのは大変である。講義をベースに組み立てていく通常の授業の中に、知識のレベルを上げることを少し入れられないか、あるいは態度や技能が伸びていくようなものを入れられないかといったことを考えていく。それをカリキュラムの中でどう位置づけていくのか。中学 1 年生のこの教科のこの部分では教える部分はやらないといけないが、後期のこの部分では態度や技能が伸びていくような活動を取り入れようかとか、自分の授業だけで全部を賄うのは難しいので、うまく補完的にやっていく視点が必要になってくる。

アクティブ・ラーニングが入ったことによって何が起こったかと言うと、従来のパッシブ・受け身的な学びから、みんながアクティブ・ラーニングに行った。従来の講義をやめて活動ベースになっていった。もともと講義一辺倒の授業は網羅主義の失敗と言われるものである。網羅的に全部扱おうとするが、結局生徒に

身につかないという状態である。それに対してみんながアクティブ・ラーニングに舵を切ったら、活動あって学びなしという状態である。何か話し合っているが、よく聞いてみると頭が動いていない。それが活動主義の失敗だ。

移行期なので少し極端な活動に振り切りすぎて、何かさせることに特化して頭が動いていない状態で来たことも問題だ。そういう中に学習の深さという軸を入れて解釈すると少し様相は違ってくる。本来私たちが目指すものは、活動もあって学びの深い状態であり、これが「主体的・対話的で深い学び」のど真ん中の領域になると思う。

ただ、私は実際にすべての授業がこのようになるのは難しいと思う。やはりワンウエイレクチャーが必要な局面はあるし、例えばコミュニケーション・スキルを学んだり、プレゼンテーションの時間に取り組んだりするのは、学びの深さはないかもしれないが、手を挙げる経験とか発言をする経験自体は意味がある。それ自体は浅くてもアクティブなことも大事だということもある。

もっと言うと受け身だけども深い場合もある。たぶん大学の授業の大半はこれを意識してやっていると思う。それは先生の問いかけとか教材のつくり方で頭の中がスパークする状態だ。経験・知識がつながったり、あのときに学んだ知識がこのときの知識とつながったりする瞬間があるはずだ。この部分はあまりクローズアップされてきていない。いずれにせよこの 4 つを私たちはどう使い分けていくかが大事だと思う。

もともと主体的・対話的な部分はアクティブ・ラーニングの強い部分だが、深い学びが入ってきたことによって、ある意味では私たちにさらに負荷がかかった。現場はまだ深さを議論するのはしんどい状況であり、主体的・対話的という状態をつくるだけでも結構大変で、さらに深さを入れていくのは本当に大変だ。

私がいま関わっている東山中学・高等学校は、来年 150 周年を迎える男子校だ。SSH や SGH を取っているところはある程度やっていけると思うが、普通の学校がどうやって成長していけるのかに関わることに意味があると思っている。

「カリキュラム・マネジメントの 3 つの視点」ということで、教科横断的な視点や PDCA サイクルがあるが、組織文化の形成というのが大学でも一番大事である。生徒の学びと育ちに関わっていく教員集団、要は進学実績を上げていく受験対応型の教員集団ではなくて、自分のクラスでなくてもこの生徒何かおかしいなと思ったらその生徒の学びと発達のために手を出せるような、そういう文化形成が非常に大事だと思う。ただ、組織文化の形成は本当に時間がかかるものであり、そう簡単に変わるものではない。これをトップダウンでやってしまうと、もともとの組織文化との摩擦で管理職側と現場教員の間であつれきが生まれてしまって、笛吹けど踊らずという状態も出てくる。そういう中でどうやってマネジメントしていくのか。

東山中学・高等学校では学習力強化プロジェクト委員会という委員会をつくっている。この委員会は、これをやりなさい、あれやりなさいというよりは、どちらかというとコーディネートしていくような、この先生とこの先生をつないでみて何か新しいものが生まれないかという、横の風通しをよくしていく、そういう運動体として位置づけて動いている。そうは言っても実質的な教育の指揮権を持っている副校長先生、中学・高校の 2 人の教頭先生、進路指導部長、教育部長、企画室長と私というメンバーである。そういう意味ではわりと上の層でメンバーを構成している。

アクティブ・ラーニングの授業は正課だけではなくて、正課外も積極的に使っていくことが大事だと思う。正課だけで十分培えない部分を正課外でしっかり補強し、それをアクティブ・ラーニングという視点で括っていく。例えば修学旅行の事前研修・事後研修もアクティブ・ラーニング的な視点から整理できる。文化祭とか学園祭などでも、アクティブ・ラーニングで大事な視点が必然的に入ってくる。それを東山の場合はトランジションという表現を使っている。アクティブ・ラーニングの活動とアクティブ・トランジションの活動を両方合わせながらやっている。

個人の力量形成をやりながら、それを組織の力に戻していく、それから組織の力を個人の力に戻していく

という運動。横の運動も縦の運動もなかなか起こりにくい組織形態が残っているので、それを何とかやっていきたいと思っている。

教科の枠を超えた議論をしていく。具体的な方法はあとで述べる。

アクティブ・ラーニングはどういう方法でやれば良いのかという、方法に議論が集まりがちだが、画一的な方法を一斉伝達でやるのではなく、それぞれの先生の持ち味を活かしてどうやってコラボレーションをつくっていくかということをやっている。

それから若い先生のサポートの強化も重要である。着任した先生が急に教科担当を任せられることもあるが、若い先生たちが学校の目指す人材育成制度に沿ってしっかり授業ができるようなサポートがあまりないという印象がある。そういう若い人たちも来て勉強してサポートし合えるような関係性というのをこの中でつくっている。

アクティブ・ラーニングはあくまでも媒介であって、それ自体が目的ではない。では何のためかということが必要になる。東山の場合には「主体的に行動して目標を達成し、夢を実現するために」、「アクティブ・ラーニングを媒介として、質の高い教育を実践する集団へと成長して進化し続けていく」ことを目指している。

委員会をつくって、ワーキンググループを立ち上げて、ワーキングの下に 30 名弱のいろんな教科の先生たちが集まって勉強会を開いている。そのときに私たちが計画した研修デザインなどを実践したり、その中でいろいろな事例を拾い上げていったりしている。

なかなかトップダウンでは動かない部分がある。トップダウンは強制力と普及力と効率性があるが、一方では自由度が弱かったり、究極性が担保できなかったりする部分がある。

ボトムアップでやっても一定数以上は増えない。残念ながら個々の先生がいくら努力してみても、それを線、面につないでいくのは別物である。1 割 2 割はどこの学校にも言われなくてもやっている先生がいるが、その人たちだけを囲っているだけでは次の 6 割は動かない。何をやっても動かない 2 割はこの際置いたほうが良いと思う。すごくやっている 2 割と、興味はあるが大変そうだと思っている 6 割をどうやって巻き込んでいくかが課題になる。

そういう合わせ技としてミドルアップダウンという形がある。とにかく実質的に続けていくことが大事だ。1 割を 2 割に、2 割を 3 割に、まず半分くらいを目指して、地ならしから含めてやっている。地ならし抜きでいきなり城を建てようとしてもガラガラ崩れてしまう。ここは慎重にやらなければいけないと思う。

では何をやっていけば良いかと言うと、可視化していくことが大事だと思う。ニューズレターを定期的に刊行していろんな先生に知ってもらうこともひとつであるし、その中でこの先生はこんなことをやっていると紹介していくチャンネルをつくっていく。東山は昔から 10 年カレンダーというものがあるが、今回このプロジェクトで「3 年日記」というのをつくった。ただの白紙ではなくて、いろいろこちらで考えた問いのようなものが間に入っていく。それをできれば保護者にも買っていただいて、それで対話を促していくということもある。このへんはトランジションに合わせている。

いろいろと勉強会の機会もセットしているが、私が会に出てレクチャーするというよりは、教科を超えた 30 名弱の先生方が 2 ヶ月に 1 回定期的に集まって共同勉強会をやっている。実際にみんなでルールをつくってみたりとか、学校としてどういうルールがつくれるかとか、そんなことを議論したり開発したりしている。

2 ヶ月に 1 回の勉強会の間に公開授業期間がある。実際に授業をつくって公開授業をして検討会をしてく。このときのポイントは、先ほどの共同勉強会のメンバーで教科のバラバラな 3 人でチームをつくる。その 3 人で 1 人の授業をターゲットと決める。例えば今回は数学先生の授業をやるとすると、ほかの先生、英語の先生と理科の先生がサポートして数学の授業をデザインして公開授業に臨む。ある数学の先生は英語の先生の力を借りながら英語で数学の授業をやった。教科の枠を超えてやることを積極的に推進している。

全体で年に一度、実践研究会という講堂でやる授業もある。やりながらリフレクションのための材料をつくったりしている。昨年初めて行ったが、1 月 20 日に「アクティブ・ラーニング実践研究会 2016」をやった。2017 年度も 1 月 27 日に、今度は時間を延ばして朝から夕方くらいまで 1 日かけてやる予定だ。

ここで、先日東山の勉強会での様子を紹介する。

1 つ目はグループ形態の授業である。グループ形態のデメリットはどうしても背中を向く生徒が出てしまうことだ。先生はいろいろゲーム的なことをやらせて、そのあと解説するが、ゲームでざわざわして声が届かない。顔も別の方向を向いている生徒もいて、ゲームで使ったボールを転がして遊んでいる生徒もいる。

2 つ目はペアワークの授業である。評価シートというものを配って、書いた文章をペアでお互いに項目ごとにチェックするのだが、この生徒は座ったまま何もしていない。ペアの子が可哀想だ。その子の学びはどうなってしまうのか。勉強会のときに、その授業を担当した先生に、この生徒に気づいていたかと聞くと、気づいていたと答えていた。若い先生だが、彼はだいたいいつもこんな感じである。いろんなタイプがいるので、敢えて注意をせずに横を素通りすることにしていると。本当にこれで良いのだろうか。

3 番目、生徒に意見を書かせてそれを立って発表させるのだが、声が小さくて反対側の生徒に聞こえない。聞こえないなら聞かなくて良いや、どうせ聞いてもらえないと思うと声も小さくなっていく。読ませるというのは何の意味があるのか。それなら前へ出て自分の発表をする。ちゃんと発表する、聞く、そういう場をつくらないと、何のためにこの子が発表しているのかわからない。

4 つ目、グループでディスカッションする授業である。どこのグループも話し合っていない。これは保健体育の授業で、テーマは医療費制度の課題についてであり、生徒にとってテーマが大きすぎて何を話して良いかわからない。問いの立て方とか課題の出し方をもっと砕いてあげないと、生徒のスイッチが入らない。こういうのが続くと生徒のディスカッションするモチベーションが下がっていく。

これは象徴的な例で、ほかにもたくさんアクティブ・ラーニングにトライしている過程で問題が生じているが、気づいてないという先生もいるし、気づいていても何もできない先生もいる。

特に 2 つ目のような何もしない生徒は必ずいる。なぜやらないのかというと、やりたくないですと言う。場合によっては内職している学生もいる。先生に聞くと、いやこの子偏差値高いですからと言う。でも、この生徒、この先、このまま社会に出ても居場所ないですよと先生に言った。

隣の人とペアで話して下さいというと必ずなにもやらない学生がいる。さっきの生徒みたいな子がそのまま大学に来るとそうなる。このまま社会に出るとどうなるのか。プロジェクトで仕事して下さい、チームで仕事して下さいといったことに、この状態で対応していけるのか。どこかで手を打たないといけない。それを個性だと言うのも方便だが、実際いろんな子がいる。話すのが苦手な子もいる。でもその子のあとの発達まで考えていくと早いうちに止めておいて欲しい。もう高校では遅いかもしれない。中学くらいかもしれない。こうなったときにどう介入するかということも勉強会の良いテーマになる。

「主体的・対話的な深い学び」の一番大事な部分は「主体的に学ぶ」ことだと思う。「対話的に」というのは形としては成功すると思うが、「主体的に」というのは、主体的をどう定義するかが問題になる。ただ何か話していれば主体的なのかというとそうではない。やはりアクティブ・ラーニング、グループワーク、ペアワークをやる前に、きちんと聞く・話す・伝える力をつけさせてあげないと、全部だらだらした授業になってしまう。ほかの班が発表するときに聞いてないというのはよくある。誰が誰のために話しているのかわからない。それは結局先生が用意したカタチをやっているだけであり、生徒の様子を見ていない。

もうひとつ、教室をマネジメントするという発想があまり強くなくて、先生の中ではとにかく進行が気になる。次にこれやって、あれやって、とこなしていくが、それについてきていない生徒、のってきていない生徒がいるのに放置してそのまま進む。あるいは放置しないためにみんなの話が終わるまで待つので時間が足りなくなる。タイムマネジメントがうまくできていない。もっとメリハリをつけて、タイマーを前に出し

て 5 分話し合って下さいと。5 分あったらどれくらいの話ができるか、自分はどれくらいのことを考えられるか、このためには自分はどのくらいスピード感を持って授業に臨まないといけないのか、そういうことを身につける、習慣をつけるということが大事だ。

授業デザインを意識するという意味では、「導入・本体・振り返り」というものを徹底していって欲しい。特に振り返り、落とし込み作業だ。それをしないと、その教科が終わって休み時間になると、もしくは次の教科が始まるとほとんどその内容は抜けていってしまうということになる。振り返りも、教師から生徒に対する振り返りも大事だし、生徒同士での振り返りも大事だし、生徒個人での振り返りも大事である。最後の 10 分は振り返りに残す。5 分でも良い。それを授業のデザインのところでセットしておく。それが学習成果という観点からは効率的・効果的だ。

最終的には学習は個人に落とし込む作業が必要だ。グループワークさせて話し合いをさせてそのまま終わりではなく、自分にとって何を学んだのか、個人での落とし込みが非常に重要である。

そういう意味でも、その授業で何を目標にするのか。授業が始まったときにそのまま、はい教科書何ページと始まっていく。今日何をやるのか、今日の授業では何をみんなに身につけて欲しいのかを、場合によっては黒板の端にでも毎回書いておく。重要なキーワードをあらかじめ書いておく。それを生徒と教師間で共有しながら授業を進行していく。そうしないと生徒置いてきぼりの、先生の独演型の授業がどんどん進行していく。これだと今までの一方通行型の授業とあまり変わらない。

やる意味がないディスカッションというのもよく見てきた。ディスカッションしていると、そこに先生が来る。何か質問すると、そこで先生が答えていく。これではレクチャーと同じだ。その中で話し合うことに意味があるわけで、そこに行って自分が教えたら意味がない。あくまでその中でどうやって問題解決できるかという問いかけで止まる、このウエイティングの姿勢が大事である。

先生は自分が何を進行するかに関心があって、生徒の状態を見る視点はあまりないような感じがしたので、今は主体的学習を評価するルールのようなものを作って、授業公開のときにみなさんに持ってもらって、生徒の様子に注目して評価することになっている。基本的なことができないので、残念ながら深い学習まで行かない。逆に言うとこれができる空間さえあれば何をやってもうまくいくと思う。

本当はもっとお伝えしたいことがたくさんある。私は主体的な学びというものがかなり重要になってくると思っていて、そこに関わる概念として、いま学生エンゲージメントというものに着目しているという話だが、時間がないので割愛する。

知識の定着や汎用能力の伸長。学生エンゲージメントというのは、要するに学びのプロセスへのコミットメントである。成果がどれだけ上がったのかも大事だが、そもそも成果の前に、どれだけその場に深く関わっているかも大切だ。関わりというのは、心・技・体ではないけれども、エモーショナル・ビヘイビア・コグニション、頭と心と体である。これが全部その場に入っていくことが主体的学習の本意だと思う。この状態ができれば成果は自ずと出てくる。私たちは、学習成果を高めるためにという視点を少しずらして、エンゲージメントを高めるためにアクティブ・ラーニングをどうデザインできるかと考えたほうが、トランジションとか発達を考えたときには、生涯学習という文脈で見てもやはり大事だと思う。こういうことを関係者の間で議論をして、自分たちの学校でアクティブ・ラーニングをどう考えていこうか、どこを見ていこうかと。2 年後か、5 年後か、10 年後か、2040 年になるのか。そこを見て、自分たちなりのアクティブ・ラーニング観、アクティブ・ラーニング論というものを、実践を展開して積み重ねてつくっていく。それが最終的には共に成長する学校づくりになると思う。

教育課程部会　講演

「成熟社会に相応しい教育課程と学習指導要領改訂」

文部科学省初等中等教育局教育課程課　課長
淵　上　　孝

学習指導要領は、昭和 30 年代、40 年代、50 年代、平成、随時改訂している。私自身の理解では昭和 50 年代にいろいろな課題が出てきた。昭和 50 年代の後半には臨時教育審議会がもたれ、生涯学習体系への移行などの議論がなされた。学校教育の果たすべき役割に大きな変換があったと思う。それ以前は、学校教育ですべての社会的な問題が解決できる力を身につけて社会に送り出そうという、いわば完成教育理念があったと思うが、社会全体の動きがあまりに大きく、学校ですべてを教えるのは困難である。むしろ人間は生涯にわたって学び続けるもので、生涯学び続ける基盤の形成が学校教育の役割であろうという議論になっている。平成元年はいわゆる「新しい学力観」という言葉で言われ、平成 10 年以降は「生きる力」である。20 年の改定は、生きる力のさらなる充実ということだが、その過程で、この間に学校教育法の改正があったのでそれを踏まえた改定。さらに今回はさらなる充実を図るという構造になっている。

今回の学習指導要領は、キーワードで言えば、「社会に開かれた教育課程」「アクティブ・ラーニング」「カリキュラム・マネジメント」といったあたりかと思う。

社会に開かれた教育課程については 3 つの視点で語られている。「社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、より良い学校教育を通じてより良い社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していく」。どういう社会をつくっていくのか。そのときにどういう学校教育を展開するのかという、この価値・目標を共有していこう。そのためにはどういう資質・能力が必要なのかを明確にする。それを共有しながら連携して実現していく。これが社会に開かれた教育課程である。保護者や地域の方々とその価値を共有し、地域のさまざまな協力を得ながらより豊かな教育を展開していく。これが 1 つ目である。

2 つ目は「資質・能力」である。今回、資質・能力をベースに学習指導要領全体を改めて再構造化した。もともと平成 19 年に学校教育法が改正された際に、第 30 条第 2 項で、学力の定義のようなものを追加した。学力の 3 要素として「基礎的な知識・技能」、「活用して課題を解決するために思考力・判断力・表現力」、「主体的に学習に取り組む態度」の 3 つが示されている。今回の学習指導要領はこの学力の 3 要素を踏まえて、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力・人間性等」の 3 つの「資質・能力」で再整理した。

なぜこの 3 つの柱で再整理をしたのかと言うと、私は 4 つくらい意味があると思っている。1 つはそれぞれの先生方にとって、その教科や単元の狙いとするものは何で、なぜそれを教えなければならないのかを確認していただく。2 つ目は生徒にとってもその部分を学ぶ意義がより明確になる。そして 3 つ目は社会とそ

の意味を共有するという意味で、構造化してわかりやすくなっている。そして 4 つ目は、あとで説明しますが、学校としてどのようにカリキュラムをマネジメントするかという点から、各教科を 3 つの観点で並べ直していることに大きな意味があると思っている。

その延長線上で、今回の小中学校の学習指導要領の解説には全教科に系統表をつけた。ぜひ高校の先生方も小中の学習指導要領の解説を見ていただいて、小中学校でどういう連続性で学びを持っているのか、系統表をご覧いただければと思う。

例えば国語科ではどんな学年段階でどういう語彙を意識して学んでいくのかを明確にしている。情報の扱い方についても、情報と情報の関係をどう理解するかとか、複雑系の情報からどうやって正しい的確な情報を取り出していくかというのを、系統的に小学校の段階から中学校の段階に並べた。例えば情報の整理の部分で、3、4 年生くらいで比較や分類の仕方に着目をしていき、5、6 年生で情報と情報の関係づけなどを意識しながら情報を操作したり取り出したりという手順を含んでいる。こういうことを今回できるだけ明らかにしている。

アクティブ・ラーニングで最も重要なことは、知識の理解の質を高め、資質・能力を育むということである。そのための主体的・対話的・深い学びということで、学び方のみが先に立つわけではなく、こういう力をしっかり身につけるためのものである。

アクティブ・ラーニングの中で、先ほど「主体的な学び」について、山田剛史先生のご講演でご説明があった。主体的な学びこそが最も重要なのではないかというご示唆だったと思う。主体的な学びをまず保証するということが大切だろうと思う。

加えて「対話的な学び」というのは、子供たち同士で意見を交換すれば良いのではなく、それによって何を見ていくのかが大事である。また、子供たち同士で意見を交換するだけでなく、先哲の考え方を手掛かりにするとか、本を通じて作者と対話を図るということも一つの姿としてある。

そして 3 つ目が、どうすれば「深い学び」になるのかということである。事象の中から自ら問いを見出し、課題の追究・解決を行う、探究の過程に取り組むとか、自分の考えを形成するとか、考えを伝え合うことを通して集団としての考えを形成していく。今回は各教科の「見方・考え方」を働かせながら深い学びにつなげていこうという考え方をとっている。

中教審の議論でも深い学びの視点が極めて重要だということで、学びの深まりの鍵となるものが、各教科の特質に応じた「見方・考え方」であると整理している。「見方・考え方」と「資質・能力」は相互に関係していて、「見方・考え方」を働かせることによって「資質・能力」が伸ばされ、その伸ばされた「資質・能力」でさらに「見方・考え方」が豊かなものになっていくという双方向の関係にあると言っている。

例えば社会科では、位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して社会事象を捉え、比較分類したり総合したり関連づけたりすることによって物事を捉えていく。その過程で、分布や地域・範囲などを問う視点、なぜ始まったのかということで起源・変化・継承などを問う視点、文化・環境などの視点で捉えていく。考え方としては比較・分類・総合・関連づけである。それによって現代の社会的な事象はどうなのか、ほかの地域でどのような解決方法があるか、過去にどんな解決方法があったかを総合的に学んでいくということである。

理科で言うと、いわゆる物化生地が、エネルギー・粒子・生命・地球、それぞれの分野で、物質的・実体的な視点、多様性と共通性の視点などいくつかの視点があり、考え方としては、比較・関係づけ・条件整理・多面的な考察がある。こういう見方や考え方を働かせながら理科的な自然の事象をどう理解していくのかが

大事で、これによって深い学びになる。

国語科も、言葉と事象の関係、言葉と言葉の関係を相互に吟味して言葉についての自覚を深めていくということが言われている。

アクティブ・ラーニングは、今のような見方や考え方をしっかり活かしながらやっていくということで、特別にこういう形があるということにあまり捕らわれないで見ていただければと思う。

カリキュラム・マネジメントは、3 つの視点から整理されている。1 つ目は内容の組織的な配列、2 つ目は PDAC サイクル、3 つ目はリソースの組み合わせである。

学校の教育目標に照らして教育の内容をどのように配列するのが最適なのかをしっかり議論していただく。それを実行に移したうえで、成果・効果が上がっているのかどうかを検証しながら進めていただく。そして学びをより豊かなものにするためにさまざまな資源を有効に組み合わせていく。これがカリキュラム・マネジメントである。

これは学校全体としてももちろんだが、各学年、一人ひとりの先生の年間の授業などでも必要になってくる視点だと思う。カリキュラム・マネジメントをさまざまに活かしながら全体の教育を行っていただければと思う。その際、いろいろなカリキュラム・マネジメントがある。学校でそれぞれどういう教育を重視してやっていくのかを決めていただいて、それが各学年、各教科、どうつながっていくのかを明らかにしていくことが大事だと思う。

今回、ひとつ参考にしていただけると思うのが、小学校・中学校の総合的な学習の時間で、「探究的な学習の過程においては、他者と協働して課題を解決しようとする学習活動や、言語により分析したりまとめたり表現したりするなどの学習活動を行うようにすること」。その際、「例える・比較する・分類する・関係づけるなどの考えるための技法が活用されるようにする」と言っている。

今回、学習指導要領の解説で、総合的な学習の時間の解説の中に、考えるための技法を 10 個分類して出している。

物事の捉え方というのはそれぞれの専門分野でいろいろあるが、考え方というのはどうすれば良いのか。どうすれば考えたことになるのか。先ほどの「主体的な学び」や「深い学び」を形づくるうえでも、主体的に学ぶ、主体的に考えるといったときに、どうすれば考えられるのかが大きな課題だと思う。

今回「資質・能力」、「見方・考え方」というものを、半ば強引に全教科通じて整理した。各教科に盛り込まれている見方や考え方がかなりクリアになっている。各教科に埋め込まれている考え方から主要なものを取り出したものが、考えるための 10 の技法である。これによってカリキュラムをマネジメントするという考え方も取りうる。

ある社会的な事象を社会的な見方で捉えて社会科的に考える。同じ事象を理科的な科学的な手法で捉えて考える。その際には同じように比較や分類が行われるだろうと思う。未知の課題に突き当たったときに、その問題に対するアプローチをどうすれば良いのか。今まで起きたことと比較してみる、類似の事例を探してみる、多面的に事柄を見てみる。そうやって考えていくのだろうと思う。こういうことを「総合的な学習」で提示しているので、これもカリキュラム・マネジメント全体の参考にしていただけたらと思う。

今回高等学校はかなり教科が変わる。国語も変わる、特に地理・公民が変わる。まだ指導要領の検討が進んでいる途中であるので、途中段階のこととしてどんな議論をしているかを報告する。

国語は現在必修の「国語総合」を「現代の国語」と「言語文化」に変える。もともとの問題意識は、現代の国語についての授業が読み物中心になりすぎているのではないかという指摘である。「話す・聞く・書く」

活動が十分に行われていないという問題意識で「現代の国語」を再構成しようとしている。実社会・実生活における言語による諸活動に必要な国語の能力を育成しようとしている。その中でも特に、論述をしたり、批評をしたり、議論をして結論をまとめていくことを重視すると中教審で言われているので、読むことよりも、「話す・聞く・書く」の方向にかなりウエイトを置いた教科構成になる予定で進んでいる。

読むことは「言語文化」でしっかり学ぶ。これは上代から近現代までつながる言語文化で、古典がかなりウエイトを占めるが、古典を解説している現代の文章も併せて古典を深まりのあるものとして理解していこうとしている。

そのうえで選択科目としては、「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」がある。ここで言われた最も大きな議論は、国語は何のために必要なのかということで、言語の持つ機能を大きく 3 つに整理している。ひとつは思考するための創造的・論理的思考の側面に着目した「論理国語」、もうひとつは感性・情緒の側面から捉えた「文学国語」、そしてコミュニケーションの側面から捉えた「国語表現」になる。

「論理国語」は、実生活の文書であり、役所で書く文書もそうだが、基本的には論理的な文章なので、誰が読んでもわかる、紛れのない文章になる。言葉の持っている概念は抽象的になればなるほどふくらみが出てくるので人によって受け止め方が違ってくる。そういうことを乗り越えて論理的に表現する力だ。

一方「文学国語」は、感性・情緒の側面から言葉を捉えるということで、必ずしもギリギリとした論理性だけではない。人間は感情や情緒をどのように他者に伝えていくのか、あるいは感性・情緒を自分でコントロールする観点からも言葉によって表現する機能がある。

それから他者とコミュニケーションする。どういう場面でどういう人に対して話をするのかということで、場面によって違いがある。こういう観点でそれぞれ伸ばしていく「国語表現」。古典についての「古典探究」という構造になっている。

「地理・公民」は、大きな目標としては、現代社会の諸課題の解決を視野に入れて考察をする。その際に空間・時間・現代社会の構造などに着目して再構成し、「地理総合」「歴史総合」「公共」になる。

「歴史総合」は、18 世紀後半からの歴史を見る、基本的に現状の「日本史 A」と「世界史 A」をベースに考えていくが、近現代の歴史を日本史と世界史、相互の視点から捉えていくことになる。現在、社会的に起きているさまざまな問題の直接的なきっかけは近現代にさかのぼることが多いという観点で、近現代を日本史・世界史相互の関係で学ぶ。「近代化と私たち」「大衆化と私たち」「グローバル化と私たち」という 3 つの時代区分で捉えながらやっていこうということである。近代化というさまざまな社会構造の変化が現代社会にどのようにつながっているのか。大衆化、個人の高まりというものが完成して、それで歴史がどう動いて、現代にどうつながっているのかということ。それとグローバル化である。ただ、2 番目の「大衆化」の部分が、これだけでコミットできるかというのは少し議論があって、検討を要している状況である。

「地理総合」は、グローバル化する国際社会を主体的に生きる平和で民主的な国家・社会の有為な形成者を育成することを目的としている。「地理 A」をベースとしているが、地理を学ぶ意義や、地理の全体的な捉えをしたうえで、地理情報システムなどを学び、国際理解、国際協力、防災と持続可能な社会を考える。

「公共」は大きく 3 つの観点である。「公共の扉」ということから「自立した主体として社会づくりの施策」、「持続可能な社会づくりの施策」である。これは 2 単位科目だが、内容が盛りだくさんなので議論が難しくなってきている。どこまで内容を盛り込むのかということと、抽象化しすぎると子供たちに学ぶ意義がわかりにくくなるということで、少し具体的な課題を引きつけたほうが良いのではないかという議論もある。

この 3 教科が必修で、この上に「世界史探究」「日本史探究」「地理探究」などの選択科目が乗ってくる。

数学は、「数学活用」をやめて「数学 C」を新設する。「理数探究」と「理数探究基礎」をつくることもあって「数学活用」を廃止する。「理数探究」「理数探究基礎」は現在のスーパー・サイエンス・ハイスクールなどで行われているものを参考にしながらつくっていくが、実際には現在の理数科で行われている探求系の科目などを参考にしながら議論をしている。

理科は、「生物基礎」「地学基礎」という大きな構造は変わらないが、少し議論しているのは、この基礎系の科目の中で観察・実験を重視し、探求的な要素を入れていくことを意識しながら議論をしている。

生物については生物用語の問題がある。先日の学術会議でも報告が出た。あまりに覚える量が多すぎて、生物の本当の面白さ、学ぶ楽しさが十分伝わりきれていないという指摘である。その要望をどう精選するか、学習指導要領が示せるのかどうかを議論しているところだ。

家庭科は「家庭基礎」と「家庭総合」に大きく 2 括りに変える。中学校までの学びとの連動性からカテゴリーを統一する。

英語科は、小学校で 3 年生から外国語が始まり、5、6 年生は外国語科が教科として導入されるので、それに応じた形で中学校・高等学校もレベルアップしていくことになる。最終的には 5,000 語レベルのものと言われている。外国語によるコミュニケーションにおける「見方・考え方」をベースにつくっていくので、コミュニケーションを重視したものになっている。

情報科は、プログラミングが小学校 5 年生から始まるのにあわせて、中学校の技術家庭も少し高度化し、高等学校もさらに高度なものになっていく。必修科目の「情報 I」は今の情報科の「社会と情報」がベースだが、そこにコンピュータとプログラミングとデータの利用が入ってくるので、かなり高度な内容になってくると思う。

「総合的な学習の時間」は、小学校・中学校は「総合的な学習の時間」で、高等学校は「総合的な探究の時間」となる。中学校までの「探究的な見方・考え方」から高等学校では「探究」になっている。探求的と探究はどう違うのかも今いろいろ整理している。ひとつは、高等学校段階では自己の在り方・生き方に照らして考えていくだろうということである。

現時点での私自身の理解で言うと、「探究的」から「探究」に上がっていくことで、ひとつは探究そのものが自立的になっていくということ、もうひとつは手続が厳格になっていくというイメージを持っている。つまり小学校・中学校の総合的な学習の時間は、ある程度教師のリードのもとに課題を設定して解決方法を探っていくが、高等学校の「探究」はもっとオープンである。自分たちで課題を見つける。何かを疑問に思ってそれを追究しようとする。それを追究しようとする自分がいる。なぜ自分はその課題を課題と認識するのか。自分の在り方・生き方と直結させながら課題を認識して、それに対して解決を迫っていく。それが「総合的な探究の時間」だと思っている。

学習評価の観点は、現行 4 観点で行われているものを 3 観点に変更するといわれている。その関係で、先日第 1 回の学習評価のワーキンググループを立ち上げて議論を開始した。特に高等学校については、要録に観点別評価の記載がないことをどう考えるかというのが 1 つのテーマになっている。それから今の 4 観点を 3 観点に整理するときに、「知識・技能」と「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の 3 観点は、冒頭説明した「資質・能力」の 3 観点にほぼニアリーイコールだが、そのうち 3 つ目の「学びに向かう力・人間性」は、観点別評価に馴染むものと馴染まないものがあるということで、馴染む部分を観点別評価にして、馴染まないものは個人内評価にすると言っている。

この 3 観点目の「主体的に学習に取り組む態度」を見取るためには主体的に学習に取り組む場面がないといけないので、その場面を設定する観点からもアクティブ・ラーニングの視点からの学習方法の改善が欠かせないという指摘がある。

最後に高大接続の関係である。平成 32 年度から「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」が導入されることになっている。この 11 月に 10 万人規模のプレテストを実施することになっている。今回かなり探究の過程を重視した問題などを入れていくとのことなので、それによってどういうデータが出るのか。あまり難しくなると選抜性の機能が失われるので、そういうデータを取るためにいろいろな問題を入れている。

国語は、近代以降の文章、古典といった題材を対象とした、言語活動の過程を重視した問題で試行調査を実施する。言葉を手掛かりとしながら、与えられた情報を多面的・多角的な視点から解釈し、目的や場面に応じた文章を書くことなどが求められている。分野を超えて題材を組み合わせたり、同一分野における複数の題材を示したりするものが含まれる。

数学については、日常の事象や数学の良さが実感できるような題材とか、受験生の既知ではないものも含めた数学の事実定理などを既知の知識を活用しながら導くような題材ということになっている。

地理については、事象の空間的な規則性を分析して地域性を捉えるとか、地域の課題の将来像について構想していくとか、系統地理と地誌の両分野からのアプローチなどである。

歴史は、教科書などで扱われていない初見の資料について、これまで学んだ知識を活かしながら仮説を立て、歴史的事象の展開を考察する問題、時代や地域によらず歴史の見方のようなテーマを設定した問題、時間軸を長く取った問題が含まれる。

公民も、しっかり文章を読んだ上でないと解けないような問題、深い理解に伴う知識や思考力を問う問題、仮説を検証する過程で数的処理を伴う思考力が求められる問題、といったものも出していくと言われている。

英語、外国語科については、リスニングは複数の情報を聞いて判断し、議論を聞いて内容を把握する力を問うとか、問題を構成や内容の音声回数は基本的に 2 回だと思うが、2 回で行くかどうかも検証していく。

今回プレテストをして、来年の 11 月にも大規模なプレテストをしたうえで、31 年度の早い段階で実施大綱を出して、32 年度から実施する。36 年度からは新しい学習指導要領に即してやることになるが、そこで具体的にどうするかはまだこれからの議論となる。

新しい学習指導要領はいくつかのコンセプトで作られている。高等学校は今回かなり大きな変更をする。内容的に変更する部分もあるが、大学入試とも兼ね合わせながら、高等学校でいかに質の高い知識を得て、主体的にさまざまな問題に取り組んでいける、そういう子供たちを育成するという観点での改革を行っていくことになる。

私は前職が私学助成課長でしたので、私立学校もいくつも見させていただいた。私立学校の先生方が改革に取り組んでおられることは身に染みてわかっているつもりだ。今回の学習指導要領を実現していこうとすると、その狙いとするところは結構、理想が高い、深いところがあるかと思う。ぜひ、先生方の私立学校の建学の精神に基づきながらも、今回の学習指導要領を積極的に料理していただいて、もっともっと良いものに高めていただければありがたいと思っている。

教育課程部会　実践発表Ⅰ

「教育環境の変化と対応　～校内 ICT 化へ向けた実践報告～」

聖カタリナ学園高等学校　教頭
平　原　澄　夫

はじめに

学校では ICT 教育の推進責任者をしているが、本大会で実践発表を行うということで、ICT 機器の達人と思われるかもしれないが、逆であり、周りの人に教えてもらいながら毎日勉強している。本校は ICT 教育をスタートさせて 3 年目に入る。素人なりにではあるが、校内で多少の進歩や変化を起こすことができ始めた気もしているので、本日は、その辺りの取り組みや工夫点を先生方と共有できたらと思う。

発表に入る前に、本校の概要について説明する。本校は今年で創立 93 年目をむかえた学校である。昨年度より女子校から共学に移行した。現在は、普通科・総合学科・看護科の 3 つ学科から構成されており、コースや系列を含めると、11 種類の教育課程が存在する。卒業後の進路も様々で、大学・短大 35%、専門学校 20%、看護専攻科進学 20%、就職 15%と、生徒は多様な進路に進んでいる。

本日の発表テーマは「教育環境の変化と対応～校内 ICT 化へ向けた実践報告～」であるが、内容的に 3 つのテーマに分けて説明したい。第 1 部では、「教育環境の変化」について整理し、「今なぜ学校 ICT 化なのか」ということについて話したい。第 2 部では、校内 ICT 化へ向けた本校の取り組みについて、進行段階を踏みながら説明していきたい。そして最後に、「今後の ICT 教育の方向性や可能性」について説明していく。特に本校の取り組みについては、抽象的な理論や方法論ではなく、実際の取り組み状況を、写真や動画を使いながらできるだけ具体的に発表したい。本校の実際の様子が少しでも伝わればと思う。

今なぜ学校 ICT 化なのか

現在の教育現場では、「アクティブ・ラーニング」や「ICT 教育」、「探究学習」と言った言葉をよく耳にする。また、「思考力」「判断力」「課題発見力」や「英語 4 技能」「大学入学共通テスト」など高大接続改革に関する話題も毎日のように耳にする。これら教育環境の変化を理解しようとした時に、もう少し遠くにあることから考えていくと分かりやすいのではないかと思うようになった。スライドにあるような社会環境の変化がある中で、日本が今後、経済的に発展を続けて行くためには、社会の変化に即した新しい力が求められる。そして、このような新しく求められていく力を生徒に身につけさせていくためには、新しい考え方や方法、道具が必要になってくる。その 1 つになり得るのが ICT 機器ではないだろうか。今後も「地域から選ばれる学校」であり続けるためにも、我々私学は社会環境の変化に迅速かつ適切に対応し、魅力ある学校であり続ける必要がある。ICT の活用は、それらの課題解決への突破口になり得ると強く信じている。

では、校内 ICT 化への現場の反応はどうか。学校という場所は新しい変化に対して敏感に反応する。「来年から学校を ICT 化しよう」と突然言われても、現場ではかなりの混乱や抵抗が予想される。本校でも、様々な反応があった。しかし、先ほども述べたが、ICT は負担を軽減したり、課題を解決したり、今までできなかったことを可能にする可能性を秘めているのである。

ICT 化へ向けた具体的な取り組み

本校は、平成 27 年度より校内 ICT 化へ向けてスタートを切った。今年で 3 年目に入る。小さな PDCA サ

イクルを繰り返しながら、大きなPDCAサイクルの1周期目を終えようとしている。「あるもの・できること」からスタートし、2年目は「広く・速く」、そして今年は「広く・深く・濃く・質の向上」を目指して校内ICT化に取り組んでいる。

これより、8つのカテゴリーに分けて本校のICT化へ向けた取り組みを説明していきたい。まずは、校内ICT化へ向かう際の「目的設定の重要性」についてである。ICTを学校教育に導入する際、ICT機器を使うことや機械を揃える前に考えなければならないことがある。それが「目的」である。機械は何かを行うための道具にしか過ぎない。「何のためのICTであるのか」ということを見失ってはいけない。本校の場合は「授業改善」「社会環境の変化」、それに伴う「教育改革への対応」「学校改革」などがその目的である。ICTを校内に広めようとした時に、この目的を学校の先生方といかに共有できるかが、その後の校内ICT化の進行具合に大きく影響を及ぼすことは言うまでもない。もう一つ付け加えると、新しい動きを校内に取り入れて、それを浸透させるためには、提案から決定、実施に至るまでのスピードも大切である。

私は、新しいことを校内の取り入れる際は、できるだけ出発点や進むべき方向性を教員間で共有する環境を意図的に作ることを心がけている。校内にICTを広めていくための組織作りも例外ではない。校内ICT化を始めた初年度は、推進委員を中心とした2つの委員会を立ち上げた。本校の場合、ICT教育を行う最大の目的は「授業改善」であるので、「教科指導でICTを推進していくチーム」と本校のICT教育の柱となる「（学習支援ソフト）Classiを推進していくチーム」の2つのチームである。ICTを一括りにせず、目的やタイミングを分けて推進していくように注意を払った。Classiとは、教育分野のエキスパートである「ベネッセ」と通信分野のエキスパートである「ソフトバンク」が合弁会社を設立して開発した学習支援ソフトである。現在、多くの学校で採用されている。

また、推進活動として、校内研修会も実施している。ここでは、本校の推進委員が講師を務め、「本校にとって必要なものは何か」「今できていないことは何か」「今後したいことは何か」を考えながら手作り研修を行っている。本当に痒いところは本人でしか分からないように、学校現場で必要なものは学校に勤めている者でしか正確には分からない。業者に全てを依存するのではなく、できるだけ学校の現状に即した研修会になるように努力してきた。また、ICTを活用した公開授業も行っている。教科の枠を越えて、また、常勤・非常勤の枠を越えて多くの教員が見学にやってくる。

冒頭でも述べたが、本校の学校ICT化は平成27年にスタートした。「あるもの・できること」からのスタートだったので、授業担当者が職員室にある共有プロジェクターを担いで教室まで上がり、自分のノートPCを使って黒板にデータを投影する。そこが出発点である。投影資料も特に凝ったものではなく、例えば、教科書の本文を映すなど極めてシンプルなものからのスタートである。その様子を見た教員が一人、また一人と増えていき、少しずつICTを授業に活用していこうという雰囲気が出来上がってきた。その後、iPadのレンタル契約やClassiの契約も進めていき、必要に応じてハード面も揃えていった。ICTを活用した授業実践者も徐々に増えていったので、移動型共有プロジェクターも予約をとらないと使用できない状況が起こり始めた。現在は、移動型プロジェクターとして13台が、廊下に設置されており、利用簿を使って多くの教員が活用している。また、iPadの方も少しずつ導入を進め、現在は教員用として76台が稼働している。76台の内訳だが、担任や学年主任、業務主任には個人タブレットを支給している。また、15台は共有タブレットとして職員室に保管し、利用簿を使いながら多くの教員で共有している。また、幸いなことに、平成28年度の共学移行のタイミングで新校舎を建設した。そちらの校舎には全教室、短焦点型プロジェクターやホワイトボード、Wi-Fi 環境を整備することができたので、こちらの教室では充実した環境のもと授業を行うことができている。

ある特定の教員や教科が ICT の授業を行っているわけではない。多く教員や様々な教科で ICT を利用した授業を行っている。また、ICT 機器の設備が整っていない教室でも、共有プロジェクターを活用しながら、できる範囲で ICT を活用している。校内 ICT 化 3 年目を迎え、その授業実施率も年々高くなってきた。もちろん、教科や単元、授業シーンで、ICT を使う必要性がないケースも多々ある。必要に応じて活用していけば良い。全てをデジタルに置き換える必要性などないのである。

本校の iPad や Classi を使った生徒の様子を紹介する。本校の生徒は、普通科の特別進学コースと総合学科の進学系列の生徒は一人一台タブレットを所有して学校生活を送っている。生徒はタブレットを使ってスケジュール管理を行ったり、家庭学習の時間を集計したり、Web 上でテストを受験したりと様々な用途でタブレットを使っている。授業の中では、生徒の模範的な答案をクラスで共有するなど、これまでやりづらかったことが瞬時にできるようになった。

今後の ICT 教育の方向性や可能性

最後に、「ICT 教育の可能性」というテーマで、Classi やベネッセ、ソフトバンクなどの民間企業と進めている ICT を活用した未来型の授業を紹介したい。まずは、ネット環境を利用したオンラインでの英語スピーキングトレーニングである。「英語 4 技能の育成」という目的のもと、海外のネイティブスピーカーとオールイングリッシュでスピーキングのトレーニングを行う。2 つ目は ICT を活用したアクティブ・ラーニング型の授業である。この授業では、先生から生徒への一方通行型の授業ではなく、先生と生徒がリアルタイムでつながった双方向型の授業が実践できている。生徒の答案や思考をクラスで共有することができ、協働学習や学び合いが容易となる。3 つ目は反転授業への取り組みである。授業の 50 分間をフルに活用するために予習動画を授業時間外に配信している。本校では、二人の教員がこの分野の研究に取り組んでいる。

次に紹介するのは、「英語探究」というこの 4 月にスタートさせた授業である。まだまだ、試行錯誤を繰り返しながら授業を進めているが、ICT と英語を組み合わせた、プロジェクト学習型の授業である。「思考力」「表現力」「英語力」の向上を目指している。

ICT を使うと目的別の層別学習も可能となる。例えば、難関大合格を目指した生徒たちのグループや留学や海外進学を目指した生徒たちのグループをクラスや学年の枠を越えて結成し、ピンポイントで、必要な情報を提供・共有することができるのである。このような取り組みも ICT を使うことによって実現可能、容易になったものの一例である。

以上、本校の校内 ICT 化へ向けた取り組みについて説明した。ICT の活用は負担を軽減、課題を解決、不可能を可能にする大チャンスだと思う。今後もワクワク感を忘れずに様々なことに挑戦していきたい。

教育課程部会　実践発表Ⅱ

「アクティブ・ラーニングの実践報告～AL 授業タイプと国語と ICT の相性～」

芝浦工業大学附属中学・高等学校　教諭

斎　藤　貢　市

1. はじめに

校地移転に伴い、ホワイトボードとプロジェクターが全教室に設置され、アクティブ・ラーニング室もできた。生徒も 2in1 タブレットを持ち、ICT 環境の整備が一気に進んだ。授業内外でのユニバーサルデザインも進んでいる。環境の変化は授業を変えるはずである。

担当学年が中学 3 年であり、新テスト元年の生徒となる。アクティブ・ラーニングと ICT を効果的に使うことで学力の 3 要素への対応が進むと考えるが、方法やタイミングは大切である。幾つかの実践で確認していきたい。

知識の量的確保や基本的な読解力は当然必要なことだが、授業では生徒が自ら考え、人に伝え、意見を突き合わせてまとめ、協働して答を導く方法を中学入学時から練習してきた。幅広い視点も身につけさせたい。相互・自己評価を通して学びに向かう力を育て、導ければと考える。

具体的には授業形態、グループサイズ、アウトプットの方法、ラーニングスタイル、評価の方法などの選択、組み合わせに注意を払った。特にアウトプットとそこに至る過程への工夫を実践した。

またメディア形態（ICT 教材）では、視聴覚的な教材に留まらずに主体的に情報を選別し、思考の道具としてメディアと付き合うことを意識させた。教材理解を豊かにする資料（画像、動画、HP）、豊富な情報に教員の導きと生徒の興味関心を合わせて双方向授業として利用できる ICT 教材（iBooks Author で作成）などを制作、使用をした。アダプティブ・ラーニング、教材の配布・提示・回収、CBT も行っている。加えてアウトプットの手段、思考ツール、共有編集機能などに研究の余地を感じている。

最終的には読書や生活の場面で、論理的に思考し、情緒的に鑑賞し、場面に応じて多様な表現ができる生徒を育てたい。

2. 本論

今まで実践してきた授業で、意見交換が盛んで目標達成でも効果的な学習を、アクティブ・ラーニングと ICT の活用で効率的に再現していきたい。そのためのアイディアや工夫を実践してきた授業を報告する。

実践報告 1「走れメロス」のグループ学習（中学 2 年）

使用教材：『国語 2』「3 群像－発見と行動　走れメロス」学校図書

単元の目標：

・信頼関係の動揺について考える。

・視点を変えて出来事や心情を捉える。

本授業での目標：

・疑問意識を持ちながら小説を読み、自らの読書の仕方を考えるきっかけとしたい。

・問題意識から協働して解決へと意見交換をする。

事前の取り組み：

同学年担当の他教科の教員が iPad を使った授業を実施した経験があることで説明が少なくて済み、授業に集中できた。韻文教材「おたまじゃくし四五匹」などで、グループでの意見集約と発表の練習をしておいた。国語の授業中に思考するイメージを作っていく。また、同様の学習を小説の主題にポイントを絞って「サーカスの馬」でも行い、これはロイロノートで発表させた。ロイロノートの練習としてもちょうどよかった。短めの教材で訓練をすると、本格的な中編での読み取りと意見の組み立てに時間がかからずに、授業の展開がスムーズとなる。

アクティブ・ラーニングの手法：

グループワーク（4 人）、ロイロノート、発表、相互評価

ICT を使ったアプリケーションやデバイスなど：

紙ベースでの発表素材を PDF 化し、プロジェクターで投影して発表

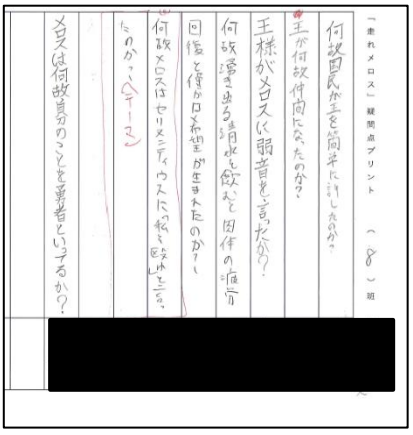
授業展開：全 8 時間　（　）は時間

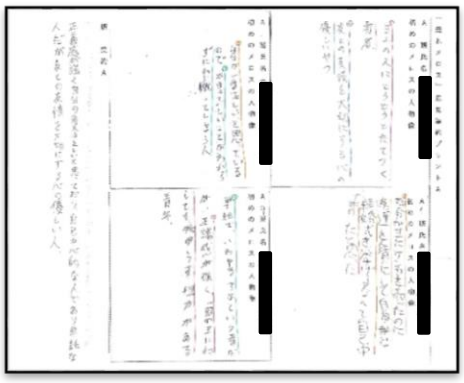
一斉読み（2）はプリントを使って表現などを理解して、あらすじを読み取る。

読みの中での疑問点［個人の疑問点］の意見交換［グループの疑問点］と決定（0.5）

重要な部分の意見メモ作成（0.5）［読み取りと意見シートの思考の時間を分ける］、グループでの意見集約と根拠の話し合い（2）［意見集約シートなどを使って一人一人の意見を拾う］

発表原稿作成（1.5）、発表と評価（1.5）


「走れメロス」疑問点シート

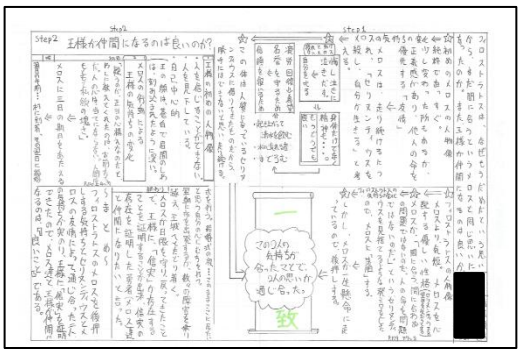

「走れメロス」意見集約シート

生徒の発表テーマ：

メロスの強さの理由や心情変化と性格など、セリヌンティウスの心情や人質になった理由、人物比較、細かな表現の根拠と意味や矛盾点、情景変化と心情、王様の過去やメロスに時間を与えた理由など。

評価：

小説なのでかえって根拠を示して意見を持つことの大切さを強調した。生徒は正しい読み取りにそって自由に読みを考え深め伝えることに苦しんでいた。内容としては面白い発表が多く、小説を自由に読みながら方向を定めていくことができた。各自の読書につながってくれると良い。昨年の小説のグループワークと比べると誤字脱字も減り、意見の羅列や薄い根拠と読みの繰り返しなどはほぼなくなった。


「走れメロス」発表資料

生徒の評価では、前年より深く読めた実感を持てた。協力して読めた。意見をまとめるのが大変。原稿までよくできたが発表の準備が不十分だった。他の班の発表を聞き、発見があった。全体的に楽しかった。ロイロ

ノートをまた使いたい。などが多かった。この形式でのグループ学習とプリントを切り離して意見集約をする方法は、高校の『羅生門』『こころ』『山月記』『舞姫』などの小説の授業でおこなってきたグループ学習の手法を中学生用にしたものである。中学では様式を変えて『少年の日の思い出』『おたまじゃくし四五匹』『サーカスの馬』『走れメロス』『最初の質問』『故郷』（学校図書）で実施している。

実践報告 2　演習授業の反転授業と復習教材　（高校 3 年　センター古典演習）

使用教材：

「大学入試センター試験対策問題集実践センター演習古典編」四訂版　数研出版、「大学入試センター試験対策問題集マーク演習古典」四訂版　数研出版

授業の目標：

・センター試験の国語の古典分野の演習を通して、学習の確認と増進を図る。

・センター試験での高得点を目指す。

本授業での目標：

基礎学力の不足や学習項目の定着をどう図るか、自己学習への組み込み方の提案をする。

アクティブ・ラーニングの手法：

反転授業、サイトでの公開（板書と TODO リストの web 公開、文法の復習プリントと解説動画など）、アダプティブ・ラーニング

ICT を使ったアプリケーションやデバイスなど：

インターネット、google site（文法の復習プリントと解説動画、板書、ppt と来週までの TODO リスト、文章の構成表など）

実践報告 3「俳句十五首」での調べ物と授業形式の発表と相互評価（中学 3 年）

使用教材：『国語 3』「2 生命－命の共鳴　俳句・俳句十五首」学校図書

単元の目標：

・仲間同士で言葉を磨き合うことの大切さを理解する。

・俳句表現を検討する方法を理解する。

・俳句の表現に込められた思いや情景を捉える。

・俳句特有の表現を捉える。

本授業での目標：

《俳句》

・仲間同士で言葉を磨き合うことの大切さを理解する。

・俳句表現を検討する方法を理解する。

《俳句十五句》

・俳句の表現に込められた思いや情景を捉える。

・俳句特有の表現を捉える。

《グループ学習》

・意見を持つことと意見集約、調べ物の精度を高める。

・発表と評価、google site での事後発表をする。

《創作》

・創作と google form による提出をさせる。
・句会方式での友達の俳句の鑑賞をする。

アクティブ・ラーニングの手法：

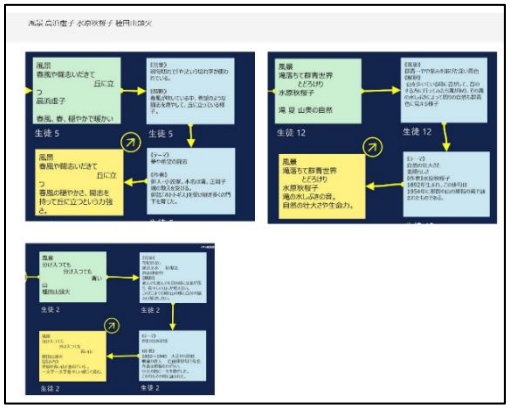
図書室を使った調べ物。授業形式での発表と相互評価。グループワーク（4 人）

ICT を使ったアプリケーションやデバイスなど：ロイロノート、プロジェクターで投影

授業展開：全 4 時間

読み取りと朗読を主眼とし、俳句の読み方と面白さを感じさせたい。まず俳句・連歌の成立と教科書の古典教材「おくのほそ道」と現代の俳句（正岡子規の短歌革新など）につなげる。俳句のルールを確認する。初めに一句、教員が授業をし、同じ項目で調べ物と読み取りをさせる。途中で俳句それぞれに追加指示を出し、授業の質と必ず確認して欲しい部分を示す。これで考査までの学習の質を確保した。

評価：



授業形式で人を当てたりしながら授業をするには緊張してしまったり、受け手が不真面目だったりすると困るので、初めに雰囲気づくり、授業前のウォーミングアップのため、読み方の注意とみんなで一斉に朗読をした。今日の発表の予告を各グループ 20 秒で行い、聞く準備をさせた。他の生徒を指名して空欄の答えを導いたり、文学の世界にある 2 の説を 2 人で言い合いながら進めたり、工夫を持って授業ができていた。解説で不十分な部分は、当日に感想の中でまとめて説明した。楽しみながら学ぶことと主体的に調べ、表現できた。図書に触れることもできた。

発表資料は印刷できず、学校で一括購入したタブレットもまだ持っていない学年なので、学校でしか見ることができない。そこで、4 クラスの発表から厳選したものを google site に載せ、考査の参考としてもらった。

《評価項目及び生徒評価と意見は省略》

その他

フィールドワーク「文学散歩」、古典の読み取りと伝達のジグソー学習、反転授業、電子教材の製作、評価の効率化などを実践してきた。発表、議論、レポートのなどといったアウトプットと教材の相性を研究した。ルーブリック評価などによる、目標達成（評価）と学習の深化を意識した実践をした。

3. まとめ（相性）

多くの機会をとらえて ICT を使った主体的・協働的な学びにつながる授業実践を行ってきた。「知識・技能」は従来の方法でも習得できるが、「思考力・判断力・表現力」を学ぶ過程から戻ることで早い習得ができる。

ICT は目新しさと男子の性質からか、楽しく参加してくれた。数年、そして他教科で活発な活用になると、さらなる工夫も必要になるだろう。学年に応じた教材の深化と使用ソフトや PBL などでの表現への工夫で生徒は楽しみながら取り組んでくれている。

アクティブ・ラーニングでも生徒の興味、好奇心、学ぶ意欲を引き出せば、同様に意欲的な姿が見られる。1 年間の中でも段階を作って作業の量とレベルの調整、山場となる教材を作った。同時にシートの共通化や思考法の訓練をしてきた。グループ学習や発表、プレゼンテーションソフトなどの活用の機会も多く作った。また発表やプレゼンテーションで満足し、基礎的な学習をおろそかにしないように留意した。

グループでのアクティブ・ラーニングは小説教材や韻文で効果的であった。人数は 4 人が理想であり、少人数が有効な小さな課題も作ったが、5 人以上では分担が進みすぎて手の空く生徒が出てしまった。授業で

は思考し表現する雰囲気作りが最も重要で、次に学習工程と目標をはっきりさせ、タイムマネイジメントと学習量の可視化に努めた。

介入レベルや授業での教材と生徒と教員の距離感（立ち位置）、フィードバックの方法により、効果は左右され、生徒の意見の活発さが変わった。教材理解での教員の伝達量の調整も同様である。ファシリテーターとしての意識を持った。

AL や ICT を取り入れた授業は初めこそ準備に時間がかかる。しかし授業の効率化、デジタル化で教員間の教材共有や授業方法の相互研究などの連携は強くなっている。

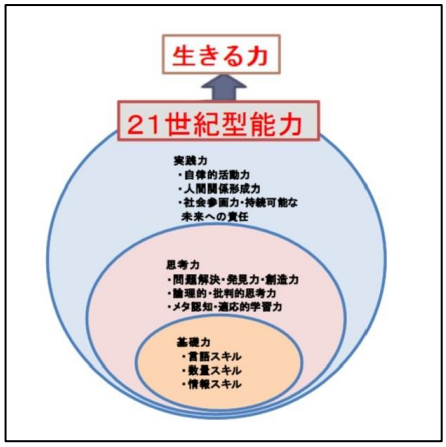
教育課程部会　実践発表Ⅲ

「21 世紀型能力の育成に向けて
～SMILE プログラムによる学校改革への挑戦～」

開星中学・高等学校　教頭
浜　屋　　陽

校舎は、JR 松江駅から徒歩 20 分、緑山という高台に位置しており、松江市内を一望できる場所にある。本学園は、93 年前（大正 13 年、1924 年）、女性の地位・生活の向上を目指し、大多和音吉・タカ夫妻によって「松江ミシン裁縫女学院」として創立された。以降、何度か校名変更や科・コースの変更を経て、平成 6 年 3 月より現在の校名となり、同じ年の 4 月に中学校を開設した。生徒数は中学 81 名、高校（普通科中高一貫コース、特別進学コース、キャリアデザインコース）516 名である。中高一貫コースについては、来年度より中学でのコース制（アドバンスト、ベーシック）を導入し、東大・京大・医学科といったような難関大学の合格を目指すプログラムを新たに構築していく予定である。

開学以来の本学園の建学の精神は「品性の向上をはかり、社会の発展に役立つ有望な人材を育成する。」である。「品性の向上」については、道徳教育（モラロジー教育）が基盤となっており、Warm Heart（思いやりの心）の育成に主眼を置いている。目指すべき人間像としては、「万物に感謝し、周囲の幸せを祈ることができる。」「自分に厳しく、相手には優しくすることができる。」である。一方、「未来への貢献」として、先見・先行教育に取り組んでおり、Cool Head（冷静な判断力）の育成にも注力している。目指すべき人間像としては「物事の本質、時代の流れを読むことができる。」「不易と流行を区別することができる。」である。



国立教育政策研究所『教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書 7「資質や能力の包括的育成に向けた教育課程の基準の原理」』

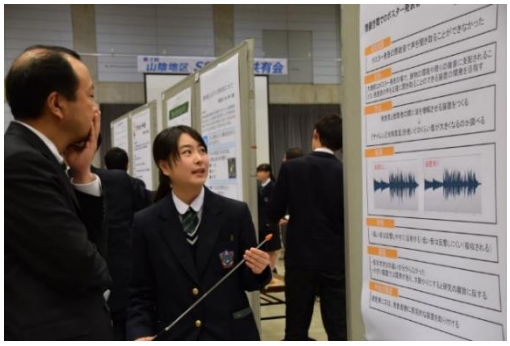
この建学の精神を体系的に具現化していくために、平成 25 年に「開星未来構想委員会」を設置した。これは、5 人のメンバーで構成し、10 年後の学園の姿をイメージしながら、改善点や新たな取り組みを提言していく機関である。この委員会でまず手掛けたことは、教員間のコミュニケーションや情報共有の在り方についての改善提案であった。職員朝礼を改善したり、講師をお招きし、会議のやり方研修を 1 年間かけて行うなどして、よりスムーズな教育活動が展開できるようになった。そして、次に手掛けたのが「21 世紀型学力とは？」というテーマである。学びのスタイルや中身を含めて教育の在り方が大きく変わろうとしている中で、「学力」をどう捉え、教員間で共有していくかということが、大変重要であると感じたからである。国や関係機関が出しているもの（右図）などを参考にしながら、5 人で議論を繰り返した。

その結果、結論付けたものが「つくる力（創造力）」、「つながる力（共生力）」、「もちこたえる力（忍耐力）」（通称「つつも」）という 3 つの力である。これを校内で徹底させるために、オリジナルキャラクター（右図）の作成も

行った。一方で、平成 23 年度から SSH に申請を行い、1 回目の不採択を経て 2 回目の挑戦で採択となり、平成 25 年度から指定を受けている。その申請の際に提出したプログラムが「SMILE プログラム」である。

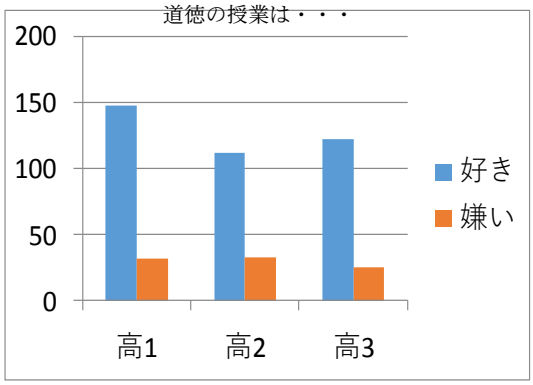
「SMILE プログラム」とは、Science（科学）・Morality（道徳性）・Internationarity（国際性）・Literacy（読み書き能力）・Enterprise（先進性）の頭文字を合わせたもので、それぞれのカテゴリーについての取り組みを関連付け、まとめ上げた中高一貫用プログラムである。

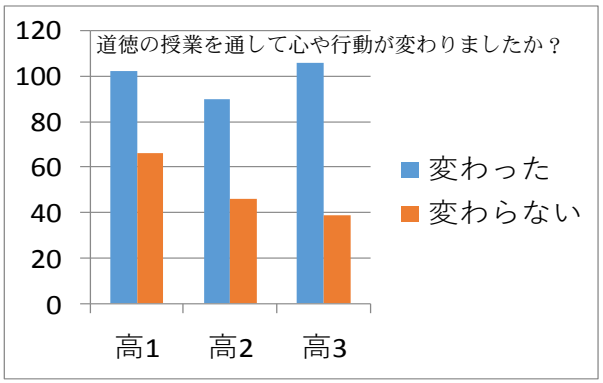
Sience（科学）では、①探究型授業の開発、②課題研究・発表、③校外研修の 3 つが柱となる。①については、理数融合科目である「科学探究」（左写真）、文系科目融合の「コミュニケーションメソッド」、全教科で 2 教科ずつランダム融合の「総合探究」などの授業を開発している。②については、生徒 1 人 1 人が自分でテーマを決定し、それに対して指導教員が 1 名付いて研究を行う。また、毎年 12 月には近隣の SSH 校などにも参加いただいて、「山陰地区 SSH 成果共有会」（右写真）を島根県産業交流会館（くにびきメッセ）で開催しており、年々規模の拡大を図っている。③については、「金沢工大研修」や「つくば研修」などを実施し、大学や研究施設の訪問学習を行い、研究内容の充実につなげるとともに、高大連携の一端も担っている。



Morality（道徳性）では、①全校一斉の道徳授業、②校内外での教員・保護者研修が柱となる。①については、麗澤大学出版会から出版されている「高校生のための道徳教科書」を高校生全員に持たせ、年間 6 回の授業を行っている。これは、学年の副担任がそれぞれ全クラスを回る形をとっており、生徒は 6 人の教師から違ったテーマでの授業を年間 6 回受けることになる。昨年度の生徒に対するアンケート結果によると、生徒は興味・関心を持って授業に取り組んでおり、多くの生徒が、考え方や心のあり方・行動に変化を起こした。（下のグラフ）これらの点において道徳授業には大変意味があったと考察する。②については、親や教師（大人）が一緒に学びながら、モラロジーに対しての理解を深めている。家庭や学校で率先垂範することこそが、自らの人生を豊かにするとともに、生徒の成長も促していくものであるという考え方のもと、「掃除に学ぶ会」、「校内モラロジー研修」、「親学講座」、「PTA モラロジー研修旅行」などを実施している。

Internationarity（国際性）では、①多様な国・地域とのつながり、②海外研修の 2 つが柱となる。①について





は、1986 年から毎年留学生の受け入れをしており、これまでに 27 の国・地域から 64 人の学生を受け入れ、交流を図っている。また、留学生派遣については、1977 年から行っており、これまでに 14 の国・地域へ 42 人の生徒を送り出している。②については、中 3 全員参加の「中学ニュージーランド研修」、高校 1・2 年生希望者での「高

校アメリカカリフォルニア研修」を毎年実施している。しかしながら、後者については、ここ数年希望者が少なく、実施できていないことが課題となっている。また、SSH の指定を受けて、「SSH アメリカテキサス研修」（右写真）を実施している。これは、高校 2 年生理系での希望者に対して、試験（英語・理科の筆記と英語での研究発表プレゼン、英語での面接）により 5 人を選抜して参加者を決定している。参加生徒は、ダラスを中心として、現地での博物館調査やフィールドワーク、高校でのプレゼンやディスカッションなどを行う。

Literacy（読み書き能力）では、①語彙・読解力の養成と②生徒と教員のコミュニケーションの活性化が柱となっている。①については、全クラスに毎朝新聞（地元紙）を配布しており、クラスでの発表やスクラップづくりなど積極的に活用を図っている。②については、コースごとの「勉強合宿」や「英語・数学特訓」などはもちろんのこと、「TT による授業」の導入や「タブレットおよび Classi の活用」などにより、生徒と教員のコミュニケーションを活性化している。それにより、学習意欲や基礎・基本の徹底を図り、応用力の養成につなげている。

Enterprise（先進性）では、①進路意識の醸成および②研究開発部の創設により、先見・先行教育につなげている。①については、起業体験をする中で地元の企業とコラボして商品開発を行う「起業家スクール」や、大学での学びの意味や地域貢献にどのように関わっていくかを徹底的に考えさせる「推薦判定面接」などを行っている。また、昨年度より部活動として「探究クラブ」を創設し、個々の進路について日常的に考え、活動できる環境づくりを行っている。②については、平成 26 年度の新たな創設により、県内を中心とする小中高の先生方の参加もいただき、年間 3 回（各回 3～4 教科程度）の「研究授業」を実施し、年度ごとにテーマを掲げながら授業改革に取り組んでいる。また、日々の授業について意見交換をしたり、悩みを相談できるように「授業改革推進会議」（通称オフ会）などを主催し、情報の共有化をはかっている。さらに、「ICT 活用」については、一昨年度より常勤職員全員にタブレットを配布し、授業での利用を中心に活用方法を研究している。また、昨年度入学生（中学・中高一貫コース・特別進学コース）から、生徒も 1 人 1 台のタブレットを持たせ、授業や学習での有効活用（右写真）はかっている。

最後に「SMILE プログラム」に取り組んでの成果と課題を述べる。まず、成果としては次の 5 点である。①教員の意識の変容（新しいことへの挑戦・より高みへ向かう意識が向上）②理系進学者の増加（平成 27・28 年度の 2 年間はその前の 2 年間の約 2 倍）③大学での積極的な学びの姿勢（卒業生の活躍）④図書の貸し出し数の増加（昨年度は前年度の 10 倍以上）⑤運動部の好成績（高 3 には日本一が 3 人）。一方課題としては次の 4 点が考えられる。①プログラム対象コース以外の生徒への対応（プログラムのブラッシュアップが必要）②中学生徒数の減少（新コース創設と地域へのアピール）③SSH で得たものをどう生かすか（再申請も含めた検討）④生徒個々の課題研究のレベルアップ（指導する側のレベルアップも含めて）

以上の反省を踏まえて、現在「SMILE プログラムⅡ」を構想中である。今後は、全校生徒を対象とし、それぞれの取り組みや生徒個々のレベルアップをはかっていく予定である。

教育課程部会

総　括

松山東雲中学・高等学校　校長
谷　本　賢　治

総括として、感想を含めまして述べさせていただきます。

最初の山田剛史先生の講演では、「アクティブ・ラーニング」について、幅広い知識を得ることが出来ました。先生は、高度情報化、人工知能、グローバル化が急速に進んでいる社会状況の中では、知識と、その知識のスキル、そして人間性が求められる能力と語られました。このような能力を身に付ける学習方法としての「アクティブ・ラーニング」は、これからの教育を質的に転換させるアプローチの一つと説かれました。そして、「アクティブ・ラーニング」と「カリキュラム・マネージメント」を連動させた実践で、素晴らしい成果を上げている「東山中学・高等学校の取組」を紹介されました。また、課題も示され、きちんと聴く姿勢・伝える力を身につけさせる、教室のマネジメントをする、授業のデザインを意識する教師の心構えが不可欠であるとまとめられました。これからの学校経営の方向性を示していただいたと思います。

淵上孝先生の講演は、次期学習指導要領の考え方を詳しく説明していただきました。高等学校学習指導要領について、現在、検討されている内容や議論されている事柄を詳しくお話しいただき、大変参考になりました。教育課程の中に学校の教育目標は表れます。そこには、私学として建学の精神を踏まえた教育課程を構築しなければなりません。大変示唆に富む講演であり、これからの私学教育の向上に生かしていきたいと思います。

三校による実践発表についてです。

地元からは、ICT 教育に熱心に取り組んでおられる聖カタリナ学園高校の平原澄夫先生に、同校の特色を生かした発表をしていただきました。愛媛県内の県立高校に iPad 導入の流れが加速している中、私学としてどう取り組むかを示していただきました。映像も取り入れた発表から大きな成果を上げられていることを知り、大いに励まされました。

芝浦工業大学附属中学・高校の斎藤貢市先生の「アクティブ・ラーニングと ICT の活用」による授業は、眼を輝かし生き生きと取組む生徒の姿が目に浮かび、生徒と先生が協働して素晴らしい授業を造り上げ大きな成果を上げられていることに、大変感銘を受けました。これから目指すべき目標を示していただきました。

開星中学・高校の浜屋陽先生の発表は、私学教育の最も大切な「建学の精神」を土台にして、21 世紀型能力をどのように育てるか。学校を上げて取り組まれている SMILE プログラムの実践を通して、先生方の意識の変容が大きく学校を変えたことに、私学教育の質的充実に向けたヒントを示していただきました。

来年度は鹿児島大会です。今回の成果をさらに高めていただき、大会テーマである「時代を先取りする私学」の理念の下、生徒の未来が輝くものになることを願って鹿児島大会に引き継ぎたいと思います。

最後に、講演並びに実践発表をしていただいた先生方ありがとうございました。ご参加の先生方、準備・運営をしていただいた運営委員の先生方そして専門委員会、客員研究員の先生方に心からお礼申し上げます。

法 人 管 理 事 務 運 営 部 会

近年、大規模自然災害の発生や学校を標的にした情報漏洩事件など、学校運営における広範囲な危機管理の重要性は、年々増すばかりである。

当部会では、午前の講演では自然災害における不測の事態に備える組織体制のあり方やトラブル発生時の迅速かつ適切な対処方法を考察するとともに、多発している情報管理のトラブルや情報セキュリティマネジメントの最新事例を学び、情報全般の取り扱い方についての知見を広める。

午後からは、情報交換会において、各校の抱える災害マネジメントや情報セキュリティマネジメントに関わる問題等をグループごとでオープンに話し合い、互いに実践例を学ぶ。また、当大会の開催地である松山で情報発信を行い、地方都市の再生・活性化に向け取り組む「坂の上の雲ミュージアム」の初代館長の講演を聴講し、地方の私学にとって大きなリスク要因となっている生徒数の減少等に対する改革・改善への示唆を得る。加えて、愛媛県の済美高等学校が、宮城県の複数の高校との交流等を通じて行っている、リスク対応としての継続的な震災学習を取り上げ、独自のキャリア教育の実践例として報告する。

これらのプログラムを通して、自然や人為的なリスクへの対応の理解を深め、私学として、今後の取り組みについて再考する一助となれば幸いである。

1　研究目標　学校を取り巻くリスクとその対応～坂の上の雲のまちからの発信～

2　会　　場　松山全日空ホテル　南館２階　サファイアルーム

3　日　　程

	9 15	10 40	11	12 10	13	14 50	15 30	16	17
10月20日（金）	受付	開会式	講演Ⅰ	講演Ⅱ	昼食・情報交換会	講演Ⅲ	実践発表	閉会式	

4　内　　容

講 演 Ⅰ

演　題「災害リスクと学校・地域の防災対策」

講　師　**紅　谷　昇　平**　　兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科　准教授

講 演 Ⅱ

演　題「サイバーセキュリティ　安心安全な教育環境の確保」

講　師　**小　林　真　也**　　愛媛大学大学院理工学研究科　教授

情報交換会

テーマ「学校を取り巻く諸問題」

講演をうけての意見交換【例：災害対策備蓄品（食料等）について】

事務の効率化・省力化への取り組みについて

事務組織と教員組織の相互理解・一体化への取り組みについて

講 演 Ⅲ

演　題「地方からの情報発信～坂の上の雲を軸としたまちづくり～」

講　師　**松　原　正　毅**　　松山市坂の上の雲ミュージアム　初代館長

実践発表

テーマ「キャリア教育を通した震災学習の取り組み」

発表者　**髙　市　裕　子**　　済美高等学校　キャリア教育課長

５　講師・発表者・指導員（順不同）

紅　谷　昇　平　兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科　准教授

小　林　真　也　愛媛大学大学院理工学研究科　教授

松　原　正　毅　松山市坂の上の雲ミュージアム　初代館長

髙　市　裕　子　済美高等学校　キャリア教育課長

６　運営委員・指導員（順不同）

委員長

末　廣　久　行　済美高等学校　校長

副委員長

永　井　康　博　済美高等学校　副校長

委員

一　色　康　孝　愛光中学・高等学校　教頭

岡　本　一　夫　済美高等学校　事務長

髙　橋　寅　明　愛光中学・高等学校　事務長

西　村　佳　純　済美平成中等教育学校　事務長

門　田　尚　明　済美高等学校　教諭

森　　誠　二　済美高等学校　教諭

北　岡　周　平　済美高等学校　事務職員

７　専門委員・客員研究員・指導員（順不同）

委員長

工　藤　誠　一　聖光学院中学･高等学校　　理事長・校長

委員

野　尻　富太郎　学校法人芝学園　　常務理事・事務局長

服　部　泰　啓　学校法人信愛学園　　理事長

川　島　英　和　学校法人川島学園　　理事長

客員研究員

正　村　幸　雄　学校法人鹿児島学園　　理事長

法人管理事務運営部会　講演Ⅰ

「災害リスクと学校・地域の防災対策」

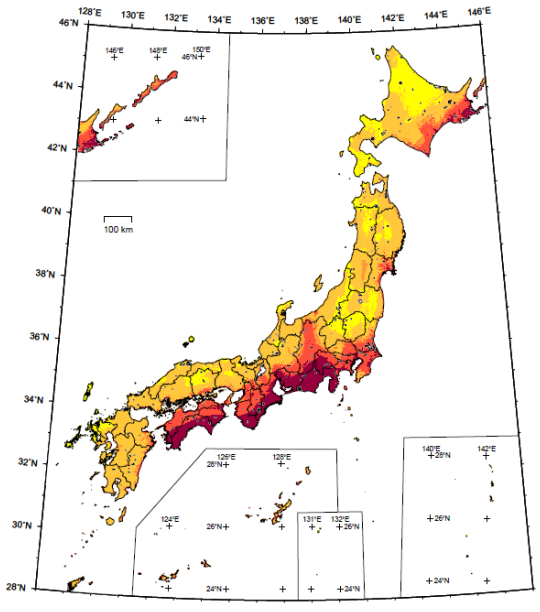
兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科　准教授

紅　谷　昇　平

学校での防災には子供を守るということと、子供に防災を教えるという2つの重要な点がある。本日は前半で防災の一般的な内容、災害リスクについての話、後半は学校における防災の取り組みについての話をする。

最初に防災に関する常識クイズ。「震度5と震度6の地震、建物はどちらが壊れやすいでしょうか？」　答えは震度6。ただ、建物の被害は震度だけではない。神奈川県の音楽ホールのミューザ川崎シンフォニーホールでは、建物として8年しかたっていないにもかかわらず、地震としてはそれほど大きくない震度5弱の揺れで、天井が崩落するほどの大被害を受けた。震度とは最大の揺れの大きさ。阪神・淡路大震災では最大震度が7だったが、揺れた時間はわずか15～20秒、一度ガツンと殴られただけのような感じの地震だった。一方、東日本大震災の場合、内陸部に関しては、揺れが大きな所でも震度6強、多くは震度6弱以下。ただし、この地震は海溝型地震である。地震の揺れが長く、2～3分ほど続く。内陸直下型の瞬間的な震度7と、2～3分の長さが続く震度6では建物の壊れ方が全く異なってくる。南海トラフ地震が起こった場合、津波からどう逃げるのかが最も注目されているのだが、2～3分の揺れが続くことによって、震度6強クラスの内陸型地震に連続で回遭う、それと同程度のダメージを建物は受ける。

次のクイズ。「地震が起きやすい地域や場所は大体分かっていると思いますか？」実は分かっていないかもしれない。ここにあるのは約10年前の2006年に公表された、全国地震動予測地図である。地震の起こりやすい地域を濃い赤、起こりにくいと考えられる地域を薄い黄色に塗られている。この10年間で地震が起きた地域は、能登半島、新潟県中越沖、共に色の薄い地域だ。岩手宮城内陸地震に関しても、内陸部において色はそれほど濃くない。一方、駿河湾地震は色の濃い地域。2011年には東日本大震災があった。宮城県沖は高い確率で地震が起こると言われていたが、岩手県や福島県沖はノーマークだった。昨年は熊本地震があった。直近の地図で熊本は赤くされていたが、10年前の地図では薄い色となっていた。この10年間に起った地震は、色の濃くない所が多かった。従って、日本海側など地震が起こりにくいと考えられ



ている所でも日本全国で警戒感は持つ必要があると思う。

次のクイズ。「地震が起きると建物が壊れ、人が亡くなる、これらの被害は正確に予測できると思いますか？」正確には予測できない。防災専門家の間では、「倍半分」という言葉がある。「このような地震が起こったら、建物は 1 万棟壊れる」という想定に対し、実際の被害が 5,000～2 万棟の範囲に入っていれば、その被害想定は正確だったと言われる。それほどの誤差はあって当然ということ。ここで 2013 年 4 月に起きた淡路島中部での地震を例に挙げると、兵庫県では数百億円の費用をかけて、地表面の被害を計算するフェニックス防災システムをつくり、全半壊が 2,000 棟、死者 10 人という予測が出ていた。実際の被害は全半壊が 150 棟、死者は 0 人。これほど予測は当たらないということだ。しかし、当たらないにも関わらず、自治体は死者の予測を何百何十何人という一桁の単位まで公表し、予測が正確だという印象を与えている。地震がどこで起こるかなど、正確には分からない。規模や深さも予測も当然ずれる。

自治体や企業、大学などは、おそらく自治体が公表している被害想定の数字を基にして防災計画をつくろうとする。もちろん予測よりも被害が少なければ良いのだが、逆に被害が大きくなる場合がある。それは、風が強くて火災が広がる場合。昨年 12 月に新潟の糸魚川で火災があったが、風が強くて被害が大きくなった。1923 年の関東大震災の場合、亡くなった方が 10 万人を超える中、その 9 割が火事で亡くなっている。台風が接近しており、風が強かった。また、木造の古い密集地、京都のような街並みがあるのであれば、火災のリスクは非常に高まる。

次のクイズ。「水害ハザードマップというものがあります。これは自宅が洪水で大丈夫かどうかチェックするためのだと思われますか？」そうではない。大雨による災害は大きく分けて 2 種類、1 つは浸水・洪水被害、もう 1 つは山の斜面が崩れる土砂災害だ。洪水による被害のうち、自宅で亡くなった方は 12%だけで、多くは屋外で亡くなっている。路上 20%、水路・側溝付近 16.6%等だ。路上の被害では、車ごと流された方も多い。従って、水害ハザードマップで自宅が大丈夫かどうかだけではなく、通っている学校、働いている職場、通勤・通学路、それらを全て見ないといけない。一方、土砂災害では自宅で亡くなる方が 6 割以上なので、家が山に近い方はしっかりチェックする必要がある。

最後のクイズ。「自然災害では高齢者対策が重要になるか？」重要になる。大きな災害には共通した傾向があり、亡くなる方の約 6 割は 65 歳以上の高齢者である。従って、災害で亡くなる方の数を減らすには、しっかりと高齢者対策をする必要がある。一方、阪神・淡路大震災では 20～24 歳も亡くなっている方が多い。お金の無い大学生は木造の文化住宅等、質の悪い住宅に住んでいることが多いからである。ただ、高齢者の場合は自然災害よりも、がんや心疾患など病気で亡くなる人のほうが圧倒的に多いので、高齢者に防災を呼び掛けてもなかなか取り組んでもらえない。

子供たちに関してはどうか。10 歳未満の子供の死因としては、2 位が不慮の事故だ。10～14 歳未満も不慮の事故が 3 位、14～19 歳は 2 位だ。不慮の事故による死因の順番を見ると、高齢者に比べて子供のほうが上位にくる。確かに災害で亡くなる子供や若者の絶対数は少ないのだが、もともと病気ではそれほど死なないので、死因の割合という点で見ると災害や事故は上位にくる。災害で亡くなる子供の数は少ないので、高齢者対策のほうが重要だと言われることもあるが、それは違うと思う。本来は死ななくても良い子供の命を奪う自然災害や事故を防ぐため、学校や家庭の防災対策を行う、防災教育をしっかり行うことは非常に大切だ。さらに、震災遺児、震災孤児の問題がある。片親を亡くした方は震災遺児、両親を亡くした方は震災孤児と呼ばれるが、この子たちのケアをどうするかという点も被災地では大きな問題だ。

防災対策を考える上で災害をどのように捉えるかを考えると、英語で災害を表す場合、ハザードとディザスターという言葉がある。ハザードの場合、地震で言うと地面が揺れるという自然現象のことである。揺れ

によって社会が実際に被害を受けた場合はディザスターと呼ぶ。そのディザスターを引き起こす原因は、ハザードだけではなくて社会というものがあるから。さらに言うと社会に被害を受けやすい弱さがあるからである。これは脆弱性と呼ばれている。脆弱性が高い社会でも、地震が小さければ被害は出ないが、今の科学で地震の揺れは減らせない。大雨をとめることもできない。ハザードの大きさは変えられないので、社会の脆弱性を小さくして被害を減らす、その活動が防災だという考え方に世界は変わってきている。

社会の弱さと被害の結びつきについて、地震を例に上げると、地震の被害で危ないタイミングは 3 つあり、1 つは地震直後だ。地震の揺れで家やたんすが倒れ、その下敷きになって死ぬことがあるので、家具の置き場を考える等の対策が必要になる。次のタイミングは地震直後から 3 日間、地震後に襲ってくる火事や津波だ。建物の中で生き埋めになったら、早く救助されることが必要になる。最後は 3 日後以降の段階だ。避難先では安全で健康な生活を送り、震災関連死を防ぐ必要がある。繰り返すと、地震直後に死なないため、古くて弱い家に住んでいる場合は少しお金をかけて工事をして、地震でも倒れない丈夫な家にする必要がある。阪神・淡路大震災では、8 割以上の方が建物などの下敷きになって亡くなった。意外に盲点なのが通学路である。小学生に防災の指導をする場合、通学路の安全性を考えるよう促している。

緊急地震速報というものがあって、特に南海トラフ地震など海中で起こる地震の場合、少し早めに速報が出るので、その際に対策する必要がある。昨年のちょうど今の時期、鳥取県中部地震があったが、私の勤務先である神戸でも緊急地震速報が出た。普段から私たちは、身の安全を守るために机の下に潜り込みましょうと言っているのだが、そのときはしばらく様子を見て、地震が大きいと判断してから初めて机の下に隠れた。防災の専門家としては駄目な行動だった。子供がいる場合、小さな揺れであっても先生が率先して行動すると、速報が出たら先生のような行動を取らなければいけないと学ぶので、特に子供がいる場では正しい行動を取って欲しい。

地震直後から 3 日間における命の守り方は、避難場所を確認する、火事を出さない・広げないということが重要である。自分の家は大丈夫だと考えている方もいるが、どれほど強い家でも火事からは逃げられない。鉄筋や鉄骨の家であっても、中に家具がある以上は燃えてしまう。あと、壊れた家で下敷きになった場合、近所同士で助け合わなければいけない。中学生や高校生を地域の防災活動で積極的に活用する、手伝ってもらおうという考え方もあるが、私は賛成しない。防災活動、特に危険を伴う救助の段階で未成年に活動させるのは個人的には反対だ。

東日本大震災は 14 時 46 分に地震が起こった。追悼式典の黙祷も、この 14 時 46 分だが、そこに違和感を抱く人もいる。亡くなった方の 9 割以上は、14 時 46 分の時点では生きていた。ほとんどの方はその 30 分後以降の津波で亡くなっている。つまり、東日本大震災で亡くなった多くの方の死因は津波であり、避難しなかったという点が問題だ。なぜ避難しなかったのか？　現在の科学ではどのような津波が起こるか正確には分からないにも関わらず、あたかも想定が正しいかのように情報を出し、それを住民の方が信じ込んでいたということで、専門家による情報発信の問題があった。

亡くなった方の 6 割は高齢の方だった。足が悪いなど、なかなか避難できなかった。また、障害のある方はそうでない方よりも平均 2 倍の比率で亡くなっている。高齢者の死亡率が全体では 1.03%、障害者全体では 2.06%だった。身体障害のうち、肢体不自由の方は高台へすぐ逃げない傾向があった。車いすを使っているので逃げるのを躊躇したとか、サポートしてくれる人がいなかったなどの問題があった。あと、視覚障害や聴覚障害の方の場合、避難勧告の情報を受けられなかったという問題があったと言われている。一方、知的障害の方は死亡率が低い。地震が昼間に起こったからである。昼間は特別支援学校や作業所にいるので、誘導してくれる人がいた。

宮城県と岩手県では、高齢者と障害者の死亡率は共に大きく異なっている。死亡率が高かったのは宮城県だ。宮城県の場合、高齢者施設を仙台平野に多く建てていた。高齢者施設は地価の安い所に建てられる。それが宮城県の場合は仙台平野、岩手県は高台の山側だった。その結果、平地にある宮城県の施設は津波の被害を受けた。また、宮城県はノーマライゼーション、在宅で障害者が生活できるようにという施策を進めていたが、自宅で普通の生活はおくれても、災害時のサポート体制まではできていなかった。施設内でサポートを受けられる岩手県のほうが、災害の面では結果的に良かったと言われている。

これは気仙沼では12～15mの津波が来たと言われている。津波が来ると海面が上がり、岬、半島が全て水に埋まる。次の段階として水が引いていく。水が引く場合、この状態で引くのではなくて、マイナス15m分の水が引くということだ。つまりプラス15からマイナス15まで、水の落差は30m。押し波はいったんどこかで止まる。その止まった段階で近くの木につかまったりした方は助かっている。引き波の場合、一端巻き込まれてしまうと海の奥底まで引き込まれてしまう。

さらに、単に水面が上がる・下がるということではなく、津波は時速約40kmでやってくる。50cmの高さの津波でも危ないのは、その50cmの水が時速40kmで押し寄せてくるからである。小さな車でも時速40kmで走ってきて、いきなり足に当たれば骨が折れるし、立っていらない。津波も同様だ。津波の後には火災が起きる。油は水より軽いので、壊れた建物と油によって火災が起きやすくなる。

これもよく出しているクイズだが、「阪神・淡路大震災では壊れた建物によって生き埋めになった人がいます。その中で自衛隊や消防隊員など救助隊に助けられた人はどれほどおられるでしょうか？」答えは約2%。助かった人のほとんどは、自力で逃げた、家族に助けられた、友達や近所の方に助けられたということだ。たまたま通りがかった人に助けられた人も3%いた。そして1%の方が亡くなっている。あまりに多くの家が倒れると、公的な救助は期待できない。そのようなときに助けてくれるのは家族や友達なので、小学生に対しては、「普段からちゃんとあいさつして仲良くしましょうね」という話をしている。

次は3段階目、避難生活。災害が起こると学校が避難所になる場合があるし、帰宅困難になった子供を一時的に滞在させることもある。避難生活において、まず困るのはトイレだ。学校でも行政でも職員用や非常用のトイレは意外に備蓄していない。阪神・淡路大震災のときには電車の駅全体が便器のようになった。駅の近所の人が、駅ならトイレが使えるだろうと思って来て、トイレが使えないと分かったら、人目に隠れて出せる所で出して帰っていかれたということがあった。一方、学校ではプールの水が使える。防災のために冬場でも水をためているプールは多いと思うし、近所の方に頼んでグラウンドに穴を掘ってもらって臨時のトイレをつくった小学校もあった。

避難所生活の環境が悪いと、そのために命を落とすことがある。2004年に起こった新潟県中越地震の場合、地震の揺れによる直接死は16名、避難生活が原因で亡くなった震災関連死は52名、関連死のほうが多かった。東日本大震災においても原発関連の避難者が多いので、特に福島県では関連死の方のほうが増えている。熊本地震も余震が非常に長く続いたので、自宅のテントや車に避難する方が多くおられた。その結果、1年間で震災関連死が170名になった。直接死は50名だった。関連死は防げないのかという点だが、2007年の新潟県中越沖地震においては、その3年前の新潟県中越地震で関連死が多く出たという教訓から予防策に力を入れた。その結果、直接死11名に対して関連死は4名に抑えることができた。本気になれば関連死は減らせる。

災害対応の難しさについて、学校でも自治体でも企業でも、災害を経験された方に話を聞くと、災害対応は失敗したと言っている。1つ目の理由としては、地震は突然やってくるということだ。火山や大雨の場合は予兆があるのだが、地震や津波は突然やってくる。そうなると万全の体制で迎えることはできない。2つ目と

して、災害時には普段と全く違う仕事をする必要があるということ。学校であれば、子供の安全を確保する、親御さんに連絡する、無理やり学校に入ってくる地域住民の避難者に対応するとか、連絡しても警察は来てくれないとか、普段と異なる業務は不慣れなので対応できない。3 つ目として、災害時にすべき仕事の量が非常に多いということ。人手が全く足りなくなる。4 つ目は、災害が起こる、特に地震が夜に起こると先生方も来られないので人が足りない。施設や設備も被害を受けて使えない。電気や水道などのライフラインも使えないので、普段と全く違う環境で仕事をしなければならない難しさがある。

心理的な難しさもある。人間は嫌なこと、都合の悪いことは信じなくて、都合の良いように歪めて解釈する傾向にある。耐震改修が進まない原因の 1 つは、危ない家に住んでいても、自分が危ない家に住んでいるとは認めたくないからである。実際に住んでいる家が非常に危険だというのは、心の中に矛盾を起こす。これは認知的不協和と呼ばれており、自分の認知を変えて、「この家は危ないと言われているが、きっと危なくないだろう」と思いこんでしまう傾向がある。

心理面のハードルの 2 つ目は、正常化の偏見だ。自分の生活はいつものように続いていくはずだ。津波などの大災害はテレビの話であって、自分の所は大丈夫。そのように思う傾向がある。実際に災害に遭った方たちも、「あのような災害は神戸ではあったけれども、まさか東北で起こるとは思わなかった」、「東北では起こったけれども、まさか熊本で起こるとは思わなかった」と言われる。例えばビルで火災警報器が鳴った場合でも、「きっとこれは訓練だろう」と思う傾向がある。

集合的無知という心のハードルもある。周りの人の行動に、つい合わせてしまうというものだ。韓国の大邱（てぐ）市で地下鉄火災があった。この火災において、火事が起こった車両からは全ての人が逃げ出せたのだが、その向かいの車両からは死者が出ている。煙はあるけど大丈夫だろうと考えたからだ。皆が座っているのに自分だけ逃げ出すのはどうかと思い、そのまま座っていたら、煙に巻き込まれて 192 名の方が亡くなった。危ないと思ったら、周りが逃げなくても自分の判断で行動することが大事である。

オオカミ少年効果というものもある。警報が何度も出ていると、今度も大丈夫だろうと思ってしまう。気象庁は特別警報や短時間記録的豪雨などの情報を出すようになった。被害を防ぐため、そのような情報を早め早めに出すようになったが、それが逆に、特別警報が出ても大丈夫だと考えるのではないかと危惧している。東日本大震災のときも、その 1 年前に地球の裏側でチリ地震があって、そこで大津波警報が出されたが、実際にはそれほど大きな津波は来なかった。大津波警報が出ても大した津波が来なかったという 1 年前の経験が、東日本大震災ではマイナスに働いたのではないかと考えられる。

以上のような心理的ハードルがあるのはなぜかというと、人間は正確に考える労力を惜しんで、手近な情報だけで考える傾向があるからだ。根拠があるかどうかに関わらず、手近な情報で何となく判断してしまう、これをヒューリスティックと呼ぶ。これを避けるには訓練をしたり、正しい知識を身に着けたりすることで、「災害時にはこう行動する」ということを体に叩き込み、それを自然にできるようになることが大事である。その代表的なものが、群馬大学の片田敏孝先生が指導していた「釜石の奇跡」、釜石のある小学校で全ての子供が避難できたという事例だ。釜石の奇跡では命を守る三原則というものがあり、その一つは、想定やマニュアルにはとらわれない、自分の頭で考えるということだ。次に、その状況で最善を尽くすことだ。「たぶん大丈夫だろう」ではなく、命を守るために最善の行動を選ぶ。最後は、率先避難者になるということである。「周りが動いていなくても、あなたが真っ先に動いて下さい」ということで、この原則は先ほど言った集合的無知の逆である。この三原則を守った結果、死者が出なかった。

それでも正しく行動するのは難しい。例えば石巻市大川小学校の場合、迎えに来た親に子供を引き渡した結果、その子供が助かったケースがある一方、別の場所では親に引き渡した子供だけが亡くなった例もある。

親に防災の知識が無く、正しく避難できなかった。大川小学校の場合、子供は避難しようと言っていたのだが、ここは大丈夫だと先生が言って避難させずに被害に遭ったという証言もある。つまり、何か 1 つのルールを決めておけば命が守れるというわけではなく、その場その場で判断する、それには一定の知識が必要なので、研修や訓練が大事になる。

最後は防災における学校の役割だが、災害時にしっかり動ける体制をつくることは大事である。学校 BCP（事業継続計画）、国立大学の場合は文科省の指示でつくっているが、兵庫県立大ではまだつくってない。災害時には業務量が増え、自分の所だけでは対応できなくなる。そのため他の学校からの支援は欠かせないので、全国ネットワークの中でお互いに支援ができれば良いと思う。

災害時にはマニュアルがあって、避難者の受け入れや、児童・生徒に対するケアに関しては決められていると思う。それらを行うためには学校に災害対策本部をつくり、それが機能しなければならないが、そのためにはいろいろ障害がある。災害時には建物が使えない、電気や電話が使えない。教職員や家族と連絡が取れない。共働きの先生は子供を学校や保育園に迎えに行くことができない。職場の BCP を考えていくと、そこで働いている人それぞれの家庭の防災対策、祖父母に保育所へ迎えに行ってもらう等の話をあらかじめしておく必要がある。

水や食料の備蓄、トイレの用意はできているだろうか。公立学校に関して言うと準備されていない場合がほとんどだ。避難者用の備蓄はあっても、生徒用がない。マニュアルでは震度 5 強以上の地震が起きた場合、子供を学校にとどまらせることにしている。子供は何を食べるのか。支援学校の場合、一人一人の子供用にリュックが用意されていて、その子に合った食事を置いている例もある。

実際に災害が起こると、建物の安全確認ができるまで、その中に戻って良いとは言えない。新しい建物でも天井が落ちることもある。耐震性が高く、柱や梁（はり）は大丈夫であっても、天井裏には火災用スプリンクラーが通っている。スプリンクラーには耐震基準がなく、大きな地震でスプリンクラーは破裂する。大阪府咲州庁舎という高層ビルがあるが、そのビルのスプリンクラーが東日本大震災の際には壊れた。1,200km も離れた所で起きた地震でスプリンクラーが壊れ、3 階下まで水浸しになった。学校でもスプリンクラーが壊れると下の階に水が落ち、電気製品が水浸しになって全て壊れる。パソコンのデータも見られない。

自治体では業務継続計画策定の手引きが出ているが、これは学校でも参考になると思う。その簡略版として、市町村のための業務継続計画作成ガイドというものがある。小さな自治体でも最低限これぐらいはやって欲しいということで、重要 6 要素というものを定めている。トップ不在のときのため、代行順位を決めておく。トップ以外でも管理職がいない場合、その人の代わりは誰が行うか決めておく。本庁舎、建物が使えなくなったときのため、代替の災害対応拠点を置く場所を決めておく。免震であろうが耐震であろうが、建物が使えない場合があるということを想定する。電気・水・食料を確保する。そして、非常時優先業務の整理である。

災害時に教職員・児童・生徒の安全を守る点について述べたい。災害時には地域貢献として、私立の大学が避難者や帰宅困難者を受け入れる場合が多いのだが、中学や高校は受け入れないこともあると思う。もしこのような話が地域から出た場合には、窓口になる先生を決めておいて、学校の運営と、地域の人への開放、これは明確に分けておかないと混乱する。避難者はマナーの良い人だけではなく、たばこを吸ったりお酒を飲んだりする人もいるので、できれば受け入れないのが一番だ。

先ほど述べた大川小学校の場合、グラウンドに避難した後、そこにそのままとどまった結果、津波によって児童 74 人、教職員 10 人が犠牲になった。検証委員会では納得できないということで裁判が起こされ、一審では市と県に過失があったということで 14 億円の支払いが命じられた。遺族側の言い分として、学校はマ

ニュアル整備の義務を怠ったことと、教育委員会は各校に対する津波対策の確認・指導を怠ったこと、また、仮にマニュアルが不十分であっても、教員たちは自らの判断で児童らに避難を指示すべきだったという主張である。これに対して学校側は、マニュアル作成は努力義務だったとか、あれだけの大津波に対して完璧なマニュアル作成は無理だったと反論している。報道等を見ると学校側に過失があると思える。しかし、東日本大震災の前に宮城県が公表した津波ハザードマップを見ると、その小学校には津波が到達しないことになっている。先生方がこのマップを見ていたら、小学校にとどまるのが安全だと判断したのも無理はない。この点では、学校側に過失があったというのは、厳しいと思う。

同じような訴訟が企業に対しても起こされている。七十七銀行女川支店の屋上に避難した職員が流されてしまい、遺族が銀行側を訴えている。この裁判では銀行側に責任が無いということになった。理由の 1 つは想定を超える津波が来たという点、もう 1 つは、銀行側はしっかりとしたマニュアルをつくっていて、年に 2 回の避難訓練を行っていたという点である。この 2 つの理由から、銀行には責任が無いという判決が出ている。

一方、会社側に責任があるという判決が出た例もある。最終的には和解になったが、宮城県の山元町にある自動車学校に津波が来て、その生徒や自動車学校の先生が流された。一審は自動車学校側が負けた。理由は想定外ということではなく、山元町の広報車が自動車学校の近くで呼び掛けをした事実があり、その呼び掛けを聞いたにも関わらず、すぐに避難させなかったということで、自動車学校側に賠償を命じる判決が出た。これも難しい判決かと思う。東日本大震災に関して言うと、遺族側に立った判決の方が一審では多いような気がしている。

もう一つ、野蒜（のびる）小学校の訴訟がある。これは高裁で確定した最初の裁判で、2 つの裁判がある。1 つは体育館に避難した女性が亡くなったのは、津波が来るような場所にある体育館を避難場所に指定したのは行政が悪いということ。もう 1 つは、小学校 3 年生の女児の裁判がある。学校は同級生の親に子供を引き渡した。「帰る方向が一緒なので連れて帰る」と言った友達の親に子供を引き渡し、途中で津波にのまれた。この女児に関しては、学校から自宅までの帰宅ルートの中に津波浸水予想区域があった。そのような区域を通って帰る人、親でもない人に子供を引き渡した学校には過失があるという訴えだ。この裁判では女児の遺族に 2,660 万円の支払いを命じる確定判決が出ている。女児が帰宅するには浸水予測区域を必ず通過しなくてはならず、危険が及ぶことは予見できたと指摘された。学校の先生の責任として、子供の帰宅ルートに津波浸水区域、大雨の場合は水害の危険区域があるかどうか、全ての生徒に関して把握する必要があるという意味に取れる。これもなかなか厳しい判決で、学校側の意識改革が必要である。

学校でまず行っていただきたい点はマニュアルの確認や改善、災害の初動時は職員の参集である。中には学校の遠くに住んでおられる方もいるので、全員が来られるわけではないし、職員の方にもそれぞれ家庭がある。小さなお子さんのいる教員の方、共働きの方であれば、二人とも駆け付けるのは基本的に無理である。また、災害の種類別や時間帯別にマニュアルを作り、そして、教職員の誰が来ても、初動時にやるべきことが分かるチェックリストを作る。

特別な配慮が必要な子供、例えば支援学級に通っている子供や障害のある子供、アレルギー食が必要な子供、これらの子供に関しては担任だけではなくて、学校全体で把握しておく必要がある。また、災害が起こった後はけがをする子、メガネをなくす子なども出るので、その災害によってケアが必要な状態になった子供も押さえておく必要がある。避難訓練等でパニックを起こしやすい子供もいるので、その点でケアが必要な子供がいれば、訓練では特別な対策をしておく必要がある。

設備、備蓄をしっかりしておく。通信手段として公衆電話はつながりやすいのだが、無い場合は衛星携帯

電話を強くお勧めしている。あとは MCA 無線や災害時優先電話というものもある。非常用発電装置が無ければ学校にハイブリッドカーを買っていただいて、インバーターを付けておく。

校舎の安全が確認できない場合、しばらくグラウンドにとどまることになる。冬は非常に寒くなる場合もあり、雨風をしのぐ必要も出てくるので、その際にはグラウンドにテントを張る、地震後でも絶対に大丈夫だと言える耐震性の非常に高い建物を用意する等も大切だと思う。毛布、食料、水、非常用のトイレなどもあれば便利だ。保護者との情報共有として毎年 4 月、「災害時にはこのようなルールで学校は動きます。連絡はメールで行います」などということを保護者に伝える。個々の保護者が学校に電話を掛けてくると、その対応だけで先生たちは児童・生徒への対応ができなくなる。逆に言うと、保護者が連絡しなくても良いと思えるよう、安心できる防災計画をしっかり作る。

震度 4 程度の地震であっても、学校で子供を待機させる選択肢を用意しておくのは必要だと思う。特に私立の学校は遠くから通っている子供もおり、震度が小さくても交通機関が止まることもある。風水害などで浸水地域を通る可能性のある場合、無理に下校をさせてはいけない。先ほど述べた野蒜小学校の判決は衝撃的なものなので、帰宅させるのであれば通学路も含めた安全確認が必要になる。保護者に対しても無理に学校へ迎えにこないよう伝えたほうが良いと思う。

訓練に関しては普通に、「グラウンドに避難しましょう」ということが多いが、地震の際に避難する廊下や階段は安全か確認して欲しい。倒れそうなロッカーの横を通る、または渡り廊下やその下を通る場合、余震の危険があって通れないこともある。あとは生徒や教員がけがをした場合だが、教室で児童が 1 人けがをして、担任がクラスを誘導していくと、そのけがをした児童を 1 人だけ置いていくのかという話になるので、けが人が出たときは誰がケアするのか考えておく必要がある。

そして、グラウンドに避難した後、どうするかということ。グラウンドに行った後は安全に滞在できる所に移動することが基本なので、その点も考えておく。実践的な訓練として、単に子供と一緒に逃げるだけではなく、「災害時は学校のこの部分はこうなります」、「地震の場合はこれが倒れてくるかもしれないですね」、「ここは安全なので、ここを通りましょう」など、危ない所を説明しながら移動することも、災害時の状況をイメージするためには有効だと思う。

生徒に自己判断させる訓練もする。休み時間や掃除の時間に地震が起こると教員が誘導でない。休み時間に抜き打ちで訓練させて、子供たち自身が判断して動けるようにしている学校もある。ただ、パニックになる子供もいるので、その点でのケアも必要になる。防災教育に関しては、文部科学省に学校安全ホームページがある。ここには都道府県や政令市がつくったマニュアル等が一覧で載っている。防災の資料が必要な場合は見て欲しい。

防災の効果は災害が実際に起きてみないと分からない。ただ、アメリカの場合、火災報知器を付ければ火災による死者が 20 年間で半減したとか、日本でも交通事故の予防策を進めた結果、交通事故死も 20 年間で半減したとか、やはり事故に関しては対策によって被害が減る。防災に関しても効果があると信じて対策を講じる。子供に防災のことを話すと、最後は怖くて泣きだす子も出てくる。そのようなとき、地震や津波で命を落とす可能性は非常に低いということや、火事や交通事故、水の事故で命を落とす可能性のほうが高いことを伝える。そして、火事なら火遊びをしない、交通事故なら信号を守る、海水浴なら準備運動をするといったように、地震や津波でもしっかり知識を持って対策すればそれほど怖いものではないと説明している。対策すれば大丈夫ということを本日は覚えていただいて、それぞれの学校の防災対策に生かして欲しいと思う。

法人管理事務運営部会　講演Ⅱ

「サイバーセキュリティ　安心安全な教育環境の確保」

愛媛大学大学院理工学研究科　教授

小　林　真　也

私は情報通信の専門家として、セキュリティ分野にも携わっている。「安心・安全」と言われますが、安心は主観的、安全は技術的・客観性を含んでいて、サイバーセキュリティは技術的な話、インシデントの話、広く言うとサイバーセキュリティ空間での犯罪、詐欺などの話になると思っている。

早速、質問、「学校法人内で使われているパソコン、その台数やOS、ソフトウエアの更新状況を把握している部署や責任者がはっきりしている所はどの程度おられますか？」。9割程度。「先生方が使っているタブレットやスマホの総数はどうですか？」随分と減っている。教員や生徒個人が学内に持ち込む機器、教員が業務に関するデータを自宅に持ち込んで作業するための機器も存在すると思うが、これらの実態は学校として把握されていないと思う。また、複合機、多機能プリンターやITカメラ、ネットワーク接続型の家電機器もある。HDD レコーダーやテレビなどの家電機器がコンピューターだという認識を持っていない方も多いが、ネットワーク機器そのものもサイバー攻撃のターゲットになりうる。

「マルウェア、コンピューターウイルスの被害を受けた方はいますか？」皆さんよりもセキュリティ対策をしていると思われる私でも被害を受けてしまった。サイバー攻撃の現状ということで、情報処理推進機構（IPA）は情報セキュリティ10大脅威というものを毎年発表している。最近の事例として、フィンランドでは暖房機器の停止、サウジアラビアでは飛行機が飛べなくなり、韓国ではサイバー司令部そのものが攻撃を受けた。サイバー攻撃の目的は非常に多様化している。かつては面白がるのを目的にしてウイルスをつくる、いわゆる愉快犯でしたが、最近の目的は国益のためや経済的利益、産業スパイもある。学校関係で言うと、ネット詐欺により児童生徒が引っかかる危険性もある。

インシデントの被害と原因について考ええると、学校が被害者となる場合、加害者としては法人、教職員、生徒、保護者、学外者というのが考えられる。原因として、悪意の無い場合は少しのミスで被害を与えることもあるが、悪意のある場合、例えば、何らかの行き違いで学校に対して不快な感情を持って辞めた教職員がいるなら、その人から攻撃される危険性は意識しておく必要がある。生徒や保護者からも同様に恨みを買う場合がある。学外者に関してもそのような危険はある。つまり、全てが原因になり得るという意識を持っておく必要がある。特定の組み合わせだけを考えて対策を取っても駄目だ。原因と被害者ということで言えば、自分自身による何らかのミスによって、自分自身が被害者になってしまうこともある。火事という被害

も放火と失火の両方に対して備えなければならないように、サイバーセキュリティに関しても同様に、うっかりミスに対して備え、悪意を持つ者に対する備えも確実に必要となる。

ここでサイバーセキュリティに関する言葉について簡単に説明する。先ほども触れましたが、マルウェアとは、不正行為や被害をもたらす目的でつくられたソフトウエアやプログラムの総称です。皆さんがご存じのマルウェアはコンピューターウイルスだろう。ワームという自ら動くマルウェアもある。ちなみにワナクライはワームだ。ボットというのはコンピューターを乗っ取るタイプだ。DoS 攻撃と呼ばれるサービスを停止させる攻撃がある。サーバーやネットワークに対して意図的に過大な負荷を掛けることで、その脆弱性を利用してサービスの提供を不能にするという攻撃だ。大量のリクエストや巨大なデータを送付する等の方法が取られる。以前、ある宗教団体にとって望ましくない放送をしたテレビ局に対して、信者が一斉にファクスを送りつけ、電話を掛けまくったことがある。このインターネット版が DoS 攻撃だ。

また、DDoS 攻撃という DoS 攻撃の発展版のようなものがある。複数のコンピューターで攻撃して、より被害を拡大させようというものだ。複数のコンピューターを使うからといって、協力者を呼び掛けて集めたりするのではなく、ボットを使って乗っ取ったコンピューターを用いて攻撃を仕掛けている。乗っ取られたコンピューターの持ち主は普通それに気づかない。皆さんのコンピューターも知らぬ間に乗っ取られているかもしれない。コンピューターではなくテレビを乗っ取ることもあるし、カメラを乗っ取ることによっても攻撃に利用することができる。インターネットに接続できる機器は全て乗っ取られる危険性がある。ワナクライのように利用者に対して訴えかけてくるようなマルウェアに対しては、利用者はすぐに気づくことができるが、多くのボットは黙ってずっと潜伏し、知らない間に利用者のコンピューターを拠点にして悪いことを行う。ワナクライは感染したコンピューターをロックして使用不能にした後、「元に戻したければお金を払え」というウイルスだ。これはランサムウェア、身代金型を言われているマルウェアである。

標的型攻撃というものは、ある特定の組織に対して情報の摂取や業務の妨害を目的に行われる攻撃である。まず攻撃者は標的とする組織に狙いを定め、精巧な技術と相当程度の資源を投入して標的とする組織の情報を大量に集める。その際、ボットが使われることがある。例えば、メールのやり取り等、ネットワークに流れている情報を全て集めまる。ネットワーク機器を乗っ取ることにより、そこに流れている情報を全て取ることができる。どこに所属の誰がどのような人とどんなやり取りをしているかが分かる。次の段階として、その業務上やり取りしている人のふりをしてメールを送り付けるようなことをする。この手の攻撃は国レベル、あるいは経済的な利益を目的としたケースが多い。

フォレンジック調査というものがある。事件や事故が起こった際、端末に残された電子的記録の保全や分析を行うことによって、原因は何で、どのような情報が漏れたのかを調査するものである。皆さまの法人においても事件が起こった際、しっかりした技術を持った業者に外注することが安全だと思う。早めに手を打ってセキュリティホールを残さないようにしないと、続けて攻撃される危険性がある。

CSIRT（シーサート）というのは、セキュリティに問題が発生していないかを常に監視し、インシデント発生時にはその対応を取る組織のことである。国や企業レベル、皆さんの法人の中でもそのような意識を持っておられるかもしれないが、平時において情報収集をしっかり行っていただくことが重要だ。

ゼロデー攻撃というものがあって、私もこの攻撃を受けたことがある。学生の海外インターンシップの関係で中国へ行った際、活動の様子を中国の学生さんたちにビデオカメラで撮影してもらったのだが、その映

像データを私のノートパソコンへ移動するとき被害に遭った。日本を出る前に最新のワクチン情報をパソコンに入れていたにも関わらず被害を受け、キーボード操作を受け付けなくなった。このパソコンはもう使い物にならない。ワクチンソフトをいくら最新パターンにしていてもゼロデー攻撃には対処できないので、攻撃を受ける前提でいるというのが非常に大事である。後日談として、ノートパソコンに入っているデータは欲しいのでハードディスクを取り外して、別のパソコンにつないでデータを吸い上げ、必要な幾つかのファイルを抜き出すことはできた。

組織型の攻撃については、官公庁、民間団体、企業、研究機関、大学などが被害に遭う。脅威と影響としては、メールやウェブサイト、外部記憶媒体等によってパソコンがウイルスに感染する。関連会社が感染して、そこから本社に入って来る場合もある。遠隔操作によって情報を搾取するということが行われ、情報を抜き出すタイプは目立つことがない。目立たず長く潜伏できれば利益が大きくなる。メールからウイルスに感染するケースでは、ばらまき型というタイプもあるし、やり取り型と言ってやり取りしながら安心させるタイプもある。また、ウェブに誘導して感染させる手口もある。どこかのウェブショップでユーザー登録したらキャンペーンの案内が来て、そこで偽の URL をクリックして感染することもある。

水飲み場攻撃という手の込んだ手口もある。まず、普段からアクセスしているウェブサイトを推測、観測する。観測されている時点ですでに感染している可能性があるのだが、その情報を用いて攻撃に使うページに誘導することもあるし、よく見ているサイトがあるとして、そのサイトにマルウェアを仕組ませることもある。偽のウェブサイトに誘導するのではなくて、本物のサイトが改竄されているケースもある。ある会社の正式なホームページだと思ってサイトを開いたら、そこにウイルスが入っているということが起こる。何を信用すれば良いのか分からないというのが、このサイバーセキュリティ上での出来事だ。

標的型攻撃による情報流出事案として、富山大学は研究成果を盗まれ、JTB では 678 万件の個人情報が流出する被害に遭った。ただ、JTB の場合、本来はログを取っておかなければいけないのだが、ログが残っていないために正確な被害の実態は分かっていない。標的型攻撃における情報流出の対策として、まずは対策のための予算確保、そして継続的な対策を実施して欲しい。セキュリティ対策は余分な費用と感じるかもしれない。しかし、皆さんの家にも鍵があるだろうし、セコム等と契約している方もおられるだろう。幾らかのお金はかけないと仕方がない。

内部の対策として具体的に何ができるかというと、情報の管理とルールの策定だ。例えば、外部からのメールに関してはどのようにアクセスし、どのように扱うかということだ。URL が張り付けてあるメールにはどう対処するのか。クリックする前に URL を確認するというルールを制定して組織のメンバーに徹底する、このようなことが必要になる。また、サイバー攻撃に関する情報を共有します。「このような事案がある。このような攻撃がある」という情報を全ての構成員が共有できるようにしておく。週報や月報を用いる、職員会議や朝礼で伝える、そのような場を用いてセキュリティ担当者によって皆で共有する活動は大事だ。あとはセキュリティ教育の受講ということで、皆さんが実際に集まって行う形もあるが、オンライン型でいつでも受講できる形にすることもできる。そして受講内容を理解しているかどうかのテストを行うことも有効だろう。当然、ソフトウエアの更新、セキュリティソフトの導入や更新はしっかり行う。それでもゼロデー攻撃には残念ながら対処できないが、確実に危険性は減る。

ランサムウェアは犯罪グループや国家など、大規模な組織がよく仕掛けてくるタイプの攻撃である。サー

バーやパソコン、スマートフォンの利用者もターゲットになる。被害としては、保存されているファイルが暗号化され、操作できないようにされ、後で金銭の要求をしてきます。データを流出させるという強迫もしてくる。データが暗号化されてしまえば業務ができないので、実際には破壊されたのとほぼ同じだ。手口の多くは、メールの添付ファイルを通じて感染させるというものだ。

ワナクライの場合、いわゆるウイルス型ではなくワーム型で、それ自体が活動するというタイプである。ウェブサイトを用いて感染させる場合もある。よく聞かれる質問として、「感染してしまったら身代金は払ったほうが良いのですか？」というものだが、これに対する答えは専門家によって意見が分かれている。払っても解決するかどうか分からないので払わないほうが良いという説と、払えば元に戻る可能性があるので払ってみても良いという説がある。ただ、犯罪者にお金が渡るのは許せない。しかし、ランサムウェアの被害は急増している。2016 年は前年比約 10 倍の被害があった。日本語表記で脅迫を行うようなものもある。

ランサムウェアの対策としてはリテラシーの向上が挙げられる。学校においては教職員の教育、どのように潜入されてしまうのか事例を知っていただき、意識を持ってもらうことが必要だ。また、ゼロデー攻撃でもそうであるように、攻撃されることを前提としてバックアップを定期的に取って欲しい。バックアップを取る、これに尽きる。バックアップを取っていれば、被害に遭った場合でも無駄なお金を払わなくて済む。バックアップを取るといって、同じパソコンの中にファイルのコピーをつくっても意味がないので、別のメディア、違うコンピューターにバックアップするのが原則になる。

また、災害に備えたバックアップということでは、空間的に離れた場所にバックアップを取ることも大事だ。東日本大震災が起こる前、ある小学校の卒業アルバム作成を請け負っていた写真屋さんは、デジタルカメラによって入学からの写真を撮りためていた。そして津波が襲ってきて、子供たちのデータが全て流されてしまった。震災で亡くなった子供がいて、運動会に出ていた生前の写真が見たいと望まれた親御さんがいたのだが、データが無くなって非常にかわいそうな思いをされたと聞いている。従って、バックアップ先を空間的に離すということも、災害という面では効果がある。また、ネットワークとして分離された場所に置くこともバックアップとしては良いと思う。

あと、「バックアップは取っています」と言ってバックアップファイルに上書きする人がいる。上書きはやめる。大丈夫なファイルの上に、感染したファイルを書き込んでしまう危険がある。残っているからバックアップであって、上書きしてしまえばバックアップの意味がなくなる。バックアップ先の容量が足りないということであれば、例えば古いデータは間引きして保存しておく、そのような方法にして欲しい。

内部不正による情報漏洩と、それに伴う業務停止の事案について。残念なことだが、在職者や離職者が攻撃者になってしまうケースがある。被害者は組織や個人、顧客やサービス利用者だ。組織の場合であっても、従業員や社員という個人が被害に遭うこともある。動機としては恨みや金銭目的、職員が仕事をするため自宅に書類を持ち出して、それを失ってしまうことが情報漏洩につながったケースもある。最近は減っているが、ファイル交換ソフトによる被害がある。ファイル交換ソフトのウィニーにはセキュリティホールが結構あったので、そこが攻撃されて音楽や映像を交換する際に、マルウェアによって交換している以外のデータが全て抜き取られたケースがあった。

情報漏洩によって社会的信用を失い、賠償等が連鎖的に発生する。発生要因としては職場環境や処遇に対する不満等あるが、これは人間の感情の問題なので、同じように対応しても不満を感じる人はいる。また、

アクセス権限のない人にデータが見える状態にしていることが原因になる場合もある。データを見た人の中には悪意のある人もいるだろうし、悪気が無くても見てしまうと変な考えを起こす人もいるので、アクセス権限の適切な管理は大事だと思う。ヤフージャパンの子会社の元従業員が悪意を持って不正に情報を持ち出し、18 万件のデータが流出したことがある。データの入ったパソコンを置き忘れてくるケースもあるので、持ち出しのルールも徹底しなければいけない。ここにノートパソコンがあるが、このパソコンに内蔵されているディスクドライブは暗号化されているので、ドライブを取り出してもデータは読み取れない。このパソコンの場合、通常作業ではログインのパスワードでロックは解除されるが、ドライブだけを取り出してもデータは見られない設定になっている。このような機能は多くのパソコンで使えるので、積極的に使ってハードディスクの紛失や盗難に備えるのは一つの方法だと思う。被害の予防として、資産の把握、体制の整備、どのようなものを持っているのか、持ち出し禁止になっているのかどうか、そのようなことを管理することができる。さらに、そのようなルールやポリシーを決めても守らなければ意味がないので、それらの周知徹底が必要だ。取り扱いの教育、構成員のセキュリティ意識、どのようなことが危ないのかを理解してもらう取り組みが大切である。

IoT 機器の脆弱性ということで先ほどはカメラやビデオについて触れたが、犯行グループとしては組織と個人が両方あって、それらによって情報漏洩や遠隔監視が行われる。カメラが付いているパソコンを持っている方も多いと思う。カメラの機能を使っていないなら、レンズにシールを貼る。そうでないと、のぞき見されるかもしれない。カメラ使用時にはランプが光るので大丈夫と思うかもしれないが、ランプを光らせることなくカメラが使えるようなソフトウエアに変えられていたら、全て写ってしまう。これは実際に産業スパイが使っている方法だ。マイクから音声が取られている可能性もある。その危険性を少しでも減らすため、マイク端子に何か関係ない端子を挿しておいてもらえればと思う。IoT 機器を用いてマルウェアを広めるタイプもある。ルーター機器、ネットワーク機器そのものが脆弱性を持っていて、これを標的としてアクセスした例があった。1991 年の湾岸戦争においては、イラン軍がフランスから購入したプリンターにウイルスが仕込まれていた。そしてイランへの空爆をする前に豪空システムに障害をもたらして攻撃しやすくした事例がある。

複合機も危険だ。皆さんが使っているパスワードは初期設定のままということはないだろうか。複合機でコピーした資料のデータが全て抜き取られる危険性がある。スキャナーとプリンターを一体化したものが複合機だ。印刷したデータは画像として複合機内に蓄積されているので、パスワードは変えて欲しい。外部から接続されて複合機内の画像データが取られる危険がある。他にも太陽光発電管理システム、MRI などもマルウェアの被害に遭ったことがある。コンピューターが入っている機器は全て危ないと考えていただいて結構だ。車業界も今は機械産業ではなくて電子情報産業だ。機械部品よりも電気・電子部品のコストが多くなっている。

被害の実態だが、ルーターをインターネットにつないだ後、わずか 38 秒でウイルスに感染したケースがある。対策を取る間がない。一方、48 時間が経過しても感染しなかった場合もある。トライに何度か失敗したら、しばらくの間はアクセスを受け付けないという機能が搭載されていたからだ。従って、新しい機器を導入する場合には、パソコンとその機器を別のネットワークにつないで、せめてパスワードを変えてから外部のインターネットにつなぐ、そのようにするだけでも危険性は減る。危険なのは気づきにくい場合、長期に

わたって知らない間に犯罪に加担してしまうケースだ。知らずに加担した場合でも、「どこそこ高校のコンピューターから攻撃を受けた」と報道されてしまう。

対策として、必要ない場合はインターネットなどの外部ネットワークにはつながないようにする。パスワードも初期状態からは変更し、不要な機能がパソコンに入っている場合、それが利用できないような設定に変えて欲しい。アップデートを速やかに実行し、自動でアップデートするような設定にするのも良いだろう。ただ、アップデートにも危険性がある。

被害の事例を幾つか紹介する。2015 年 5 月 8 日～23 日までの約 2 週間、日本年金機構の情報が流出した。23 台の端末が遠隔操作され、128 万人の個人情報が漏れたという事件だ。システムの中には情報系と業務系があり、情報系はインターネットにアクセスされるネットワークで、業務系はつながないタイプだった。確かに業務系の端末は外部とつながらない設定になっていて問題は無かったのだが、それでも被害に遭った。被害に遭うまでを時系列で見てみると、5 月 8 日に標的型攻撃、「厚生年金基金制度見直しに関する意見」という件名のメールを受信している。年金機構としては外部からのメールを受け取る必要があるので、そのために公開しているアドレスがある。その公開アドレスに先の件名のメールが送られてきた。リンク先として商用オンラインストレージが載せられていたのだが、それを構成員の誰かがクリックし、それで感染してしまった。その感染によって不審な通信をネットワーク上に流してしまった。年金機構という大きな組織なので、不審な通信を検出する機器があって、「この端末は問題がある」ということを知ることができた。その後、非公開の個人メールアドレスにも問題のメールが送られている。そしてある端末がボット化されてしまい、年金機構内のメールアドレスを収集していたようだ。つまり、公開のメールアドレスではなくて非公開のメールアドレスに、まさしく業務に関係するようなメールが送られてきた。それによって 3 台が感染した。この時は不幸中のさいわいと言うか、ネットワーク接続に失敗した。次は 20 日、公開のアドレスに対して医療費の通知というメールを受信して、それで再び感染した。数時間後に他の 6 台の端末からも不審な通信が発生していた。その後、21～23 日に掛けて感染は合計 21 台になった。何通かの不審メールは同一攻撃者からのものだと判定されている。添付ファイルの圧縮形式が同一だとか、送信元のメールアドレスが同じだったということで、4 つ全ての攻撃は同一者が一連の攻撃を仕掛けてきたといえる。

以上が組織の防護に関してですが、次は個人レベルの話です。スマートフォンはウイルス感染の危険性が高い。クラウドと連携するサービスを利用する場合、情報漏洩の危険性がある。グーグルマップはクラウド型サービスだ。皆さんの所在はグーグル社に把握されている。セキュリティ対策更新の迅速な対応が必須になる。スマホはパソコンだと考えて欲しい。従って、パソコンと同レベルのセキュリティ意識が必要になる。スマホはアンドロイドと iPhone に分けられている。iPhone の場合、アップルが審査したアプリしか基本的にはインストールできない。一方、アンドロイドの場合、公式ルートであるグーグルプレイ以外からでもアプリが簡単にインストールできる。そこからマルウェアに感染する危険性がある。基本的な対策として、インストールは信頼できるサイトのアプリに限定する。また、アプリをインストールする際には、そのアプリに対して許可する権限を確認してくるが、面倒がって全て OK にするというのは非常に危険だ。誘導する手口にも注意し、認証の許可、データのバックアップはしっかり行う。推定しづらいパスワードを設定するなどの対策を取る。

公衆無線 LAN の危険性も意識して欲しい。同じ SSID を用いて偽のアクセスポイントを設けるという手

口もあるので、SSID だけを見て安心してはいけない。同じパスワードを面倒くさがって様々なサイトで使い回さない。アプリや OS の更新、アンドロイドの場合はセキュリティソフトの導入を検討して欲しい。先ほどアプリをインストールするときは許可する権限を確認するように言ったが、その権限をバージョンアップの際にこちらが意図せず変更されてしまう場合もある。最初のインストールの際には問題なくても、バージョンアップ版で悪さをすることがある。バージョンアップ版がマルウェアというケースもある。アンドロイドスマホの場合、SD カードの使用にも気を付けないといけない。暗号化せずに SD カードへデータを保存する危険性がある。本体内のデータは抜き取りにくくても、SD カード内のデータは割と簡単に抜き出せる。スマホをなくしてしまった場合、遠隔ロック機能を用いるなら情報を守れる。公衆無線 LAN を使用する場合には通信の暗号化を行い、業務で使用する場合には VPN サービスも有効だ。現在、どのような手口が世の中に存在するのか、それを知っておく必要があるので、定期的な情報収集を欠かさないようにする。

対策として、まずは環境の整備、通信の監視が行えます。外部に情報を出させるような場合、最初の段階で不審な通信があるので、通信を監視することが対策として有効です。学内ネットワークを監視する装置、そのようなサービス利用する。内容にもよりますが、月額数千円から利用できるサービスもあるので、それらを用いてネットワーク全体の監視を行って安全性を確保する対策は必要だろう。情報の持ち出しということでは、教職員の方々も仕事を家に持ち帰ることもあるだろう。それらの仕事を家のパソコンで行うのではなく遠隔業務を行うため、仮想デスクトップというものがある。端末には情報が残らないというソフトウエアがあるので、それらを用いることによってデータの持ち出しを伴わない環境を整備することができる。

ネットワークにつながっている機器のリストをつくる。テレビは何台あるのか、新しいソフトウエアに更新されているのか、それらのチェックリストを整備することは絶対に必要だ。また、ネットワークにつなぐ際のルールも策定して欲しい。情報収集は毎日行うのが理想なので、担当者を決めて職務として行ってもらう。インシデント発生時の対応手順も立てておいて欲しい。判断の責任者と手順は事前に決めておく。緊急時には業務が止まっても仕方がないので、機器をネットワークから切り離す。

最後に伝えたいこととしては、どんな手立てをしても攻撃されてしまう危険性はあるということだ。攻撃されてしまうことを前提にして、その際の被害を少なくするという意識を持って対策する必要がある。攻撃されないよう最善を尽くしながら、攻撃されてしまった場合は被害を最小限にとどめるということをしっかり考えて欲しい。仕入れておきたい情報源を幾つかお伝えする。最初に触れた情報処理推進機構（IPA）では脆弱性などセキュリティの危険情報が公開されている。警察関係の団体として、日本サイバー犯罪対策センターにはサーバー犯罪の注意喚起情報が公開されている。インターネット・ホットラインセンターにはサーバー空間における犯罪、児童ポルノ等に関する情報が出ているので、児童生徒の指導に生かせると思う。攻撃に遭ってしまった場合には、ファイル共有ソフトの実行を禁止する、あるいはインストールされていないことを証明する、そのためのソフトウエアを IPA が公開しているので利用できる。ランサムウェアに対する複合ツールもあるが、全てのランサムウェアに対応しているわけではないので、これで暗号化されたファイルが復元するかどうかは分からないが、トライしてみる価値はあるだろう。

法人管理事務運営部会　講演Ⅲ

「地方からの情報発信～坂の上の雲を軸としたまちづくり～」

松山市坂の上の雲ミュージアム　初代館長

松　原　正　毅

今から 10 年前の 2007 年 4 月、「坂の上の雲のまち松山」のまちづくりを目指す一環として、坂の上の雲ミュージアムがつくられ、私は 10 年間館長を務めた。開館当初は「坂の上の雲のまち松山」という標語が町のあちこちに見られたが、残念ながら現在は電車通りの角にある愛媛銀行大街道支店の上の所に残るのみとなっている。まちづくりというのは本来、非常に気長に時間をかけて取り組むべきものだが、当初は勢いが良いものの、だんだんしぼんでいってしまう、これはまさにそういうケースになってしまった状態。『坂の上の雲』という小説は、作家、司馬遼太郎さん代表作の一つで、この小説の冒頭部分が、松山出身の正岡子規、秋山好古、真之、この三人の主人公に焦点を当てて展開されていることから、この小説にあやかったまちをつくっていこうという意気込みで始められた。

司馬さんは、大阪の文学協会から 1991 年 12 月発行の『樹林』という雑誌に、この小説をどういう位置付けで書いたかについて短い文章を残していて、同じ年の 11 月に司馬さんは文化功労者として顕彰され際のインタビューでも同じようなことを書いている。この樹林に書いた『二十二歳の自分への手紙』によると、1945 年、敗戦の年、当時 22 歳の司馬さんは、ご自身を含め多くの若者たちが抱いた「どうして日本という国は戦争に次ぐ戦争を繰り返し、そして自ら滅んでしまったのだろう。なぜ、そういう歴史を歩んできたのだろう」、また、司馬さんの先人たちの明治、大正の人々について「なぜこんなに愚かだったのだろう」、そのような問いに対する答えを返すことができなかった。それから 20 年後の 1965 年、司馬さんは 22 歳の自分への答えとなる手紙を書き始めた。

その時期、司馬さんは長編『竜馬がゆく』を書き終え、『坂の上の雲』に取り組んでいたところでした。司馬さんは 1965 年前後、取材を重ね、松山にも何度か来られてこの作品の構想を膨らませ、固めていった。松山で子規のことを調べ始めていた司馬さんと話した際、何度も口にされていたのは、子規のことを調べるにつれ、幼友達に真之がいて、お兄さんには好古がいて、二人とも日露戦争における重要な役割を果たした人物であるということを知っていった。そしてこの三人を主人公にした小説の構想を固め、1968 年 4 月 22 日から 1972 年 8 月 4 日まで、産経新聞夕刊に 1,296 回の長編小説を連載するに至った。連載を終えた 8 月 4 日という日付は､明らかに司馬さんがご自分の誕生日である 8 月 7 日を意識して書き終えたのだと思います。かつて 22 歳の自分が抱いた疑問に対する答え、それを自分あての手紙として書いた作品が、この『坂の上の雲』であると思う。司馬さんが 22 歳の自分への手紙として書いた作品はこれだけではないかもしれないが、その一番中心になっているものはこの作品であると言えると思う。

司馬さんが抱いている歴史観、歴史認識、歴史把握について、司馬史観という表現がよくなされるが、私

は司馬さんという人にとって、これが一番ふさわしくない不適当な表現だと思っている。なぜなら司馬さんは、固定されて凝り固まった 1 つの史観を示すためにあの膨大な小説文を書いたわけではなく、色々な時代に生きた人たちの人生を描くことをまずご自身の任務、使命としていたと思うからだ。このことについては幾つかの文章を司馬さん自身が残していて、一番それをよく表しているのが『二十一世紀に生きる君たちへ』という、1989 年大阪書籍、小学国語六年下の教科書に掲載された文章だ。この中で司馬さんは「歴史とは何でしょう」と聞かれた際、「それは大きな世界です。かつて存在した何億という人生がそこにつめこまれている世界なのです」と書いておられる。要するに、この世に生きて足跡を残していった人たちの人生を描く、人生を捉える、それが歴史だと司馬さんは定義付けている。

司馬さんが亡くなった後、司馬さんへの追悼論文集が中央公論社から出され、私はその中に『裸眼の思索者』というタイトルで追悼文を書いた。司馬さんは幾つかの文章の中で、裸眼、裸の目で見ることが一番大事だと言っている。司馬さんは 20 代後半から 30 代の始めまで 4 年間ほど、産経新聞の美術記者をされていたが、その時、司馬さんは「セザンヌたちの絵画理論にとらわれ、拘束されて、その理論に基づいて作品を批評し、見たりしたが、全く楽しくも面白くもなかった」と言っている。ところがその美術記者の仕事から離れた途端、絵画理論という一種の道具の束縛から自己を開放することによって、どういう作品を見ても楽しく、感動を覚えるようになったと書いている。それと同時に、司馬さんは偶然のことと書いている、小説家としてひとり立ちをする決心をしたということである。自分の足で歩き、自分の目で見、自分の頭で考える、この裸眼の思索者であるということが司馬さんの一番の基盤になっていると思う。

裸眼で見、自分で考えるには、当然万巻の書を読み、色々な資料を読む必要がある。先人の残したものをみだりに勝手に考えるという意味ではないが、このような姿勢は司馬さんのような小説家に限らず、多くの人に一番大事な指針になる。ただ、司馬さん自身、この裸眼で見るということは本当に難しいと書いておられ、裸眼とは独断とは違うという意味も込めて、そういう姿勢を持ち続けることが大事だということを自らに課していた。それゆえに、なおのこと司馬史観という表現は司馬さんに対しては最も不適当な表現だと私は思う。

司馬さんの代表作品である『坂の上の雲』には多くのことが同時並行で書かれていることから、読者はそれをさまざまな形で受け止め、解釈していくことができる。明治という時代は、若い人たちが国づくりに参加した「一朶（いちだ）の白い雲」という言葉に表現される活動があったことは事実だが、だからと言ってこの小説はその明るい面だけを書いたものではない。明治という時代の暗さ、影の部分を正面切って扱ってはいないが、この小説を読めば、その明るさの裏にある暗、明と暗が同時並行で示されていることが分かる。だから、この『坂の上の雲』をまちづくりの指針にすることは、ある意味で正しい方法だと思ったので、私は坂の上の雲のミュージアムの館長を引き受けた。この『坂の上の雲』に書かれている方向性、盛り込まれている精神を見える形でまちづくりに生かすことはなかなか難しいことだが、それに挑戦する意味は非常に大きいと思っている。松山でのこの取り組みを忘れさせてしまうわけにはいかない。ミュージアムができたから終わりではなく、さまざまな場で『坂の上の雲』に描かれている世界をまちづくりに生かす形になってほしいと願っている。

次に、このまちづくりについて話します。人類にとってまちづくりとは何かという問題がある。人類史の中で、現在まちと呼ばれている集落、居住形態が現れたのは紀元前 6000 年ごろ、今から 8,000 年ほど前だと思う。本格的な発掘によって最初の集落として現時点で確認されているのはトルコの中央部、アナトリア中央部にあるチャタル・ヒュユクという遺跡である。研究者によっては、そこに 1 万人規模の集落が存在していたと言っている。私は何度か現地へ行って発掘の状況を見たが、非常に密度の濃い、密集した集落でした。

家々は全て壁でつながっていて、当時は屋根の上に入り口を開けて、そこから出入りをしていたようだ。この遺跡のあるトルコ中央部、夏は非常に暑く、冬は非常に寒いという気候に対応するため気密性の高い住居を工夫したということがよく分かる。では、なぜこういうまち、集落がつくられたのか。残念ながら、よく分かる説明や解釈はまだなされていない。ただ、当時の状況から、この地域は非常に早くから農耕が営まれ、その人たちの集落が非常に早い時期からつくられたと考えられている。その集落が合体して大きくなっていったようだが、ゆっくりとではなく、急速にそのチャタル・ヒュユクの街並みが現れたようだ。こうなった背景には、人が集まる場所におけるネットワークの重要性、まちをつくることによる密度効果などが関係していたと想像される。

中東で暮らすとよく実感できるのが、まちや大きな村の集落は、非常に遠くからでも見える光、明かりを持っている。また、日に何度もなされる祈りの声が遠い所にまで聞こえてきます。このように、まちというものの最終的な要素と言うのは、光、音、重力、ネットワーク、密度効果、こういったものだと思う。今までの人類の歴史と、世界の色々なところを実際に訪ねてみて、良いまち、暮らしやすいまち、そして何度も繰り返し訪ねてみたいまちの要素は何なのかを考えてみた結果、私自身はその要素が次の 4 つに集約されると考えるようになった。すなわち、水、緑、散策路、歴史の記憶、この 4 つである。

まず水について、当然これは飲用水を含めた話になるわけだが、先ほどのチャタル・ヒュユクという遺跡も、二股に分かれた小川のそばにつくられている。水というものは飲用水として一番大事なものだが、この要素はただ飲用水の確保を意味しているわけではない。例えば、暮らしの中で聞こえるせせらぎの音、川の流れ、そういったものがまちの中を走ることで非常にゆったりとした感覚が生み出される。韓国のソウルの中には東西に走る長さ 3.7 キロメートルほどの運河があったが、そこを埋め立てて暗渠にし、高速道路をつくった。それを元大統領のイ・ミョンバクさんがソウル市長だった時代、全部壊して清渓川（チョンゲチョン）という川を復元して水が流れるようにした。そこはソウルの中心部で、大きな効果が現れた。周辺の夏の気温が 2～3 度ほど低くなり、何より今そこはたくさんの人が集う場所になった。これは、まちの中にある水の流れや川というものの重要性を証明する一つの事例になっている。

ここ松山に関して言えば、残念なことにまちの中に川がありません。江戸時代の初期、石手川という洪水を起こす川があり、現在の松山城の下を巡っていたのですが、それを付け替えて重信川という人工の川にして、まちの外に出してしまいました。松山のまちの中には小さな川が道後や松山市駅の近くに残されているが、現時点ではもう川とは言えず、排水のためにコンクリートで固めてしまったものなので、川としての流れもなくなり非常にひどい風景になっている。松山をより良いまちにしていくためには、特にこの水の問題については真剣に考えるべきだと思う。

松山は色々な意味で、良くなるまちの要素、条件を備えているが、現時点では十分なところがない。これは松山だけでなく、日本や世界のまちにも言えることだが、マイナスの要因をプラスにしていく努力が必要である。松山もそうだが、特に夏に水不足に陥ることが多い。松山は初めから石手川ダムをつくって対応してきたが、水量が少なく、すぐに土砂で埋まってきてしまい、今このダムは当初に比べて容量が 3 分の 2 か半分ほどになっている。たまった土砂を取り除く方法はあるが、完全に除去するためには水の流れを止め、大型機械を投入し土砂をさらえる必要があり、どれほど作業を急いでも半年から 1 年かかる。そうなると水の供給ができなくなってしまうため、実行は不可能である。もう一つ考えられる方法は、放流によって一気に土砂を洗い流すというものだが、下流に大変な被害を与えるので実行できない。ただ、幸いなことに、松山では年間 1,500 ミリほど雨が降るので、この雨を有効に使う方策を当然考えるべきだと思っている。

次は都市にとって非常に大事なもう一つの要素、緑について、街路樹や森林公園などについて話す。緑は、

酸素を生み出す元で、酸素自体は 30 億年ぐらいの歴史があります。光合成を行う植物が現れて、酸素を地球の表面上に蓄え、これが 30 億年かかった。その遺産を私たちはありがたく利用しているが、30 億年以上の時間をかけて蓄えられた酸素を得るには、現時点では植物の力を借りる以外の方法はない。だから、たくさんの人が集まって住む都市やまちに、色々な手段を使って緑の塊をつくっていくことが大事になる。松山に来られた方の多くが、「緑豊かなまちですね」とおっしゃるが、実は松山は、衛星写真や航空写真で見れば一目瞭然なのだが、本当は緑の少ないまちだ。夏の暑い時期にまちを歩かれても休む木陰が全ない。まちの中には散策路や散歩道が本当に必要である。自動車の交通と両立する形で、特にまちの中心部に散歩道を考えるべきだと思っている。

10 年前に私が坂の上の雲ミュージアムの館長をお引き受けした時にまず提案したのは、道後にある中世の城である湯築城（ゆづきじょう）と江戸期の松山城の間をゆっくり歩ける道をつくるべきだということでした。一部はその提案に対応した措置を取ってくれたが、残念ながら全部の道は、まだそのような道になってはいない。愛媛大学の医学部のキャンパスは、以前、刑務所のような塀が立っていたが、当時の愛媛大学の学長に「この塀をまず壊してほしい」とお願いしたところ、見事なほど早く対応していただき、現在では植木が植えられて見違えるように穏やかな塀になっている。そのような道が湯築城から松山城まで続いていくなら本当に魅力的な散歩道になると思う。

松山は、ゆっくり歩いて色々な所を訪ねることができる小さなまちだ。路面電車、伊予鉄が走っていることも幸いしている。これは市営の電車ではなく私営である。私も長く暮らしたことがある京都のまちなどは、早い時期に市鉄の路面電車を取り払い、自動車の道にしてしまった。現在京都のまちがひどい状況になっているのは、その市営の鉄道を全部無くしてしまったからだ。最近それを復活させようという動きが起こっているのが、当然、現時点から取り組むと巨額の費用が必要になってくる。それでもやはり、私は京都でも、路面電車、緑を増やす、さらに雨水を利用したせせらぎをつくるなどといった工夫を行っていくべきだと思っている。

松山は外部から来られた人も非常に良いまちだと評価をされることが多いが、松山に支店長として来られた方の集まりで、特に支店長の奥さん方が、やはりまちの中に散歩道をつくってほしいと一番におっしゃっていた。外部から支店長で赴任され、そのままそのまちに住み着く率が一番高い都市は札幌、次が福岡、松山はその後になるようだ。もし松山のまちの中に、ゆっくり歩ける水と緑を伴った散歩道が整備されていけば、非常に魅力的なまちになると思う。

そして、もう一つ、まちにとって大事な要素は歴史の記憶です。各土地で受け継がれてきた歴史の記憶というものは当然その土地に関わるもの、また、その土地に住み、生き、亡くなった方々、それこそ司馬さんの表現するように人生の総体、全体、その総体がそれぞれのまちに詰まっている歴史の記憶を、形としてまち中に表していくことが非常に大事である。松山のまちは、1945 年の戦争の際、アメリカ軍による大空襲で、明治、大正期の建物、佇まいというものがほとんど焼失してしまった。しかし、残されている記憶、記録に基づいて、まちの一角や当時の面影を復元していくことは必要なことだと思う。イタリアのフィレンツェというまちの一角は 13～14 世紀、いわゆる中世の佇まいがあるが、当時のまちがそのまま残ったものではない。そこでもさまざまな動乱や第二次世界大戦の戦禍で街並みはほとんど無くなった所が多いのだが、フィレンツェは「中世のまちをつくっていきましょう」ということで、そのような区域が広がっていっている。当然これは行政の命令で一気に出来るものではない。その土地の人たちが愛着を持ちながら、過ぎ去った一つの歴史、その時代のまちをつくっていく、参加していくことが必要である。

松山と姉妹都市関係を結んでいる、ドイツのフライブルクという小さなまちがある。人口は二十数万の都

市だが、このまちも戦争の被害を受けていて、戦後は工業地帯になり、排気ガスが酸性雨となり降ってきたことで、森が全て枯れてしまったという歴史がある。このフライブルクというまちは、循環線路のようになっている路面電車の中心部には自動車を入れず、その外側にパーキングをつくり、中は電車か歩くか自転車で移動する、そのような原則を住民たちが中心となってつくっている。さらに、通りに面している家々がその通りの管理をすることになっている。例えば、落ち葉や雪が降り積もったときにはそこを整備し、掃除をする、それを住民たちが責任を持って行っている。だから、仮に、除雪をしないで誰かが転んでけがをした場合、その賠償責任を負うのはその住人ということになる。そういう条例をつくって住みやすいまちづくりに取り組んでいる。酸性雨のあった時代を考えると見違えるように良い、非常に住みやすい、魅力的なまちになっている。こういう歴史の記憶を一つのコワークとして、住民も参加していくという仕組みをつくる必要があると思う。

日本の場合、官側と住民の協力関係はなかなかつくれないので非常に難しいと言えるかもしれないが、それは改めていく努力が必要である。松山でも住民側と官側との協力でまちを住みやすく、良くしていくという動きが、少しずつですが始まったようである。そういう動きが広がり積み重なっていくならば、水、緑、散歩道、そして歴史の記憶、それが結びついた形でまち並みが整えられていく。住みやすいまちは、訪問者もそれを感じ取り、多くの方はリピーターとなって何度も訪ねてくれるといった良い循環が生まれる。

松山のまち､その歴史の記憶の中できちんとした形に具現化する必要があるのが愚陀仏庵（ぐだぶつあん）である。第二次世界大戦の戦災で愚陀仏庵はきれいさっぱり焼けてしまったが、元は二番町という松山のまちの中心部にあったようだ。当時の建物があった場所は繁華街の一角で現在駐車場となっている。坂の上の雲ミュージアムの少し上に萬翠荘（ばんすいそう）という、松山藩のお殿様だった久松さんのつくった大正時代のフランスの建物がある。その裏側に、30 年ほど前に愚陀仏庵という名前で建物がつくられていましたが、2010 年の大雨でそれは壊され完全に流れてしまいました。松山の人たちも、よそから来られる多くの人たちも、子規と漱石が一緒に暮らしていたこの愚陀仏庵が、松山城のふもとの山の中に前からあったと錯覚してしまっていて、実際それは違っているわけですが、「文豪の二人がさすがにこんな静かな所に暮らしていたのですね」と思ってしまっている。そこで、愚陀仏庵が流出した後、現在駐車場になっている跡地に復元すべきという声が松山でも起こり、署名も行ったが、残念ながら行政側を動かす力にはならなかった。行政側が二番町の元の場所につくるのが不適当と言っている一つの理由として、個人の所有になっているその土地を買い取るには 2 億数千万のお金が必要になってくるということがある。復元にはそのような壁はあるが、私はこの愚陀仏庵は小さくとも重要な建物であると思っています。

道後にある子規記念博物館には、この愚陀仏庵の 1 階部分の部屋が再現されている。明治 28 年、漱石と子規が共に 28 歳の時、夏目漱石が松山中学の英語教師として少し前に松山へ来て、この愚陀仏庵という下宿に住んでいました。子規は日清戦争に従軍し遼東（りょうとう）半島に渡る途中の船上で多量の血を吐き、神戸須磨の病院で療養をしていた。そこで漱石は子規に対して松山に来て療養したらどうかと手紙を書き、それに従って子規は松山に帰って来た。当時、子規は母の八重さんや妹の律（りつ）さんをすでに東京に呼んでいて、松山に家は無かったので漱石の下宿に転がり込み、8 月の終わりから 10 月の半ばまで 52 日間と言われているが、漱石が 2 階、子規が 1 階に一緒に暮らした。そして松風会と言う若者たちの俳句の集まりで盛んに句会を催している。このように 28 歳以降の俳句の革新を果たしていく子規と、『吾輩は猫である』以降、日本における近代小説の基を築いた漱石とが一つ屋根の下に暮らした。

ただ、残念なことに子規と漱石は、離れているときには頻繁に手紙のやり取りをしていますが、一緒に暮らしたわけですから手紙のやり取りは無く、子規と漱石がどういう会話を交わしたかについては分からない

部分が多い。それでも、色々総合して考えると、子規は決して俳句だけをつくっていたのではないということが言える。司馬遼太郎さんが子規を好きだという一番の理由は、現在私たちが使っている文章、日本語の基礎を子規がつくったからである。漱石たちがそこに参加して現代日本語、文章語の礎をつくったということで、子規を深く評価している。子規は決して俳句だけをつくっていたわけではない。東京に出た 16 歳の時には、日本語を回復すべきだという非常に短い文章を書き残している。そのあと彼は小説も書き、色々な試みをしている。

愚陀仏庵で二人が暮らしたその後、子規は病が重くなっていった。全貌はまだよく分からないのですが、日本語で『ああ無情』と翻訳されている、『レ・ミゼラブル』というユゴーの有名な小説を、子規はフランス語ではなく英語に翻訳されたものを入手し、全部を読んだようだ。そして、年始に子規庵に訪ねてくる佐藤紅緑（さとうこうろく）など若い人たちに対し、『レ・ミゼラブル』の内容について何度か講義をしています。恐らく明治 30 年ぐらいにこの小説を子規が自ら翻訳している。この翻訳は残念なことに 400 字詰め原稿用紙で 4~5 枚しか残っていないが、その文章は当時として驚くほどの現代日本語だった。現代に書かれた文章とほとんど変わりがないことは本当に驚くべきことだ。子規は色々な小説を書き、和歌、漢詩、俳句もつくったが、どのように文章を表現するかということについて彼自身が色々な形で試み、そして深く考えていった。この原点となるのは、愚陀仏庵で子規と漱石が二人で暮らしたこの時代であるに違いないと私は思っている。従って、私たちが恩恵を受けている現代日本語の礎をこの二人が築いたのであれば、日本全体にとっても非常に重要な意味を持った歴史の記憶であるこの愚陀仏庵を二番町の元の場所につくるべきだと私自身は思っている。

愚陀仏庵を二番町に再建するという案は残念ながらまだ具体化してはいないが、いずれそういう方向になっていくのではないか、ぜひそうなってほしいと思っている。つい最近、東京の新宿に漱石山房が 9 月に復元して公開されたが、子規と漱石が明治に果たした役割の大きさについて考えると、この愚陀仏庵を再建するのが松山にとっても一番大事なこれからの仕事になっていくと思う。愚陀仏庵を含めた松山の歴史の記憶というものを、まちの色々なところに形あるものとしてつくっていく、そしてそれが水と緑を伴った散歩道となり、松山の中をゆっくり歩ける。歩きながら歴史の記憶を確認することができるようになった松山は、見違えるように住みよい良いまちになることは確実だと私は思っている。

今日申し上げたような、水、緑、まち中の散歩道、歴史の記憶、この要素を松山だけではなくて、世界の全てと言って良いと思っている。それらを具体的につくり上げていくことが、より良く暮らしていくために一番必要なことだと思っている。松山を含めて色々な所でそのような働き、動きというものが出てきて、それが具体的な形になっていってほしいと願っているところだ。

本日、「坂の上の雲のまち松山を目指して」というテーマでお話をさせていただきましたが、やはりこれはまだ形成途中の話だと思う。この、「坂の上の雲のまち松山」の方向というのは間違いではなく、正しいことだと思う。それがさらに提唱、発展することを願うばかりである。

法人管理事務運営部会

「情報交換会」

○昼食から 100 分に渡って教育情報交換会行った。午前中の講演を受けての「災害リスクと学校・地域の防災対策」「サイバーセキュリティ　安心安全な教育環境の確保」の 2 点と、事前に愛媛県の各学校にとったアンケートから選ばれた「事務の効率化・省力化への取り組みについて」「事務組織と教員組織の相互理解・一体化への取り組み」の 2 点についての計 4 つのテーマについて主に話し合われた。積極的な情報の交換と参加者同士の交流が深まり、有意義な時間となった。

各テーマについて、以下のような意見が出たので参考にされたい。

①災害リスクと学校・地域の防災対策

・避難訓練のありかた
・ルートの確保が必要。
・多い所では年 3 回実施。
・生徒を地区別に分け実施。
・学年別に実施。
・地域と連携して実施。
・予告なしでの実施。
・備蓄について
・全生徒・教員のための備蓄品を購入・準備（3 日分）。
・備蓄なし（複数校）。
・3 日分の水を確保。
・トイレは確保できていない学校がほとんど。
・入学時に水・乾パンを購入→卒業時に返還。
・避難場所に指定されていても一般の人の分の備蓄を用意する予算が足りない。
・地域と連携して学校の敷地内に地域の備蓄倉庫を設置。
・保管場所がない。またはどこに保管すべきなのか分からない。
・松山市…発電機・簡易トイレを提供→数が不足
・避難所に指定されていてもマニュアルがない。誰が管理者になるのかも不明。
・避難場所になっているが、生徒だけでなく、老人や要介護者の移動が必要。学校だけでは対応ができない。
・耐震工事は済ませたが、避難用の別棟を建てる等の費用はない。
・耐震工事などが全額学校負担。
・学校により乳幼児～専門学校を併設。災害時どう対応すれば良いか分からない。
（特に乳幼児の引き渡しなど）

・通学路の確認をしている学校が少ない。
・台風・津波などではスクールバスのルートを変更している。
・災害時には井戸を利用。自家発電機も用意している。（ライフラインの確保）
・遠方からの通いの生徒の帰宅の問題。（帰宅できるのか。帰宅させて良いのか。）
・マニュアルを作成。保護者に配布している。
・被災時、また訓練時の携帯電話の扱いをどうすべきか。（携帯電話自体の扱いが各校異なる）
・安全マニュアルに J アラートを入れるべきかどうか。
※地域によって危機感・対策が全く違う。行政の補助も危機感のある地域ではあるが、全くない所が多い。

②サイバーセキュリティ　安心安全な教育環境の確保
・ICT について
・ICT の導入進む。しかし、使用する教員しない教員に分かれるので意識に差。
・ICT は限られたコースのみの使用になっている。
・全教室にスクリーンとプロジェクターの設置。（セキュリティまでは意識していなかった）
・被害
・生徒の USB メモリからウィルスに感染。
・C クライアントにしていてもサーバーが感染。ランサムウェアから身代金（10 万円程度）要求あり。払わず、専門業者にできるものを復元してもらう（100 万程かかった）。
・対策
・学校管理タブレットには監視アプリを入れる。
・神奈川県では、私学 82 校にアドレス配布。一括した情報管理。全てに Wi-Fi 環境設置。専門的な知識を持った事務員の雇用。
・ネットワークにつなぐものとつながないものをしっかり区別。
・情報委員会を設置。
・サーバーの中でデータ管理。遠隔監視でサーバーの管理会社がサポート。
・クラウド型のウィルスバスターを導入。（導入後感染なし）
・ウィルスバスターと法人契約。
・現状
・USB メモリ・個人用パソコンなど、各自で用意・管理している学校がほとんど。
・対応が遅れがち。最新のものには対策ができていない。
・仕事の効率を優先させ、危機管理ができていない。

③事務の効率化・省力化への取り組みについて
・入試処理が大変なので web 出願を導入した。
・事務を中心に一人一台タブレットを支給。
・保護者への行事案内・校納金・成績・出欠連絡を一括管理。保護者・生徒にそれぞれアドレスを配布し利用。（卒業後も利用可能）
・業務の棚卸をし、整理。

・会議の回数を減らし、互いが業務内容のすり合わせを行う。
・「働き方改革」と銘打って推進中。
・時間を決め電気を落す。NO 部活 DAY を設ける。
・勤務体制の見直しの為に「ジョブローテーション」を実施。無駄を見つけ業務の作り変え。
・「ジョブローテーション」は異動のない私立だからこそできる。育休・産休にも対応しやすい。
・生徒数減は職員数減につながる。少子化の中、効率化は急務である。
・校内ＬＡＮの導入はペーパーレス・タイムレスにつながる。
・データを入れておき、教員は配布されたタブレットで確認。

④事務組織と教員組織の相互理解・一体化への取り組み

・校納金・就学支援金・日本学生機構奨学金等の時期により忙しくなる仕事については生徒・保護者から集めるため、教員との連携が要。システムの構築が必要。
・教員との話し合いの場（交流ではなく意見交換など）があまりない。
・職員会議に出席。（事務方からは代表者のみの場合が多い。交代しながら数名ずつでも参加すべきでは。学校で起きている事柄・問題の意識の共有化が図れる。）
・アナログではあるが、やはり相互に足を運び、顔を合わせて話し合うことが必要。
・教員の仕事内容をこなす事務もいる。
・事務が総務部と経理に分かれている。仕事の共有化を図っている。

⑤その他

・「教務事務」の導入が公立校では進んでいる。私学でも検討できるのでは。教員の負担減につなげることができる。
・私学は教員の労働時間超過が課題。働き方・意識を変えるべき。
・「落雷」への対策は各校どうなっているか。
・保険に必ず入る。（保険料高い・復帰までの間、エアコン・パソコン等しばらく止まってしまう。）
・避雷計の設置（現在の技術では完璧ではない）
・スクールバスの運用はどうしているか。
・バスは学校所有がほとんど。（購入またはリース）
・運転士も学校職員として雇っている所が多い。
・リスク回避のため、バスは自前だが運営（運転士含む）はバス会社に依頼。（代金はかかる）
・通学用のスクールバス以外にも学校のバスは必要。運営は難しい。
・採算が取れず大きく赤字であるため、経営の負担となっている。良い案はないか。

（まとめ　済美高等学校　教諭　　門　田　尚　明）

法人管理事務運営部会　実践発表

「キャリア教育を通した震災学習の取り組み」

済美高等学校　キャリア教育課長

髙　市　裕　子

１．済美高等学校の概要

本日は、本校の震災学習につきまして、キャリア教育や被災地との交流などをご紹介しながらお話をいたします。

済美高等学校は、1901 年に女子校として創立し、100 周年を迎えた 2001 年に男女共学となりました。校訓は「やればできる」、進学の済美・スポーツの済美・文化芸術の済美の 3 つをスローガンとしています。全校生徒は約 1560 名。それぞれが、進路目標に合わせて多くのコースに在籍しています。進学に向けた普通科特進コースには音楽専攻やスポーツ科学コース、女子だけの食物科学コースや情報・商業コースなどがあり、全国的にも数少ない美術科も設置しています。

さて、本校の 3 つのスローガン、1 つ目は進学についてです。本校は入学してくる生徒の 9 割が進学します。国公立大学 100 名合格を目標に、確かな学力をつけ、進学実績を残しています。2 つ目はスポーツです。先日まで愛媛で国体が開催されましたが、本校はスポーツも盛んで、多くの競技で全国大会を目指しています。特に、この夏の甲子園では、野球部がベスト 16、満塁ホームランに満塁ホームランで反撃した熱戦の様子は、ご記憶にある方もおられるかもしれません。また、3 つ目の文化芸術活動には、学校全体で力を入れており、毎年 3 月にはその集大成として文化芸術発表会を開催しています。

２．キャリア教育への取り組み

近年、「キャリア教育」の重要性がクローズアップされていますが、「生き方教育」ともいわれているこのキャリア教育に、本校が本格的に取り組み始めて 10 年以上になります。下の図は、その全体像です。日々の授業以外にも、インターンシップやボランティアなどの様々な学びを通して、生徒自身にたくましく生きていく力をつけて欲しいと考えています。その中心となるのが、年間 50 回を超えるキャリア教育講座です。これは、大学や企業から先生方をお招きして開講しているもので、その意図から「進路に向けた講座」と「生きていく力になる講座」の 2 つに分類しています。小学校・中学校を経て高校生となった生徒たちにとって、卒業後の進路選択は切実な課題です。各コースそれぞれの「進路に向けた講座」を開講する一方で、就職・進学という目の前のことだけを目標とするのではなく、茶道に学ぶ日常生活のマナー、ストレス社会をどう生きるかなど、将来に向けて生徒の「生きていく力になる講座」の開発にも力を入れています。平成 19 年度より毎年の取り組みを報告書としてまとめており、すでに 10 冊を数えています。

３．被災地の高校との交流を通した震災学習

2011 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分、東日本大震災が発生しました。私たちは、連日メディアによってその甚大な被害の様子を目にしました。

生徒たちは、震災直後から、今自分たちに何ができるかを考え、生徒会を中心に募金活動や東北の物産販売などを熱心に行いました。そしてもっと何かできないかと考えるのですが、残念ながらそれ以外のことは思いつきませんでした。そして、そのときの熱い思いは、いつの間にか日々の生活の中に埋もれて風化してしまうのではないかという危惧を抱いていました。

このような状況に、私たち学校は今こそ「生きていく力になる」キャリア教育として、震災学習に取り組まなければならないと思いました。しかもそれは、決して単発的なものではなく、継続した学びでなければなりません。そう考えると、どういう形で取り組めば良いのか非常に難しく、なかなか手をつけられずにいました。

そんなとき、宮城県仙台市にある東北高校から、修学旅行の行程で済美高校を訪問したいという連絡をいただきました。さらに、翌年には、愛媛県の「被災地の学校・助成事業」の一環で、宮城県気仙沼市から東陵高校の生徒さんをお招きすることになりました。こうして被災地の 2 つの高校との交流が始まりました。東北高校が本校を訪問先として選んで下さったのは、2004 年ダルビッシュ投手を擁する東北高校野球部と創部 2 年目の本校野球部の甲子園での対戦というご縁でした。用意してきた資料を使って、震災の体験を話していただきましたが、同じ高校生からじかに聞くというこの体験は、私たち大人が思っている以上に生徒の心に響いたようです。東北高校さんは、昨年も来ていただきましたが、その際には事前に Skype を使ったやりとりをしていましたので、実際に顔を合わせたときには、距離を感じないとても良い交流になりました。

また、東陵高校さんには、「津波てんでんこ」と題して気仙沼の現状について話していただきました。「てんでんこ」とは、てんでばらばらにという方言で、津波の時は家族さえ構わず 1 人でも高台に走って逃げろという意味です。過去何度も津波の被害にあってきた三陸地方では、家族や集落の全滅を防ぐためにそう語り継がれてきたそうです。来校した生徒さんの中には、津波で家族を亡くされた方もおり、同じ高校生がたくましく頑張っている姿が全校生徒の心に残りました。

この両校との交流で学んだことを、それぞれ 2013・2014 年度の文化芸術発表会において全校で共有しました。この交流を大切にしたいという思いから、済美高校では、毎年、東日本大震災が発生した 3 月 11 日に文化芸術発表会を行うことになり、全校生徒・教職員で震災について考える日にしています。震災が発生した午後 2 時 46 分には黙祷をささげ、復興応援ソングである「花は咲く」を全員で合唱しています。

この発表会の終了直後、何名かの生徒が駆け寄ってきて、「やっぱり実際に行ってみたい。なんとか行くことはできないのか」と訴えました。その場で即答はできませんでしたが、生徒たちの思いを何とかしてやりたいと校内で検討し、代表何名かを派遣しようということになり、全校生徒から募集しました。代表になるには、なぜ志望したのか、被災地で何を学びたいのかを書いた志望理由書の提出と事前準備や全校生徒への報告も条件にしましたので、どのくらいの希望者が出るか未知数でしたが、その思いがびっしり書かれた志望理由書が 58 枚も提出されました。これを全部読み、その後の面接にもかなりの時間を要しました。

こうして、選ばれた 4 名の生徒が 2015 年 11 月上旬に宮城県気仙沼市を訪問しました。このとき既に震災から 4 年半が経過していましたが、まだまだ復興の基礎である嵩上げ工事のためのトラック、ダンプカーがどんどん行き交う状況に大きな衝撃を受けた訪問でした。そのときの様子は最後にご覧いただこうと思います。このように 2013 年から 16 年にかけて、高校生との交流を通した震災学習を行ってきました。これらのことで本校の生徒にどのような変化が見られたのでしょうか。

４．震災学習を通した生徒の変容　　～学びの広がり～

昨年、東北高校の 2 度目の来校が決まったとき、交流会に向けて、生徒たちが済美生の防災意識についてのアンケートを行っていました。マグニチュードと震度の違いや芸予地震を知っているかどうか、家の家具の固定をしているか、非常用持ち出し袋を準備しているかなどの項目です。その結果は、基本的な知識はややあるものの、具体的に行動を起こすということにはつながっていないというものでした。アンケートを行った生徒たちは、済美生はもう少し意識が高いだろうと思っていたようで、この意外な結果に、やはり災害の少ない瀬戸内という地域性だろうか、危機感を持ち続けるというのは本当に難しい、などと感想をもらしていました。その後、メンバーで防災センターを訪問するなど、アンケート結果も含め、意識向上のための内容等をまとめて「震災学習新聞」を発行し、全校生徒への啓発を行ってくれました。

しかし、本当に生徒の変化はこれだけなのか。アンケートの数値には表れていないものもあるのではないかという思いから、学校全体の生徒の様子を今一度振り返り見つめ直してみました。すると、少しずつですがこれまでの学びに広がりが見えてきました。

その 1 つが本校の 2 年生が全員で取り組む課題研究です。これは、自分の興味のある事柄について探究するもので、テーマには全く制約がありませんので、「女子高生の好む髪型とその傾向について」「ホラー映画に見る宗教の違い」「色鉛筆の可能性」など毎年ユニークなテーマが登場します。震災学習を始めた 2013 年以降のテーマを調べてみますと、東日本大震災・南海トラフ地震・原子力発電に関するものが増えており、「Google Earth を使って避難所マップを作ろう」など内容にも具体性が見えます。

また、この課題研究以外にも、日々の授業や学科・コース、あるいは部活動・委員会活動などにおいても、同様の広がりを見ることができました。では、その様子を、震災学習を始めた 2013 年から今年まで、順を追ってご紹介したいと思います。

○2013 年「高校生が考える災害時の救助活動」（自然科学部）

空き缶サイズの人工衛星を作りました。パラシュートをつけて打ち上げた空き缶人工衛星は、音を出しながら落下します。拾った被災者はそこから自分の位置情報をもらい、最も近くて安全な避難所へ行けるというものです。

○2014 年～15 年「プロジェクト D」（食物科学コース）

プロジェクト D というボランティアに参加しました。D はドングリの D です。被災地が元の豊かな生態系を取り戻すには、何百万本もの苗木を育てなければなりません。本校の校庭で岩手県のどんぐりを育て、1 年半後に大きくなった苗木を岩手へ返しました。

○2015 年「絵本・ひまわりのおか」（国語科授業）

この絵本は、震災で子供を亡くされたお母さんたちが作ったものです。購入するとその一部が義捐金として被災地に寄付されます。国語科の教員が授業の中でこれを取り上げ、声に出して読みつなぐ群読という形で学習し、東陵高校の生徒さんに気持ちを伝えました。

○2014 年～「松山市防災センター」（全校有志）

校内の防災リーダーとして毎年訪問し、全校生徒への啓発のために学習しています。

○2015 年～「松山まつり・野球拳おどり」（全校有志）

松山では、毎年 8 月に野球拳おどりが開催されます。高知のよさこいや徳島の阿波踊りと同様、松山の夏の風物詩です。全校から募集した総勢 150 名で、「頑張れニッポン！気仙沼！」を旗印に 2015 年から参加し、準優勝や団体賞をいただいています。

○2016 年「大切な命と多くの人との出会い」（美術科）

各自が作った筆を使って、命をイメージしたドローイングとパフォーマンスで、2m×10m の大作を完成させました。

○2017 年「つまようじタワー・耐震コンテスト」（特進理系コース）

昨年大きな地震に見舞われた熊本県で開かれた「つまようじタワー・耐震コンテスト」に挑戦しました。つまようじで作ったタワーに圧力や振動を与え、その強度を競うものです。参加 60 チーム中 5 位という結果でした。

○2017 年「誰にでもできる防災食作り」（食物科学コース）

夏休みの校庭で、校内の廃材を集め、虫眼鏡で火をおこしたり鍋の代わりに空き缶で調理をしたりと、災害時の防災食づくりについて熱心に研究していました。

このようにキャリア教育講座など、生徒に感じ考える機会を提供することで、少しずつではありますが、その学びが広がりを見せ、本校のキャリア教育が目指している「たくましく生きるための力」になってきています。

５．震災学習から次のキャリア教育へ

ここで、もう一度震災学習について考えてみますと、それはまず災害そのものを学び、被災地のために何をすれば良いかを考えることです。しかし、そこで終わらせず、生徒が学び得たことを、将来、身に起こるかもしれない様々な困難に活かせるよう支援する、それが震災学習を通した次のキャリア教育であると思っています。高校生活 3 年間でどれだけのことを生徒に伝え、考えさせるか。本校の震災学習はまだ 5 年目ですが、教育の場である学校としてこれからも継続していかなければと思います。

最後に、話の途中にありました、気仙沼を訪問した時の様子をご覧いただいて発表を終わります。かねてより本校の震災学習を取材していた NHK 松山放送局が現地へ同行し、全国ニュースとして放送されたものです。

写真は「文化芸術発表会」の様子
毎年 3 月 11 日に開催
上段　左：「花は咲く」の大合唱
右：課題研究発表
下段　左：気仙沼視察団による報告

法人管理事務運営部会

「総　括」

済美高等学校　副校長
永　井　康　博

今回の法人管理事務運営部会は、「学校を取り巻くリスクとその対応～坂の上の雲のまちからの発信～」をテーマとして実施しました。

講演Ⅰでは兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科准教授の紅谷昇平先生より、「災害リスクと学校・地域の防災対策」と題して講演をいただきました。近年だけでも、東日本大震災、熊本地震と大地震が相次いで起こり、多くの尊い人命が奪われ、大きな被害が発生した。紅谷先生は講演の中で、きちんと準備をしておけば、地震・津波の被害を減らすことができると話されました。学校としてもソフト面、ハード面とも、最大限の備えをしなければならないと考えています。

講演Ⅱでは、愛媛大学大学院理工学研究科教授の小林真也先生に「サイバーセキュリティ　安心安全な教育環境の確保」と題して講演をいただき、情報システムマネジメント等の最新事例を数多く教えていただきました。恥ずかしいことですが、不勉強の私には驚きの連続でした。さらにパソコン以外の機能や情報管理の重要性も痛感しました。

情報交換会においては、グループごとに災害マネジメントや情報システムマネジメントに関する問題について、オープンな話し合いを行いました。非常に実りのある情報交換会になったと思っています。

講演Ⅲでは、松山市坂の上の雲ミュージアム初代館長の松原正毅氏に「地方からの情報発信～坂の上の雲を軸としたまちづくり～」と題した講演をいただきました。一地方都市、松山をさらに魅力ある「まち」にするために、行政に様々な提案をされた先生の運動ぶりがうかがえました。地方の学校において、大きなリスク要因になっている生徒の減少の問題に対して、これからどのように取り組んでいけばよいのかのヒントをいただきました。

実践発表においては、済美高等学校キャリア教育課長の髙市裕子先生より「キャリア教育を通した震災学習の取り組み」をテーマとして発表をいただきました。宮城県の高校との交流がきっかけとなり、リスク対応の継続的な震災学習を取り上げた済美高等学校独自のキャリア教育の発表でした。被災地の方々が語った「忘れないで」という言葉の意味の重さを改めて考えさせられるとともに、継続的な震災学習の重要性を再認識させられました。

最後に、ご多忙の中、お越しいただいた講師の先生方に改めて感謝申し上げるとともに、ご参加いただいた先生方の今後のますますのご健勝とご活躍を祈念して、総括とします。

特　色　教　育　部　会

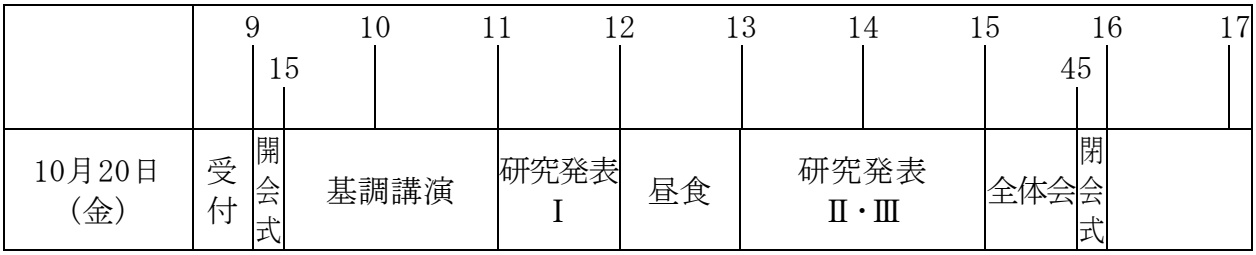
公立学校の私学化が始まって久しい。全国に設置された中等教育学校はその最たるものであるが、学科やコース、或いはカリキュラムの設定などについても私立の実施例を参考にした改変が目立つ。これらのことは、私立学校の先見性の高さを物語るものでもある。

そもそも、私立学校が備えている柔軟でかつスピード感のある対応力は、公立校に比して格段に優れている。したがって、私立学校の役割のひとつには、社会情勢の変遷を的確に捉え、速やかな計画の立案とその実行を積極的に意図することがある。その観点において、私学教育の特色は時代の先取りや時流への即応において出すことが可能であり、今回の基調講演と３つの研究発表はいずれも私学ならではの着想が基盤となっている。当然、私立学校の在り方はその立地環境により大きな影響を受けることから、単純な先行例の模倣では多くの収穫は望めない。しかしながら、発表内容の細部における何点かでも、各校がさらなる新機軸を考える上でのヒントにしていただければ幸いである。

１　研究目標　　私学にこそできる特色教育の実践

２　会　　場　　松山全日空ホテル　本館４階　ダイヤモンドボールルーム（Ⅱ）

３　日　　程



４　内　　容

基調講演

演　題「『知識偏重』の学びから『論理創造型』の思考力へ!!」

講　師　**平　方　邦　行**　　工学院大学附属中学・高等学校　校長

研究発表Ⅰ

テーマ　「高校卒業年の９月に美容師免許状が取得可能となる教育課程」

発表者　**紙　本　　彰**　　今治明徳高等学校　教諭

　　足　立　維　史　　今治明徳高等学校　非常勤講師

研究発表Ⅱ

テーマ　「高大連携教育の具体的な取り組み」

発表者　**横　山　博　文**　　聖カタリナ学園高等学校　教頭

研究発表Ⅲ

テーマ「専門学校と連携したキャリア教育の実践」

発表者　**岡　部　敬　介**　　未来高等学校　教諭

全 体 会

テーマ「私学にこそできる特色教育の実践」

５　**講師・発表者**（順不同）

平　方　邦　行　工学院大学附属中学・高等学校　校長
紙　本　　彰　今治明徳高等学校　教諭
足　立　維　史　今治明徳高等学校　非常勤講師
横　山　博　文　聖カタリナ学園高等学校　教頭
岡　部　敬　介　未来高等学校　教諭

６　**運営委員・指導員**（順不同）

委員長

芳　野　敬　三　聖カタリナ学園高等学校　校長

副委員長

大　嶋　　治　未来高等学校　校長

委員

金　子　秀　樹　未来高等学校　副校長
横　山　博　文　聖カタリナ学園高等学校　教頭
井　上　幸　治　未来高等学校　教頭
山　本　　勇　未来高等学校　教諭
山　本　拓　哉　未来高等学校　教諭
渡　部　友　章　聖カタリナ学園高等学校　教諭
曽我部　勝　博　聖カタリナ学園高等学校　教諭
竹　田　　忍　聖カタリナ学園高等学校　教諭

特色教育部会　基調講演

「『知識偏重』の学びから『論理創造性』の思考力へ!!」

工学院大学附属中学・高等学校　校長

平　方　邦　行

今日は特色教育部会ということでお招きいただいたが、果たして特色教育とあえて言うべきなのかどうか、少し自分の中でまだ整理がついていない。

今、日本の教育制度改革を盛んに行うように文部科学省がいろいろな仕組みをつくっている。これは中央教育審議会が 2014 年の 12 月に文部科学大臣に答申したところから始まっているわけであるが、ただそれよりも、何年も前から財界やいろいろな所で日本の教育はこのままで良いのかという、話が随分あったと思う。そのため今回の教育制度改革は、日本の自己都合で行われているわけではないということを押さえておかないと、誤ってしまう。

いろいろなものを改革していくときのプロジェクトチームができたとき、最初ものすごく壮大な、あるいは理想的なシナリオが描かれ、そこで議論が始まるのだが、だんだんそれを詰めていったときに一人一人の委員の先生方も、「どうしてこんなに自己都合な発言をするのだろう」となっていくのが通常だと思う。それは文部科学省の会議でもその傾向がないわけではないと考えている。しかし、世界から日本の未来を考えて、特に教育に対してどのように考えていくのかということを、絶対に落としてはいけないところだと私は思っている。

本校の中学校生徒が作った映像がある。JICA が主催している国際平和映像祭が毎年行われているが、グループで昨年から参加をしている。

いろいろなことを調べながら平和ということをみんなで考えようと作ったものである。

映像を作った生徒は中学 2 年生である。彼らは国際平和映像祭のファイナル 11 人に選ばれた。中高生はこのグループだけである。実は映画監督等が審査をしていのだが、「中学生が作ったとは思えない」と絶賛されていた。

少し、21 世紀型の教育についてこれから話したい。

授業は双方向でないともう意味がないと思っている。それを行うためには ICT は欠かすことができない。本校は、2015 年から中学 1 年生全員に PC を持ってもらうようにした。ただ、それはもう数年前から決めていて、高校ではタブレットではなく、PC にしていく。というのは、キーボードがないと、いろいろなログを書いたりするときにできない。ただ、タブレットはアプリがあるので、双方の資料で行うには教育がやりやすい面もある。

元に戻るが、「今、日本、あるいは世界ってどうなんだろう？」と考えたほうが良い。近代文化を支えて

きた社会がずっと続いてきたと思う。今までも時代が変わっていく速さはあったと思うが、これからは全く異なる社会が、毎年毎年あっという間に新しい世界が私たちの前に現れてくる。だから、当然過去の経験とか知識をあてはめるようなことで、物事が解決できるということはほぼない。

そういう時代に、今の 10 代の若者たちに対して中学校高等学校の教育は何をすれば良いのか、もちろん小学校からを含めてであるが。

私たちは教育に責任を持っている。これは非常に重要な問題である。何しろ解決できないものがたくさんあり、しかも正解がない。そういうことをきちっと整理しながら仕事をしていかなければいけない。ただし、中学校に入学する子供は 12 歳、高等学校に入学する子供は 15 歳である。20 年たっても、その生徒は 30 代。20 年後の日本、世界がどうなっているか想像がつかない。そうすると今、我々は最低でもどういうことを身につけさせなければいけないかを考え、今まで経験したことのないような未知の局面に出会ったときに的確な判断がきちっとできる力を持った若者を学校教育の中でつくっていかないといけない。「6 年間ひどかったよね」と卒業生から言われてしまったら、これはもう存在意義がない。

グローバル化と言われて久しいと思うが、教育の中のグローバル化、学校説明会でもグローバル化ということが盛んに飛び交うようになってきた。教育教科でも飛び交うことになってきてからまだそんなに経っていない。7、8 年前に言われても、誰もまだピンとこなかったであろう。定義もまちまちであった。そのグローバル化の最終章、最後はどうなるのか生徒と一緒に考えてみたらどうだろうか。

講義をしても、実は私はあまり意味がないと思っている。講義だけでは意味がない。それはもう、私が話しても、皆さんの頭の中にも心の中にも、ほとんど定着しないからである。しかしそれを、今の日本の教育は毎日繰り返している。だからそういうことも含めて生徒と一緒に考えなければいけないと思うのだが、少し、20 世紀型の教育から 21 世紀型の教育へということを整理していきたい。

21 世紀になっても 20 世紀型の教育と言っているのは、20 世紀型の教育が今も続いているからである。特に中心は、講義型。レクチャーである。レクチャーする教育がずっと続いているが、それはもう違う。21 世紀型の教育を、きちっとはっきりと意識しなければいけない。

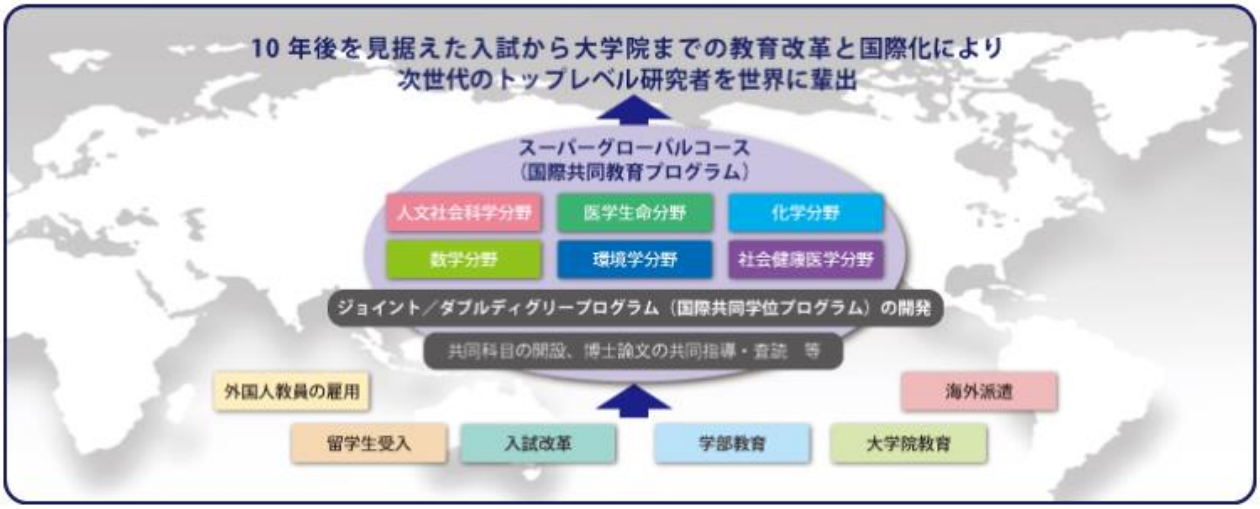
その根底は 20 世紀の影の象徴である第二次世界大戦であろう。第二次世界大戦が、今の世界情勢を引き起こしていることも恐らく間違いない。こういったことが、世界のあらゆる領域に拡散していった。この第二次世界大戦の状況を、21 世紀型教育は担う使命があるのだと思う。この問題を解決できる思考を育成する教育をしなければ、世界に平和は恐らく訪れない。この問題を解決できる思考力を持った子供たちがどんどん大人になっていかなければならない。これが根底にあると思っている。

声をかけていこうというわけではない。2020 年問題も考えないと、間違う。

2020 年というと、教育関係者である皆さんは、ピンと来ると思う。大学入試センター試験の名称が大学入学共通テストに変わり、そこで初めての試験が行われる。高大接続と言っているが、最初に申し上げたように、自己都合の制度改革ではないわけだから、グローバル高大接続と言ったほうがふさわしいのではないか。2020 年が始まりであって、その後もどんどんグローバル高大接続改革は日本の中で進んでいくと見たほうが良い。

特に新しい学習指導要領で学んだ受験生は 2024 年からだから、2024 年以降とその前では、大きく入試の

方程式が変わるだろう。変わらなければ、日本は本当に世界の中では終わるのではないだろうか。今、ものすごく改革をしようとしている大学、すでに着手している大学と、全く動いていない大学に、はっきり二極化している。1 つの例を出すと京都大学ではジャパンゲートウェイ構想というのを打ち上げ、現在進めているようである。大学院教育の国際化、入試改革、外国人教員の雇用促進、留学生の受け入れ、学生の海外派遣、英語による授業の増加、これをやるとして、ジャパンゲートウェイ構想というプログラムを始めている。図式化されて、ホームページには下のような形で出ている、ぜひご覧になって欲しい。



これがどのぐらい進んでいるか、私は分からない。しかし、このようにやろうという人たちがいるということは事実である。京都大学は、特殊入試も大学入試で始めている。このままでは駄目だということははっきり分かっている。

その京都大学がミネルバ大学をとりあげ「大学教育の創造的破壊と未来―世界最先端の次世代大学が仕掛けるエリート教育を探る―」というシンポジウムを開催し、山本秀樹・ミネルバ大学日本事務所代表を招いて講演「ミネルバ大学と高等教育の未来」を行った。今、世界中がミネルバ大学に注目している。ただし、この大学はキャンパスを持っていない。開校したのは 2014 年である。そして世界 7 都市をキャンパスで移動する全寮制の大学である。初年度が 98 カ国から 1 万 1,000 人の応募があって、合格率 2.8%だった。最初から注目を浴びて、レベルの高い大学だが、キャンパスはない。だから経費が 3 分の 1 で済む。

ではどうやって授業を行っているかというと、全部 ICT である。ただし、私たちが知っているような精度の ICT ではない。大変な資金をそこにかけている。分析、複雑系、実証分析、修辞学という 4 つのコンセプトをきちんと掲げてやっている。

世界中をキャンパスに 1 年生のときはサンフランシスコ、2、3 年生はブエノスアイレス、ベルリン、バンガロー、ソウル。4 年生はイスタンブール、ロンドンと移動していく。「世界とつながる学び方というのがあるのだよ」という話をして下さった。

もう世界の中で孤立するのは駄目だ。教育は一番そういうところがあるが、そうではないということを彼は盛んに言っている。

YouTube を見ると、幾つもミネルバ大学の映像がある。

先ほどから一方通行のレクチャーで良くないので「ミネルバ大学のビデオを見て、グローバル時代の私学

教育はどう変化していけば良いのか」を周りの人といろいろ話してもらい、話し合った内容を返していただけると良いのだが、今回は時間がないので、双方向的なやり方を紹介して、次に進みたい。

周りの人といろいろ話すことによって、自分の考えや周りの人の考えがインプットされ、それを発表すると、アウトプットとインプットを交互に行える。全部インプットされてからアウトプットしていくのが、典型的な日本の教育である。だからアウトプットから始めても全然おかしくない。実際に本校はそのようにやっている。最初からアウトプットしている子もいるので、そこはうまくやっていかないといけないが、そのときに重要になってくるのが、後ほど紹介するブルームのタキソノミーである。例えば、紙を広げておいて、この中に書き込んだ情報を統合して、フレーズを周りの人と話し合って、円の中心に書き込んでいくということをやれば、ワークショップになっていく。これまでの話で、私たちは今教育の転換点の一番先端にいるというのはお分かりになると思う。そういう転換点に立ったときに、私立学校は今まで着実に成果を上げてきた。成果を最初から狙っていたわけではないけれど、大きな意味を持って教育にあたってきたと思う。

そう言われてすぐ思いつくのは恐らく、幕末から明治維新にかけて、松下村塾などで学んだ若者たちが日本を引っ張っていく姿であろう。教育はそういうものでなければいけない。価値の定まったものに後からついていくのは、これは公立学校のやることだと思う。今、私学公立化とか言っているが、あんなのは当たり前で、公立学校は新しいものを最初に開発して、先進的なものをやったということは、ここ 150 年の中ではない。だから私立学校は、本当の独立先進性ということは何かということを考えながら教育していかないといけない。

もう AI 社会がすぐそこまできている。3 年前は、テレビのコマーシャルあるいは新聞、様々な所に人工知能という言葉は出てこなかった。私たちが知らないところでは、もっともっと進んでいる。

「東ロボくん」が東大受験を断念したニュースが流れたが、これも、偏差値を 2〜3 上げるために莫大な費用がかかるので、もうそこには意味がない。今は、違うことをやっている。しかし、その研究者に聞くと、進路変更したわけではないということである。

一方、数年前からホーキング博士は、「AI によって人類は滅亡するから早く人間が住める惑星を探してコロニーを造れ」と言っている。これは一番極端な例である。しかし、全く逆の話をしている例もある。AI を活用していくことによって、2035 年までに企業の収益が平均 38%は増収する可能性かあるとコンサルティングファームの Accenture はオーストラリアの Frontier Economics と共同で作成したレポートで発表している。業種によって大きく伸びる業界があると盛んに言っている。AI についての未来予測もどうなるか分からない。

少なくとも、今ある職業はなくなっていくと思うが、なくなったままではない。100 年前から続いている職業は幾つあるのか。職業がなくなったら、新しい職業に誰でもなれる。では新しい職業につけるようなスキルを教育の中で身につければ、仕事がなくなるなというネガティブなものではないかもしれない。

極論する人たちがいるが、決してこれは断定ではない。AI とともに生きるということを私たちは教育の中でやっていかないといけない。財界の人に言わせると、一番大変なのは「産業構造が大転換」だと言っている。AI だけではなく色々なインフラとの関係が新たに必要になり、様々な会社が進め、業界同士や大学との共同研究も進んでいくだろう。産業構造が大転換すると財界の人たちは言っている。これも私たちが想像す

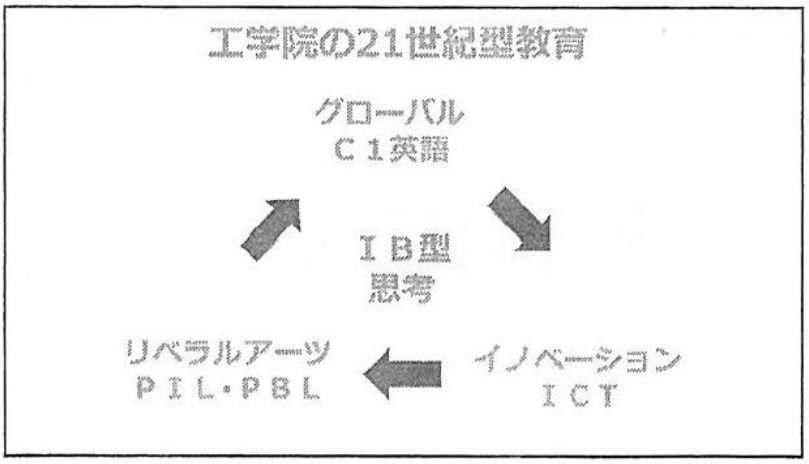
る以上の大転換だと思う。そう構造の変化に対して私立学校はどうするのか。

産業界も教育界も、同じ人間として生きていくわけであるが、本当は教育のほうが先に行かなければいけないはずなのに、科学技術の進歩があまりにも早いため、やむを得ない部分もあるが、後追いになってしまっている。そういう状況なので、世界は教育に相当投資をして、そしてその投資が有効に、きちんと使われているかどうか、成果は上がっているかを確かめながら、欧米の国では教育改革が行われている。

私が工学院大学附属中学・高等学校の校長に就任したのは 2013 年なので、今年、5 年目である。学校改革をしてくれと依頼されて就任したので、最初から改革するということを教職員には話している。

しかし、どんなに早く改革を行おうとしても 1 年目は全体で研修会をして、改革に必要な下地を造らないといけないため、すぐに改革はできない。研修を 1 年間、頻繁に学校の中で行った。そして、どのような教育をするのかということを外に発信しないと改革になっていかないので、1 年研修しながら考えて、2 年目にそれを発信した。2014 年の募集、つまり 2015 年の入試からである。それ以上早くは、私が考えた中ではできなかった。だから 2015 年から今までとは違う生徒募集で、新しいクラスをつくることを世間に発表し、行ってきた。その一つの考え方としては、21 世紀型教育、2013 年にそれに着手をしたということになる。

例えば 21 世紀型の教育の学びというのは、根本的なものは、3 本の柱としてグローバル・イノベーション・リベラルアーツの現代版をやっていこうとすることだと理解して欲しい。その下に C1 英語とか ICT とか PIL・PBL と書いたのは、その代表的なものを書いたので、英語ができればグローバル化と思っているわけでなし、そういうことを言ったこともない。



そして、文部科学省はその数年前から IB に対して、IB200 校計画を立ち上げていた。この 2013 年から日本の中でも IB のワークショップが始まった。それなので、その中心に IB 型思考をきちんと理解して、ワークショップには 40 名ぐらいが参加しているが、こういった形をまず一つの教育の形として進めていく。しかし、IB 校になるということを宣言したわけではない。しかし、IB の精神、考え方は、理解して、支持しても良い内容だと思ったので、図のようにした。

2015 年から新しい募集を行っていったが、その時にはもうグローバル化ということを盛んに言われるようになって久しいので、多文化・多言語を意識した学校・クラスにしていこうとした。そのため、コース名にハイブリッドと冠をつけた。

そして、この 4 月に、3 学年がやっと中学校でそろった。ただ、プレ的には今の高校 1 年生が中学 3 年生くらいから少しずつやり始めていたので、前倒しにやっているインターというクラスを今年はつくった。本当に発展途上ということになる。世界から日本の未来を考えて教育の中でやっていく。そのために、2013 年からやってきたのは、1 つは、双方向授業。これは Peer Instruction Lecture につながっているが、エリッ

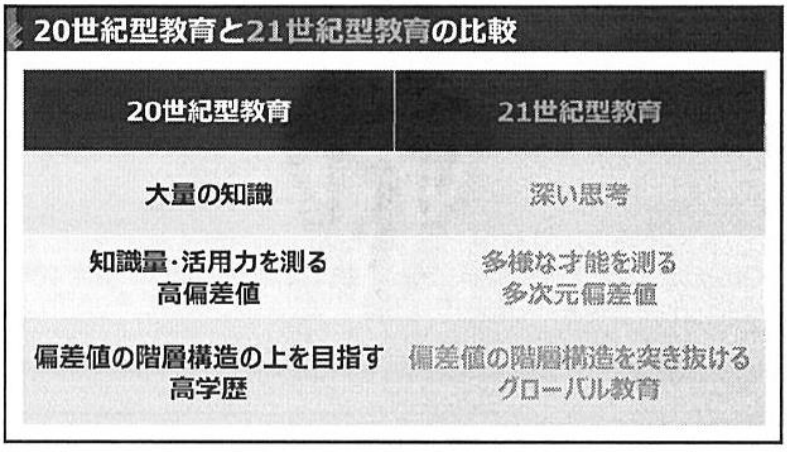
ク・マズールというハーバード大学の物理学者が自分の講義を、知識をただ一方的に伝えるということに疑問を持ち、1995 年にピア・インストラクションと授業法を考え出して、本を出している。私たちは中学生や高校生にはレクチャーも大切であると考えて、L を付け足した。それで PIL となった。一般的には使われていないはずである。実は、2007 年くらいから使っていたが、誰も相手にしなかった。しかし、首都圏の中学入試では、昨年メディアが PIL を使いだした。それはそれで良かったと思うが、Peer Instruction Lecture というように私たちが名付けたことにはそういう意味がある。

PBL は、Project Based Learning を選んでいる。共同的にやる学習のためである。同じ PBL でも、Program Based Learning と言っている人たちもいるが、そことは一線を引いている。また、他の使い方をしている例もあり、同じ PBL でも様々あるのだと思う。

生徒と教師はともに学習者である。これは IB の精神だ。ともすると一方通行の授業の中には、教える側と教わる側、これがはっきり線引きされている。線引きされていても良いが、時には従順と抑圧の関係を教師と生徒の中につくらないと授業が成り立たないようなことをやっている人たちが大勢いるのではないか。それは 40～50 年前であればいざ知らず、そういう世界は日本の社会の中、縦割りの中にもまずない。両親と子供の環境が従順と抑圧などありえるだろうか。しかし、学校の授業現場では、絶対 0 とは言えない。それではもう絶対駄目である。ともに学習者だと言う視点に立ってやっていかないといけない。

ヴィゴツキーの最近接発達領域とブルームのタキソノミーに関しては、真剣に教職員が習った。特に、タキソノミーに関して学んでおかないと、双方向授業、アクティブ・ラーニングがでたらめになると思っているので徹底した。そしてそのためにタキソノミーを元にして思考コードをつくった。同時に、授業と評価とテストの 3 つが一体的に改革できていかないと駄目だと考えている。授業が変わったのにテストが変わっていなければ意味がない。テストが変わったのに評価も変わってないのはおかしい。この 3 つは、今も研究を続けながら改革をしている。

新しく中学入試に採用したのは思考力テストで、英語は CEFR の C1 を目指すことにしたため、英語の入試を実施する。そして来年からは Creativity 入試を実施する。AI 社会を迎えるにあたって、Creativity が相当重要になってくると感じている。

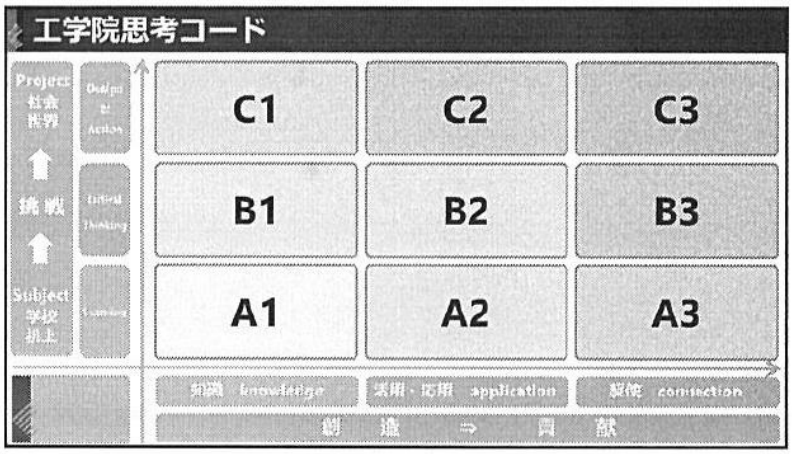


20 世紀型と 21 世紀型の教育の違いを比較してみると、やはり 20 世紀型は大量の知識を自分で獲得する教育で、学校も教師もそうであった。それで、足りていた。しかし、今はもう深い思考を身につけるような取り組みをしていかなければいけない。

小学校 6 年間、中学 3 年間、高校 3 年間。12 年間、教師が答えを知っていて、しかも 1 つ正解を知っていて、そこに毎日導いていく教育訓練を 12 年間朝から晩まで行っている。そうすると、正解があるものに関してはまっしぐらに駆けていく生徒も、答えが先になければ途中で止まってしまう。思考の問題である。そして、今までは、知識の量や活用力を測る、

そして知識の量を 1 でも 2 でも上げるような、そういう教育だったと思う。受験が一番そうかもしれない。しかし、子供たちを見ているといろいろな才能を持っている。例えば中学受験の生徒などを見ても、作文を書かせると凄い文章を書くが知識を測るテストはできない子供たちがいる。いろいろな子供がいるので、一つの指標だけで決めてしまうと、そういった子供もはみんな弾き出されてしまう。だから、多次元的な偏差値をつくっていかなければいけない。

そして、高学歴の先には安定した生活が待っているかというと、そうではない。そうなってくると、偏差値の階層構造を突き抜けるようなグローバル教育をしていけば、本当に自分は生きる道を見つけて、いきいきと生涯にわたって活躍できるそういう人生を歩める。そういうことも見据えていかなくてはいかないのではないか。それができるのが、21 世紀型の双方向での授業だと私たちは考えた。



これは、工学院大学附属中高の思考コードの原型だが。教師が議論をしてチームでつくった。採用して改良した。縦軸と横軸になっていて、9 つの表に区分した。ブルームのタキソノミーを元にしている。

実は昨年から東京では私立の受験のために、日能研、四谷大塚、サピックス、それから首都圏模試という 4 つの模試があるが、首都圏模試から、この方法を使わせてくれと言われた。首都圏模試の中学入試の模擬試験が出ると、テストはみんな、「この問題は B2 です、A1 です」と出ていて、どういう割合でできているかというのは個別の個人表として配られていた。ただし、縦軸と横軸を逆にしている。それは広めてもらう点でも良かったなと思っている。でもこのような中で、教師はどうしても一番簡単な A1 に行きたがる。でも子供たちは、A1 だけをやりたいと思うだろうか。A1 は全然面白くない。だから突然何かを提案という形に見せれば、最初からもう B2 の発想をする子がいる。足し算して引き算してかけ算して割り算したら、もっと高度なことができるというようにみんな思いがちだけれど、そうではない。最初から高度なものに興味を持って、そこから出発しようとする、そういう子供たちがたくさんいるということを、私たちは知らなければいけない。だから塾に行っても、受験は一番基礎的なことまで戻されて始めるから、そういうことに向かない子は嫌になる。

そういう意味でもコードをつくって、しかも教師が、今この単元の授業は B1 なのか A2 なのかということを整理しておかないと、アクティブ・ラーニング、双方向の授業はできない。だからデタラメなアクティブ・ラーニングが行われている。それは思考コードがないからであり、あればそのようなことには絶対にならない。

私たちはこれを大切にして、今もやっている。まだまだ完成はしていない。そういう中で、思考コードの一例を少しだけ紹介したい。例えば、中学生に織田信長について知っていることは何があるか、と投げかけたときに、どこから発想すると考えますか。本能寺の変を知っている子は、そこからするかもしれない。A1

は「織田信長の絵を見て、この人物の名前を答えなさい。」とし、これは見れば分かるわけだから、別に教える必要はない。これは完全に知識である。A2 が、「織田信長が行ったこととして、すばらしい物を選択肢から全て挙げなさい」。そういう授業をやっていれば、これは事実なので、授業の中で少しは双方向で行える。「織田信長が行ったことを全て、年代の古い順に並べなさい。」これも完全に知識を問うている。C3 は、「もし信長が現代の市長になったらどのような政策を取るか、考えてみましょう。信長市長が演説をして、発表しなさい。」これをグループで議論させたらいろいろな話が出てきて、しかも自分が思ってもしない発想をする友達がいるということに気づく。そういうことを毎日やっていくと、必ず創造性、想像力というものは身に付くと思う。そのためにも、思考コードを使ってやっていかなければいけない。しかも、今の思考コードの例でお分かりと思うが、知識がいらないとは誰も言っていない。それどころか知識がないとできない。ただ、知識を集積したら何かできるということとは違う。自分が興味を持ったら、いろいろな知識を習得するように調べていく。つまり、知識の習得の仕方に問題があったと思う。一生懸命英語の単語を書いただけで覚えても、翌日には何割か忘れるのと同じである。

例えば、「スティーブ・ジョブズが歴史の本で信長を知ったとしたら、どのように評価したか、200 字以内で説明しなさい。」という問題があったとすると、スティーブ・ジョブズのこと知らなかったら書けない。そこは知識が必要だ。これを書こうとしたときにスティーブ・ジョブズを知らなかったら、その生徒は調べる。間違っていることも結構あるけれど、iPad を持っているからそこで検索して、調べていく。だから、授業で ICT 機器が必要になってくるということは、もう間違いない。

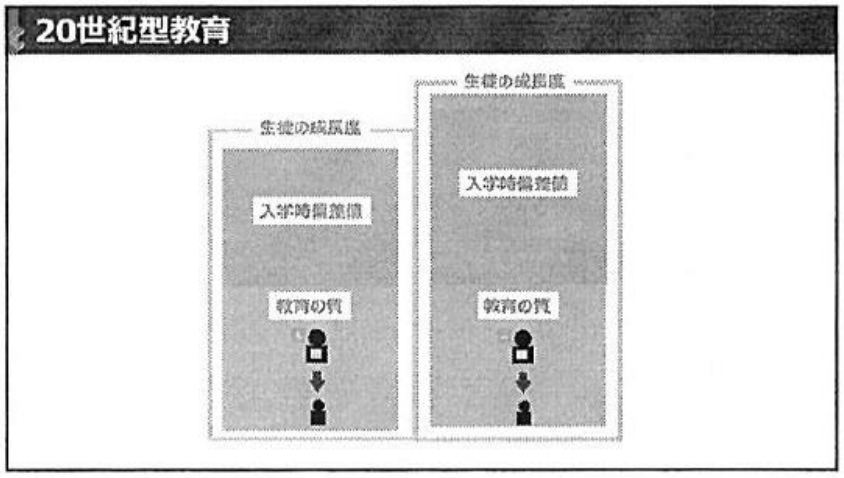
一番間違うといけないことは教育の目標、学習の目標としても良いかもしれないが、あくまでも私たちは、ブルームのタキソノミーを学習の分類だと理解している。日本の著名な教育学者が、これはあたかも学習の分類ではなくて、目標のように訳している。目標でやると観点別評価になる。これは学習の分類だという意識を教員が持つとして思考コードを使っている。

実際にブルームのタキソノミーは 6 段階になっているが、様々な方が付け加えたり修正したりしている。しかし、応用・分析・評価・創造となっている上の 5 と 6 の部分が一番、実は身につけるのに難しい。しかもここが人との大きな差別につながっていく。

ところが今までの学習指導要領は 4 までしかない。明確に 4 までしかない。肝心の 5 と 6 がない。なぜかよく分からない。文部科学省に何度聞いても、はっきり答えない。それで、アクティブ・ラーニングは、まさにレベル 5 とレベル 6 は意味を持つ。記憶や知識にアクティブ・ラーニングをわざわざ入れる必要はない。自分でできるわけだから。だから、タキソノミーを学んでそれを元にして思考コードをつくった。

特に AI 社会がどんどん進行していったときには、AI にできないこと、ここをもっと自分のものにしていく。その 1 つは、現在の考えでは Creativity だと思う。そこを授業で行っていく。

入学試験を受けて学校に入ってきた段階で生徒の偏差値に違いはある。しかし、一方通行型授業では 3 年間、あるいは 6 年間学んでいけば、その偏差値がたまる。入学時の偏差値がそのまま移行して卒業していくということになりかねない。中身はものすごく伸びたと思う生徒は、教師たちにもある。でも本当にそれは伸ばしたのか。もしかしたら全然違う所で、あるいは自分で伸びていったのかもしれない。本当に教育の質を問われて、学校は良質な教育を行った結果、いろいろな子供たちが出てこないといけないと思っている。



ラーニングピラミッドの平均学習定着率で見ると、レクチャー、講義を聴いているだけでは 5%しか伸びない。自分でプレゼンしたり、人に教えたり、そういうことをやっていると定着率はどんどん増えていく。レクチャーだけ、講義だけを朝 1 時間目から 6 時間目まで続けていたら、生徒はどうなるか。自分で考えても、聞いていなかった授業がたくさんある。静かにしていれば教師に叱られない。これを続けて行くと恐らく生徒が全員寝ている風景になる。これは、全然授業に参加していない。

ある生徒が海外に 1 年留学したときに校長に呼ばれて、「あなたは日本では静かにノートを取って授業を聞いていればよかったかもしれませんけれど、うちの学校はちゃんと貢献をしなければなりません。貢献するということは、授業の中で積極的に自分の考えを、手を挙げて述べることです」と最初に言われたというが、日本の学校で転校しても、そのようなことは言われない。そういう違いがもう明かにあって、本当に Creative な力を出していくためには何をしなければいけないのか。それと同時に STEM 教育、サイエンス、テクノロジー、エンジニアリング。そして、アート。これを抱合したような授業でやっていくことがアメリカでは盛んに行われるようになっている。日本ではなかなか進んでいないが、その取っ掛かりとして去年から、私たちは中学生に 3D プリンターなどを使った授業をしている。

担当は大学の先生で大学の授業は講義を受けに来る学生だから、「ここにいる生徒たちはこういうことをやるけれど、やりたい子は集まって下さい」とアナウンスしているので、本当にやりたい子供が集まる。そうすると、興味、関心が全然違う。積極的にやるので、実は大学の先生も喜んでいる。全然一緒にやるのが嫌じゃない。楽しいと言ってくれる。

ですから 21 世紀型の教育は、20 世紀型と比べて、生徒と教師の関係はともに学習者である。その中で本当に教育の質を高めていく。だから、入学時の偏差値は関係ない。もちろん合格者・不合格者がいるので、線引きはあるが、そのためにいろいろな入試を行うようにしている。

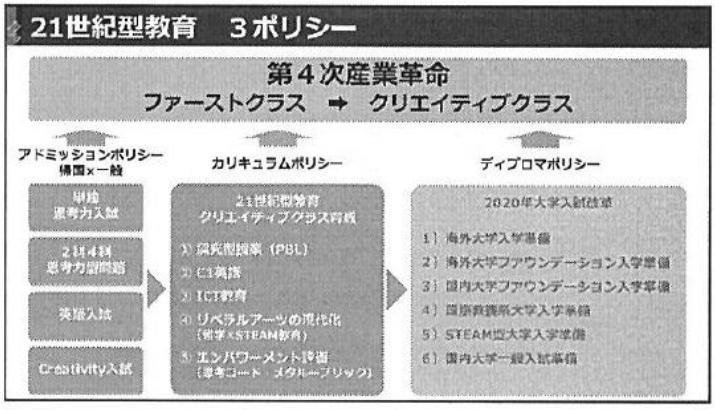
高校生の授業ではスクール形式の座り方はできるだけ避けようとしている。実は、2000 年を過ぎてからヨーロッパ、アジア、アメリカのプレップスクールの授業をたくさん見る機会があったので、見させてもらったけれど、2001 年にベルギーの授業、これは高校 2 年生の微分の授業をやっていたが、そのときには女性の先生が黒板に話をしながら生徒は板書をしていた。しかし、それ以降そういう授業を、少なくともヨーロッパやアメリカで見たことがない。全くそういう座り方はしていないし、そのような授業をやっていない。

正直言って、最初は分からなかった。文化の違いとしか思わなかったが、何年間か見ていくうちに、日本とはちょっと違うのではないかと思い出した。それが 2005 年頃からで、同様の授業を 2006～2007 年から始めた。だから、それで違和感もなく、騒がしくして良い、コミュニケーションして良い、そこには秩序があるコミュニケーションだ。こういう授業を多くやっている。特に中学生は、ほぼ 100%である。

英語教育ではケンブリッジ大学機構のテキストを中学生の頃から使っている。今年から、ケンブリッジのイングリッシュスクールに認定された。ケンブリッジのプレイスメントテストをやり、それで CEFR のレベルで A1 から B2 のクラスを作っている。すでに一部、入学したときに B2 の子供もいるので、A1 から B2 というように 6 段階で分けている。CEFR は EU が統合したときにコミュニケーションスタンド枠をつくらなくてはいけないという事情がありつくられたものだが、これを今、日本の大学入試で使おうとしているし、すでに個別入試では多くの大学が使っている。これを見ると、B2 では絶対に世界へ出て活躍するための言語の習得としては駄目である。普通に社会生活を営むには全然かまわないと思うが、本当に活躍していこうとするなら、「長い文章を理解して内容を把握できる」、「言葉を探しているという印象を与えずに流暢にまた自然に自己表現ができる」、「学問上や職業上の目的で言葉を柔軟かつ効果的に操ることができる」、「複雑な話題について明確でしっかりとした構成の詳細な文章をつくることができる」というのが C1 となっているので、ここまで求めていかないと駄目だと思っている。もちろん高校 3 年生を終わるまでに、全員が C1 にはなかなかなれないと思うが、でも中学生でも C1 になった子供もいるので、そこは目指さないといけない。

今度 CEFR の基準が変わると言われているので、また動きがあると思うが、去年の大学入試を見ると、この B1 でみなし満点の大学がたくさんあった。しかし、来年受験する、現在の高校 3 年生の子供を見ると、私立大学でも B2 でみなし満点というように変わった大学が増えている。今後、すごく難しくなっていくと思うが、学校で何をやらせたら良いのか、あるいはその子供の英語力には何が向いているのか、あるいはこの子供がどこの大学を希望しているのか。1 年生の時には OK だった検定試験を、3 年生の時には外されているかもしれない。だから非常に難しい問題はあるが、現在は図のような感じである。

大学は 3 つのポリシーを出すことが義務化されたが、中学校高等学校にはない。しかし、私たちは 3 つのポリシーを出している。ディプロマポリシーがあって、カリキュラムポリシーを作っている。それに基づいて、どういった力を持った生徒を入学させるのかというアドミッションポリシーをもった入試を作った。



Creativity 入試を実施する。予め 800 字のエッセイを出してもらい、それをもとに面接を行っている。そして、プレゼンテーションを行ってもらう。なにをやっても良い。その中で見極める。勿論思考コードを作っている。

思考力セミナーをやっている。思考力入試を 2014 年からやっているが、いきなりやったのでは大変なので、セミナーをやっている。持続可能な社会を、レゴを使って作って、それを発表しようというセミナーをやった。このセミナーで初めて会った小学校 6 年生で、元々友達じゃないけれども、あっという間にグループの中でいろいろなことをディスカッションして考えている。考えがまとまったら、協同してレゴで都市の形を作って、それを発表するために iPad で写真を撮って、写真を使ってプレゼンテーションを行った。その日に会った子供同士でも本当にちゃんとできる。そういうことで能力を見ていこうとしている。試験の時にはグループではなく一人一人である。

6 年一貫なので、高校も来年からは 4 つのコースに分かれていく。英語で現代社会や文学や哲学をやっている。数学も英語でやっていて、理科も英語である。ただイマージョン率は 36%くらいなので、英語ばかりでやっているというわけではない。

2020 年から大学入学共通テストが始まる、今の中学 3 年生から現小学校 6 年生まで、これが 2023 年まで。そして 2024 年以降は、ここでまた大きく入試の風景が変わるだろうと思っている。

日本の教育はどうなるのか、大変なところにさしかかってくるが、そこを常に前向きに、先進的に切り抜けてきたのは私学教育である。そういう学校が評価されてきたと思う。追従主義は駄目である。価値が定まったものを後から追いかけるのは誰でもできる。それは私立学校の原点ではない。公立学校の私学化と言われるが、それは全く不思議な話で、一番恐れているのは、私立学校の公立化だ。価値の定まった私立学校は、その時点で私立学校としての役割は終わったと私は思っている。

特色教育部会　研究発表Ⅰ

「高校卒業年の９月に美容師免許状が取得可能となる教育課程」

今治明徳高等学校
教諭　紙　本　　彰／非常勤講師　足　立　維　史

１．初めに

本校は、タオル産業と造船産業で有名な愛媛県今治市にある今治明徳学園に属している高等学校で、本校と矢田分校の 2 校がある。他に短期大学と中学校を併設している。本校は明治 39 年に創立以来、昨年度で丁度 110 周年を迎えた、伝統のある学校である。かつては、生徒数が 2,000 名を超える大規模校だったが、現在は本校男子 151 名、女子 132 名の計 283 名という中規模校で、全日制普通科の中に 4 つのコース（進学コース・総合コース・美容コース・チャレンジコース）を設けている。

本日は、その中の「美容コース」においてテーマにもあるように高校を卒業した年の 9 月に美容師免許状が取得できるという、全国でも 8 校ほどしかないと言われる大変特色のあるコースについて説明する。

２．ダブルスクールについて

美容師になるためには、一般には高等学校を卒業して、更に美容専門学校等に 2 年間在学し、所定の単位を履修・習得して、更に美容師国家試験を受験して合格しなければならない。しかし、本校のように高校生でありながら同時に専門学校にも籍を置くという、いわゆる「ダブルスクール」制度により、高等学校を卒業した年に美容師国家試験を受験することが可能となり、18 歳で美容師になることができる。

本校は、香川県高松市にある「専門学校穴吹ビューティカレッジ」とダブルスクールの提携をし、平成 18 年度から美容コースを立ち上げ、今年度の 1 年生で 12 期生となる。

３．教育課程について

まず、「専門学校穴吹ビューティカレッジ」への入学であるが、専門学校との「ダブルスクール」制度は、高校生であることが条件であるので、4 月入学は手続きが間に合わず、よって 10 月に専門学校の通信課程に入学する。そして、高等学校を卒業するのに必要な必修科目・選択科目の履修・習得をしながら、1 年生の 10 月から 3 年生の卒業する年の 9 月まで美容師国家試験の受験に必要な科目を履修・習得する。美容に関する科目と、その時間数は以下の通りである。

＜必修科目＞

・関係法規・制度	10 時間	（0.5 単位相当）
・美容運営管理	10 時間	（0.5 単位相当）
・衛生管理	30 時間	（1 単位相当）
・美容保健	30 時間	（1 単位相当）
・美容物理化学	30 時間	（1 単位相当）
・美容文化論	15 時間	（0.5 単位相当）
・美容技術理論	15 時間	（0.5 単位相当）
・美容実習	450 時間	（13 単位相当）
合　　計	590 時間	（18 単位相当）

※ただし、美容実習については、高校卒業後も国家試験対策の座学と合わせて 7 月まで授業がある。

＜選択科目＞

・ﾄｰﾀﾙﾌｧｯｼｮﾝ	10 時間 （0.5 単位相当）
・美容ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ	10 時間 （0.5 単位相当）
合　　計	20 時間 （1 単位相当）

以上、美容師国家試験の受験に必要な科目の総履修時間数は、610 時間となる。

上記の科目を履修後、それぞれ公益社団法人日本理容美容教育センターにて定められたレポートを期限までに提出し、レポート点数が 60 点以上であれば、その科目が単位修得となる。また、各科目の履修状況は、高校側がひと月毎に「教務日誌」および「出席簿」に記入して「専門学校穴吹ビューティカレッジ」に提出し、履修･習得となる。ちなみに、上記の必修科目には、以下のような教授資格が必要となる。

・関係法規制度…高等学校「公民」の教員免許状を持った教員が指導。

・美容運営管理…美容師の免許を受けた後、3 年以上実務に従事した経験のある者であって、厚生労働大臣の認定した研修の課程を修了した者、もしくは高等学校「公民」の教員免許状を持った教員が指導。

・衛生管理　…美容師の免許を受けた後、3 年以上実務に従事した経験のある者であって、厚生労働大臣の認定した研修の課程を修了した者､もしくは薬剤師の資格を持った者が指導。

・美容保健　…美容師の免許を受けた後、3 年以上実務に従事した経験のある者であって、厚生労働大臣の認定した研修の課程を修了した者､もしくは薬剤師の資格を持った者が指導

・美容物理化学…美容師の免許を受けた後、3 年以上実務に従事した経験のある者であって、厚生労働大臣の認定した研修の課程を修了した者､もしくは高等学校「理科」の教員免許状を持った教員が指導。

・美容文化論　…美容師の免許を受けた後、3 年以上実務に従事した経験のある者であって、厚生労働大臣の認定した研修の課程を修了した者､もしくは高等学校「美術」の教員免許状を持った教員が指導。

・美容技術理論…美容師の免許を受けた後、4 年以上実務に従事した経験のある者であって、厚生労働大臣の認定した研修の課程を修了した者

・美容実習　…美容師の免許を受けた後、4 年以上実務に従事した経験のある者であって、厚生労働大臣の認定した研修の課程を修了した者。

美容コース立ち上げの経緯について

女性 10 歳～14 歳の人口動態統計

2010年	2015年	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
758,167	733,481	705,543	674,277	641,305	607,208	571,583
27,751	25,238	21,917	19,674	18,491	17,505	16,394
29,799	27,640	25,125	21,833	19,606	18,432	17,455
32,857	29,636	27,493	25,014	21,744	19,534	18,363
31,981	30,995	28,508	26,511	24,141	21,002	18,877

男性 10 歳～14 歳の人口動態統計

2010年	2015年	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
673,326	649,981	623,956	595,174	565,098	534,255	503,035
28,777	26,604	23,101	20,739	19,490	18,452	17,281
31,582	28,709	26,500	23,032	20,682	19,446	18,413
34,481	31,678	28,722	26,542	23,073	20,725	19,488
33,886	32,233	30,230	27,462	25,416	22,113	19,876

少子化による生徒数の減少を鑑み、魅力ある学校作りを目指し、四国初の美容コースを誕生させる。ところが、2 期生からたちまち入学生が減少し、打開策として全く新しい考え方で魅力アップに取り組む。

具体的には、教え方を見直し、簡単に続けられるような教材を作り、生徒のやる気を引き出す環境改善に力をそそぐ。また、SMS へ毎週投稿をし続け、6400 リーチを達成し、ついに生徒数の増加、将来的には日本初の高校生美容室を目指す。

明徳高校美容コースの魅力

① 専門学校を卒業するより 1 年 6 ヶ月早く美容師免許が取得可能。将来的には、4 年制(単位制)にしたいと考えている。

メリットとして、在籍日数が増え、1 年間は美容だけに専念できる。

明徳高校美容コースは、美容専門学校通信制(秋入学)と提携し、高校と合わせて 3 年 6 ヶ月在籍。18 歳で美容師免許が取得可能となる。ちなみに、従来の美容専門学校は 2 年間通学し、20 歳で美容師免許を取得する。

② 今治明徳高校での授業時間数と、学費（高校の授業料含まず）は、3 年 6 ヶ月で 1200 時間。穴吹ビューティカレッジに納めるのは約 58 万円。また、美容研修センターに提出するレポート指導とスクーリング指導が 610 時間以上ある。ちなみに、高校を卒業後、美容専門学校に入学した場合、授業時間数と学費(四国地方または近畿地方)は、2 年間で 2010 時間 280 万円～140 万円。

③ 即、戦力になる生徒の育成を目標にかかげる

・美容専門学校よりも高い技術を習得できる。

・ディアルシステム(企業実習 OJT)を進めている。

・放課後、プロフェッショナル部(Academy)で更にレベルアップができる。

※Academy では、CUT・まつ毛エクステの 2 つを行っている。

明徳高校美容コースの 12 年間における動向について

・専門学校のやり方では、高校生には合わない。

・独自システムを構築が必要に。

	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
明徳全校の入学人数							382	361	361	363	333	283
	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期	10期	11期	12期
美容入学数	32	29	30	16	22	24	7	13	14	15	15	21
卒業数	23	22	26	11	20	19	2	8	8	13在学中	13	21
	71.90%	75.90%	86.70%	68.80%	90.90%	79.20%	28.60%	61.50%	57.10%			
受験者数	21	21	19	10	19	13	2	8	7			
	91.30%	95.50%	73.10%	90.90%	95.00%	68.40%	100.00%	100.00%	100.00%	0.00%		
国試技術	20	21	17	8	8	11	1	8	未定			
	95.20%	100.00%	89.50%	80.00%	42.10%	84.60%	50.00%	100.00%	100.00%			
国試筆記合格数	9	12	10	8	11	8	2	5	6			
	42.90%	57.10%	52.60%	80.00%	57.90%	61.50%	100.00%	50.00%	86%			
合格数全国			54.70%	88.90%	60.50%	89.10%	56.00%	89.10%				
明徳美容コースSNS動向						7	211	404	940	1,049	2,357	6,400

４つの問題点を改善

⑴入学数を増やす。

⑵コース変更をする生徒を減らす。

⑶学力の向上。

⑷技術内容の改善をする。(短時間で高成果を得られる)

⑴　入学生を増やす対策として(SNS の活用)

SNS による効果が出始め、問い合わせが増加。また、直接入学の問い合わせが増加。　　※SNS(facebook)…毎週、授業内容を投稿している。

⑵　コース変更生徒を減らす方策

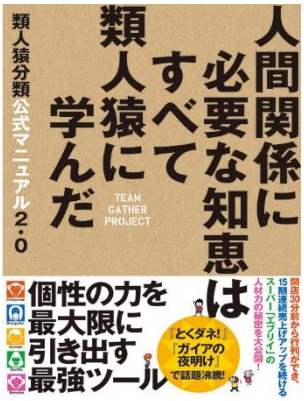
10 期生から、人間関係のセミナーを始める。

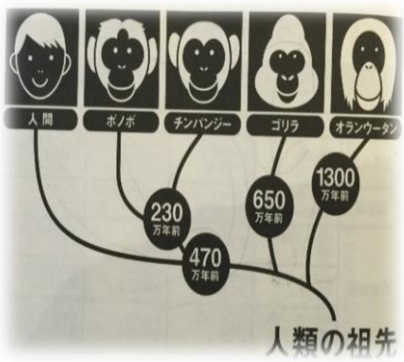
10 期生から、コース変更をする生徒が減ってきた。

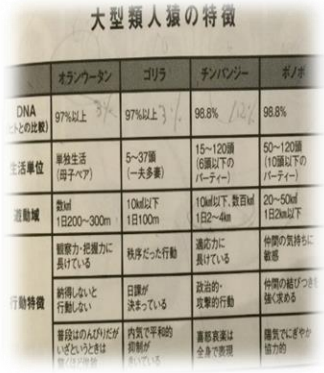
参考書籍「人間関係に必要な知恵は、すべて類人猿に学んだ」

(日本でも、近年企業が導入している。)

(ＴＶ番組「ガイアの夜明け」でも特番あり)







⑶　学力の向上

9 期生から取り組む。

学力の問題における対策(成果)は出てきた。

明徳高校の美容コースは、偏差値が 35～37（D ランク）

ところが、美容師国家試験の合格偏差値は最低でも 42（C ランク）必要。

そこで、明徳高校美容コースの偏差値を 42～47(C ランク)に上げる方策として

①　座学の時間を増やす。(3 年 6 ヶ月間で 500 時間増加)

※座学を増やす為に、実技時間を減らす改善と対策も必要に

②授業中の傾聴力をつける。

③授業中の集中力をアップさせる。

④探求心を強める。（調べる癖を身につける）

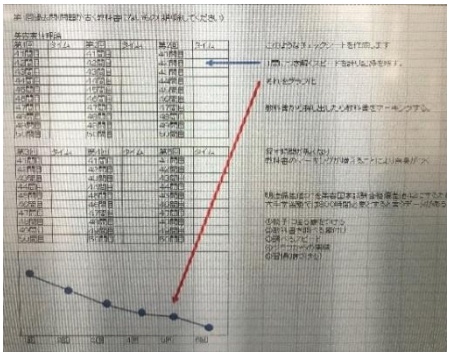
短時間で教える取組（学科編公文式勉強法を活用

①机に 100 分座る癖をつける➡1 人で考える癖付け。

②集中力をアップさせる　　➡問題を解く時間を測る。

③探求心を強める。　　➡調べる癖をつける。

※勉強が苦手な生徒にどうすれば克服できるか徹底指導。



指導シート

⑷技術内容の改善（短時間で高成果）

ワイディング授業 200 時間➡90 時間

※補助線を施す事で 3 ヶ月程早く習得

ウエーブ授業 200 時間➡90 時間

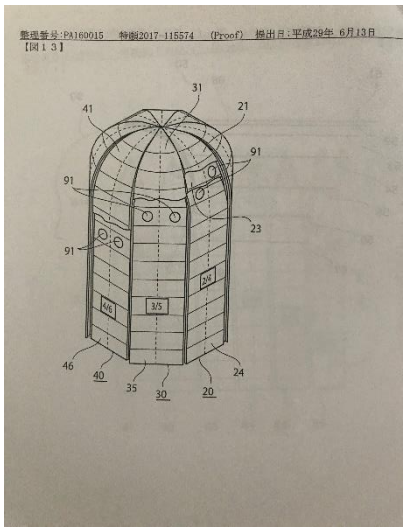
ウエーブ授業 200 時間➡91 時間

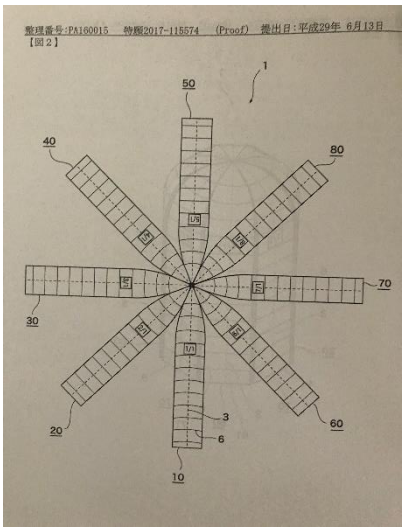
ウエーブ授業 200 時間➡92 時間

ウエーブ授業 200 時間➡93 時間

ルーローCUT(特許)

短時間で、明確に教える事が可能





① 今まで CUT 練習にはお金がかかっていた。人毛カットウイッグだと 3,000 円程。これがルーローペーパーウイッグなら安価で勉強ができる。

② 人工毛と違って、紙なので掃除が簡単で、汚れない。人工毛カットウイッグの毛髪は 0.1 ㎜で、切ると床が汚れる。ルーローペーパーウイッグは横幅 4 ㎝～2 ㎝なので畳の部屋でも練習できる。

③ 8 つの ZONE に別れていて自然に立ち姿勢を覚え理解が進む人工毛カットウイッグでは、正確な立ち位置を覚えるのが難しい。

④ 折り紙の様に使える為、初心者(低学年生)でも安心して取り組める鋏を使わなくても教えられる

⑤ 展開図(これがイメージ出来ると CUT は出来る)自然にイメージが出来るようになる。

⑥ 指導し易い(伝え易い)ので、一人の先生が一度に 20 人の生徒を指導できる。

ＣＵＴを教える量の比較

圧倒的に教えられる量と質が違う

専門学校ＣＵＴ授業

・国家試験レイヤード 1 スタイル

明徳高校美容コース

・ワンレングス 3STYLE

・グラデーションスタイル 12STYLE

・レイヤード 2STYLE

・フロント CUT

合計 18 スタイル

パーマの授業実用的な技術を教える

専門学校ＣＵＴ授業

・国家試験ワイディング

明徳高校美容コース

・ストレートパーマ

・クリープパーマ

・デジタルパーマ

・国家試験ワイディング

明徳高校美容コースのライバル校は、美容専門学校になる。

専門学校より秀でないと勝負に勝てない

専門学校よりも高い技術力

・CUT・パーマ・カラー

即戦力になる人作り

・ディアルシステムで責任感を身につける。

2020 年には学生美容室を作り

美容免許を持っていない方はモデルの施術を、

美容免許取得者はお客さんを(お金をいただく)施術できる環境を整えたいと思う。

在校生が技術を身につけ、仕事ができている状態が一番の実績になり、宣伝にもなる。

夢ある学校創りを続けていきたいと思う。

特色教育部会　研究発表Ⅱ

「高大連携の具体的な取り組み」

聖カタリナ学園高等学校　教頭
横　山　博　文

本校は、1924 年創立のカトリックの女子校としてスタートした。戦中、戦後の学制改革で校名を変更しながら、1968 年、聖カタリナ女子高等学校となった後は、長く地域から愛される女子高校としてその地位を確固たるものとしてきた。学校法人聖カタリナ学園には、現在は大学、短期大学部、高校が 3 校、幼稚園が 5 園、さらには医療、福祉系の機関もある法人に成長したが、その礎は、本校が築いたといえる。創立 90 周年を迎え、将来の学校の未来像を考えた結果、共学化を決定、2016 年より共学に移行し、2 年目である。本校には、普通科・総合学科・看護科の 3 つの学科あるが、共学化をしたのは普通科と総合学科のみであり、看護科は女子のみの募集である。普通科には 2 つのコースが、また、総合学科には 7 つの系列があり、生徒の希望する学びができる仕組みを整えている。

さて、高大連携であるが、平成 24 年度から学科改編によりスタートした総合学科と、普通科のスポーツ進学コースにおいて、取り入れられている。まず、連携の目的であるが、いわゆる Win-Win の関係、すなわち高校と大学にとって、双方がメリットのある内容でなければならないが、次の 4 つがあげられる。まず高校側のメリットとして、「①生徒の学習意欲・進路意識の向上」、「②専門知識の習得」、「③進路保障」、また、大学側のメリットとしては、「④少子化時代における生徒募集の効果」があげられる。また、何より、高大連携により、高校生と大学生がともに学園への帰属意識を高め、生徒・学生のロイヤリティーを高め、満足感を得ることで、地域から必要とされる高校・大学であり続けることができると考えられる。次に連携の経緯であるが、平成 20 年に理事会において、高大連携事業をスタートさせることを決定、翌、平成 21 年に上部組織としての「高大連携計画委員会」が発足、さらにその委員会のもとで実務に携わる「高大連携実務担当者会議」が平成 24 年に発足、現在に至っている。年に 2 回、実務担当者会議が開催され、年間活動計画の策定と実施、実施後の反省および次年度への改善がなされている。

また、肝心の授業における連携は、普通科のスポーツ進学コースと、総合学科の 3 つの系列において、実施されている。まず、普通科のスポーツ進学コースにおける連携では、大学の「健康スポーツ学科」の教員が高校の授業である「トレーニング論」を担当し、スポーツを科学の視点から捉え、筋生理学からエネルギー機構、パワー発揮と伸縮性反射、アイシング効果など、幅広い視点でトレーニングにおける科学的なアプローチを学んでいる。同時に、大学にあるトレーニング施設を使っての実習も行われている。（但し、この普通科における授業連携は、男女共学化によりこのコースに在籍する生徒数の大幅な増加により、昨年度平成 28 年度で一時中断している）総合学科の 3 つの系列における連携は、保育系列における「保育概論」を、「短期大学部保育学科」の教員が、健康福祉系列の「福祉概論」を大学の「社会福祉学科」の教員が、心理コミュニケーション系列の「心理コミュニケーション」の授業を大学の「人間社会学科」の教員がそれぞれ担

当している。この高校の総合学科における系列は、そもそも大学・短期大学部に直結する系列として誕生しており、授業を通じて高校から大学・短期大学部へ進学する生徒を支援する仕組みを構築するとともに、大学・短期大学部の生徒募集につながるよう工夫もされている。

さらに、行事における連携も、年間を通じて多彩である。領域の分類としては、進路関係、広報、イベント、ボランティアの 4 つの分野に集約することができる。まず、進路関係では、総合学科の 1 年生が、6 月に大学を知ることを目的に「大学訪問」を実施している。これは、総合学科における必履修科目である「産業社会と人間」の科目の中で実施している。広報関係では、8 月に、地元松山市で開催される「松山まつり」において、高校生と大学生 100 人余りが踊り連を結成し、松山まつり野球拳踊りにおいて、「聖カタリナ学園連」として出場、本年は優勝するという快挙を成し遂げた。同時に松山まつりの開催期間中、城山公園内で「聖カタリナ学園」ブースを出展し、高校・大学の PR とともに、チャリティーゲームのコーナーを設け、収益金はすべて、松山市の社会福祉協議会に募金する活動を行っている。もう一つ、時期は 6 月から 11 月の間で、愛媛県内では最大の商業施設である「エミフル MASAKI」において、やはり高校・大学の紹介と、それぞれのサークルのステージ発表などを行い、学園の PR に努めている。ボランティアの分野では、7 月に大学で開催される「ボランティアウィーク」への高校生の参加、イベントでは 11 月に開催される大学祭に高校生が参加するなどの交流を図っている。　また、互いに持つ施設の有効活用の観点から、大学にあるトレーニングルーム「サルーテ」および「大学図書館」の利用、高校にある宿泊研修施設「セミナーハウス」の利用が双方できるようにしている。

以上のような連携事業の実務を担当するのが「高大連携実務担当者会議」であるが、年 2 回の開催を通じて、事業の運営と見直しを図っている。メンバーは大学側が学部長、学科長、入試募集委員長と関係者、学生生活委員長と関係者、および事務方からの参加を得ている。高校側からは各 3 科の科長、学年主任、進学課長、授業担当者、行事担当者が参加をしている。事業の運営と、この実務担当者会議を通じての交流を機に、高校と大学の教員同士による交流が深まり、共通理解と円滑な事業運営、そして何より互いに顔がわかる関係が大切であることを改めて感じるところである。すなわち、学生を送る側の高校の教員と、受け入れる大学の教員双方に、責任をもって学生を送る、責任をもって育てるという共通の責任感が生じることで、生徒の学習指導、生活指導にも良い影響が働いていることは言うまでもない。

だが、なんといっても高大連携の実の部分は、高校から大学への進学者の増加、つまりは内部進学率の向上にあることは、私学である以上、押さえるべき大事なポイントである。現在までの女子高時代の高校の生徒数は減少傾向であったため、高大連携事業を進める以前よりは内部進学者数は増加したものの、思うような大きな伸びではなかった。しかしながら、今後、共学一期生が卒業する来年度は、大幅な増加を目指して、進路指導をしていかなければならない。現在、総合学科に男女共学を機に新設をした「アンビシャス進学」をはじめ、既存の「保育」「健康福祉」「心理コミュニケーション」の各系列からの進学者を増加させるべく、担任、学年で検討を重ねている。

最後に、今後の高大連携の取り組みとして、「①高校・大学合同教員研修」、「②高校教員による大学生へのリメディアル教育」、「③看護・医療分野における授業連携」、「④海外研修の合同実施」、「⑤スクールバスの共同運行」などが検討されていく予定である。更なる高大連携の充実を図り、高校生・大学生、高校・大学の双方にとってメリットのある関係がさらに深まるよう、工夫を重ねていきたい。

特色教育部会　研究発表Ⅲ

「専門学校と連携したキャリア教育の実践」

未来高等学校　教諭
岡　部　敬　介

1　はじめに

未来高等学校は、平成 19 年 4 月に広域通信制の高等学校として認可され、現在開校 11 年目を迎えている。生徒の中には、退学や不登校を経験した者など困難な状況を抱えた生徒もいるが、いろいろなコースを設けて、個別の生徒の学力の向上を図りながら充実した高校生活を送らせることを目指して日々教育活動を行っている。また、学校法人河原学園には、9 つの専門学校があり、本校としてはその専門学校と連携したキャリア教育の一環として高専連携授業を実施している。その取り組みについて報告をする。

2　本校の概要

(1)　教育方針

河原学園全体としては、「感謝の心」を育み、未来高校としては「個性で見ればどの子も一番！」をモットーとして教育活動を実践している。

(2)　重点努力目標

1　豊かな人間性の育成

2　確かな学力の育成

3　キャリア教育の推進

(3)　コースの概要

未来高等学校松山本校（以後は本校）は、生徒に目標をもたせて 3 年間で卒業させることを目指し、次のような 4 つの多様なコース設定・学習内容を準備している。

ア　平日コース（週 5 日登校・通学型通信制）

イ　週 2 日コース

ウ　通信制基本コース（月 2 回登校）

エ　集中スクーリングコース（在宅学習）

(4)　教職員数（松山本校教職員数）

	校長	副校長	教頭	教諭	講師	事務	小計	合計
男	1	2	1	5	6	2	17	30
女	0	0	0	4	7	2	13	

(5)　生徒数

平成 29 年 9 月 1 日現在の本校の生徒数は次表のように 278 名である。本校の特色として、年度途中に他の高校から生徒が転入することで生徒数が増加することがあげられる。また、平日コースに在籍する生徒は、中学校時代に不登校傾向にあった生徒が多く、人間関係づくりに課題を抱えており、いろいろな機会をとらえて、自分の進路について考えさせる指導をする中で一人一人を育てる必要がある。

コース名	1年	2年	3年
平日（週5日）	27	33	37
週2日	13	22	17
通信制基本	19	29	31
集中スクーリング	7	20	15
後期生	2	4	2
合　　計	68	108	102

3　高専連携授業の実施計画

本校の特色としては、河原学園の中にある専門学校と連携した高専連携授業を実施していることがあげられる。河原学園に属する専門学校は、河原パティシエ・医療・観光専門学校、河原デザイン・アート専門学校、河原医療福祉専門学校、河原電子ビジネス専門学校、河原ビューティモード専門学校、河原医療大学校、河原ITビジネス専門学校、河原アイペットワールド専門学校、大原簿記公務員専門学校の9校があり、その専門学校の講師の先生が未来高校の生徒を対象に普段の授業を体験させることを行っている。平成29年度の実践は、次のような内容を計画し、実践している。

(1)　実践の目標

「知って、分かって、好きになる。好きなことは、自主的にやりだす、将来の進路選択に合わせて徹底してやる。（学園長の言葉より）」

(2)　実践の目的

①　専門学校の学習内容を実体験する中で、その専門学校のめざす能力の育成内容を知り、自分の進路選択の一助とさせる。

②　専門的な学習を進めることで、自分の適性や特性に気付き、主体的に進路を選択したり、決定したりする力を身に付けさせる。

(3)　実施内容

①　対象生徒：平日（週5日）コース・週2日コースの全学年の生徒

②　実施日時：実施可能な木曜日の午後（13：05～14：55：移動時間も含む）
　　前期8回・後期8回：実施前にコース決定のための希望調査を実施

③　実施場所：基本として各専門学校の教室での授業

(4)　実施に向けての流れ

ア　各校の教務課長による授業内容の詳細な打合せ及び決定

イ　未来高校生への各校の学習内容のプレゼンによる提示

ウ　生徒の希望調査による受講学校の決定及び未来高校の担当教員の確認

エ　授業実践

オ　生徒のアンケート結果・感想の専門学校へのフィードバック

カ　8回終了時の生徒へのアンケート等による評価の実施

4　実施内容

(1)　実施学校及び生徒の決定

本年度の計画については、昨年度末に実施した各専門学校の授業を担当していただいた先生のアンケート結果をもとに専門学校との打ち合せを行った。平成29年度前期は次の7校に高専連携授業の実施

を依頼し、次の表のように、担当や生徒の希望調査に基づいた人数配分を行った。転入生については、本人との相談で適時追加している。

学校名	未来高校担当	生徒数	6月1日実施会場
河原パティシエ・医療・観光	西高	14	河原パテェシエ・医療・観光専門学校
河原デザイン・アート専門学校	新開	27	未来　603教室
河原電子ビジネス専門学校	佐藤	14	河原電子ビジネス専門学校
大原簿記公務員専門学校	山本	13	大原簿記公務員専門学校
河原アイペットワールド専門学校	濱田	16	河原アイペットワールド専門学校
河原医療福祉（保育）	岡部	25	未来　501教室
河原医療大学校	澤近	9	未来　504教室

(2)　実施計画

前後期に分けて各8回の計画で「高専連携授業」として、木曜日の午後を利用して実施している。前期の実施計画は、次の表のとおりである。

長期目標		健全かつ豊かな社会感・職業観を涵養し、幅広い視野から自己に適した進路選択を行えるようにする。			
回	実施日	学習テーマ	学習目標・内容	担当者	備考
1	5月18日	働くことの意義	将来の職業選択に向けて、職業理解に取り組むことの大切さに気付く。 ①実際の職場でどのような仕事をしているか紹介をする。 ②なぜ社会人は仕事を続けているかを知らせる。	河原学園の適任者	
2	5月25日	職業分野・職種の多様性の理解	各専門学校の担当者による学校の紹介をするとともに、各学校で修得する専門知識や技術についての理解を進める。	各専門学校の担当者	
3	6月1日	専門学校での学習する内容及び体験する内容の確認	専門学校の学習内容の理解をさせ、そこで体験する内容についての説明を受ける。実際に各自が学習する内容について理解をする。		
4	6月15日	専門学校に分かれての授業	専門学校に分かれて、専門学校の先生から実際の授業を体験する。 その専門学校で修得する専門知識や技能について意識しながら体験をする実践を積む。		
5	6月22日				
6	6月29日				
7	9月14日				
8	9月21日	振り返りによる学習内容の確認	体験をした内容をまとめるとともに自分の進路選択にどのように生かせるかを考える。		

(3) 実施内容

① 第１回高専連携授業

講師として、河原学園　就職キャリアセンターの奥山眞史次長を迎え、自身の就職に関する体験を基にした具体性のある内容での講話をいただいた。

奥山次長のユーモアあふれる話し方と自身の以前の就職された時の具体的な体験が内容に生徒も話に引き込まれ、集中して聞くことができていた。

② 第２回高専連携授業

各専門学校の担当者に来校いただき、生徒に各学校の特色や修得を目指す資格や目指す生徒像を基に授業で学ぶ内容についての話をしていただいた。

河原デザイン・アート専門学校

絵の描き方に関する様々な技法や道具の用途などについて知り、デザインの仕方について学んでいくと話をしていただいた。

河原医療福祉専門学校

介護福祉士や保育士、柔道整復師の職業について知り、実際にどのようなことをしているのかについて学んでいくと話をしていただいた。

河原医療大学校

主に歯科分野についての専門的知識を身に付け、体験を通して職業のやりがいを知るようになると話をしていただいた。

③ 各専門学校の高専連携授業の指導内容等一覧

第２回高専連携授業での学習内容をまとめたのが次の表である。

専門学校名	高専連携授業の目標・内容
河原デザイン・アート専門学校	4 コマ漫画や長編漫画等様々な形式がある。更にジャンルとしても、少年漫画、少女漫画、青年漫画等様々な層に向けての漫画が存在する。プロットの作成、ネームの作成、下書き、ペン入れ、仕上げ等の作業工程があり、日本におけるストーリー漫画の場合、多くはこれらの作業を全て 1 人で担当する。この授業では、漫画制作の過程を一通り経験することによって、より漫画家という職業についての知識を高めていく。

アイペットワールド専門学校	・ペット業界の現状を学ぶ・ペット業界の問題点と課題・犬の気持ちと触り方 ・犬の散歩の注意点・犬の健康管理
河原医療大学校	歯科分野（歯科衛生士・歯科技工士）における仕事のやりがいや職業説明・専門知識・技術の体験
河原医療福祉専門学校	・介護福祉士の仕事・社会福祉士・精神保健福祉士の仕事 ・伝わりやすいコミュニケーション技法の体験と学び ・保育士・幼稚園教諭の仕事の内容紹介と簡単な体験授業（絵本の読み聞かせ・製作等）・柔道整復師の職業紹介・鍼灸師の職業紹介 ・福祉や医療を職業選択する人に求められること
大原簿記公務員専門学校	・公務員の社会的役割を説明・事務系公務員の説明・公安系公務員の説明 ・適性試験の説明と体験・判断推理に挑戦・集団討論を体験
河原パティシエ・医療・観光専門学校	・医療現場で活躍する縁の下の力持ちである医療事務・医療秘書について ・医療現場で必要な資格・スキル医療サービスについて・病院の種類について ・病院とクリニックの違いについてまた病院での診療科について ・保険の種類について・保険証の仕組みについて・請求の仕組みについて ・医療での接遇について・医療事務としての心構え、患者様・医療スタッフとの連携について
河原電子ビジネス専門学校	IT 業界における仕事についてエンジニアやプログラマの役割を説明する。

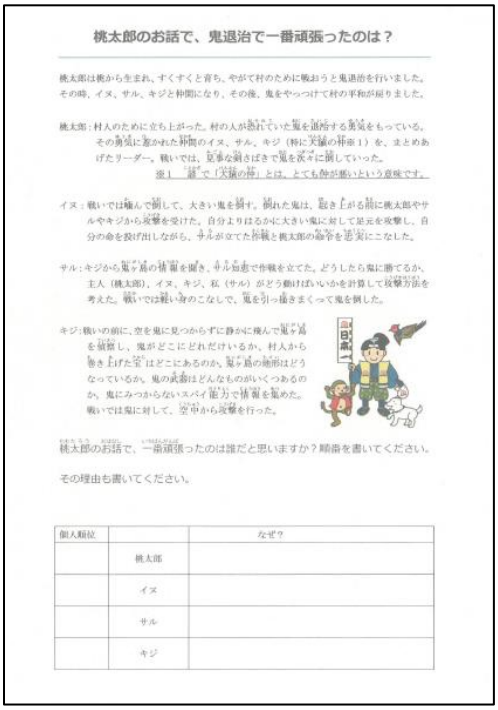
④　第 3 回以降の高専連携授業の実際

第 2 回の高専連携授業での各校の説明を受けて、生徒一人一人に自分が受講を希望する専門学校を調査して、訪問する専門学校を決めさせて、第 3 回から第 8 回までの授業に参加をさせた。

その中で、河原医療福祉専門学校での実践について、活動内容の様子を紹介する。

ア　介護福祉士の仕事（杖を使っている人への介助方法）

杖を使って歩くことがどれほど難しいのか、またどのような危険があるのかについて、実際に杖を使って歩き学んだ。また杖にはどのような種類があるのかといったことや、杖を使っての歩行パターンなどについても学んだ。



イ　社会福祉士、精神保健福祉士の仕事

（伝わりやすいコミュニケーション技法の体験と学び）

グループワークを通して、相手の話をしっかりと聞くことの大切さを学んだ。グループワークのテーマ

は「桃太郎のお話で、鬼退治で一番頑張ったのは？」についての話し合いであった。生徒一人ひとりが、鬼退治の中で桃太郎、イヌ、サル、キジが頑張った順番を考え、その意見をやりとりする中で相談援助職に必要な「聞く力」を培った。

ウ　保育士・幼稚園教諭の仕事の内容紹介と簡単な体験授業

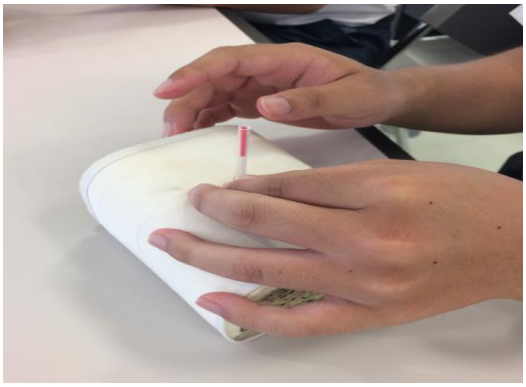
保育士・幼稚園教諭の仕事内容について DVD を見て学んだ。また、折り紙制作を通して創作について学び、歌や振り付けの体験も行った。

エ　柔道整復師の職業紹介・業務体験

柔道整復師はどのようなけがを治せるのか、またどのような場所で働けるのかについて学んだ。低周波治療器を実際に使用させてもらったり、具体的な脚へのテーピングをお互いに施すなどの体験を通して治療の方法の一部を学んだ。

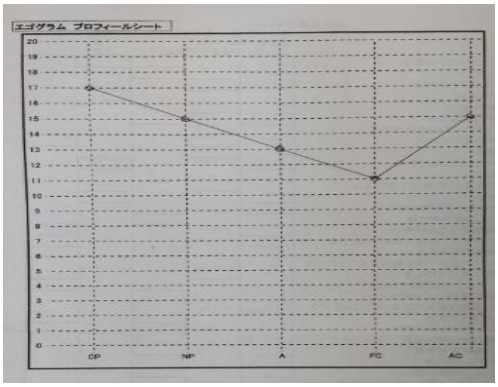
オ　鍼灸師について

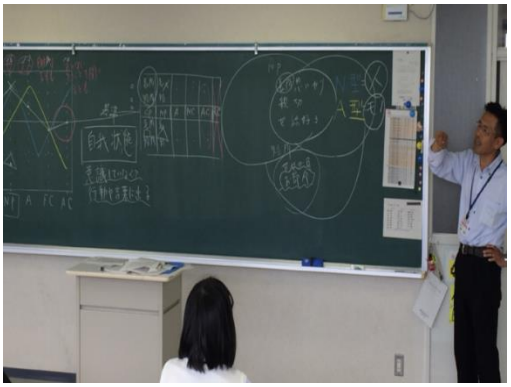
病気はどのようなことが原因で起こるのかについて知り、鍼灸師はその病気を「はり」と「お灸」を使って治療するということを学んだ。また、実際にはりを用いて使い方の体験も行った。



カ　エゴグラムを使った自分自身チェック

チェックシートを用いて、自分自身について知る活動を行った。エゴグラムで自我状態（意識していなくても行動や言葉に出る）を知ることができ、生徒達は興味津々である様子を伺うことができた。





⑤　活動の振り返り

毎時間、生徒に高専連携授業ノートをもたせ、授業内容の要点を書かせるとともに、感想や自分にとって学習した内容が分かりやすかったかどうかの評価をさせている。担当者は、生徒のその評価やノートを専門学校の担当の先生にわたして先生の授業改善の一助にしてもらっている。

⑥　高専連携授業を終えた生徒の感想

河原パティシエ・医療・観光専門学校 （医療事務の仕事につて）	・心理テストをやってみて自分のことがよくわかった。自分の性質や働く上での人との接し方について理解できた。 ・医療事務員さんの仕事内容についてよくわかりました。 ・エゴグラムをはじめてやって、すごく自分のことについてわかりました。 ・焼き菓子には糖とアーモンドが多く使われていること、アーモンドが高いことがわかった。アマンディーヌという名前がマドレーヌと似ていて、そこの違いと同一性について調べてみたい。
河原デザインアート専門学校 （つけペンに慣れる）	・漫画を読むのは面白くて簡単だけど、描くとなると読む人のことを考えて工夫をしないといけないことが大変なんだと改めて思った。 ・授業を受けるようになってから、休みの日も好きな漫画を参考にして、コマ割り等、どう描けばよいのかを考えるようになった。 ・自分で考えて描いている漫画が完成したら、先生にみてもらいたい。 ・実際にデザインアートの先輩たちの授業に参加してみたい。
河原電子ビジネス専門学校 （Monaca を使用した Web アプリ作成）	・タイピングが出来ず、説明についていけなかった。タイピング練習の良い方法を教えて欲しい。 ・文字を打つ、数字を変える。それをするだけで精いっぱいで、何故そういう結果が出るのか、どういう関連性があるのか、理解できなかった。板書を取ったりして、もう少しゆっくりやりたい。 ・サンプルを渡され、そのコードを自分で考え編集という作業で、自分がどこを編集したかが分からなくなり、答え合わせについていけなくなるので、原文のコードを再度もらいたい。
大原簿記公務員専門学校 （公務員ガイダンス）	・国のために働くという、公務員の仕事や責任について理解できた。現役の公務員の人に実情などの話を聞いてみたいと思った。 ・適性検査や試験を体験してみて、学校のテストの様な問題ではなく、クイズのような感じだったので、興味を持つことができた。試験を繰り返すごとに、点数を上げられると思うので、またやりたい。 ・計算問題や、暗号問題のところは、学校の授業の様で、難しく感じた。暗号は、文字の響きだけで、難しく感じるので、クイズのような感じでやりたい。
河原アイペットワールド専門学校 （ペット業界について、触れ合う）	・大型犬への恐怖心もあったが、回を重ね、実体験でしつけ訓練を成功していくうちに恐怖心が薄れてきた。 ・さまざまなタイプの犬に触れ（賢い・そうでない、大型～小型）先生のしつけのアドバイスを聞き実体験させることは達成感を持て、プロへの憧れが強くなってきている。 ・犬のかわいい一面が見れた。意志が伝わる方法さえ知ればかわいがれると思った。 ・散歩の仕方、しつけ方が分かった。技術習得即効果実感の充実感を得た。 ・散歩は思ったよりハードで上下関係をしっかり築くことが大事だということが分かった。飼い主の態度によって犬の態度も変化する事実に感嘆した。
河原医療福祉（保育） （介護福祉士について）	・パワーポイントを使って介護福祉士の仕事について説明していただき、高齢や障害によって日常生活が困難な方の生活実現をサポートする素晴らしい仕事であることがわかった。次はロールプレイングを通じて、実際の仕事がどのようなものであるのかについて学びたい。 ・身体的なサポートをする福祉だけではなく、相談を通じて生活をサポートする精神保健福祉士があることを初めて知ることができた。次回は、実際にどのような相談があるのかについて知り、その相談内容に基づいて我々の回答を考えてみたい。
河原医療大学校 （歯、健康、窓）	・男女問わず、歯科衛生士になれ、また、生涯働き続ける職種と分かり興味を持った。 ・バイタルサインやスケーリング等の、専門用語の意味が分からず、それが気になって、話についていけないことがあった。用語の説明をもっとしてほしい。 ・治療において、補助する側の事にも興味がわいてきたので、補助についても話を聞きたい。 ・実際に作業をしているところは見入ってしまった。もっと見てみたい。

５　成果と課題

(1)　成果

・　本校に入学してきた平日（週 5 日）コースの生徒は、スーパー特進・IT ビジネス・アニメ・アート・芸能・演劇・基礎学習のどれかのコースを選択してはいるが、高専連携授業を行う以前は実際に自分がどのような適性や良さをもっているかについて、あまり自覚することができる場面がなかった。高専連携授業を受ける中で、それぞれの専門学校の内容がわかり、自分に合っているかどうかの判断をする良い機会になっていると感じる。

・　専門学校で行われている実際の授業に触れることで、将来の進路に対する考え方がしっかりした生徒が増えてきているように感じる。実際に専門学校への進学を希望している生徒には、進学してからの混乱が少なくなっている。

(2)　課題

・　各専門学校の説明を行ったが、受講をする専門学校を選ぶ段階で自分の進路を考えた選択になっていない生徒もおり、より適切な進路選択ができるように全教職員での関わりがさらに必要である。

・　週 2 日コースの生徒にも、今年度より高専連携授業への参加の機会を与えた。今後は、教職員のキャリア教育の研修を深め、月 2 コースの生徒へも参加を促すなどさらに進路指導の充実を図りたい。

特色教育部会　全体会

「私学にこそできる特色教育の実践」

１．研究発表への質疑応答・感想

沖縄県私立高校：本学の学校法人は高等学校を 4 つ経営しているが、そのうち 2 つが全日制の学校で、その中の女子高校の商業科における特色ということで美容とか美容師のジャンルを考えていたため大変勉強になった。

京都府私立高校：（未来高校・岡部先生へ質問）通信制の高等学校の教諭をしており、14 のコースを持つ学校である。非常に似ていると思いながら聞いていたが、その中で、自校でやっておらず、未来高校でやられている取り組みについて興味を持った。高専連携授業でのアンケートを実施されているということだが、要は学習内容について先生方の方で生徒の意見を振り返られているという認識で聞いていたが、具体的にアンケートの質問内容、生徒にどういうような項目を聞いているのかなということに興味がある。差し支えなければ教えていただきたい。

未来高校・岡部：まずは生徒が実際に体験したことを書くというスペースがあり、その下に、質問であるとか分からないことを書く項目がある。質問というのは正直あまり見受けられないが、もっとこういうことをやってみたい提案とか、もっとこういうことをして欲しいという意欲的な意見が多かった。質問も少しあったが、少し内容を把握することができていない。

福岡県私立高校Ａ：（聖カタリナ学園高校・横山先生へ質問）自校も保育コースを普通科の中に持っており、説明の中で、保育系列の中で、授業名としては概論だが、実習を 2 日間行うということが 3 年生と説明があったと思う。3 年生の段階で、進路が例えば保育であるとか幼稚園の方に進まない生徒、要するに、これは授業だから全員ということかが 1 点。幼稚園とか保育とか、命を預かる大事な仕事だと思うが、実習に至る前の段階で、例えば資格試験とか、そういった授業以外のいろんな資格試験・検定等といったことをしているのか。この 2 点をお聞きしたい。

聖カタリナ学園高校・横山：1 点目の実習に関しては、実は総合学科の中でこの保育の系列の生徒たちの集団が学力の高い集団になってくる。だから、進学先も、先生の指摘のように、実は本学園の短期大学部への進学の数が一番多いには違いないが、それ以外の県外の大学を含めて、いわゆる保育とは違う分野への大学進学や、確か今年度は、キャビンアテンダントになりたいと専門学校に向かう生徒もいたかと思う。　そのような形で、保育士や幼稚園教諭になるわけではない生徒も交ざってはいるが、実習に際しては、私たちは強制と言うか、そのような生徒にはどうするかと本人に確認をしている。意外なのは、「違う分野に進むから行かないです」と答えるかと思うと、「実はそれは楽しみにしています。それをやりたいです」ということで、今年も全員が実習には出掛けたとの報告を聞いている。その意味では、私ども、中学生段階での PR の中で、この系列についての学びの特色等をかなり伝えているので、例え違う分野であったとしても、その資質というか性格的な部分においては、この系列での学びを楽しみにして来ている生徒が基本なのかなと思っている。2 つ目の資格等について質問だが、あまり高度なものではないのかもしれないとい

う認識ではいるが、在学中に、高校2年生で保育技術検定の4級、それから高校3年生でさらに3級といった程度の資格としての学習はさせている。4級の方は、ほぼ100%取得しているが、3級については、例えば歌等、確か4つ分野があって、それぞれ全て合格しないとその級に認定してもらえないので、1つ2つで少し苦手なものがある生徒が全部そろっていないときはある。その程度ではあるが、一応専門の資格としては取得するように、あるいは取得させてからの実習に出掛けている。

2．参加者からの特色ある教育の紹介

東京都私立高校：本校は、キャリア教育にかなり力を入れて行っている。1年生のときから1単位ずつ毎週1時間の授業を取っている。特色的なところで言うと、2年生のときに全員田植えを行う。自分たちの田んぼを持っており、そこで田植えをし、1年間経過を見て稲刈りをする。そして、稲を刈った米を、文化祭のとか、地域のイベントにおいて自分たちで企画を出して販売を行っている。その後、米を今度は米粉にし、地域の商店街と連携して、デザインを自分たちで考え、オリジナルの米粉パンを提供し、文化祭、地域イベント等で販売をしている。先週もイベントがあり、半日で600個ほど売れ、生徒ともども頑張っている。そのようなことを通して、学校の中で何か自分たちで新しいもの起こすときにはさまざまな失敗もあるが、小さい失敗をたくさん行い、自分たちで考えて、そして新しいものを何か発見して、みんなで乗り越えていくという教育を、2年生では1年間入れている。3年生になると、文化祭を目途に、高校生レストランを自分たちで半年かけて企画、運営を全て行い実施させている。他にファッションショーも1年間かけて企画、運営から全部自分たちで行うという取り組みをしている。

　このようにさまざまなことを取り入れている学校である。

鳥取県私立高校：（東京都私立高校へ）本校も高校生レストランを考えていて、東京ということで鳥取とは随分環境が違うと思うが、実は今年の夏休みに三重県の相可高校を見てきてすごいと思って感動して帰ってきた。まだ全体的にはこれからやろうと計画しているところで少し内容の話を聞かせていただきたい。

東京都私立高校：高校生レストランは、実は定期的に行っているわけではなく、イベントとして、一応狙いは文化祭という1日をかけて、年間の1日の日に焦点を当てて行っている。というのは学校のほうで基準がいろいろあり、調理室の広さとかいろいろな基準もクリアできないので、まだ一般公開はしていないような状況である。しかし実際、自分たちのレストランを運営する前に学校の中の、昼休みを利用して学年もしくは他学年の生徒たちには販売をしているような形で、年間で5回程度の販売を行っている。

鳥取県私立高校：どのような生徒がやっているのか。

東京都私立高校：本校は2コースあり、幼児教育のコースとキャリアデザインというコースを持っている。その中のキャリアデザインコースの生徒が行っている。そのキャリアデザインコースの中で、選択授業でフードという授業を選択している生徒が中心となっている。

司会：お米作りから商品の販売まで行っているようだが、それは同じ生徒がずっと販売までするのか。

東京都私立高校：その通りである。2学年が学年を挙げて取り組んでいる学年行事でもあり、1年間を通して行っている。1年生の時には、女性就農家の方から実際話を受けており、日本の主食となるお米というものを考えながら、働くということとか、あとは農業に就く仕事ということで考えていき、職業という面からも1年生のときは考え、2年生で実際、自分たちで6次産業も経験し幅広く見ていこうという形で動いて

いる。

福岡県私立高校Ｂ：本校は普通科と保育コースが 3 クラス、北九州は工業の街で、工業系の科が 5 クラス、3 学年で 800 名の生徒と、同系列の幼稚園を 3 つ抱えている学園である。

東京大学に 1 週間、インターンシップで行かせていただいたが、これは本校はトヨタの GAZOO レーシングというものに参加しており、その関係で海外ヒストリックラリーに、東京大学のほうが、国際化教育が遅れているということで正規の授業の一環として取り組んで、そこに全国で高校唯一、本校が参加していたので、工学部の先生だが、ぜひ勉強に来ないかという誘いを受けていた。とても東大に行けるような学力、成績ではないのでずっと断っていたが、是非ということで今年から 1 週間参加したわけである。

1 週間であったが、生徒は、非常に変化を遂げた。来年は全学年から公募して選び、行こうと考えている。他にも改革はたくさんあるが、それが 1 点である。

それと、もう一つは、平方先生の話にもあったが、職員研修が命と思っているので、昨年で十数回、今年も 10 回、校外の講師の方を招いたり、いろいろなことをやったりして学校の改革に取り組んでいる。

司会：もう一つくらい、高大連携について紹介をお願いしたい。

高知県私立高校：本校では、進学をする生徒の中では、特に関西方面、関東方面に出たいという生徒が多いが、なかなかオープンキャンパスとかに行き、話を聞くという機会がないという部分があり、全国 50 大学に依頼し、実際に 20 大学が来ていただいて、生徒に大学の話等を一堂に集まってやっていただくということを行ったり、県内の大学と協力をして理系の研究という部分を協力しながら探求したりしている。

山口県私立高校：本校は吹奏楽部が近くの大学と西京銀行と連携している。定期的に徳山大学に出向いて練習をさせていただいており、地域のイベントに一緒に参加している。全国というわけではなく、1 つの部活動であるが、大学の方で教えていただいて技術も上がったようである。

司会：吹奏楽部で、西京銀行、大学と連携しているということだが、学校に普通科のアーティストコースという土台があると思うが、そちらは連携の予定はないのか。

山口県私立高校：今のところ予定はない。本校には、普通科にアーティストコースが 10 年ほど前からあるが、芸能を取り入れて、歌、ダンス、バンド等を教育活動として勉強している。表現力を磨くということを目標に取り組んでいる。一昨年からは、美術の希望の生徒と現場の希望の生徒に分かれ、それぞれ今はその分野に対して、学園祭での発表や地域のイベント等に積極的に参加している。大学祭に呼ばれることもある。

司会：高大連携、高専連携の話が続いたが、少し特色的なその他の取り組みについて紹介いただきたい。鹿児島県の私立高校で看護学科があり、ピアエデュケーションということであるが、紹介いただきたい。

鹿児島県私立高校：看護学科は 5 学年である。5 学年を終えて国家試験に向かわせるわけだが、その最初の 3 年間は基礎課程と言い、その基礎課程の高校 1 年生から 3 年生を縦割りにしてグループをつくる。3 年生と 2 年生と 1 年生がグループをつくるわけだが、3 年生がリーダーとなって授業をするような感じで、2 年生、1 年生に教えるという形を取る。その授業枠は土曜日等の時間を使うが、テーマが与えられて、例えば今日は肝臓についてとか。何月何日は肝臓についてと事前に指示を出し、それに対して 3 年生とか 2 年生が、これまでの既習事項について、教科をやる際に勉強して資料化してきたりして、互いに勉強して

きたことを出し合ってグループトークし、また全体でそのグループでまとめ上げたもの幾つかを先生がピックアップし、全体の前で発表させるという形態で行っている。

看護も、単純に看護学という勉強だけではない。人体の構造とか、病理学の部分もあり、薬理学のこともありということで、いろいろな正しい正常な臓器の特徴、そして病気の実態、それに対する治療とか薬のこと、あとの経過のこととかいろいろと幅広く勉強することで互いが教え合うという感覚で非常に効果は上がっている。また、先生が教えるより先輩が教えてくれるほうが、どちらかというと覚えが良いようで、また先輩は、人に教えなければいけないので一生懸命に勉強するという効果も期待できる。

司会：5 年制ということで自然と学内で高専連携のような形が出来上がっている素晴らしいモデル、パターンと私個人は感じた。

東京都私立中高校：本校は普通科の学校である。ただ、学校が、商店街の発達し多くの店がある所にあり、理事長である私自身も商店街の仕事をやっている。恐らく都内の私立中高の理事長でこんなにも地元と密着している人間は恐らくいないのではないかというくらいいろいろやっている。本校では、例えば中学生の職場体験や職場インタビューを行っているが、他校でも実施しているところは多いと思う。

他にも、地域の夏祭りとか春のイベント、秋のイベントという時に、お祭りの縁日でクッキング部が出店をしたり、お祭りのイベントのステージに出たり、あるいは秋祭りの時に神輿を担いでいる。それと、薪能の時に、先日も人間国宝の野村万作さんが親子で来たが、その時に、長年、切符のもぎりというものをさせていただいている。あるいは夏休みに、近くのホテルでプロのパティシエに来ていただき、調理をクッキング部の生徒にご指導いただいた。

その他にも、雑誌等で、テレビでも取り上げられる有名な飲食店があるが、そのようなところに協力を依頼し、普段、生徒は立ち寄りを禁止しているが、そこのお店の調理したものをランチの時に販売をさせていただき、ある意味特別な形で生徒に食事を提供いただくということをやっている。あるいは、ユニクロが近くにあるが、本校にはロボットの Pepper を入れており、文化祭で Pepper のファッションショーをした時に、店長に審査員をお願いした。そのように、かなり地元の方々にさまざまな教育の場を提供いただいて実施している。

また、水球を行っているが、イベントの時には本校のある市と隣の市で一緒にイベントを行っている。

司会：我々私立高校の場合、地域との関わり合いというのがものすごく大切で、理事長自ら率先して取り組んでいる様子が非常によく分かり、私個人の意見としては、この学校に通ったらものすごく楽しいだろうと生徒目線で考えて、行きたい学校と素直に感じた。

宮城県私立高校：本校は運動部ではバスケットボールやサッカーで有名な学校であるが、入学してくる生徒は、偏差値では 40 前後の子供たちが入ってくる。

要するに、自分で勉強する習慣のない子供たちが多く、教材会社と提携し、ホームページにバナーを張り、生徒に ID とパスワードを配布して、バナーをクリックすると中学校 1 年生から高校 3 年生までの教材が、大体 500 問とか 1,000 問くらいが入っている状態で、生徒の学習状況を担任がチェックしながら、それこそ、アルファベットが書けないとか分数計算ができないとか、方程式も分からないという生徒は中学 1 年、中学 2 年の内容からやっていきなさいというふうな指示をする。運動部の生徒等は特待生で入ってきおり、当然、その生徒は試験前に高校内容の学習ができるような問題が入っていて、何

回でもドリル形式でやれるようになっており、クリックするたびに問題が入れ替わっていくという仕組みになっているので、生徒たちは自分たちで勉強する。担任も共有パスワードがあり、それで入ると生徒たちの学習、何回くらいバナーをクリックしたかを管理できるようになっているため、全然入っていない生徒を支えるために声掛けをするという取り組みをしている。

以前は県内ではレベルが低い生徒が入学する学校であったが、そのように勉強する学校ということになったことで、若干入学する生徒のレベルも上がってきたという経緯もある。先生方の授業を撮影し、動画アップするサイトもあるが、なかなか先生方が忙しく、進んでいないのが現状である。

徳島県私立中高校：本校は中高一貫校で、全員が大学進学を目指しているという学校である。高校 2 年生までに教科書の内容を終え、高校 3 年生で復習をするカリキュラムになっている。高校 3 年生での授業の展開であるが、自分たちの目指す大学、それに応じて授業を受けられるような講座を作っている。具体的には、同時展開で、例えば英語であれば 4 名の教師がクラスで授業を同時に行い、レベルに応じて自分に合った授業を取るという形で授業を行っている。これは 30 程前から行っている。

特色教育部会

「総　括」

聖カタリナ学園高等学校　校長
芳　野　敬　三

当部会は私学の特色教育ということで、「私学にこそできる特色教育の実践」を研究目標として掲げ、基調講演と愛媛県の３つの私立高等学校から研究発表を行い、参加者の先生方には多くの刺激を受けていただいたと思います。

工学院大学附属中学・高等学校校長の平方邦行先生の基調講演では、今、求められている私学の特色教育あるいは、今だからこそ行わなければならない教育という面において、総論としての話があり、また、結論としての話もいくつもあったと考えています。それぞれの学校の土地柄や環境にはいろいろと違いがあるので、そのまま受けて取り込むということはもちろんできませんので、それぞれの学校に合うように工夫をしていきながら参考にして、独自の特色ある教育を作り上げていければと考えています。

後半は、愛媛県の３校からの研究発表を行いました。今治明徳高等学校の紙本　彰先生、足立維史先生の「高校卒業年の９月に美容師免許状が取得可能となる教育課程」をテーマとした発表では、専門学校と「ダブルスクール」を提携した「美容コース」の紹介、聖カタリナ学園高等学校の横山博文先生の発表「高大連携教育の具体的な取り組み」では、同学校法人の大学との連携による双方のメリットと効果の紹介、未来高等学校の岡部敬介先生の発表「専門学校と連携したキャリア教育の実践」では、同学校法人が設置する９つの専門学校と連携して進路選択の力を養っていくキャリア教育の紹介が行われ、３校の発表とも、それぞれの特性を生かした独自の教育と考えています。しかしながら、いずれも地方からの発信であることから、少し、プログラム的に心配しておりましたが、発表後には、多くの質問もあり、参加された先生方が自校での特色教育を考える上で少しでも役に立ったのではないかと考えています。

また、全体会については、「私学にこそできる特色教育の実践」をテーマとして、多くの学校からの特色ある教育の紹介や意見交換を行い、ヒントやご指導をいただいたように感じています。

今回の部会が有意義な時間となったことを感謝申し上げて、総括とさせていただきます。

生　徒　指　導　部　会

昨今、ソーシャルネットワークシステムの発達、核家族化等により、人とのコミュニケーションを図る手段が多様化し、生徒に対して声をかける重要性、教師とのコミュニケーションをとる大切さを理解させるべく、どの教師も声かけ指導は行っているであろうと考える。

当部会では、生徒に声かけをすることにより当該生徒の考え方、気持ちの変化、生活状況を把握し、問題行動の未然防止につながることを生徒指導のあり方とし、事例発表を通して生徒指導のあり方を共有したい。

1　研究目標　いつでも、どこでも、誰でもできる声かけ生徒指導

2　会　　場　松山全日空ホテル　本館４階　ルビールーム

3　日　　程

	9 15	10 30	11 50	12 50	13	14 15	15 45	16	17
10月20日（金）	受付	開会式	講演Ⅰ	講演Ⅱ	昼食	事例発表Ⅰ	事例発表Ⅱ	閉会式	

4　内　　容

講　演　Ⅰ

演　題「夢の実現～さらにその先へ」

講　師　**澤　野　大　地**　　日本大学スポーツ科学部スポーツ学科　専任講師

講　演　Ⅱ

演　題「心豊かな人間に育てる～人生を懸けた柔道指導～」

講　師　**浅　見　三喜夫**　　新田高等学校　教頭

事例発表Ⅰ

テーマ「学校生活への不適応未然防止にむけて
～自己理解・個別支援・成功体験を通した取組～」

発表者　**長　者　美　里**　　学校法人光華女子学園　学園長補佐(小中高担当)

事例発表Ⅱ

テーマ「生徒観察からはじまる声かけ指導」

発表者　**青　野　隆　義**　　今治明徳高等学校　主幹

5　講師・発表者（順不同）

澤　野　大　地　日本大学スポーツ科学部スポーツ学科　専任講師

浅　見　三喜夫　新田高等学校　教頭

長　者　美　里　学校法人光華女子学園　学園長補佐(小中高担当)

青　野　隆　義　今治明徳高等学校　主幹

６　運営委員・指導員（順不同）

委員長

濱　元　一　馬　今治明徳中学・高等学校　校長

副委員長

中　井　　清　今治精華高等学校　校長

委員

大久保　成　道　日本ウェルネス高等学校　教頭

髙　橋　啓　二　今治明徳中学・高等学校　副校長

青　野　隆　義　今治明徳中学・高等学校　教諭

菅　野　耕　太　今治明徳中学・高等学校　教諭

佐　伯　昌　彦　今治精華高等学校　教諭

塩　崎　昌　幸　今治精華高等学校　教諭

生徒指導部会　講演Ⅰ

「夢の実現～さらにその先へ」

日本大学スポーツ科学部スポーツ学科　専任講師
澤　野　大　地

私は普段は日本大学スポーツ科学部で専任講師を務めているが、陸上競技の棒高跳びをまだ現役でやっている。陸上競技をする場合は所属する富士通の人間として陸上競技をしている。

1980 年 9 月生まれ、現在 37 歳。現役の陸上選手では昨年ハンマー投げの室伏広治氏が引退されたので、ほぼ一番年齢が上、ベテラン選手である。日本大学スポーツ科学部の専任講師をしながら現在は JOC のアスリート委員長もしている。また、日本陸連のアスリート委員会でも陸上界をもっと盛り上げていこう、選手のアスリートとしての価値を上げていこうと活動している。

オリンピックだが、2004 年のアテネ、2008 年の北京、2016 年のリオデジャネイロと、3 度出場している。世界陸上は 2003 年のパリから始まり 6 回連続で出場した。6 回中 4 回決勝に進出し、2005 年のヘルシンキでは入賞もしている。日本選手権は 11 回優勝させていただいている。日本選手権の最多数優勝はハンマー投げの室伏広治氏の 20 回連続。11 回は歴代で 2 番か 3 番になる。そして現在棒高跳びにおいて、日本記録の 5m83 ㎝をまだ持っている。

オリンピックに出るにはいろいろな困難があった。陸上競技の場合参加標準記録というものがあり、棒高跳びの場合 5m70 ㎝。どんなに日本人でトップにいても、日本で優勝していても、5m70 ㎝を跳ばなければ参加する資格がない。ところが私は 2016 年のシーズンは全部 5m60 ㎝止まりだった。

5m70 ㎝を跳ばなくてはいけないということでいろいろな試合に出場したが、叶わなかった。大雨の日本選手権でも優勝しましたが、5m60 ㎝でした。

この時点で残された期限は 2 週間。最後のチャンスとして、北海道の南部記念を想定していた。陸上部の監督でもあり現在のスポーツ科学部の学部長でもある小山先生にたまたま会い、話す機会があった。

「おまえ、次チャンスいつあるんだ」「2 週間後の南部記念を考えています」「駄目だ。チャンスがあるなら全部出ろ」と。「来週何があるんだ」「母校の日本大学で記録会があります」「それ、出ろ。チャンスがあるなら絶対出ろ。こんな雨の状態で、おまえの年齢で優勝できたのは、おまえ何か持ってるぞ。絶対にあきらめるな。オリンピックへ行けるから絶対あきらめるな」と。そこで覚悟が決まった。日大記録会で 5m70 ㎝を跳ぶという気持ちを小山先生に固めていただき、出場した。そこで参加標準の 5m70 ㎝を越える 5m75 ㎝をクリアして、リオデジャネイロオリンピックの出場権を得ることができた。

あのとき小山先生に会っていなかったら、日大記録会に出ようという気は起こらなかったかもしれない。おかげでリオデジャネイロに出場することができた。

ただ、代表になると決まってからリオデジャネイロに行くまでは、たった 1 カ月しかなかった。1 カ月で何ができるか。何もできない。強化することもできない。それで、もうとにかく普段通りの自分をつくっていくことだけに集中して、リオデジャネイロに向かい、全くいつもと変わらない状態でリオデジャネイロに入ることができた。予選のときも決勝のときも、3 度目のオリンピックということもあったのかもしれないが、ここはオリンピックなのかなと自分自身で分からなくなるくらい、普段通りの試合をしていた。スタンドを見て、オリンピックのマークを見た瞬間に「あっ、これオリンピックだった」と。そのくらい普段通りの自分でいられたのである。

なぜそんなことになったのか。実は選手村から競技場のサブトラックまでバス移動の間、私は音楽を聴きながらケータイをいじっていた。すると頭の中に棒高跳びを始めてからお世話になった方々の顔がどんどん浮かんできたのである。「ああ、あそこであの人に声をかけてもらったな」「あの人にこうやって応援してもらったな」「またあそこでこの人、こうやって応援してくれてるな」その思い、今まで携わってきた方々の顔を思い浮かべていると、自然と涙があふれてきた。

これから試合に向かうバスの中である。最初はまずいと思ったが、この涙、力になるかもしれないと思い、サングラスをかけてずっと流し続け、今まで棒高跳びを通じて出会った人たちの顔を一人一人思い浮かべながら競技場に向かった。

競技場に着いたときにはすっきりしていた。「よし、やるぞ」という気持ちで試合に臨むことができ、日本人では 1 人だけ予選通過したし、その流れで決勝も全く同じことをして、日本人としては 64 年ぶりに 7 位入賞することができた。

帰ってから、「澤野、おまえなんであんなに穏やかな表情をして跳んでいたんだ」と言っていただくことが多々あった。この映像を見て、本当に穏やかな表情だなと自分でも思うし、穏やかな気持ちで跳ぶことができた。

今いる日本大学だったり所属している富士通だったり、棒高跳びを始めてからたくさんの人にこうやって支えられてここに立てているんだな、ということが心の底から感じられたからこそあんな気持ちで戦えたのかな、幸せな気持ちで跳べたのはそのおかげかな、と思っている。

決勝の前にサブトラックでウォーミングアップをしていたら、アメリカ人選手のコーチが話しかけてきた。「ヘイ、アンクル大地」と言った。「なぜアンクル大地なの？」と聞いたら、「だっておまえ、一番年上じゃん。だからみんなのおじさんだよ」と。

決勝結果が出た後の囲み取材でメディアの人に「ちょっと聞いて下さいよ。アメリカ人のコーチにこんなこと言われたのですよ。大地おじさんって言うのですよ、ひどくないですか」と言ったら、次の日の新聞では「大地おじさん 64 年ぶり伝説」と、こんな表題が踊った。こうして世間の方に少しでも棒高跳びについて知ってもらい、また 35 歳を越えてからもオリンピックで結果を出せたことを認めていただけたと、とてもうれしく思った。

それでは棒高跳びについて、簡単に説明をしていく。

どのくらい跳ぶのかというと、中学生で大体 4m90 ㎝くらい。実は今年の夏に群馬の中学生が 4m93 ㎝という中学記録を更新した。そして高校記録が 5m46 ㎝。もう 20 年近く前だが、私が高校生だったとき、私が 5m40 ㎝まで伸ばして、昨年 2016 年に江島雅紀選手が 5m46 ㎝まで伸ばした。この江島選手、今年の 4 月から日本大学スポーツ科学部に入学してくれて、私がコーチとして指導もさせていただいている。

そして日本記録は 2005 年の記録であるが 5m83 ㎝。世界記録は 6m14 ㎝でウクライナのセルゲイ・ブブカ選手の記録である。またフランスのルノー・ラビレニという選手が 2014 年に 6m16 ㎝を跳んで、室内の世界記録保持者となっている。

道具については、棒高跳びが始まった頃は木の棒とかいろいろな物を使っていたが、競技では竹のポールが有名である。京都の竹が世界で一番質が良く、丈夫で、高く跳ぶためにはとても優れていたということで、世界中の棒高跳び選手は京都の竹を買い付けに来ていたという話を聞いたことがある。

そして竹は折れたら裂けて危ないということで、スチール製のポールが開発された。しかしいくら折れないとはいえ金属なので重くて大変である。スチールポールは重いということで開発されたのがグラスファイバー製ポールである。現在私が使っている物が長さ 5m10 ㎝、重さは大体 3 ㎏くらい。しかし端を持って水平にすると、かなり重く感じる。体感で大体 25～30 ㎏くらいである。なので、いかにポールをうまく運ぶかも棒高跳びの奥深いところだと思っている。

なぜ棒高跳びを始めたかと言うと、そもそも私は走ることが好きだったので、中学校で部活動を選ぶときは陸上部と決め、長距離を選んだ。

長距離をやっているとき、グラウンドの隅のほうに棒高跳びの施設があった。そして中学 1 年の夏くらいのときに顧問の先生に呼び出され、「おまえ、ちょっと棒高跳びやってみないか」と誘われた。もともと楽しそうだなと思っていたので、「じゃあちょっとやってみます」と始めたのがきっかけである。

始めたらどんどん記録が伸び、中学 2 年生で県 2 番になって、中学 3 年生のときには全国大会に出場するまでになった。棒高跳びの魅力に魅了されて、そのまま 25 年間やり続けている。

なぜ 25 年も続けられてきたのかと言うと、明確な夢があり、どんどん新しい目標が出てきたからである。その 1 つが 6m である。棒高跳びにおいて 6m は夢の数字、全世界のポールボルダーが目指す 1 つの目標である。セルゲイ・ブブカ選手が人類で初めて 6m を越えてから、まだ 26～27 名しか越えていない。6m という数字を年間に複数回出す選手は実は皆無で、そのくらい難しい記録である。

私の日本記録は 5m83 ㎝。アジア記録でも 5m90 ㎝である。アジアで 6m を越えた選手はいない。日本人として初めての 6m 突破を目指して今でも現役を続けて、若い選手たちもやはり 6m という数字を意識しながら日々トレーニングに励んでいる。

そしてもう 1 つが昨年のリオデジャネイロオリンピックである。

実は小学校の卒業文集で将来の夢を書く欄に「オリンピック選手になりたい」と書いた。当時棒高跳びは全く知らない。私が初めて意識したオリンピックはソウルオリンピックだった。柔道の柔ちゃんなど日本選手の活躍を見ながら「この世界ってすごいんだな」と幼いながらに感じていたのだと思う。そして陸上競技と出会い、棒高跳びと出会い、夢が実際に棒高跳びで目指すという目標に変わり、その目標が現実となり、オリンピックが自分自身の戦う場所になっていったわけである。

その目標を達成するためには、まず夢を持つこと。私自身、棒高跳びと出会いこの種目でオリンピックに行くんだ、と考えたときから世界のトップ選手たちと対等に戦える選手になりたいという夢が出てきた。

夢に対して目標をしっかり立てること、これがやはり大事。この目標を立てることをしっかりやってきたからこそ、今私自身ここに立てているのかな、というものがある。そしてこの目標を具体的なものでイメージすることがとても大切である。

まず長期的な目標から中期、そして現在やるべき短期を計画立ててやることが必要である。『目標設定シ

ート』と題して、高校2年の冬に高校3年でどんな目標をかなえたいかということを設定した。

私は千葉の成田高校出身だが、当時の監督は越川一紀先生だった。その越川先生に「できるだけ具体的な目標を書け」と言われた。最初は目標を簡単に書いた。インターハイ優勝。すでに優勝していたので「インターハイ2連覇」としか書かなかった。するとすぐ突き返された。「なんだこれは。もっと細かく、この紙がびっしり黒くなるくらいまで書いてこい！」と言われ、それで書いたのがこれです。

『1998年8月3日、自分は香川の丸亀競技場で行われるインターハイに出場し、去年のインターハイのような、捻挫した状態ではなく、波に乗った絶好調の状態で試合に臨み、5mを一発、5m10㎝はパス、5m20㎝を一発といったように、高校生離れしたきれいな棒高跳びで、全ての高さを一発でクリアし、自信に満ちた、思い通りの自分のペースで試合をうまく運び、他を寄せつけず、5m40㎝を跳び、高校新で優勝している。そして去年流した悔し涙とは違い、うれし涙を顔に浮かべ、表彰台の一番上で成田高校陸上部の部旗を眺めている』

この目標を部屋に貼り、毎日寝る前にこれを見て、その状況をイメージする。そんな生活を送ってきた。すると1998年8月3日に全く同じことが起こった。高校記録を出し、インターハイを2連覇することができた。

これは常に目標を頭に置いて、しかもそれが状況として具体的にイメージできていたからこそ実現できたのだと思う。こういった目標の立て方を教えて下さった越川先生には今でもすごく感謝している。

またこのとき、インターハイと世界ジュニア選手権が同時期に開催された。両方を選択することができなくて、世界ジュニアに行きたいな、という思いを抱きながら越川先生に相談に行った。すると「ばかじゃないの」と。「おまえ今まで3年間何やってきたんだ。同じ友達、同じ部の仲間と一緒にインターハイの総合優勝を目指してやってきたんだから、みんなで力を合わせて、みんなに見守られながらインターハイで優勝すれば良いじゃないか。それで良いじゃないか」ということを言われ、ああそうだな、と思ってインターハイへ行ったところ、この結果が出たわけである。

そういったことを教えていただいたのもすごくありがたかったな、と思う。もし世界ジュニアに行っていたら、こんな結果は出せなかったかもしれない。

この目標に向かっていくイメージ、しっかりその目標を見ていることで、良いときも悪いときも一歩ずつでも上に向いていけるのが良いのではないかと思う。人間、良いときもあれば悪いときもある。目標がしっかり定まっているからこそ、悪くても一歩を踏み出すことによって、少しずつベクトルが結果として目標に近づいていけば良いと。こんなイメージで、私は目標に向かっていっている。なので、そんなに一喜一憂しないと言うか、まあ仕方ないと思えるようになったほうが気持ちは楽だし、あせることもなくなるのかな、と思っている。

またトレーニング以外にもいろいろなこと、休むこともするし、遊ぶこともたくさんする。私はヨーロッパやアメリカなどで転戦をする中でトップの選手たち、金メダリスト、世界記録保持者、たくさんの選手たちと関わってきた。一つ共通して言えることは、オン・オフがとてもはっきりしている選手が多いということである。常に陸上のことばかり考えているわけではなく、遊ぶときはとことん遊び、休むときはとことん休む。トレーニングするときはとことんトレーニングする。このメリハリがしっかりつけられることが強くなる近道なのかな、と思う。

次は、『うまくいかなかったとき』である。私は中学校で棒高跳びを始めてから高校を卒業するまで、ず

っと順風満帆にきた。そして大学時代、怪我が多かったがまあなんとかやってきた。社会人になってからもオリンピックに出場して、日本記録も出し、かなり順調にいっていた。

そしてちょうど 10 年前、2007 年の大阪世界陸上にも、私はメダルを期待される選手として出場させていただいた。地元大阪での世界陸上ということで、メディアも含めてとてもいろいろな活動を積極的に行ってきた。ポスターまで作成していただいた。このポスターが渋谷のハチ公前広場のビルボードに飾られたりして、渋谷駅全体がこの世界陸上一色になった。大阪のグリコの看板が世界陸上マークになったほか、記念切手にまでなった。また東京ストリート陸上として丸の内のストリートで試合をやったり、バラエティー番組に出演させていただいたりもした。

これだけたくさんの方に応援していただいたのに、全身痙攣を起こして記録なしで予選敗退してしまった。1 本目のときに手を滑らせて、手の指の幅が全部やけどをしてしまった。それでもう頭の中がパニックになってしまい、2 本目からふくらはぎ、太もも、腹筋、背筋、首、手、腕、全部つって動けなくなってしまった。

たくさんのメディアに出ていたからこそ、全国の皆さんに注目していただき、メダルを期待していただいていた。そんな中で記録なしで敗退してしまったので、ブログが大炎上した。顔も名前も分からない人たちからの誹謗中傷というのがどれだけきついものか、身をもって体験した。今まで「メダル獲得目指して頑張って下さい。応援しています」と言っていた人たちがコロッと変わって、「なんだあれ」と言われた。「けいれん王子」という名前も付けられて、「ふざけんな」とか「なんだあの試合のやり方は」と、ひどい誹謗中傷を受けた。全部受け止めようとしてずっと読んでいたが、もう気持ち悪くなって吐きそうになり、頭の中がぐるぐるになりながら、「ああ、こう思われているんだな」と、どんどん心も落ちていった。

本当につらかった。陸上競技を続けてきて初めて、こんなにもつらいことがあるのだなと思った。

そしてもう 1 つは 2012 年のロンドンオリンピックである。

2004 年のアテネオリンピックを目指して高校、大学と頑張って、社会人になったとき、陸上競技専門メーカーの西スポーツに入社した。そのとき社長から最初に言われたのが「オリンピックに出てくれ」であった。もちろん私自身の夢だったし、会社に入れていただいた恩返しのつもりで「オリンピック絶対に行きます」と。それで目指したのがアテネオリンピックだった。アテネオリンピックに出場し、決勝まで進出した。決勝では 13 位くらいだったが、そのとき金メダル争いをしている 2 人を見て、思ってしまったのである。ああ、同じ決勝の舞台で戦っているファイナリストだけれども、彼らは私が同じ舞台で戦っているとは思っていないだろうなと。

これがとてつもなく悔しかった。同じアテネオリンピックの棒高跳びのファイナリストなのに、彼らの眼中にないということが本当に悔しかった。だからこそ次のオリンピックでは必ず彼らに混じって優勝争い、上位争いをしたいと 4 年間過ごした。結果、練習のしすぎでアキレス腱を痛めてしまった。北京オリンピックでは予選敗退となった。

こんな状態で競技生活が終わってしまうというのは考えられなくて、もう 1 回オリンピックで戦いたい、との思いでリハビリからやり直し、目指したのがロンドンオリンピックであった。そして最終選考会の日本選手権。大雨の中、当時大学生の山本選手と一騎打ちになり、優勝者を決めるためのサドンデスとなった。どちらかが跳べるまでバーを下げていく。当時、2 人 1 位が決まったのが 5m45 ㎝だった。そこから 5 ㎝ずつ下げていき、最終的に 5m15 ㎝まで下がった。試合が始まってから 2 時間くらい経過した後 2 人だけの戦いになり、さらに 2 時間くらいかかった。

当時私は 32 歳、彼は 20 歳。体力の差は歴然です。私は 5m15 ㎝のバーを越えることができず、山本選手が跳んで、オリンピック代表には山本選手が選ばれた。

その発表の日、私は家で 1 人で待っていた。すると仲の良い記者の方から「残念でした」とのメールが入った。頭が真っ白になって、とにかく泣きわめき、叫びました。現実が受け入れられなくて、とんでもなく苦しかった。そのとき 1 本の電話が鳴った。仲の良い後輩からだった。「大地さん、どこにいるの」と。「今、部屋に 1 人でいるよ」と言ったら、「あと数分で着くからちょっと待ってて」と言われて。数分後に後輩が来た。「大地さんが心配だったから」と。

本当にうれしかった。私自身、もうどうすれば良いか分からないときに駆けつけてくれたのである。そして「残念だったね」とか「しょうがないよ」という話をしていると、後輩の電話が鳴った。「もう 1 人来るから」と。

そのときはもううれし涙が止まらなくなった。さっきまでロンドンの代表を落ちたことが受け入れられないくらい悔しくて涙を流していたのだが、駆けつけてくれた 2 人の気持ちが純粋にうれしくて、涙を流したのを覚えている。

どんな言葉をかけるか。私は、どんな言葉でも良いと思う。とにかくその場で寄り添ってくれる人。そんな人がいれば自分の心は保てるな、ということを感じた。

自分自身が心を取り戻した後はどうなるかというと、しっかり次の目標をつくって、その目標に向かって一歩を踏み出す。その一番のきっかけは、周りの人がそばにいて、声をかけてあげること。私自身、大阪のときもロンドンオリンピックのときも、周りの人、先生、コーチ、友達、家族に支えられ、助けられて、また一歩を踏み出すことができた。

シドニーオリンピックで女子マラソン金メダルを取られた高橋尚子さん。そのとき「暗闇に入っても目標を持つことで一日一日を充実させ、楽しい毎日を過ごすことができる」と言っていた。

またマーリンズのイチロー選手だが、4,000 本安打を打たれたとき言われた言葉が「誇れることがあるとすると、4,000 本のヒットを打つには僕の数字で言うと 8,000 回以上は悔しい思いをしてきた」である。4,000 本の安打を打つために、8,000 回以上アウトになっているわけである。

今シーズン、イチロー選手はずっと代打で活躍されて、代打の歴代記録まであと 1 本というところまできた。シーズンが終わって記録にはとどかなかったが、イチロー選手がその記録に対して、「1 つのことを続けていくことによって、そういった記録もまた新しく見えてくる」と言われた。

続けていくこと、目標を持ってずっとやり続けること。それがまた新たな目標を見つけたり、新たな結果を生み出したりする一つの原動力になるのかなと思う。

次は『怪我との戦い』である。私はたくさん怪我をしてきた。中でも大きな怪我は、2014 年に起こった。アジア大会で銀メダルを取って、そのシーズンはずっと負けなしでやってきた。そしてシーズン最終戦として、長崎で行われた国体に出場した。優勝争いの跳躍の中、踏切直前肉離れが起きた。このほかにも捻挫、肉離れ。また 2008 年から痛み始めたアキレス腱と。これには本当に悩まされた。現在は完治しているが、それも毎回地道なリハビリによるものである。自分自身がオリンピックという夢、目標を目指しているからこそ、地道なトレーニングもずっと続けられたのだと思う。

そして 2015 年、春先にアキレス腱を部分損傷した。ここであきらめることはできない、とにかく 2016 年のリオデジャネイロオリンピックに出るという気持ちを持って 1 年間地道なリハビリを続けた結果、出場で

きたわけである。

『さらにその先へ』ということだが、実はリオデジャネイロオリンピックでもう引退かなと考えていた。しかしあれだけ楽しく競技ができ、結果を出すことができた。そしてその後ケータイを見てみたら LINE が 600 件あった。その 600 件、全てが友達だったり先生だったりコーチだったり家族だったり。そして「おめでとう」「すごい。良かったね」を、みんなが言ってくれた。みんなが喜んでくれていた。本当に幸せだった。勝手に涙が流れてきた。とんでもない幸福感からの涙であった。こんなにも人生で幸せなことがあるのかな、と。そのくらい自分の人生の中で一番幸せな 1 週間であった。

もちろん結果が出たということもある。しかしそれよりも、結果が出たことによって応援してくれてきた人たちが喜んでくれた、これが何よりもの私自身の幸福感につながっていたのかと思う。

また、そういったオリンピックという自分自身の夢の舞台で、あれだけ心の底から楽しんで一番好きな棒高跳びができた、これがとても良かったと思っている。

人生 37 年生きてきて、一番楽しいこととして挙げられるのはやはり棒高跳びである。この棒高跳びの楽しさをリオデジャネイロで終わらせるのは、やはりちょっともったいない。日本大学も富士通も、「続けて良いよ」と環境も整えて下さっている。この棒高跳びの楽しさというものをもう少し感じていきたい、またリオデジャネイロで感じた幸福感を 1 人でも多くの若い選手たちにも感じて欲しいから伝えていきたい。そしてコーチという立場から、その子たちと一緒に跳んでいきたい。一緒に跳ぶことによって私が今まで経験してきたことを少しでも多く伝えていきたいという思いがあり、現役を続行させていただいている。

2020 年の東京オリンピックであるが、「東京を目指します」と、胸を張って言えるかというと、実はまだ分からない状態である。というのも東京オリンピックのときは 40 歳になる。40 歳で、陸上選手でオリンピックに出た選手に日本人はいない。また、世界で見てもほとんど事例がない。そのとき自分自身の体がどうなっているか分からない、というのも正直なところである。しかし現在痛い所もなく、今シーズン出た試合はすごく状態が良かった。去年よりもスピードが上がっていたりとか、技術的にアップしていたりとか、そういったことがあった。だから、教え子たちと一緒に練習をしながら、新たな開拓をしながら、1 年 1 年勝負をしながら、2020 年の東京オリンピックが見えてきて、そこを目指せたら良いなと思い、競技を続けさせていただいている。

東京オリンピックには何かしらの形で関わることになろうかと思う。それが果たして選手なのか、コーチなのか、アスリート委員会なのか、陸連なのか、教員なのか、ボランティアなのか分からないが、私自身の経験を少しでも東京オリンピックに向けてつなげていきたいと強く思っている。

理想として、江島選手と一緒に選手兼コーチとして出られたら面白いのではないか。そんなことを考えながら競技を続けている。

最後になるが、棒高跳びを続けて得られた大切なものは、やはり人との縁なのかなと思っている。いろいろな選手と出会って、いろんな人と出会って、助けられ、支えられながら今の自分があるのかなと思っている。棒高跳びを続けてきたからこそ出会えた人たちである。そしてこの人たちに支えられ、今も現役を続けながら教員という立場で陸上界に携わらせていただいている。

今回、このように話をさせていただいているのも、棒高跳びを続けてきたからこそ得られた縁だと思っている。やはりこのような、人との縁を大事にしながら、またオリンピックという夢を大事にしながら後世に伝えることを、これからも頑張っていきたいと思っている。

生徒指導部会　講演Ⅱ

「心豊かな人間に育てる～人生を懸けた柔道指導～」

新田高等学校　教頭
浅　見　三喜夫

今の生徒は本当に子供だと強く感じる。昔の生徒は目立つように悪さをしていたが、それでも大人であった。本当は駄目な内容もあるが、昔の話として聞いて欲しい。悪い子を見つけてコツンとやって、「見なかったことにしてやる」と言うと生徒は恩を感じて、ふらふらしていたものがピシッとしてくる。今の生徒に「見なかったことにしてやる」と言うと大変である。「この前は見逃してくれたのに、なぜですか？」という感じとなる。ただ、これは子供の責任ではなく、社会環境の変化、特に家庭環境の変化が原因である。以前は両親、祖父母がいて、兄弟が何人もいた。その中で父親が権力を持ち、それでも祖父母に言われれば一目置く、そのような秩序があった。兄弟が何人もいたので、兄・姉が叱られるところを見て学習したものだ。今は核家族化が進み一人っ子も多くなった。昔はよく、「若い時の苦労は買ってでもしろ」と言われたが、今は買うような苦労がない。それほど平和、楽な時代なのだろう。そうなると表立って悪いことはせず、地下に潜ってしまう。SNS 等の問題には先生方も頭を悩ませているだろう。気づいた頃には大変なことになっていることもあるのではないだろうか。環境が大きく変わった今、指導者の考え方・指導方法も時代に合ったものにする必要がある。

若い頃の私は生徒から恐れられていたし、話しかけてくる保護者もほとんどいなかった。40 歳頃になると保護者と年代が近い、あるいは私より年下になるので話しかけられるようになった。ある時、聞かれたのは、「先生自身に反抗期はあったのですか？」。「あるわけありません。反抗できる環境ではなかった」と答えた。私の父は、「殿様」だった。父の兄弟は 13 人いて、上から 9 番目までが女性であった。やっと産まれた男の子であったため祖父は父を大変かわいがったそうである。母は私によく言っていた、「若い時の苦労は買ってでもしなさい。苦労せずに育つとお父さんみたいになるよ」。父は子供の頃に食卓にふざけて放尿し、それを見た祖父は、「上手にひったのう」と褒めたそうである。本当かなと思うような話だが、それほど極端に育てられた。

何不自由なく育てられた遅々は何もしないで自由に生活する日々を送り、20 歳を過ぎても職に就いていなかった。そこでおじさんたちが集まって、「これはなんとかせないかん。何もせずぶらぶらしているようではいかん」と話合いが持たれた。仕事をしないばかりか、あの食糧難の時代に納屋にあった麦を持って近所の後輩 4～5 人を連れて飲みに行っていた。そんな父に対して、「市会議員が良いんじゃないか」という話が出た。当時の市会議員は名誉職でしたので、それならできるということであった。父もまんざらではなかっ

たようで、「よし出てやる。その代わり落ちたらお前達の責任だぞ」という態度であった。無事当選して市会議員なったものの父の姿勢は変わらなかった。大物と言って良いのか、大ばかと言って良いのか分からない出来事も数多くあったようだ。

陳情のため父は市長に連れられ東京へ行ったことがある。ロビーには国会議員だけが座っており、他の人は立っていたが、そのような場で父は座って、たばこを吸った。灰皿が必要な父は、「すまんけど、灰皿を取ってや」。そこにいた大臣が、「どうぞ」と渡してくれたので、父は、「すまんな、ありがとう」という感じだったそうである。その場を離れた後に仲間の人が、「その人は誰か知ってるのか？」、「知っとるわい。金丸やろうが」と。当時、自民党の幹事長をしていた金丸信さんであった。相手が誰であろうとお構いなしで自分の世界を生きている。まさにお殿様であり、従って、子供に対しても非常に厳しかった。

小学生の頃、行動が遅れた私に父は、「誰のお陰で飯、食うとるんや。誰のお陰で布団で寝れとるんや。嫌だったら出て行け」と。また、枕詞（まくらことば）のように話し始めには必ず、「ばか」が付く。私の名前の前にばかを付けて、「ばかミキ」、兄は、「ばかイチ」と呼ばれていた。私は 3 人兄弟の末っ子で、私と上の兄の間に実は兄と姉がいたようだが、産まれてすぐに亡くなっている。母は父の分も働かなければならなかったようだが、医者の話によると、2 人が亡くなったのは、母が無理して働いてお腹を冷やしたのが原因だということであった。故郷の宇和島は真珠養殖が盛んな所で、我家も養殖をしていた。私は兄に叱られながら、夜遅くまで一緒に海へ出ていた。私が大人になってから冗談半分で母親に、「小学生が海へ出て夜になっても帰ってこなかったら普通捜索願を出すんじゃないかな」と言ったら、「それどころではなかった。生きるだけで精一杯だった」と納得の答えが返ってきた。子供のことまで考える余裕が無いほど大変な暮らしであったようだ。

私が小学 2 年生の時、兄が中学校で柔道を習い始めた。習うと誰かに教えたくなり、習った技を全て私にかけてくるので、いつも母親の所に泣きながら逃げていた。島に住んでいた私は、中学生になると合併のためフェリーで学校へ通うようになる。そこで一番嫌だったことは、父親の選挙ポスターが貼ってあることだった。ちょうど入学の時期と選挙が重なっていたため「お前の父親だろう」と言われる。フェリーの近くに父親が演説に来ると、私は隅のほうでじっとしていたが、皆にからかわれた。これは今ならいじめでしょうが、ある程度開き直りが必要だった。中学校から柔道を始めたが、兄を倒したい気持ちもあったと思う。そこで非常に厳しい先生（四国大会でも生徒に優勝させるような）と出会う。私は弱く、入部した中で 2 番目くらいの小さな体、体重は 40 キロ台だったと思う。弱かったのでいつも投げられ、やる気にならず、試合に出ても目標がなかった。

日曜日にも練習はあったが、いつも父と一緒に私の好きな魚釣りに行っていた。あの怖い父親がそのときだけは優しかった。月曜日、柔道の大西先生に呼ばれ。「お前、きのう練習を休んで何してた？」、「釣りに行ってました」と正直に答えると、「ばかやろう」と叱られたが、先生も半分冗談のような怒り方であった。「もう休むなよ」、「はい」と応えたが、そんなわけはない。次の週、また釣りに行き、また怒られる、その繰り返しであった。しかし転機が訪れる。中学 2 年生の時、1～3 年生で出場する団体戦の試合が宇和島市であった。その時、非常に強い選手（私の同級生は誰も勝てないような相手）と対戦することになった。試合が始まり、相手が私のほうに向かってくるところを、ひょいと沈んで背負い投げ、観客も私もびっくりの一

本勝ち。試合後、真剣な顔をした先生から、「あの選手、知ってるだろう？　お前が勝ったんだぞ。これからは絶対に練習を休んだらいかん」と言われた。私自身も、「あれ？　俺は結構、強かったのかな？」という気にもなり、次の日曜日、葛藤はあったのだが先生の真剣な顔が頭に浮かんできて、父親からの釣りの誘いを初めて断り柔道の練習に行った。その日からは一度も休まず頑張ったのだが、もともと弱い上に休んだ時期が長かったので、良い結果は出なかった。県大会は 2 回戦負けで、宇和島市で優勝したのが最高成績であった。

3 年生のある日、先生に呼び出され、「お前たちの中で新田高校に行きたい選手はいないか？」と聞かれたが、皆は顔を見合わせて黙っていた。新田高校は強い選手の集まりで自分の行く所ではないイメージがあったのだ。その後、先生は私に対して、「浅見、皆の手前、あの場ではああ言ったが、新田高校はお前を欲しいと言っている。新田へ行って柔道やってみろ」と言われ新田高校に行くこととなった。私は筑波大学 2 年生の時に全日本ジュニアで初優勝したのだが、挨拶のため先生の所へ行った際、「分からんもんじゃのう。こっちから頼んだ生徒が一番結果を残したのう」と言われた。新田高校が私を欲しいと言ったのは嘘で、先生が頼んでくれていたことがわかり驚いた。ありがたいだまされ方をしたことが、私は心地良くなった。「このような先生になりたい」という思いが強くなったのが、教員になった大きな理由である。

中学当時の練習は、汗をかくとスタミナが落ちるので水は飲むなと言われた。また、腰高になり受けが弱くなるのでランニングは駄目だと言われ、うさぎ跳びばかりやらされた。本当に理不尽な練習であったと思う。新田高校柔道部での上下関係は厳しかった。その時代はどこの学校でも、どの競技でもそうであったが、3 年生は神様、2 年生は平民、1 年生は奴隷。何時間も正座をさせられ、殴られるなどは当たり前。そんな場所だったが、父親の所よりはまだましだという気持ちがあった。柔道を途中で辞めれば家に入れてくれないのは分かっていたので、3 年間続けることが目標であった。ところが、私が 1 年生の時、いつも一緒に練習していた 2 年生が全国優勝した。確かに強いのだが、手も足も出ないという程ではなく、その先輩が優勝したので、「うそやろ？　それなら俺だってできるかも」と思い、「柔道を 3 年間続ける」という目標が、「全国優勝を目指す」に変わった。しかし 2 年の時には全国 3 位。階級を上げた、3 年時も 3 位であった。

高校を卒業して筑波大学入学した。私と同様に体の小さな同級生と四畳半で 1 年間生活することとなったが、その出身校も厳しい高校で、よく話が合った。ただ、大学では 1～2 週間経っても正座すらない。「おかしいなあ？」と二人で話し合った結果、「油断させてるんや。絶対厳しくなる。油断するな」と言っていたのだが、1～2 カ月たっても何もないため別の意味で、カルチャーショックがあった。「これじゃ、自分でやらないと強くなれない」と感じたのを覚えている。大学では 2 つの目標を立てた。一つはチャンピオンになること、もう一つは団体の選手になることだった。1 年生の時には練習試合で利き腕を骨折し、半年ほど休んだが、次の年、全日本ジュニアで優勝した。その時は優勝した喜びと共に、得意の背負い投げが掛けられない、不安を払拭することができた。団体戦では準々決勝、準決勝、決勝の 3 試合で出場を果たした。決勝戦では東海大学に敗れ準優勝だったが、非常に思い出深い試合となった。団体戦に出してもらったのはうれしかったが、準決勝で膝、決勝で足首を痛めた。翌日から、両足が動かない状態が 1 週間ほど続いたが、痛いけれども心地良い思い出となった。

大学卒業後、誘いを受けて母校の新田高校へ帰ることになった。昔の悪い慣例が残っていたので、それを

変えなければならない。例えば、練習のため他校へ合同練習に行った。柔道着に着替えたが、別のライバル校がやって来ると先生が、「集まれ。帰るぞ」と言う。ライバル校に手の内を見せないためであったようだが、みんな練習をしたがっていた。また、レギュラーとそれ以外には差を付けるのが当たり前になっていた。試合前になるとレギュラーは早めに練習を止め、すき焼きなどを食べに行く。そのような差別は、「良い思いをしたければ強くなれ」という感覚だと思うのだが、これでは強くならないという思いが強かった私は一つずつ悪しき伝統を変えていった。

指導者になって大切だと思うことが何点かある。「預かった生徒は最後まで面倒をみる」という思いは当初からあった。入部した1年生は5月ごろになると辞めたくなる。ある生徒がやって来て辞めたいと言うと、「先輩方は6月が総体だ。ここに賭けてるんだぞ。その前に辞めたらいかんだろう！　総体が終わるまでは頑張れ」というと、総体が終わるまでは一応頑張る。実際に総体が終わって辞めたいと言ってくると、「四国大会がある。全国大会もあるじゃないか」と言っても、まただまされると思うのか、もう通じない。そして7月頃お父さんがやって来て、「先生、辞めさせてやって下さい」と言う。よく話を聞くと、柔道部を辞められないなら学校を辞めると言っているのだ。そこで私は、「お父さん、私は聞いています。彼は家でバイクを乗り回しているでしょう」と。それに対してお父さんは、「私が責任を持ってバイクをやめさせるので、お願いします」と言われ、仕方なく退部を認めた。しかし、生徒はバイク事故により8月に死んでしまった。それを知った私は、「ぶん殴ってでも辞めさせるべきでなかった」という気持ちになった。そのようなこともあって、生徒を続けさせるためには時間と手間を惜しまないよう心掛けている。

リオデジャネイロ五輪女子柔道監督、仙台大学の南條教授は私の教え子だが、高校時代の同級生に問題の多い生徒がいた。その同級生から電話が掛かり、「先生、お話があるんです。電話ではちょっと…」と言うのですぐ自宅へ来させたが、何も言い出さない。そこで私は、「柔道を辞めたいんか？」と聞くと、「はい」と即答したので、「ピー（厳しい）指導」をした。少し間を置いてわざととぼけて、「お前、何しに来たんやった？忘れた、何やった？」と言うが彼は何も言わなくなった。私が、「そうじゃ、思い出した。柔道部、辞めたかったんやのう」と言うと、また即答で、「はい」と言うから、再び、「ピー（厳しい）指導」を入れた。そしてまた間を置き、「お前、何しに来たんやった？」と言うと次に彼は、「柔道部、頑張りたいと思います」と言ったので「頑張れ！」と言って帰した。しかし、その後、彼がまた学校を休んだので実家を訪問した。呼び鈴を鳴らしても出なかったが、勝手口が開いていたので、迷ったが家に入って中を見回すと、玄関先のベッドの上で布団をかぶっていた。そこで私は彼の上に乗りかかり、「こらっ。ピー（厳しい）指導」である。後になって考えると、布団をかぶっているのが彼かどうか確かめていなかった。おじいさんだったかもしれない。勝手に家へ侵入し、布団の上へ馬乗りになる、警察に通報されても仕方ない状況だった。「これは指導と言えるのか」「そこまでやったら駄目だろう」と言う人は多いと思うが、それほどまでに一生懸命、必死になっていたのは事実である。その生徒は高校3年間、柔道を続け、無事卒業した。

別の生徒の例では、「辞めたい、辞めたい」と言って電車に飛び乗って実家へ帰ってしまった。それを私が連れ戻す、また帰って連れ戻す、それが何回も続いた。それに対して保護者の方から、「先生もう辞めさせて、勘弁して下さい」と言ってくる。メールで、「辞めたい、辞めたい」と何十回も伝えてくることで親が耐えられない状態だった。そこで私はその生徒に言った。「今辞めたら2年生や3年生と学校でいつも顔を

合わすが、その都度隠れるのは嫌やろ。先輩にちゃんと納得してもらえ」と言った。練習中の部員を集めて、「話があるそうなので、〇〇の話を聞いてやれ」と言って生徒だけにしたが、しばらくして拍手が起こる。その後、本人が来て、「頑張ります」と言った。私は、「辞めても良いと言ってるじゃないか」と言ったら、「いや、先輩方の気持ちはよく分かりました。頑張ります」、「本当か。今度はもう辞めれんぞ。お前がやると言ったんだ。良いのか？」と聞くと、「はい」と返事をした。彼は最後まで辞めなかった。その生徒は今、ある会社の取締役になっている。

見せしめという悪い例もあるが、絶対真似しないで欲しい。携帯電話が使われ始めた頃、学校では使用禁止であるにも関わらず、授業中に使う生徒がいた。この生徒に対しては強く叱っても大丈夫だという自信があった。父親は私の教え子、母親も良く知っている。柔道の朝練が終わって、その生徒を本気であると伝わるように（心は冷静）叱った。その後、全員が携帯電話の使用をやめた。年が過ぎ、その生徒と一緒に飲む機会があった。「携帯電話で叱ったことあったなあ」と言うと彼は、「先生、俺はあの時、本当に辞めようと思いました」と。「何を言ってるんだ。お前だったら厳しく叱っても大丈夫。その意味でお前は信頼された選ばれた人間なんだ」というと彼は「ありがとうございます」とニッコリ笑った。このような指導もあったが、やはり見せしめ的指導は心が痛い。

〔教員としての姿勢〕生徒を絶対に辞めさせない。そのためには行動を共にする、全員に目配りと気配りをする。選手になれた生徒には目標があるので、よほどのことが無い限り辞めたいとは言わないが、選手でない生徒は目標が無いので、いつ辞めたいと言い出すか分からない。弱い生徒、つらいと思っている生徒のことを、言葉は悪いが、「お風呂の栓」と呼んでいる。栓が無くなれば風呂の水は全て無くなる。部が崩壊する危険性、次から次に生徒が辞めていく危険性もある。弱くても一生懸命に頑張っている生徒、ここに目を向けてやる必要があると思う。そのためには自分が休んでいてはいけない。奉職間もない頃、熱が 38 度 5 分程度あり、おう吐下痢がひどくて学校を 2 日ほど休んだことがある。ただ、後で考えれば、無理をすれば休む必要はなかったと思い、それ以後、冠婚葬祭以外は体調が悪くても休まないと心に決め、生徒に言い続けた。「俺は休まない。俺が休んだときは死んだか、意識を失って救急車で運ばれたか、そのどちらかだ」。実際、かなり体調が悪くなったことは何回もあったが、自分で宣言した以上、休まなかった。最もひどかったのは 20 年位前、39 度 5 分が 4 日間続いた時である。インフルエンザだったのかもしれないが、受診していない（点滴は打った）ので分からない。そのようなことで 35 年ほど休んでいない。指導者が言っていることと行動が折り合わないと、生徒からの信用は得られないと思う。

才能は皆が持っている。努力を継続できる力が才能であるが、センス（感覚）はみんな違うと思う。私の次女（柔道 48kg 級で 2 回世界チャンピオンとなった）は 3 兄弟の中で一番感覚が悪かった。キャッチボールをしてもうまくできないし、バドミントンをしても空振りしていた。他の 2 人は上手かったので、「なぜ次女だけが。かわいそうに」と思ったこともあったが、彼女は「できるまでやる」という才能があり、これが力となった。例えば、普通の子は 10 回、センスの良い子は 3 回でできる。センスの悪い子は 15 回やってもできないので、16 回目にできるかもしれないのに止めてしまう。15 回やったとしてもできない子は、できた子と勝負にならない。しかし、できない子ができるようになったときに初めて回数（努力）が生きてくる。柔道であれば、努力の時間が長いほど、やった回数が多い程競り勝っていることは間違いない。100 メート

ル走などは無理だと思うが、柔道の場合はセンスが無くてもチャンピオンになれる数少ない競技の一つだと思う。

高校時代は通過点だと常に思うようにしている。生徒が高校時代に結果を残せば、その指導者の名前が上がるが、高校時代は結果を残せなくても大学（実業団）で結果が出れば、それで良いと思う。指導者は生徒が将来的に伸びるように考え、指導してやらなければいけない。大学、あるいは実業団で強くなれば、それは世界につながっていく。「上のレベルで優勝したときに心から喜べる指導者でありたい」と他の指導者とも常々話をしている。ある競技を初めて受け持つ先生もいるが、その先生は素晴らしいと思う。本校のバドミントン部は全国的に活躍しているが、初代の顧問は元柔道の先生である。その先生が体育科の部を辞めた生徒を集めてバドミントンを始めた。最初は同好会、次に部になって、もう一人の柔道部卒業の先生にお願いして、二人でバドミントン部を強くした。やる気があれば経験は関係ないのかなと、その熱意が生徒に伝われば生徒はどんどん強くなるのだと思った。

昔の指導者と言えば、「文句を言わずにやれ。こうやるように決まってるんや」という感じであった。これでは指導者として失格であると言わざるをえない。なぜやる必要があるのかを本人に理解させ、その上でやらせることがより効果的である。また、嘘の気持ちは通じないし、生徒に分かってしまう。本気で、本音で迫ってやること、これが大事だと思う。平等に接することは当然であるが、柔道の場合は男子と女子がいて性格は、全然違う。一対一で 2～3 時間ぶっ通しで練習したこともあるが、男子生徒の場合、「俺が相手じゃなくて良かった。あいつ可哀想」という感じである。一方、女子生徒の場合は、「なんで先生はあの子ばかり相手にするの」という考え方をする。特に女子の場合は全て平等に行わなければならない。それが 3～4 人であれば平等にできるのだが、10 人を超えるとさすがにできない。そのような場合は全く行わないことにしている。そのようにしないと女子の人間関係に問題が生じるのではないかと思う。

女の子はかまってやる必要がある。試合当日、見るからに緊張し青い顔をしている選手がいた。私は、「お前、どうした、青い顔をして！ははあ、朝鏡を見たんやろ？あれほど鏡は見るなと言ったのに」という冗談を言うと、しばらくして理解し、「先生、ひどい」と答えて冗談が分かってくる。そして、もう一押し、「ひどくない。お前は結構かわいいぞ」と言ってやると、「モ～」と言いながらニコッと笑って緊張が少し緩んでくる。緊張したままでは良いパフォーマンスができないので、そこを和らげるのも指導者の役割である。これは失礼な話かもしれないが、女性の涙は 120%嘘だと思っている。全国大会の準決勝で負けた時、皆から見える所で泣いているので、「嘘泣きするな。みんなの前で泣くのは見せるためのパフォーマンス、本気じゃない。本当につらいならトイレにでも行って一人で泣け」と言ったらぴたっと泣きやむ。「やっぱり」と思った。

個性を尊重して型にはめない。これは大事だと思うが、全く型はめないのも駄目だと思うので、下（最低）だけは決めてやる。「これ以下は駄目。これは絶対に許さない！」というルールを決める。周りを囲んでしまうと逃げ場が無くなり、生徒が潰れてしまう。プライド、意地、見栄などは誰でもあると思うが、これを捨て切らないと本物の指導者になっていけない。三位一体という言葉があるが、生徒を育てるためには五位一体でなくてはならないと思っている。指導者、生徒、保護者は勿論であるが、OB・OG の力と、もう 1 つ、地域の協力（地域に愛される）必要である、「よく頑張ってるね」と協力してくれるような関係のでた部は

非常に良い結果を残す。そのような学校は本当に素晴らしいと思う。

最後、「人として」という視点で見ると、感謝、素直、謙虚、反省、の４つが大事だと思っている。まず、誰に感謝するのかを聞くと大抵は親や先生の名を挙げる。当然嘘ではないが、基本は「存在」への感謝、今こうして存在していることへの感謝である。素直というと、「はい。はい」と言っていれば素直だと思う指導者もいるが、これは全くの間違いである。何を言われても、「はい」としか言わないなら本当は聞いていないということである。本当に聞いているかどうか、ときどき聞き返してやる。疑問が出たら、「先生どうしてでしょうか？」と聞いてくる、それを受け付ける指導者でないと駄目だと思う。「うるさい、黙っとけ。言われたとおりやったら良いんだ」というのでは指導者の負け、ただの勉強不足である。

勝敗や失敗・成功に関係なく、謙虚さが無くなった時点で成長が止まると思う。結果がどんなに悪くても、決して後悔はしない、むしろ後悔してはいけないと思う。次に進むため必要なものは反省である。プラス思考、目標を立てることもトレーニングできる。人間はだいたい悪い考えが出てくるため、「負けたらどうしよう。親も見に来てくれているのに恥ずかしい」と考えるのが普通であるが、それをトレーニングによって変える。答えは最初から出ているので、試合前に心配は絶対しない。「負けたらどうしようと心配するが、では、負けたらどうするんだ？」と聞くと、「また次に勝てるように頑張ります」と答えるだろう。すでに答えは出ているのだから、悩む必要はないと言ってやる。一生を賭けているようなオリンピックレベルの選手は別だが、高校生レベルの場合は負けても次につながる。従って、休む暇なく、悪いときほどすぐに動くけるように持って行く必要があると思う。

相当な苦労をした徳川家康は良い言葉を残している。「不自由を常と思えば不足なし」、「及ばざるは過ぎたるより勝れり」、子供は不便をしているほうがいろいろ考える。よく、「自他共に認める」と言うが、自他ともに認める努力は普通、当たり前である。オリンピック選手の場合、他は認めるが自は認めない。他人からすごい練習をしていると見られても、「これでは勝てない。まだまだです」と本人は言う。これが世界に通じる選手だと思う。一番困るのは、自は認めて他は認めない、「俺は頑張っている。もうこれ以上できません」、「そんなわけないだろう」という選手は伸びる可能性がない。逆に、自分がさぼっていることを認めている選手は、心を入れ替えたら一気に変わる。

自分で壁をつくる選手もいる。外から見ると大したことのない壁であっても、自分がつくった壁はどうしても破れない。周りがつくった壁に対しては自分が、「よし」と思えばなんとか破れるので、自分で壁をつくらないことが絶対である。公私混同せず、必ず公を優先させることは当たり前のことである。私は自分の子供の試合を見に行ったことは一度もない。娘が出場した東京・パリの世界選手権よりも新田高校の練習のほうが公であり、大事という考え方であった。

最後に、指導者は決して見返りを求めてはいけない。どれだけ指導に力を注いでも、手の平を返すような生徒、保護者は必ずいて、私も若い頃、悩んだことがある。「嘘だる？　これだけしてやったのに」という考え方、そう思う事がそもそも間違っている。「これだけしてやったのに」ではなく、相手のため以上に、自分のためにやっているのであって。相手がどう思おうと関係ない。例えば、外国へ試合に行く選手や、新婚旅行の時に、せん別を渡して、「何も買ってこなくて良いよ」と言いつつ、少し何かを期待することはないだろうか。そのような思いを捨てた上で何か返って来たとき心から、「ありがとう」という気持ちになれ

る。見返りを求めない気持ちになると、自分自身が非常に楽になる。ただ、試合結果を知らせてこない生徒に対しては指導が必要となる。「土産は要らないが、結果ぐらいは報告に来なさい」と。以上のような指導の姿勢は生徒に直接伝わり、信頼関係が構築されるものと確信している。

生徒指導とは離れた話になったかもしれないが、少しでもお役に立てばと思う。今回の話は、「昔と違って今やったら駄目ですよ」という部分もあったが、愛情を注ぐという部分だけはしっかりと脳裏に焼き付けていただきたいと思う。

生徒指導部会　事例発表Ⅰ

「学校生活への不適応未然防止にむけて
～自己理解・個別支援・成功体験を通した取組～」

学校法人光華女子学園　学園長補佐(小中高担当)
長　者　美　里

◆　はじめに

平成 23 年度赴任以来、生徒一人ひとりの課題「生徒の困り」を教員や SC 等と共通理解をし、関わることで、生徒の好転する姿を見ることができた。細かなサインを「見逃さずに」という教員の姿勢も見られるようになり、職員室のそこかしこで、担任とコース部長や支援員等が生徒の相談をする姿が日常の風景となった。文部科学省からの委託事業も気がつけば 6 年目を迎えた。抱えている問題は深刻で力不足を感じることもあるが、毎年一歩ずつ取組を浸透、前進させることで生徒の学校生活への不適応未然防止に努めたい。

◆　京都光華高等学校の概要

講堂礼拝

学校法人光華女子学園は、真宗大谷派（本山東本願寺）前門主夫人の故大谷智子御裏方が、「仏教精神に基づく女子教育」を発願され、1939 年に創設、今年で 77 年目を迎える。その建学の精神は、「光華」の名称と校訓「真実心」に込められている。「真実心」の実践として「こうかの心」（こ：向上心　う：潤いの心　か：感謝の心）を大切にしている。5 つの光華教育（①こころの教育　②礼儀マナー教育　③伝統文化教育　④異文化理解教育　⑤言葉の力を育成する教育）を掲げ、力を入れている。また、小学校・中学校・高等学校では校種間連携のもと、12 年間の学校教育を見据えた教育内容を確立させ、21 世紀を生き抜く力、いわゆるグローバル社会で力を発揮する児童生徒の育成を目ざしている。近年「特別支援教育」「英語教育」「科学研究実践活動推進プログラム」の研究指定を受けて、平成 25 年度より毎年全国にむけて研究報告会を開催している。「外国語教育強化地域拠点事業」では、4 年間新たな英語教育を創造するために、「グローバル人材の育成をめざした小中高一貫した英語教育の在り方」（文部科学省）を主題に研究を進めており、英語教育の環境整備はじめ各種留学プログラムも充実させている。また企業や大学との連携のもと探究学習も充実させ、より深く主体的に学びに向かう生徒の育成にも注力している。

ＳＳＨ発表会に参加時のポスター発表

◆　学校生活への不適応と発達障害の可能性

不登校傾向の生徒の「学習状況の偏り」や「集団適応の困難さ」からさかのぼって見てみると、日常的に

「できない自分」「認められない自分」の繰り返しにストレスを感じたり、自尊感情が低下して集団の中で疎外感を味わったりしている等が多く見られた。また小中学校の時期にいじめ被害を受けたり、教室の中がうるさくて学習に集中出来なかったり、一時的に不登校を経験した等の生徒に、発達障害の可能性が見え隠れすることも確認できた。

◆　私学の女子高等学校での特別支援教育の意義

放課後まなび教室

6 年前に文部科学省からの委託事業として研究を始めた時、これらの研究をしている学校は圧倒的に支援学校、通信制課程の学校、定時制高等学校や各都道府県の教育委員会等が多かった。私立高等学校での支援体制の整備状況は、国公立高等学校や小中学校に比べて大きな課題がある。また、女子は男子に比べると小さな時から発達のいびつさを見逃されがちで支援も受けずに「困り」を抱えてきた生徒も多い。多くはそのしんどさから自ら殻に閉じこもる生徒もある。集団適応が困難な生徒は、学年が進むにつれて辛い経験を積み重ねていく。挫折や失敗して叱責されることの繰り返しで、いわゆる二次障害に結びついていくリスクも高い。また不適応の積み重ねは大人になっても影響を及ぼし、様々な精神病理的な課題に繋がるとも言われている。「落ち着いた女子校」ということで、軽度発達障害の可能性のある生徒の入学も増加している。生徒の困りを見抜き、「困り」の課題を先送りしないため大学や他機関との連携を密に取り組む必要がある。それゆえ私学の女子校での取組の重要さを感じた。

◆　特別支援教育の現状

高等学校における特別支援教育の必要性が提示されているが、「小中学校より公立より私学はおくれている」のが現状である。義務教育段階での児童生徒数が減少傾向にある中で、特別支援学級や通級による指導を受けている児童生徒数は増加している。発達障害の可能性のある児童生徒は約 6.5%の在籍率を占めている。学校における支援体制の整備は全体として進んできているが、個別の支援計画や指導計画の整備は 60%程度である。高等学校では、特に①「自立と社会参加にむけた教育支援の継続」②「自らの学校にどのような特別支援教育のニーズがあるのか」③「生徒本人が自己認知へのアプローチを現場の指導・支援に取り入れる」ということが求められている。

「インクルーシブ教育」「合理的配慮」「通級指導の制度化」も言葉の一人歩きでなく、具体的な取組が当たり前に進められる学校現場が求められる。

◆　未然防止にむけて

「発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期支援・教職員の専門性向上事業」（文部科学省採択）５年間の取組を通して、個別の支援を行うために「個々の生徒に自己理解」をさせながら、SST（ソーシャルスキルトレーニング）やキャリア教育を進めていくことの重要さを感じた。発達等に課題のある生徒は、生活のテンポが速く複雑な高校生活では、見通しが持ちにくい、人と違う自分に悩み始めるなどストレスが強くなり、不登校や引きこもりになる場合もある。自分の特性を理解して、自分の将来を考えさせる。そして何よりも学校生活への不適応未然防止の取組を充実させることが不可欠である。そのためにも自己肯定感・達成感を高める指導、お互いに認め合える学年・学級経営を基盤に、授業やいろいろな場面で成功体験を積み上げさせていくことに重点をおいて取り組んでいる。（「光華の花を咲かせよう・届けよう・広げよう」

の取組で「あなたのことを大切に見ているよ」というメッセージを送っている。）

◆　**具体的取組**

１．発達障害の可能性への気づき

①　「気づきのシート」やテストの答案用紙やノートから、また面談を通して、本人の「困り」の状況を共通理解し、個別の支援計画をもとに支援を行う。

②　支援員の入り込み指導等から個々の教室での状況を把握する。

③　中学校からの「支援記録」保護者や主治医との連携から状況を把握する。

２．校内体制の整備

①　支援コーディネーターを中心に校内委員会や個別ケース会議が開催しやすい組織体制を整える。

②　生徒の状況に気づき、支援に結びつけるまでの支援体制を組織図で示し校内体制を確立する。

③　スクールカウンセラー・支援コーディネーター・支援員・キャリアカウンセラーの配置をする。

３．個別支援

①　「気づきサロン」の開設

予約無しでグループや一人で、また担任と訪れる気軽な自己発見の場としてカウンセリングルームとは別に位置づけをして開設を行っている。その場は、「自己理解と適性進路を考える場」、「生徒同士が支え合う力をつける場」でもあり効果的な支援場所となっている。

気づきサロン

②フリールーム・ホットルーム・支援センターでの居場所づくり

教室に入りにくい不登校傾向の生徒は、状況に応じて、担任や支援員、カウンセラーと協議を行い、本人・保護者からフリールーム申請が提出されれば、別室での指導を認める。そこでは、SST・適性検査などを教科指導とともに行い、教室復帰を目ざしている。

別室でのＳＳＴ

③放課後学び教室

支援員の入り込み指導と本人の希望で、放課後学び教室を実施している。指導は学級・教科担任と連携し、支援員と京都光華女子大学大学院心理学科の学生が当たる。教室での授業にスムーズについていくための準備も行い、自尊感情を高め、達成感を感じる場として、計画的に実施している。

④個別支援計画・指導計画の作成と実施

⑤関係諸機関との連携（児童相談所・主治医・作業所等）

⑥合理的配慮として、本校では、座席位置の配慮、板書記録の提供、定期考査時（別室受験・定規使用・ルビ・問題用紙拡大）、読み上げテスト（試行）を行っている。

４．授業のユニバーサル化

①わかりやすい授業の進め方を研究

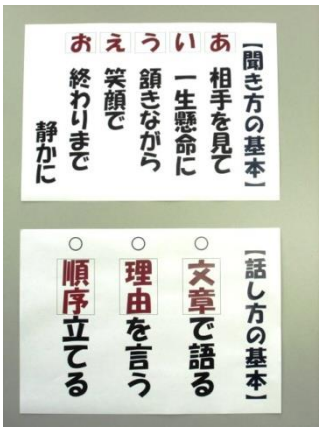
「本時の目標」と「振り返り」を全教員全教科で実施し、本時の授業の流れを明確にするなど出来るだけ具体的な物で示す。黒板の周りの整理や板書の仕方もわかりやすく工夫する。誰にでもわかり

やすく、安心して授業に参加できる環境をつくる。どの生徒にも学ぶ喜び、わかる楽しさを体感させる。障害のある生徒には「ないと困る」支援であり、どの生徒にも「あると便利」な指導方法を研究している。「授業の焦点化（シンプル）」「視覚化（ビジュアル）」「共有化（シェア）」を基本に今年度は、一歩進めて、障害特性を踏まえた授業での工夫を研究している。

②ICT 活用…電子黒板・書画カメラ・タブレット等有効活用

③授業規律の確立とルーティン

教員一人ひとりが実践すべき京都光華の「ルーティン」となるべき 22 項目を挙げて自己評価を行い、定着を目ざす。



④言語活動の工夫

全教員で「言語活動の工夫で課題解決力をつける」研究課題をもとに各教科で授業づくりに力を注いでいる。

自分の考えや思いを相手にわかりやすく伝えるために話し方・聞き方の型を提示する（教室に掲示）。また「ノートテイキング」もわかりやすく示し、どの時間でも共通した形で定着を図る。

５．特色あるカリキュラム

①対話型授業の実践

観察力・批判的思考力・言語能力・コミュニケーション力などの　総合的な「生きる力」をつける授業を実施している。京都造形芸術大学との連携授業で、具体物を用いて、そこから「見えていること」を取り出していくというプロセス「見る・考える・話す・聴く」を繰り返す中で、情報を言語化（記述）していくことを学ぶ。「答えは一つではない」開かれた課題を設定し、人とちがって良いということを感じさせる。「言えた」「わかった」「自分の答えも正しい」「いろいろな見方があって良いのだ」という成功体験を味わわせる。人と協働して「聴き合う」関係を大事にしてコミュニケーションを深めていく授業である。

②伝統文化教育（礼法・茶道・華道・邦楽・和歌・書道・着付・日舞）

③礼儀マナー教育

伝統文化教育や礼儀マナー教育は、不安の大きい生徒には大いに自信となっている。例えば「茶道」での型にはまったお点前作法の習得は、生徒の自信にもつながっている。学校外での体験学習や受験時の面接などでは、本校での礼儀マナー教育のおかげで自分たちは自信をもって望めているとの声も多い。

伝統文化教育：茶道

６．研修の充実

「発達障害」に関しての基本認識はもとより、学校全体の研修をはじめ個別また教科別の研修で教師の専門性向上を図ることが重要である。そこで下記の 4 つの観点で研修をすすめている。

①計画的な校内研修、②意欲的な外部研修への参加、③伝達研修の定例化、④おすすめ図書紹介、いずれも学んだことを、本校で実践できる提案をするようにしている。

平成 29 年度の研究課題
「達成感・自己肯定感を高める支援と授業改善」～つまずきと障害特性をふまえて～

早期支援と支援のリレー、他機関との連携、そして一人ひとりを大切にという教員の意欲的な姿勢と学校の組織力で、生徒の学校生活が充実する。以下の思いを常に持ち、日々教職員が高め合える職場環境をつくっていきたい。

「教師が変われば子どもが変わる」　「どの子も学びたい」

生徒指導部会　事例発表Ⅱ

「生徒観察からはじまる声かけ指導」

今治明徳高等学校　主幹

青　野　隆　義

１．観察する教師（私）の心の変化

以前の私は、生徒に話をする際、特にしかったり、注意をしたりするときには、「聞く姿勢」に重きをおいていた。生徒の視線が定まっているか、姿勢が良いか、手遊びをしていないか、などの点を観察し、聞く態度を改めながら話をしていた。しかし、最近はそれらへのこだわりを抑えるようにしている。

ここでいう、「しかる」とは、生徒の成長を期待し、今の言動では社会に通用しないというメッセージを発信していくことで、こちらの感情や考え方をぶつけているだけの「怒る」とは区別している。しかるときには本気で生徒と向き合い、普段の生徒観察で見つけた成長した部分を、１つはほめるようにしている。そのとき、姿勢が少々悪かろうが、視線が合わなかろうが、その場、その瞬間の態度よりも、その後、その先を考えながら指導するようになった。

聞く態度が悪いということは、私と生徒の価値観がずれているということである。私の話の内容を生徒が理解してくると、間違いなく態度や言葉遣いに変化が出てくる。時が経ち、声かけを繰り返していく中で、人間関係が構築され、互いの価値観がそろってくるようになれば、聞く態度は自然と良くなるものだと思う。

つまり、その場の雰囲気だけを見るのではなく、「そのうち気付いてくれるだろう」という余裕を持って、長い目で生徒観察ができれば、お互いに良い関係を築くことができ、指導の効果も上がると思う。

次に、生徒の問題行動の捉え方の変化である。親からの自立という発達課題に直面した子供は、親や大人に対してそれまでの従順さや甘え・依存だけではなく、時には反発や怒りを向けてくることがある。この相反する依存と反発の心理は両価的感情と呼ばれ、「求める心」と「拒む心」が同居した思春期特有のものである。そのため、この時期の子供とかかわっていくと、その何気ない表情や反抗する態度の中に、子供なりの悩みや苦しみ、そして「混乱」が見えてくることがある。

問題解決に取り組む上で忘れてはならないのは、混乱の発生は思春期という時期だけが原因ではないということである。それまでの子供の育ち方や家族関係が影響を及ぼしている、つまり、問題行動を子供なりの表現の方法ととらえ、子供の心身の特性だけでなく、家庭、学校、友人関係と関連づけながら理解する視点が求められると思う。問題の初期対応に当たっては、「悪いとわかっていながら、やってしまう」その裏にあるものは何か、という問いかけが出発点となる。

２．観察から声かけへ

私は体育の授業や部活動に於いて、まずは「集合時間」、「服装」、「指示への反応」の３点を重点的に観察する。

学校は、集団生活を学ぶ場であるので、一言で言うと「そろえる」ということを徹底し、体育の授業なら、体操服をきちんと着用して、始業 2 分前に整列できているか。気をつけや礼の号令にキビキビと行動できているか、といった点を観察する。また、指示への反応を観察するときには、こちらが指示したことへ耐えられるかどうかを見るために、あえて強めに指示をすることもある。このような指導を「態度教育」と表現できると思うが、これは子供の発達段階に応じて、身につけるべきものが変わってくる。

小学校時代に必要とされるのは、いわゆるボトムアップ式の態度教育である。コミュニケーションや、言葉のキャッチボールと言い換えることができるが、一方的ではない共感的な会話ができる能力を身につけることが必要だと考える。さらにいえば、言葉を交わさなくても、顔と顔を合わせるだけで言いたいことがわかるようなコミュニケーションができることが望ましいと思う。

中学校や高校の段階になると、トップダウン式の態度教育も施していかなければいけない。例えば部活動を通して、体力づくりや技術指導を厳しく行う中で、生徒の様子を観察したり、「明日は 7 時集合だ」といった顧問の指示に、素直に従うことができるかどうか、不服そうな表情が出ていないか、ましてや、「8 時でえんやないん（良いのではないか）？」といった言葉が出ていないか…。体だけの成長ではなく、精神面の成長をうながし、忍耐力を教える意味でも、このような態度教育を、学校生活において実践する必要がある。

ボトムアップとトップダウンの 2 つの能力が備われば、社会に出たとき、対人関係の結び方がうまくできるはずである。教師はまず、それぞれの生徒に 2 つの能力が身に付いているか、一方だけが身に付いているか、どちらも身に付いていないのかを、観察から判断し、足りない能力を補うような継続的な指導が求められる。また、部活動の際に生徒を観察する、見守る、ということには、生徒に自信をつけさせ、責任感を持たせるという意味も含まれている。もちろん、細やかな視点で生徒を見ることは必要である。ただ、教師が生徒の考えを先読みしすぎることで、生徒の可能性を潰しかねないということも、常に頭においている。

例えば、部活動をやめたいと申し出てきた生徒がいるとする。そのとき、生徒の言葉に「言い訳」が 2 から 3 割混ざっていたとしても、「本当の理由は〇〇だろ！」といった具合にストレートに追求するのではなく、生徒の言い分を受け入れ、少しの余裕を持たせて、聞き役にまわることも必要だと考える。また、試合では、勝敗だけにこだわるのではなく、“自分の力が発揮できたか”、“勝とうとする意志の下でプレーできたか”、“プレーを楽しめたか”といったことが、生徒自身で自問自答できるよう、普段の練習から声かけしていく。

さらに、「自分で決めた道は簡単に諦めない」、「必ず全力で行う」といったことを約束することも重要である。このように、生徒の首に鎖をつけて引っ張っていくのではなく、広大な草原の中で放牧するようなイメージを大事にしながら、基礎・基本を教え、生徒に自信と責任感を持たせ、正しい道へ導くことが教師にとって大切な役割なのだと考え、指導してきた。

次に、教室でできる生徒観察についてである。一日のうちで担任の先生がクラスの生徒と接する時間は意外と少ないものである。ホームルーム、昼休み、そして授業中と限られている。生徒の「素」の部分に気づき、問題行動の前兆を感じ取るためには、それ以外の場面で生徒を観察する時間を作る必要がある。そこで、生徒観察の時間を増やす、ちょっとしたコツをお伝えしようと思う。

一つ目は、少しだけ早く授業に行く。二つ目は、教室に入るとき、教室の後方から入る。三つ目は授業の

後、片付けをするふりをして教室に残るということである。誰と話しているのか、どんなことを話しているのか、顔色はどうか、身だしなみはどうか、制服が汚れていないか、ノートや机に落書きはないか、などの点を何気なく観察する。

教師の勘はけっこう当たるものである。小さな異変に気付いたら、迷わず声かけをするべきだが、その際、タイミングや言葉選びを間違えてしまっては逆効果になることもあるので要注意である。生徒の周囲の状況に気を配り、その生徒の心にスッと入り込んでいく言葉を探すように努める。必要であれば、もう少し観察を続け、ここぞというタイミングで声かけすれば、生徒から思わぬ反応が引き出せるかもしれない。

なお、教師間で情報共有を行ったり、必要なら保護者にも電話などで連絡を取ったり、家庭での様子を聞き取るとともに、保護者と問題を共有する必要がある。ここで気をつけておきたいのは、保護者から見て「この先生は我が子のことを心配し、気にかけてくれている」、「親は責められない」、「子供のために動いてくれる」と受け止めてもらえるような言葉を選ぶことが大切である。それが、保護者とつながっていくための第一歩といえる。

３．まとめ

現代は、「集団」よりも「個」が先立ち、人と人との結びつきが薄れているといえる。家庭においても、核家族化が進み、親の面倒を見るという、以前なら当たり前の事が、当たり前でなくなってきた。そのような時代だからこそ、声かけのはじまりである「あいさつ」を大切にしていきたいものである。他者を思いやる心があれば、あいさつは自然とできるようになる。また、「おはよう」の一言にも、思いやりの心がこもっていれば、何か響くものがあるかもしれない。

もう一つ、学校という集団生活の場の中で、あいさつとともに育んでいきたいのは、「困っている人を助ける精神」である。自分さえ良ければ良いという利己的な考えでは、集団のチームワークは育たず、個人の成長も望めない。自分よりも他人の幸せを優先することができ、他人のために行動できる力を身につけることが大切なのではないでだろうか。

生徒指導部会

「総　括」

今治精華高等学校 校長
中　井　　清

当部会では、「いつでも、どこでも、だれでもできる声かけ生徒指導」を研究目標として実施いたしました。

棒高跳びでオリンピックに出場された澤野大地先生の講演「夢の実現～さらにその先へ」では、棒高跳びと出会い、そして日本一、オリンピック出場という夢を追い求め、その実現のために周りの方々からのアドバイスを得て、練習に励まれ、その夢を叶えた中で、棒高跳びを続けてきて得られた大切なものは、「人との縁」と「感謝」の気持ちであると教えていただきました。

新田高等学校の浅見三喜夫先生の講演「心豊かな人間に育てる～人生を懸けた柔道指導～」では、新田高等学校の建学の精神に支えられ、生徒に目標に向い、自主性を持った練習に取り組ませたことにより、世界に通用する選手を育て、成果をあげることができたという話をお聞かせいただきました。

学校法人光華女子学園学園長補佐の長者美里先生の事例発表「学校生活への不適応未然防止にむけて～自己理解・個別支援・成功体験を通した取組～」からは、生徒の理解をはかり、生徒一人ひとりの特性を見極めて支援体制を取り、達成感、自己肯定感を高める指導の中で、成功する体験を増やすことにより、自信を持って世の中で活躍でき、行動できる生徒を育成するという話を聞かせていただきました。

今治明徳高等学校主幹の青野隆義先生の事例発表「生徒観察からはじまる声かけ指導」では、挨拶を大切にし、「おはよう」の一言、この言葉にも友達への思いやりが感じられ、そのことが友達に響くものがあり、行く行くは困っている人を助ける精神が育まれるという話を伺いました。

現在の生徒は自己肯定感を持つ子どもが少ないと言われています。多くの生徒は自分に自信が持てず、目標を立てられず、生きがいを見出せないまま生活を送っております。朝の挨拶の声かけ指導から、生徒とのコミュニケーションが生まれ、それを通して生徒の信条を理解しながら、話し合いを続け、生徒に生きていく目標を持たせる。目標を持った生徒は自主的に何事にも取り組み、結果を出せると考えています。いつでもどこでも気がついたときに、生徒に声をかけ、生徒理解に努め、励まし、目標を立て、成功体験を味合わせることが大切です。

本日の各先生方の考えも理解していただき、今後の教育活動に生かしていただければ幸いです。

学習及び進路指導部会

高大接続改革により、現行の大学入試センター試験に替わる新テストを初めて受験する生徒がいよいよ来年度、高校に入学（中等教育学校後期課程に進級）してくる。大学入学者選抜がかつてのような知識量を問う入試から思考力・判断力・表現力を中心に多様な能力・資質を問う総合的な仕組みへと変わっていく中で、学校現場が求められる資質・能力とは何か、それをどのように育成し評価していくのかを考え、試行錯誤し続ける必要があるだろう。

これからの時代は、生産年齢人口の減少、グローバル化の急速な進展や絶え間ない技術革新等、めまぐるしく変化し、先を見通すことが難しい。そのような状況の下で、自分の将来を切り拓き、進路選択のできる生徒、自立した人間として言語や文化が異なる他者と協働できる生徒を育成することが学校教育に求められている。

特に、主体的かつ共働的な学びをより重視する意識の変革が必要であり、授業内外、学校内外での学習支援も必要である。当部会では、変化が大きく、予測不可能な未来に自分を託せる生徒を育てる指導について、意見を交わし、考える場にしていきたい。また、地域づくりに取り組んでおられる加戸氏に講演いただき、未来の担い手に何を教えるべきかを考えていく場にもしたいと考えている。

１　研究目標　　こころざし高く未来を拓く生徒の育成を目指して

２　会　　場　　松山全日空ホテル　本館４階　ガーネットルーム

３　日　　程

	9 15	10	11 45	12	13	14 20	15	16 45	17
10月20日（金）	受付	開会式 講演	研究発表Ⅰ	昼食	研究発表Ⅱ		研究発表Ⅲ	閉会式	

４　内　　容

講　演

演　題「わがまちを愛し、誇れるまちづくりを～みんなでつくろう松山のまち～」

講　師　**加　戸　慎太郎**　　株式会社まちづくり松山　代表取締役社長

研究発表Ⅰ

テーマ「論文活動を通した進路指導」

発表者　**中　矢　　尚**　　済美平成中等教育学校　教諭

研究発表Ⅱ

テーマ「進路指導とＩＣＴ教育」

発表者　**和　田　　誠**　　愛光中学・高等学校　教諭

研究発表Ⅲ

テーマ「中高一貫校におけるグローバル力の育成」

発表者　**藤　本　尚　嗣**　　新田青雲中等教育学校　教諭

５　**講師・発表者**（順不同）

加　戸　慎太郎　株式会社まちづくり松山　代表取締役社長
中　矢　　尚　済美平成中等教育学校　教諭
和　田　　誠　愛光中学・高等学校　教諭
藤　本　尚　嗣　新田青雲中等教育学校　教諭

６　**運営委員・指導員**（順不同）

委員長

窪　田　利　定　済美平成中等教育学校　校長

副委員長

中　井　美　幸　新田青雲中等教育学校　教頭

委員

中　矢　　尚　済美平成中等教育学校　教諭
飯　田　惇　弥　済美平成中等教育学校　教諭
美濃子谷　知行　済美平成中等教育学校　教諭
谷　本　康　知　済美平成中等教育学校　教諭
藤　本　尚　嗣　新田青雲中等教育学校　教諭
髙　橋　久美子　新田青雲中等教育学校　教諭
相　原　彩　乃　新田青雲中等教育学校　教諭

学習及び進路指導部会　講演

「わがまちを愛し、誇れるまちづくりを～みんなでつくろう松山のまち～」

株式会社まちづくり松山　代表取締役社長

加　戸　慎太郎

本日の話の内容は、皆様が普段過ごしている環境とは違う話であるが、どのようにすれば世の中がより良くなっていくか、自分の周りが良くなっていくかということのヒントはあると思っている。

ポイントは世代である。この世代がこんがらがって、ねじれている。例えば市町単位、例えば銀行、役所、メディア等々でも非常にねじれは起こっている。もしかすると学校の先生の間でも世代間のギャップとかコミュニケーションの違い、考え方の違いがあるのではないか、と思いながら話をするので、聞いていただきたい。

はじめに、非常に大事なことを話しておきたい。私は 35 歳である。平成元年のときに小学校 1 年生、平成 6 年のときは 6 年生であった。もうお気づきになられたかもしれないが、平成 6 年頃からゆとり教育という教育課程が全国に一斉導入されて、私が通っていた小学校でも 5 段階評価の評定が三重丸・二重丸・一重丸に変わった。

何を申し上げたいかというと、私はゆとり教育を受けているのである。これはゆとりが良いか悪いかという話ではなく、ちょうど狭間というか、上の方と下の方のちょうど真ん中に私がいる形という説明である。そしてこれをなぜ話したかというと、商店街とか地域の方々、経営者の方と話をするときに大抵同じような「世代間」という共通点があるので、それを踏まえて話をしたいからである。

父ともよく話すのだが、「そんなのは俺らの若い頃、いっぱいあったよ。世代なんか関係ない。」と言われが、経済的なことから言うと、人口が増えていった社会から減っていった社会に確実に変わっているし、父の世代は少なくともごはんが食べられない、飢えを知っている。一方で、私もそうだが、基本的には目の前に食べ物がいっぱいあり、物であふれている。そういう意味ではかなり時代背景も変わっているし、経済的なバックヤードも変わっている。この状況下で、私も今、地域のことで全世代を巻き込んで様々な活動を行っているので、その中で気づいたことや、やってきていることを聞いていただき、参考にしていただければと思う。

私は株式会社とかげやという創業 71 年目のアパレル会社を祖父から受け継いだ三代目社長である。家業は洋服屋ではあるが、洋服屋は昔に比べて売り上げも下がっている。そこで私が帰ってきてから何をしたかというと、第二の創業という言葉を使い、タリーズコーヒーと、宅配水のビジネスを始めた。ボトルウォーターという、お湯と水がすぐ出るビジネスであるが、これを高知でも展開している。高知だと朝倉に事務所がある。そのようなことをやりながら、だんだんと町の中に入っていった。

松山に帰ってきた理由は、父が胃がんになったからである。私の兄は優秀で、当時東大の研究室に在学中だったため、先に社会人になっていた私が帰ってきた。

このとかげやという会社で、18 歳高卒のアルバイトから私が生まれる前からいる社員までに日々接しながら社長をしている。つまり、いろいろな世代の従業員と関わりながら、仕事をしている。

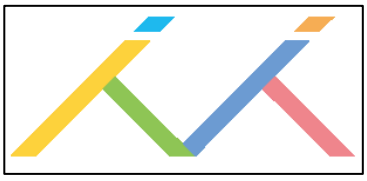
皆様はまちづくりという言葉にどういうイメージを持たれているだろうか。私は最初、うさんくさいと感じていた。まちづくりと言ったら何でも許されるような雰囲気が世の中にあって、まちづくりで地方創生と言うと「それで？」となってしまう。私も実はそのような疑問を感じつつ、今回のように講演するときには、「私たちはまちづくりをこのように考えていますし、結果的に今日お話する「人」というものが全てだ。経済的な話も考えていかなければいけない」ということで話を進めていく。

「まちづくり松山」自体は平成 17 年設立の株式会社なので、もう 12 年経っている。私が松山に帰ってきたのが 8 年前なので、設立後に帰ってきた。まちづくり会社の取締役になって 6 年目、代表取締役になって 4 年目である。最初の頃の会社は、先ほど申し上げたようなイメージに近いまちづくり会社で、どちらかというと商店街のマネージメント会社として立ち上げていた。それが中心市街地活性化基本計画で中心市街地を活性化する、という計画を内閣府が認定して、「支援します」という話が出てきたときに、銀天街、大街道と「まつちか名店会」になった。この後、行政や地元金融機関が出資して、公的な位置づけを持った会社になっている。

株主構成は、松山市、商工会議所、伊予鉄道、伊予銀行、愛媛銀行、愛媛信用金庫、そして商店街というような構成になっている。松山の中心市街地という場所は活性化基本計画を松山市がつくっていて、道後エリアから JR のエリア、そしてお城の城下のエリアを指定されている。比較的全国においても広めの中心市街地認定区域だと言われているが、こちらを活性化するための国交省系のまちづくり会社として公的に認定されているのが「まちづくり松山」である。正会員は「まちづくり松山」と商工会議所、そこに松山市がついて三位一体となって中心市街地を活性化するという、一つの原動力のある会社ということが「まちづくり松山って何？」というときの説明になる。

ピンとこないかもしれないし、ついていけない話になるかもしれないが、要は半官半民でもあるということである。そして、後で申し上げるが、この株式会社というのはこのような考え方でやっているので、「皆さんどう思いますか？」ということと、「じゃあこの会社は一体何を目的にやっていますか？」という話である。そして「じゃあそのために何をしなければいけないか」というところで「人」というキーワードが出てくるので、聞いていただければと思う。

これ（右）がまちづくり松山のマークである。



「まちづくりとは何なのか」。これをきちんと考えないと、目的が変わってしまう。単なる箱で、補助金を取ってきて、誰かの言うことを聞いて右から左にお金を流して、つぶれたって知らない。いわゆる良くない半官半民である。

来月、内閣府で講演をしてくるが、ちょうど 2 年前、石破さんが大臣をやっていたときにも、広島で開催された、「まち・ひと・しごと創世会議」というもので、福岡の知事と広島の知事と私が一緒に事例発表をさせていただいた。その様子を YouTube で公開されているので、よろしければ見ていただきたい。

まちづくりの「まち」とはどういうことか。人が集まる所とか、思いつく場所とか、にぎやかな場所と思

うかもしれないが、ではショッピングセンターはまちというのだろうか。ショッピングセンターと、例えばこの銀天街、大街道周辺を、「まちとの違いは何だ」ということで、私なりに考えているのは、まちというのは思い入れがある場所、みんなの共通の思い出がある場所だと定義している。

「今日、あそこで集合ね」「今日、土曜夜市あるけどどうする」「じゃあいつものあそこで集合ね」と言ったり、「ねえねえ、今日どうする」「まちに行く」と言ったりするわけである。

ただ、これは私世代前後の感覚かもしれない。若い人は違うかもしれない。世代によってまた、違うかもしれない。

ということで、少し皆さんにも考えていただきたい。つまり、思い出である。思い出は誰がつくるかというと、人と人である。人と人の距離が離れたり、くっついたり。もしくはみんなで集まったときに思い出になる。人がたくさんいるイメージがある。お母さんと一緒にかき氷を食べた店があそこにある。そういう場所が「まち」だというように私は定義している。そして、まちづくりは思い出づくりだと。つまりこれから、例えばこの銀天街、大街道というまちがなくならないためには、今の若い人たちにまちの思い出をつくってもらう。そうして人と人がつながると「M」、「松山のまち」になる。

まちづくり松山の理念が、マークになっている。

『まちづくり松山に係る主な諸団体』のなかで、松山市都市再生協議会という組織があるが、これはどちらかというと国交省系というより都市整備部系である。市内の大学が全部と松山市、商工会議所である。これにまちづくり松山も参加している。短期大学とか高等学校にも講演に行って、協力していろいろなことを話すようにしている。

その中で、ある女子校に行ったときに、「まちはなくなっても良いと思いますか」と聞くと、約 60 人中の 3 人が「はい」と言った。「なぜですか」と聞くと、「エミフルがあるから良いもん」と。エミフルというのは 300 億円くらいで造った、当時は中四国最大規模のショッピングモールである。

これに負けてはいけない、と思ったのがきっかけで、「松山って一体何なんだ」と問うようになった。

普遍的なものをどのように分かりやすく説明して、それに一体化させるか、という会社であるから、経営手法を取らなければいけないし、やはり深く考えて行わないと、みんなもついて来ないということが分かったところである。

また、愛媛大学の社会共創学部という所でたまに講演をさせていただいている。400 人くらいの前で、興味を持つようにいろいろな話をするのであるが、必ず後で学生が来る。「私たち、こういうことがやりたいです。やりたいけどどこへ行って良いのか分からなかったのです」でも、そこからなかなか続かない。

お城下松山というものがあり、一般社団法人の形を取っている。実は私はその理事長もさせていただいている。伊予鉄高島屋、松山三越、そして新聞や放送局や日本郵便、ガスとか信用金庫、いろいろな所がこのお城下エリアに何かしらの活性化をしていきたいために、「私たちはお金を出すし、人も出して一緒にやりますよ」という形でやっている組織である。ここでの体験をどんどん掘り下げて話していきたい。先ほどの「まちづくり松山」「まちづくりとは」というところをまとめるとこのような話で、皆さんにもヒントになるのではと思って話をしたい。

そもそも松山は、お城が目の前にあるが、有名なのはこのお城以外はあとは道後温泉くらいである。県庁は残ったと聞いているが、実は市街地は全部戦争で焼けている。全部燃えた。その後、ここの中心街にお金かけて造り直したのである。

本来ならこの都市整備をまちづくりと言う。そのまま発展していけば良いのであるが、今は人口が減少しているし、非常に多様化された社会によって、一筋縄の施策ではいかなくなってしまった。その中にいきなり地方創生という言葉が入ってきた。

かつて国の各省庁、環境庁が言っていたまちづくりは、「“まちづくり”づくり」である。予算を国が書いたのである。

そういう意味のまちづくりの分野からすると、国や地方行政が、主導して公共事業や企業誘致、補助金を出してみんなを誘導し、増資を誘発し、人を動かしていくことで、この日本という国をどんどん良くしようとした。

それがもし限界であるならば。一応私も現場の社長として「限界だね」という話をするのであるが、限界であるならば、では次はどうするか。地方創生という言葉が出てきて、「まち・ひと・しごと」という方向性になった。

これは全てにつながるのであるが、まちづくり、まちづくりと言っても結局民主導でやるしかない。まちづくりというものは、人がつくっていくものである。だから究極の思い出づくりだと申し上げている。

昔から行政は、毎回担当者が代わるので、そこのまち、そこの場所、そこの人に対して当事者意識が持てない。これははっきり言っている。行政は変わってしまうのである。不正が起こらないようにいろいろしているらしいのだが、当事者意識をなかなか持ちにくい。そして、当然だが、リスクがとれない。結局それができる、もしくはそういうことを後押しするためにまちづくり会社のようなものが必要である、ということを、今話しているのである。

今やれることに、本来は動かなければいけない主役の住民、市民を、まちづくり会社が後押しして動かしていく。いわゆる、みんなの思いがつくる舞台のプロデューサーになるのである。

そして、それを継続しなければ意味がない。行政は 3 年で終わりがちである。「大体 3 年まで」と言ってお金を出す。そこでちゃんと自分たちが組織をつくって、もっと続けられるようにみんなを巻き込んでいけたら良いのだが、大抵 3 年で終わってしまうことが多い。それではいけない。つまり経営という視点を持って、先を見ていかなければならない。マネージメントが必要なのである。

まちづくりの場合、地方衰退の原因はほぼ流動性の枯渇である。人とお金の流動性が東京と全く違う。人とお金が足りないのである、と言うより回っていないのである。出て行くのは良いが、帰ってくる、もしくは良い人材がやってくるよりは出て行くほうが多いという話である。

また、「Sustainability」（継続）をすることを考えていかないといけない。どんどん状況は変わっていく。根本の分析情報は変わっていっているが、手段のほうがどんどん細っていく状況だと私は見ている。

とにかくこういう形で民主導である。まちづくりはブルドーザーが造るものではない。舗装道路も舗装の車が造るのではない、ということを言いたい。つまり人だということである。

私は結構厳しい話をするが、実は新卒でゴールドマンサックスという外資系投資銀行に入社した経験から見て、日本はどういう傾向を見ていかないといけないか、ということも辛辣に考えた中で、今、目の前にいるお兄さんお姉さん、お父さんお母さん、お爺さんお婆さんに何を言えば良いかということも考えてこういう話をしている。

ここから 3 つに分けて、何をすれば人を育てられ、人が良い方向に動いてくれるのかについて、自分の体験談を基に話したい。

まずはまちづくりという中での話からだが、思い出から出発するまちづくり。まちづくりは思い出づくり。みんなが勝手に思い出をつくるという環境を整える。そういう状況であったらまちはなくならないし、どんどん活性化していくということである。

人口が増えていくと、基本的には住む人が増えるから、ここに思い出を持つ人がいっぱい増えるというイメージで考えている。人口が減っていく、もしくは高齢化が進んでいく、という形になると逆になる。その狭間でどうしようか、というときに、このように考えている。「まちは一人一人にとって大切な思い出がある場所で、人口減少があっても、みんながまちに思い入れを持っていればまちはなくなりません」。経営という言葉から言うと、課題は流動性の向上、人とお金である。

地域を活性化する、もしくはこの松山、または愛媛だけが周りに比べて競争力を持つといったとき、これだけすれば良いということをまとめると、「外貨の獲得」「地域内循環の促進」「省エネ・低コスト体制」この 3 つになる。

外貨の獲得ということを、よく聞くが、これは例えば県外の人がお金を使ってくれることである。「省エネ・低コスト体制」というのは、今まで予算があふれていて、必要ないものをどんどんくっつけてきて、つくってしまって、その維持費にまた予算を回して、ということで予算をふくらませていく。これは経産省の人と議論になった。「いや加戸さん、そういう無駄があるから経済は成長するのだ」と。それはそうだが、見直すことは必要である。人口が減っていくから人手不足になると言われている。人が減っていく中で、受けとしてのまちとか学校はどういうことを考えていかなければいけないかというと、ほぼこの 3 つになる。この 3 つを考えて流動性を向上させれば間違いない。

人に思い出を持ってもらうことが一番の目的だということと、この 3 つが実現できる施策にお金をかけようということ。あとは流動性を上げ、そして継続化できる組織をつくらないといけない。やりっ放しで、金が右から左で、3 年間だけ補助金が出るから人を雇って 3 年経ったらさようなら、それではいけない、ということを考えた上で、ここが必要だということである。

先ほどまちづくりは民主導でないといけないと言ったが、民主導であれば省エネにもなるし、実際、国のお金はそんなにいらないはずである。おそらく今、みんなが動いて得られるものよりも、借り入れというかかさ増しするほうが増えている。「かさ増ししてもタンス預金があるから大丈夫」いや、それはそうかもしれないが、普通に考えたらやはり単年度予算は黒字にして、というところである。初期投資、設備投資が出てくるのであれば良いが、というのが今の経済状況であると思うが、そのときどうすれば良いかというと、動いてもらえるのは人しかないのである。

実は後進の育成というか、そこを仕組み化できる、もしくは何かみんなを巻き込めるようなことができないかということで、先日、中心市街地活性化協議会でこの話をした。そこである方が、「実はこの前自分の息子に、『何をしたい』と聞いたら、『楽をしたい。仕事したくない』と言われた」と。今の中学生らしい。笑い話になっている時点で打つ手なし。もしくは、どうすれば良いか分からなかったと言う。

ではそういう人たちにどういうことをすれば良いか、そういう人をどう持っていかなくてはいけないか、ということを考えていかなくてはいけない。それで、月並みな言葉だが、動力は人。人材を呼び起こしていかないといけない。つまり、眠っているものを引き出し、さらに育てていく。人材が集まる流れをつくる。人とお金の流れを考える。新しい人材を受け入れる。これをしなければいけない。

私が思う「人材育成」の 3 つの要素がある。1 つ目は、言葉にすると非常にチープ化してしまうが、自分

事化していくことである。対象の人に「自分の事だよ」「人がやってくれると思うなよ」もしくは「自分がやった」と、プライドを持てるように、これをまず行う。つまりきっかけをつくってあげる。まちづくりであれば、まちづくりというのはこういうものなのだと分かるきっかけをつくるのである。

2 つ目は、円卓に物事を持っていくことである。例えば文化祭で「お化け屋敷をやりたい人」と言うと「はいはい」と手を挙げるか、もしくは「先生、私、お化け屋敷やりたいです」と言ったら、その人はリーダーである。今の時代、リーダーが 1 人できると「俺はいいや」と引く人がいる。私が知っているまちづくりの中のいろいろな世代を見ると、「はいはい。俺やりたい。」と言う人はいない。だからこのリーダーをつくるとき、見守ってあげなければいけない側が、円卓を考えておかないといけない。

3 つ目は、世代をつなぐことである。例えば 45 歳年上の 80 歳の方、そして私の父の世代、その下の世代、さらにその下の世代、私が間に挟まれて、下の世代。さらにその下の世代の方々と私は今関わっていて、みんなと話すのだが、世代同士言っていることは違うが、思っていることは一緒だ、ということが分かったので、そういう意味では世代をつなぐ育成をしなければいけないと責任感を感じている。

まちづくりと見ると、「まちづくり。ああ、しないといけないだろうね」「誰かやるでしょう」。松山のまちを歩いていて、皆さんどう思ってくれたか分からないが、松山のこの周辺、落書きがなく、ゴミがあまり落ちていない。これは行政がやっているだろうと思われる。

私はいつも思うが、まちづくりに引き込む人材を呼び込むためのきっかけづくりとして、一番簡単なのがゴミ拾いである。お城下松山という一般社団法人で、2 カ月に 1 回、大街道に 100 人くらい集まってゴミを拾う。自分のまちと思っている方は何かやりにくる。「ゴミ、意外にあるね」と。30 分拾って、「これで終わりですか。では失礼します」と帰った。その 3 カ月後、4 カ月後くらいに「加戸さん、あなたたちがやっていることは、パフォーマンスだとか、うさんくさいものだと思っていた。私はそういう目で見ていたんだね」と言われた。「それが、ふと気づいたよ。ゴミ拾いに参加したときに、たばこを拾った。自分はよく歩きたばこをして、結構捨てていた。それが、歩きたばこは絶対やめようと思った。持った瞬間に道が目に入って、あっと思った」これは自ら思っているのである。私は意図していなかったのだが、彼からすると 1 回自分が動いた結果、そこが自分のエリアになったわけである。

これはどのようなことにも言えると思うし、皆さんもそういうことをされて、学習指導にあたられているかもしれないが、要はきっかけづくりである。興味がなかった、うさんくさいと思っていることに対してのきっかけをつくる。

50 歳代後半の人。私は当時 32 歳。まちづくりではイーブンなのである。まちを見て、どうしようかと話すとき、普通は「なんでおまえが理事長なのだ。年下のくせに」と思うわけだが、まちのことで「みんなでやりましょう」と言うと、うまく回っている状況においては、自然とゴミを拾って、自然と「ありがとう」と言う人が多い。これは一つのきっかけだと思う。

「まちづくりを自分事化する」と書いた理由は、やはり今の若い方、私の同級生でもそうであるが、「そんなの誰かやっているでしょ」「そんなことに私は関心がない」「楽をしたい」と言う。「なぜ俺だけつらい思いをしなきゃいけない」「なぜ私だけ言われなきゃいけない」それは、人間であるから誰でも感じるはずである。朝起きて、ごはん食べて、「なんで食べなきゃいけないの」と言われた時、教えるとしたら「食べないと、自分のエネルギーがないでしょ」。食べられるのはなぜかというと、「誰かが運んでくれるから」ここである。誰かが運んでくれるではなくて、こういう人がいるのだと。そういうことから教えていかなけれ

ばいけない。

私もいろいろやっている中で、どうして自分はこのようなことやっているのかと思った。結局、今、人が中心の世の中になっていないということである。だから人が中心の世の中だと気づかせるため、つまり自分事化させるためにもそれはしなければいないかな、と思う。

要は、まちづくりを自分事化する。きっかけを与える。それをすると次はリーダーが出てくる。「一緒にゴミ拾いしようよ」とリーダーに言う。これも、私が実際に体験したことであるが、私は年上の方とよくこういうことをしている。それで、「あの人がリーダーやっているんだったら、私は横で他人事」という人が多い。それをなんとかしなければいけないと思ったのである。他人事にならないようにやった結果が一人一人をリーダーに据えるということである。全部作り上げた上で、「はい、テレビ見て。はい、床見て」ということをやったのである。

それは試しにやってみたこともあるのだが、いろいろな事が重なって、私が表に立たなくてもいろいろなプロジェクトが進むようになった。

なんとなく自分でも分かっている。この 1 番目のきっかけをどんどん与えていって、もっとその人たちが参加するようにしなければいけないこと、あとは自分が引くことである。自分が引いて、円卓になる。でもこの人たち、ともすればすぐにパーンと弾けてしまう。「なんであいつの前に座らなきゃいけないんだ」円卓なのでみんな一緒である。「僕は一緒以下だよ」と引いてあげる。そうしたら、「ああ、じゃあ分かったよ」という形で関わってくれる。きっかけを受け入れてくれる。そして、1 回自分が委員長をすると、自分事にできるのである。

この円卓が成功すると、次はみんなが分裂しないようにするために、真ん中に鉄の棒が必要である。鉄の棒を置いて、銅線を巻いて、電気を流したら磁石になったと思うのである。それをして、電気を継続的に流す物さえあれば、みんなが引き寄せられて集まってくる。

まちづくり松山の場合は、そういうお兄さんたち 1 人ずつに、委員長名と予算を付けてあげる。予算というのは電気を流すことである。そして真ん中で、誰か 1 人がリーダーになっていてはいけない。リーダーになっていた自分は引く。そのとき、「まちづくりは思い出づくりだから」と言っておかないと、「俺のほうが人を集めたぜ」「俺のほうが金を使わずにやったぜ」となる。そうではなくて、「理念はここだよ」と。共通言語の磁石をつくっておくのである。

とにかく最初にきっかけを与える。そうするとみんながリーダーにつき始める、もしくは興味を示す。もしくは、様子見している人材が動く。

自分から動くように仕向けてあげる。だからこっちは寛容にならないといけない。そういうことをしながら円卓にしていって、真ん中に磁石を置いておいたら良い。

担任の先生が替わったら変わってしまうことを防ぐのである。当事者意識をずっと持ってやる人がいなければいけないのだが、それを鉄の棒に変えてしまおう、というのが私の言っている話である。コイルをどうやって巻くかとか、電気を誰が流すかとか、その電力をどこから持ってくるかという話は、それぞれの指導によるかと思うが、まちづくり松山の場合は、まちづくり松山が儲けることによってお金を出す。

申し遅れたが、まちづくり松山は税金からのお金を一切もらっていない。これは全国的にもめずらしい。実は今、配当まで返している。株式会社なので自力自走をしている。

それがなぜできているかということも、実はこの磁石の仕組みに全部かかっていると説明している。とに

かく円卓、誰か1人を立ててしまうと駄目なのである。

次は世代をつなぐ話である。昔は縦関係で、「俺についてこいよ」と言ったらみんながわーっとついてきた。今は「ついてこいよ」ではなくて、別の方法があるのではないかと考えている。

8～9年前に帰ってきて、最初に話したのは、45歳上の方であった。今80歳である。その方にいろいろ話を聞いた。当時は私も分析して、生意気ながらに、「やっぱりアナログじゃなくてもうデジタルですから、デジタルのことも考えながら…」。それで、その方もきちんと立てる。「私たちが動くから指示して下さい」と。いろいろ動いたが、動くことが駄目だった。「とにかくわしの言うことを聞け」と。今の時代では言われないことだが、当時「いいか、きみは黙ってそこに座っていれば、良いことが必ず舞い込んでくるんだ。なんで黙って座っていなんだ」と言われた。

何が言いたいかというと、戦争に行かれた時代の方で、団塊の世代。団塊の世代の下になると新人類とかがいて、団塊のジュニアがちょうど切れるのが私のところである。私より上が団塊のジュニアと言われている世代で、私より下がゆとり世代。これは恐らく言葉の問題ではない。とにかく世代が違う。それで、いろいろなことを言われる。みんないろいろなことを言うが、その一人一人に聞いていった。「まちをどう思いますか？」「じゃあ若い人はどうすれば良いと思いますか」と。すると、当然だが皆さん当たり前のことを言うのである。

だから私は、「○○さん、こうですね」「これってこうじゃないですか」ということを全員に対して行った。それで、私に言う人も、実は言っていることは同じで、全員と話した結果、「みんなが言っている目的はこれですよね」と。世代とか、人によって言うことが違うけれども、コアなところは一緒なのである。

自分事にしていかないといけない。それを継続してやるように変化球を打って、みんなを引きつけながらやっていく。みんないろんなことを言うが、「でも結局言っていることはここだよね」と。「それをやるんだったらみんな一緒になれるよね」ということに持っていける。育成するときはこのことを考えて欲しい。

いろいろなことを話したが、1つでも気づきになっていただけたらと思う。

松山市は人口がどんどん減っていっている。この労働人口が減っているということが、非常に重要である。昨日、ある大学の4回生が視察に来てくれた。「松山は良い所ですね。私、ここに住みたいです。私、このまちにはいっぱい買いたい物があるし。岡山にない物がありますもん」と。逆に、20歳代の、今働いている社会人の方で銀行系の入社したての女性に言われたのが、「加戸さんが商店街やっているのは分かるし、頑張っているけど、私が欲しい物がない」と、言うことが真逆なのである。それについて考えると、世代であり、その人たちについた思い出の違いが原因である。

本当に悲しいのは、18歳、23歳、28歳で、性別・年齢別に見た松山市の社会労働人口である。平成23～25年の女性であるが、松山からざっと抜けている。

抜けるような優秀な人材を育てていることが松山の特長というか、自慢なのかもしれないが、こういう人口状態を市役所の人に見せつけた。皆さん分かってなかった。「若い人いるよ。おまえ、何を言っているんだ」と怒られた。「いや、若い人抜けていっていますよ」と。

抜けていくことを問題にするよりかは、入ってくることを考えなければいけない、ということはあるのだが、ずっとこうなっている。

このようなことを考えると、とにかく松山ベースでも、地域ベースでも、将来の自分たちが住んでいる所や、自分たちの世界がどうなるのか、ということを真剣に考える場というのがまず必要だと思う。

自分がどのように生きていくかというコアのところを、多感な時期に教えていかなければいけないと思う。それを植え付けただけで放って置いてもそこでつぶれてしまうので、そこはきちっと円卓なりで、「言うことは違うけど思っていることは一緒だよね」と言い続けてモチベーションアップしてあげることも必要である。学校の先生方がバラバラではいけないと思う。恐らく自分の学校の中でその辺りをきちんとすり合わせて、世代が違ってもとか、目的は違っても全員がリーダーであって、かつそれをどうやってやらせていくのかということをきちんとしないと駄目なのではないかと思う。

なぜこれを言いたかったかというと、まちづくり松山は、もともと 2 人しか社員はいなかった。今は 6 人。6 人いて、半分女性。新しくきた人はいろいろなことを言う。やはり何か違うなと。そのとき、ぐっと元の磁石の部分に戻す作業をしているし、磁石を作っておかなければいけない。これをやらなかったらどれだけ良い学びがあったとしても落とし込めない。なぜなら学生はもっと多感でもっと手強いからである。

今日、話ができた部分を分かっていただければと思う。

元に戻るが、やはり経営者の視点が外せない。それは、世の中をこれからどうしていくか、良いほうに導いていくかどうか、そういうことだと思う。

いろいろな人に聞かれる。「なぜ加戸くんはそんなことができたの？」「なぜなの？」と。私も途中いろいろ悩んだり、正直に言うと、やはり松山を出ようかなとか考えたりもしたのだが、子供に恵まれるうちに、やはりもったいないことが嫌いな自分がいて、自分の思い出は大切にしたい、自分が関わる上ではやりきりたい。

情報があり過ぎて、その情報が正しいかどうか分からないまま受け取っているので、子供たちは迷うのではないかと思う。まちもそうである。必要な情報を渡したいのに、違う情報から入ってくる。

自分のまちというのは自分の思い出である。まちづくり松山に何か関われば、何かやりたいと思っている人が自分でまちに関われるようにしたいのである。社会の入口だとすれば、社会で何かをするための入口に本来はなるのか。とにかく、人中心の世の中にしたい。

こうしたことをやっていると、いろいろなことを言われるが、やはり人が中心な世の中で、人から得られる感動が一番だなと思っている。それは若い頃に相当な給料をもらって、いろいろ遊んだからかもしれない。でも今は給料も関係なく、むしろ無賃労働をしているのであるが、そういうことをしながら目の前の子供たちの笑顔、親子や職員の笑顔を見ている。自分が幸せにならないと家族も幸せになれないし、家族が幸せではないのに会社を幸せにできるわけがない。会社が幸せではないのに、自分が幸せになることはない。この原則を逆転させないように、情報リテラシーの教育であるとか、そういうことをしなければいけないのではないだろうか。

学習及び進路指導部会　研究発表Ⅰ

「論文活動を通した進路指導」

済美平成中等教育学校　教諭

中　矢　　尚

まず、自己紹介から。メーカーエンジニアを経て、本校勤務 21 年目＝教員生活も 21 年目である。開校当初から勤務している教員が私を含め 3 名。まだ、新しい学校である。

本研究集会では、俳都松山らしく、発表者がそれぞれお気に入りの一句を紹介してから発表に入るという趣向になっている。子規漱石極堂生誕 150 年を記念して、正岡子規の句から「初恋の心を猫に尋ねばや」を紹介する。季語は猫の恋、ということで春である。子規の恋愛事情はよくわからないようであるが、どういった気持ちで読んだものだろうか。なお、奇しくも本日発表の 3 校は今年の俳句甲子園全国大会に出場した愛媛県の私立 3 校でもある。

本校は済美学園（1901 年創立の 116 年目。女子校だったが 100 周年で共学化）の 3 つめの学校（済美高校・済美幼稚園）である。学園名の由来は『春秋左氏伝』にある「世々その美を済し、その名をおとさず」（父祖の業を受け継ぎ、良いことを成し遂げるという意）から。『春秋左氏伝』には「済美」の少し後に元号でもある「平成」が出てくることから済美平成（さいびへいせい）とした。

本校の座標について。県立トップの松山東（正岡子規を輩出）があり、中学受験としては愛光、愛媛大学附属がある中で 1997 年に開校した。1 期生 65 名のスタートである。松山エリアでの男女共学 6 年一貫校は初めてであった。その後、県立松山西中等教育学校、新田青雲中等教育学校ができ、松山でも中学受験の認知度が上がるとともに少子化の中、生徒獲得にも日々、努力している。

本校の沿革であるが、1997 年に定員 80 名で開校し、6 学年揃った 2002 年に中等教育学校となった。中等教育学校としては、全国 9 番目と聞いている。2007 年 11 期生から定員 120 名とした。特進などのコース制はなし。4 年から英数国は習熟度別（AB）をとっている。寮はないが、JR の特急を使った遠距離通学生もいる。入試としては、一般入試の他に、帰国子女入試、特別資格入試（英検 3 級）を実施している。

進学実績については、学校案内を参照されたい。今春、2 年目の東京大学推薦入試に男子 1 名（教育学部・文Ⅲ）が合格し、一般前期（理Ⅰ）とあわせて 2 名の合格であった。難関大学（旧帝、東工、一橋、神戸、国公立医学科）に何とか定員の 1/4＝30 名は死守したいと考えている。

6 年間を、基礎期（1・2 年）充実期（3～5 年）発展期（6 年）の 3 ステップに分けている。

進路課の仕事としては、3 年：東大ツアー（希望者）、4 年：学部説明会、外部講師の講演会、文理選択、5 年：オープンキャンパス、講演会などである。5 月に進学の手引き、6 月に合格体験記の 2 冊を発行し、全校生徒に配付している。

総合学習は、基礎期で、英語プログラム（全員×3 日間）、スキットコンテスト、学年活動（職業レポート、エッグドロップ、ビブリオバトル等）であるが、まだまだ試行錯誤である。2 コマを教科と学年団で分担して

いる。充実期では、3 年：論文活動、4 年：海外研修旅行（全員。1 週間。現地校との交流が 1 日ある）、事前準備としてイングリッシュキャンプ、稲穂の里（棚田保全×米作り体×多様性を学習。NPO 法人なもし開縁隊に協力いただいている）等を行っている。

本発表の主題である論文活動について述べる。トップの強い意向で始まったもので、開校（1 期生）以来、教員全員が 3 年生全員を指導するというスタイルは変わっていない。トップダウンでないと難しい取り組みだろうと感じる。教員 1 名あたり生徒 3 から 4 名を担当し、テーマは各自に選ばせている。当初 10,000 字であったが、現在は 8,000 字を課している。時系列では、2 年 3 学期にテーマ決定、3 年 4 月指導教員発表、中間締切を経て、9 月最終稿を提出する。A4 版にまとめた要旨も作成させている。その後、全員発表会（2 分 30 秒×120 名）を行い、これを 2 年生が聴講する（次年度の論文活動のスタートになっている）。校内選考で選ばれた優秀作品（6、7 本程度）が 10 月に全校生徒の前で、優秀論文発表会（10 分程度）に臨む。10 月の平成祭（文化祭）ではポスターセッションを行う。執筆者に質問して小レポートを書くという宿題が 2 年生に課される。その後、要旨集を発行して終了となる。

Fig. 1 全員発表会（スライド 4 枚程度）

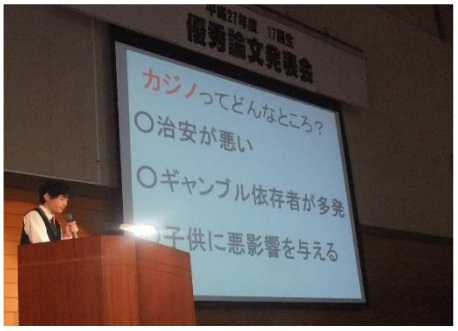


Fig. 2 優秀論文発表会

Fig. 3 平成祭（文化祭）でのポスターセッション

最近の優秀作品発表から 8 分程度であるが発表（テーマ：「LGBTQ から考える多様性の重要さ」）動画を 1 本ご覧いただきたい（省略）。この「LGBTQ から考える多様性の重要さ」にはいろいろと考えさせられた。学校でできる教育プログラムまで踏み込んだ論文であり、学校としての宿題をもらったと受け止めているが、まだまだ何もできてないのが現状である。

また、校内選考での優秀・佳作（15 名程度）の中から、何本かを手直しさせて翌年の旺文社学芸サイエンスコンクールに応募している。12 年で 20 編の入選（人文 12・自然 8）があるが、応募については開拓の必要があると感じている。

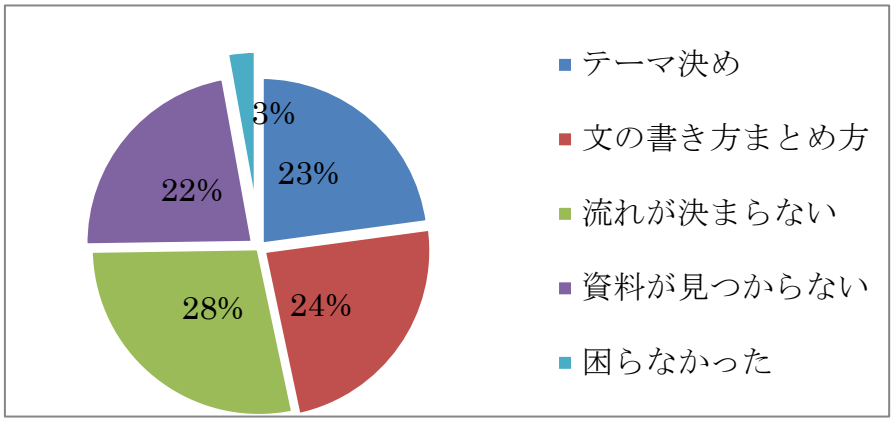


Fig. 4 同級生に聞いた「論文で困ったこと」（n＝109）

もう一つ、生徒の論文から「良い論文を書くには」を紹介する。論文活動における生徒の声がわかると思われる。過去の優秀論文を分析し、

同級生に「お困り度」「論文は何のため？」、卒業生に「論文の意義」をアンケートしてまとめたユニークな作品である。

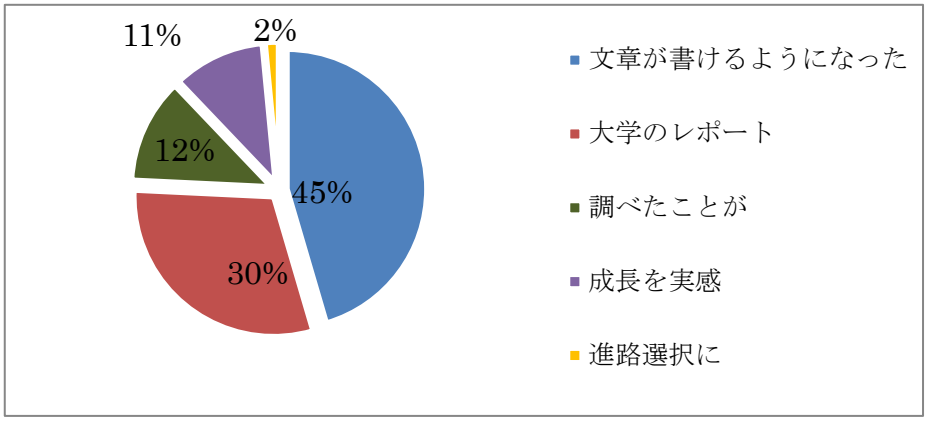


Fig. 5 卒業生に聞いた「論文は役に立ったか？」（n＝73）

本校の論文活動が、強力なトップダウンで始まったことは活動の継続につながった。教員負担も小さくないため、いろいろな声がある中、継続するには強い意志がどこかに必要である。

また、「師弟ともに学び合う姿」を理想として始まった活動でもある。担当するテーマは、学年団がマッチング（一応、教員に希望アンケートあり）するため、全く接点のない生徒と活動する機会にもなる。教員の専門や興味と関係ないテーマであっても、生徒に「ともに学びあう姿」や「教員の学ぶ姿勢」を示すことの意義は小さくない。もちろん、ここら辺りについては教員間の温度差も実際にはあるが、何とかこういった意義を共有できるように連携していきたい。

論文で得られる教育効果が大きいことは教員間でも共有できていると思われるが、具体的な効果については、教員によって説明が異なるだろう。私見を述べると、校訓「自律　創造　対話」の具現化だと考えている。締切を厳守し、論文の内容・質に妥協しないという自律、自らのオリジナルな意見の創造、自分や他人・先人・文献との対話。これらを通じて、校訓を体現する人物に近づくのではないかと信じている。

効果は大きいと前述したが、定性的な話しかできないのも事実である。感じる効果には、「書く力がつく」「継続して考える環境に向き合う経験ができる」「伝えることの設計／施工を経験できる」といった表現になるだろう。特に、最後の「設計／施工を経験する」ことは、次にそういった必要に迫られたときに威力を発揮してくれると考えている。そういった意味でも、全員にハードルとして課すことの意義は大きい。手間はかかるが、グループにせず、個人活動（1 対 1 での指導、執筆）にしているため、全員にきちんと負荷をかけられていると考えている。

今後の課題は「これで終わらせないこと」に尽きる。より深い学びへつなげるには、せっかく書いた論文テーマや表現活動を次につなげるには、受験そのものへ直接つなげるには、どうしたら良いのか。模索しているのが現状である。また、生徒の主体性の担保と強制して活動させることの適切なバランスも毎年、指導しながら難しいと感じている。20 年を契機に見直し、再構築が必要であろう。

学習及び進路指導部会　研究発表Ⅱ

「進路指導とICT」

愛光中学・高等学校　教諭

和　田　　誠

冒頭に愛光学園の学校紹介を行った。本校は愛媛県松山市にある私立の中高一貫校で、今年が創立65年目である。カトリック・ドミニコ修道会によって設立された学校で、長らく男子校だったが創立50年を迎えた15年前に共学校となった。本校は6学年男女合計で約1300名の生徒が在籍しているが、最大の特徴は大規模な男子寮が併設されていることである。全校生徒の約3割が寮生活を送っており、全国各地から多くの生徒が入学している。

そして本校のもう1つの特徴は、大学合格実績である。昨年度の東京大学の合格者は現浪合計で23名、国公立医学部の合格者は現浪合計で61名と、非常に良い結果を出すことが出来た。特に国公立医学部は、現役で37名の合格者を輩出し、国公立医学部現役合格者数を卒業生数全体で割った現役合格率は全国3位と、非常に素晴らしい数字であったと思う。

しかし、個人的にはこれで良いのか、という疑問も持っている。本校には建学の理念として、初代田中忠夫校長が起草された「われらの信条」というものがある。その中に「世界的教養人としての深い知性と、高い徳性を磨く」ことと「愛と光の使徒となる」ことが明記されている。もちろん医療という素晴らしい分野で、多くの卒業生が将来活躍してくれることは誇りに思う。しかし「われらの信条」は、グローバルな環境のもと、深い知性と高い徳性を兼ね備えた愛と光の使徒の育成、つまり他人のために自己をささげることの出来るような人材を多く育成することを謳っているのではないだろうか。はたして、現在の愛光学園がその役割を果たしているだろうか、と考えるようになった。この疑問に対する明確な答えはまだ持っていないが、近年の学校を取り巻く環境などを考慮しながら「進路指導とICT」というテーマで発表を行い、自分なりに考えていることを報告したい。

まず、大学入試改革について述べたい。現在行なわれている「センター試験」は3年後に（今の中3から）「大学入学共通テスト」と名称が変わり、国語・数学で一部記述式が導入されたり、英語において4技能を見るために民間検定試験が導入されたりすることが決まっている。文部科学省からの発表やマスコミの報道を総合的に判断すると、結局、今のセンター試験と大きな内容の変化は無さそうにみえるが、私はここ数年で入試は大きく変わると見ている。特に、文部科学省が提唱している「学力の3要素」をバランスよく見る入試に、全体が向かっていくのではないだろうか。マスコミの報道では「共通テスト」が大きく取り上げられているが、実は各大学の個別選抜入試のほうが大きく変わっていくと感じており、いくつかその例を示したい。

たとえば推薦入試。現在、国公立・私立を問わず、多くの大学が推薦・AO入試を行なっており、将来的に

は全国の国公立大学の定員の約 3 割程度は推薦・AO 入試枠とするという構想も聞いている。特に、3 年前に東京大学・京都大学が推薦入試を始めてから、推薦入試の注目度は高まっている。本校は、東京大学工学部の推薦入試に 2 年連続でチャレンジする生徒が現れ、1 年目は合格、2 年目は不合格であった。工学部は事前課題としてレポートが課されており、その内容が非常にユニークだったので、昨年の事前課題の問題を提示してみる。(以下は、スライドで提示した内容の抜粋)「～2050 年頃までに期待する 3 つの技術革新を挙げ、～」。要するに、「東大は 2050 年頃までに発明されるものを 3 つ挙げなさい」と言っているのだ。確かに東大のアドミッションポリシーの中に「～そうした意味で、入学試験の得点だけを意識した視野の狭い受験勉強のみに意を注ぐ人よりも、学校の授業内外で、自らの興味・関心を生かして幅広く学び、その過程で見出されるに違いない諸問題を関連付ける広い視野、あるいは自らの問題意識を掘り下げて追及するための深い洞察力を真剣に獲得しようとする人を東京大学は歓迎します。」とある。今後は、東京大学をはじめ、多くの大学がこのような人材の確保を目指すのではないだろうか。

もう一つ例を挙げたい。今度も東京大学だが、2015 年の前期一般入試 : 英語の第 2 問。いわゆる自由英作文の問題で、『男の子が、鏡に写った自分の顔を見ると、舌を出してアッカンベーとしており、自分はそのような表情をしていないので、非常に驚いている』イラストがある。これを見て 60 から 80 語の程度の英語で答えるという問題である。もちろん英語として間違っていないか、文法や単語は正しいか、意味は通るか、というのも採点のポイントだろうが、発想が面白いか、非常に深い洞察がなされているか、なども加点のポイントだったと思われる。東大だけでなく、そして教科に関係なく、今後は「知識・技能」だけを問うのではなく、「思考力・判断力・記述力」を問う問題が増えるだろう。そして推薦入試などでは、本人の主体性や協働性などを総合的に評価するウェイトが増えていくと思われる。

上記の推薦入試の問題や、自由英作文の問題は、通常、高校の理科や英語の授業では教えない。もちろん、教科書や問題集にあらかじめ答が書いているわけでもない。高校時代までに、思考力や判断力を働かせて、どれだけ主体的に学んだかが大切になるだろう。

このような状況の中、本校の学習状況・環境について考えてみたい。本校の伝統的な授業スタイルとしては、画一的な全体指導で、一方的な講義スタイルの授業が多い。そして非常に早い学習進度と、膨大な宿題と小テスト、なかなか成績が上がらない生徒に対してのペナルティなどで厳しく生徒の学習を管理してきた。かつてはそれで成果を上げていたが、近年は、学力の上下格差が激しく、授業が分からない層が増加している。そして受け身の学習態度の者が多く、成績上位者でも教員からの指示がないと何をして良いか分からないという現状である。また授業内容が全体画一のため、自分の志望する大学と授業内容のミスマッチが起こっており、結果、個別の対策をしてくれる塾に通う生徒が増えている。

伝統的に今まで積み上げた学習スタイルを急に方向転換するのは難しいが、今後の大学入試改革を踏まえると、このままでは生徒が志望する進路を保障できないと危機感を持っている。そこで、本校が持っている課題を克服するためのツールとして、タブレットなどの ICT が役立つのではないかと考えるようになった。タブレットは、たとえば、全体ではなく個別指導のため、自ら主体的に学ぶため、思考力や判断力、表現力を高めるため、などの補助ツールとして大いなる可能性を持っている。また教員の働き方を変える可能性も秘めていると思う。本校は、1 人 1 台タブレットを導入してまだ半年だが、どのように使っているかを紹介

したい。

まず、教員用としては「サイボウズ Live」という掲示板を使用している。これを職員朝礼や職員会議、教科会などに利用することで、まずは会議のペーパーレス化をはかった。これが上手く軌道にのって教員全体が慣れてくれば、連絡事項はすべてこれで回すようにし、会議の短縮や朝礼の廃止などを考えられないか、現在検討中である。

そして生徒用だが、おもに授業で活用している。一番使用頻度が高いのは「ロイロノートスクール」で、このシステムを利用することで、双方向授業やグループ活動、プレゼンテーションなどがスムーズに行える（これは当日会場で、タブレットを用いて実演した）。また、教育用 SNS やオンラインスピーキング、プログラミング教育などにも活用している。

大体半分ぐらいの教員が授業で使用しており、まずまずの評価を得ているが、一方で根強い反対やアレルギーもある。反対する教員の一番の理由は、生徒のいたずら・遊びなど、生徒指導に関わることである。もちろん MDM（モバイル・デバイス・マネジメント）というシステムで生徒の端末を制御し、インターネットにはフィルタリングをかけ、アプリは勝手にダウンロードできないようにするなどのコントロールをしているが、生徒はさまざまな抜け道を探してきて、学習以外のことに活用しようとする。どのようなルールを設定し、どのように生徒端末を制御し、そして生徒にどのように指導していくか、失敗しながら毎日試行錯誤している最中である。

では最後に、まとめの報告をしたい。

進路を大学入試に限定するならば、現在の高 3 から高 1 までは、ICT を活用することで大学合格実績が大幅に向上することは考えられない。ただし、大学入試改革が進行中の今、本校の伝統的な学習スタイルのまま実績が向上することも考えにくい。つまり、現状維持かやや衰退ではないかと考えている。そして中 3 以下の生徒については新しいテストの枠組みの中、学力の 3 要素を重視する入試に更に変化するので、思考力や判断力、表現力、そして主体性などを伸長させるツールとして ICT が機能するのではないだろうか。もちろん現在の小 5 以下は、よりその傾向が強くなると思う。

さらに言うと、進路というのは大学入試に限定したものではない。将来に渡って関係するキャリア全体のことを考えるべきである。今、アメリカでは「今後 10～20 年程度で、米国の総雇用者の約 47%の仕事が自動化されるリスクが高い（マイケル・オズボーン博士／オックスフォード大学准教授）」とのレポートが出されている。実際にレストランの案内係やスーパーのレジ係、データ入力作業員などの単純作業には AI を組み込んだロボットが導入され始めている。そして Google は車の自動運転などを実験しており、バスやタクシーの運転手なども将来不要になるとも予想されている。このような中、今後の学校教育で何をどのように教えていくか、ということを考えると、従来型の教育内容・方法では難しいのではないかという結論に達した。ICT が万能ツールでないことはもちろん理解しているが、従来型の教育内容・方法を変える可能性はあると感じている。子供たちの将来のため、まずはチャレンジして、失敗しながら進んでいく、という精神で今後も ICT と付き合っていきたい。

学習及び進路指導部会　研究発表Ⅲ

「中高一貫校におけるグローバル力の育成」

新田青雲中等教育学校　教諭

藤　本　尚　嗣

新田青雲中等教育学校は創立 15 年目で、小さいながらも特色のある様々な取り組みを実施している学校である。学校の特色の 1 つに「五道」の学習がある。まず茶道、華道はそれぞれ 1 年次、2 年次に総合的な学習の時間の中で学んでいる。茶道では、お点前を学びお茶をたて、礼儀作法、そして茶道の心の部分も学んでいる。華道では、花を生けるというのはどういうことなのか、その背景にどういったことがあるのかなどを学んでいる。武道も体育の時間の中で 1 年次は剣道、2 年次は柔道、3 年次は弓道を学んでいる。このように開校以来日本人としてのアイデンティティを身に付ける教育を行っている。茶道、剣道、弓道はそれぞれ部として放課後にも活動を行っている。

2015 年にアメリカのマックラチー高校から初めて 16 名が本校生徒の家庭に 1 週間ホームステイをして、交流を深めた。今年度は同校と姉妹校提携を行い 18 名の留学生がホームステイをしてプログラムを終えたところになる。これから本校での国際交流やグローバル力の育成について紹介する。

私の自己紹介もさせていただくと、本校での勤務が 12 年目、専門は美術と技術である。特活課長 7 年目となる。私は生まれも育ちも愛媛県で、高校卒業後、専門学校を出て、有限会社イマジンでテレビアニメーションの仕事を経験した。その後地元に戻り、教師を志し愛媛大学に入学した。

そんな私だが実は高校生の時に大の英語嫌いになった。きっかけは上海から来た短期留学生が私に放った一言だった。「自分の意見は自分で言いなさい。誰かに通訳してもらうのはおかしい。」当時、学級委員長だった私がホームルーム活動の時に留学生を紹介する司会進行を担当した際、難しい表現は英語の得意な帰国子女の友人に任せていた時の一場面である。それから私は話せない自分を恥じながら「愛媛に外国人は滅多にいない」という大義名分に変えて、とにかく外国語の勉強をかたくなに拒否した。もう英語という言語を話したくなかったのである。かっこつけている、必要ないと言い訳をして、「雄弁なるは銀、沈黙は金」そう言い聞かせたまま学校生活を過ごした。

高校を卒業し、小学生から憧れていたテレビアニメの世界へ飛び込んだ。一人暮らしを横浜ではじめてから英語への態度が変わった。何も考えず、ただ交通の便だけで決めた場所だったが、そこは一歩玄関を出れば「excuse me?」と話しかけられる場所であった。高校生の時と違い、逃げ場はなく、話すしかなかった。ある日、駅で女性に声をかけられた時、何か言いたいのだろうという事以外は全て聞き取れなかった。どうやら駅の窓口で定期券を買いたいらしく、申込書の記入欄に何を書けば良いのかわからなかったのであろう。その空欄は年齢を書き込むところで、私は年齢を英語で何というのか答えが思い浮かばず、ふと中学生で覚えた「How old are you?」が喉まで出てきた。その英文を解体すると、おいくつですか、という意味が細分化され、あなたはどのくらい古いですか、とばらばらにできる。しかし、「old」を単発で言っても、そのまま相手に質問を質問で返してもおかしく、留学生相手に頭の中が真っ白になった高校生の時のように、しばらく空白の時間があった。しかし、ふと自分が当時二十歳だったことに気づき、「uh…I'm twenty.　This is

20.OK?」と話してみた。文法も無茶苦茶で片言の英語で自分が二十歳だと伝え、ここに 20 と書くのだと身ぶり手ぶりで伝えると、「Oh! It's my age!」と明るい答えが OL 風の金髪女性から返ってきた。そうだ、年齢はエイジだと痛烈にあのとき記憶した。他にも、駅の構内で道案内をする紳士が、とても流暢にテンポよく説明する場面を何度も見た。昔、愛媛にいて遭遇したことのない場面を次々と目の当たりにし、逃げ場のない中で何とか英語を使ううちに、「英語はやらされるもの」ではなく、「生活に必要なもの」だと思うようになった。そして、ここから私は英語の学習を再始動させた。

愛媛に戻って大学生の時も、ドイツから来た 5 人の芸術家を「旅するアートトランク」という企画で手伝った。今でも覚えているのは、ほとんどが英単語のやり取りで、作品づくりに必要な言葉を端的に交わしたことである。しかし、最後にドイツへ帰国する直前に、「あなたは気が利く良い子だ。一緒にドイツへ行かないか？芸術活動ならドイツで大いにできるよ。」と芸術家のマダムに誘われた。初めは足りない画材や、はさみなどの道具をマダムの意のままに差し出したお礼だと思ったが、名刺と本物の連絡先を渡され海外に行くのか本気で悩んだことがある。終始、ドイツ語の返事「ヤー」を繰り返し、ことあるたびに「ダンケ」と礼を言い、常に相手に反応していたのが良かったのだろうか。かたくなにレスポンスを拒否していた高校生の頃の自分とは大違いである。

当然、大学進学のためにペーパーテストなどで高得点を得ることも大事な学力のひとつであるが、これからさらにプラスアルファで「使える」ということが大事になってくる。さらに言うと成績が上だろうが下だろうが、全員が英語を必要とする時代になっているということである。PISA 調査でも、日本が上位に来ているものの、ほとんどがアジア諸国で占めている。日本人の能力は高いものの外にアウトプット、表現することが苦手という事から、本校ではグローバル力というものを以下のような位置づけで捉えている。

まずは「違う」という異質なものをお互いが受け入れた上の「コミュニケーション能力」の育成である。言いたいことが相手に英語だけではなく、日本語、韓国語、中国語、ドイツ語など言語が何であれレスポンスが即座にできることを大切にしている。私が高校生の時みたいに黙ってじっとしているというのが一番良くないのである。自分が逃げ場のない状況でどうやってコミュニケーションをとるのか、どこに行っても英語は切っても切り離せない必要な言語のひとつである、というのが自分の経験から実感することである。実社会に出れば否応なしに他言語が必要になる。これからの社会で必要なのは、「相互理解」と適切な「意思伝達」である。いわゆるコミュニケーション能力の向上が学校教育で大切になる。

新田青雲では「グローバル力」を 4 つの観点で捉えている。そして、4 つの観点に基づいた育成要素と目標を決め、その目標を達成するための方策を考えた。

基本的に生徒全員ができるグローバル力育成のための活動とは何か、発達段階に応じてできることは何かということを考えるため、教員でチームを組んで「グローバル力育成委員会」を立ち上げた。構成員は教頭、教務課長、進路課長、特活課長、英語科教員、体育科教員、音楽科教員である。グローバル力は「相互理解」と「意思伝達」だが、世の中には沢山の人がいるため、日本人に限らず柔軟性を自分で広げていくことが大事である。目の前にある問題をどうやって解決していくかを考える「問題解決力」も必要である。インターネットがあらゆる所に存在し付随するユビキタスな社会になっているので、今後はもっと変化が激しく、その中で自分を見失わずに軸となるもの、芯を持って取り組む必要がある。中でも英語力は大切で、実際問題、大学受験が現実にどうなるのか、英検や GTEC など数多くの外部機関の資格試験が大学受験の際に利用されるというのが言われ始めている。使える英語が必須となり、読む、書く、聞く、話す、の 4 技能が必要になってくる、では英語力を身につける上で大切なことは何なのか。まず「繰り返し」が大事、また「異文化について理解する」言葉の表面だけでなくその裏側、文化、考え、どういう歴史的背景で彼らは存在するのか

を知るということである。あとは私みたいな英語嫌いではなく「英語好き」になること。「話さざるをえない」状況をつくるというのも一つ大事であると考えている。学校のちょっとした場面も英語に触れられるよう活用する。英語の授業だけで完結ではない。それ以外の休み時間や朝の SHR、終礼の時間、掃除の時間や放課後、下校時刻、あらゆる隙間の時間を使ってできるだけ英語を使う、学校生活の中で英語に触れる、触れることによって使うということが自然に感じられて使いながら学べるようになることを願って工夫している。

（表１）

グローバル力育成プログラム　―「世界市民」づくりを目指して―

育成要素	建学の精神：健全優位な人材の育成／優秀な船長（リーダー）の育成　　校訓：とべ青雲の空高く　誠　知　進			
	語学力・コミュニケーション能力 ⇔ **主体性・積極性・チャレンジ精神** ⇔ **社会性・共感力・協調性・柔軟性・責任感・使命感** ⇔ **異文化理解・日本人としてのアイデンティティ**			
目標	○言語活動を積極的に取り入れるなど、英語教育の改善を図り、4 技能の総合的育成に努める。 ○日常的に英語にふれることができる環境づくりに努め、コミュニケーションツールとしての英語に親しむ。	○授業や特別活動などあらゆる分野で、自ら課題を見つけ、自ら積極的に解決を図ろうとする態度や精神を養う。 ○高い志をもって、自己実現や進路実現に意欲的に取り組むことを通して、心・知の練磨に努める。 ○趣味や特技を生かして校内外の活動や競技に積極的に参加するなど、チャレンジ精神を養う。	○学年を超えた縦割りの集団活動や多様な学校行事等を通して、幅広くふれあうことができる機会を多く創出し、社会性の育成や人間性の涵養、豊かな感性づくりに努める。 ○様々な活動において、一人一役を徹底し、最後まで責任を持って役割を果たす経験を積み重ねる。	○五道（柔道・剣道・弓道・茶道・華道）や能など、我が国の伝統文化や武道を学ぶことを通して、日本人としての自覚を深めるとともに、アイデンティティの確立を図る。 ○オーストラリアでのホームステイや外国人との交流活動等により、異文化理解を深める。
方策	○英会話授業の時間増 ○GTEC for STUDENTS 導入 ○English Radio ○good-bye 放送 ○校内掲示 ○レシテーションコンテスト ○日直の英語スピーチ ○今月の歌（英語版） ○今週のフレーズ ○HP 活用	○English キャンプ ○海外短期留学 ○オープンキャンパスへの積極的参加 ○校外の各種コンテスト、コンクール等への挑戦	○「グローバル力」をテーマにした学級活動・HR 活動 ○道徳教育の改善・充実 ○青雲祭・スポーツフェスティバル ○部活動の充実	○オーストラリア修学旅行 ○国際交流デイ ○日本文化を英語で語ろう ○海外校との手紙や E-mail の交換、スカイプ活用

（表２）

主な行事等	・English Radio ・SHRでのスピーチ ・入室時の英語 ・今週のフレーズ ・good - bye放送 ・清掃時の放送 ・This month's song ・校内掲示	英語の歌	recitation contest	talking time	日本文化調べ学習	国際交流デイ	まつやま中学生海外派遣事業	海外短期留学	English Camp	オープンキャンパス	修学旅行（海外）	マックラチー高校との交流	ヤングボランティア
時期	年間	6月 青雲祭 前日	6月 青雲祭 前日	2,3学期	3月 発表 展示 掲示	12月 3月	8月	7，8月	7月	8月	5年5月 3年10月	2,3学期	4月に 募集
6年	全												
5年	全		全					希望者	希望者	希望者	希望者		希望者
4年	全		全					希望者	希望者	希望者		全	希望者
3年	全		全			希望者	希望者	希望者		希望者	全		
2年	全		全		全	希望者	希望者						
1年	全	全		全	全	希望者							

多くのプロジェクトの中から実際の様子をスライドと動画で幾つか紹介する。（以下スライドと動画）

①　毎日の繰り返し

・This week's phrase（職員室入室時にはこの This week's phrase を言わなければならない。非常にハードルの高い試練で、始めた頃は生徒にも抵抗感はあったが、今ではどの生徒も流暢にフレーズを言うようになった。１年次からいきなりオールイングリッシュではなく徐々にフレーズを増やし、短時間でもフレーズを覚える努力をさせることで浸透してきている。）

②外国人常勤講師との交流

・English Radio（毎週のはじめ朝８時半から５分間、今週の予定や This week's phrase クイズなどを全校放送で実施。英語科以外の教員も聞き取り理解を深めるよう協力している。）

後期課程生の English Radio の様子と放送室のアダム先生

③姉妹校との交流

・手紙の交換

・Skype 授業

・姉妹校ホームステイ留学生の受け入れ

（今年度の活動動画）

④学校行事

・English Camp（希望者、高校生対象。オールイングリッシュで２泊３日。英語を話さざるをえないという状況を作りだし実践している。外国人と協働でプランニングし映像を創作する

English Camp での一幕

2017 年７月、マックラチー高校生と青雲生

アクティビティなど使う英単語がシンプルでもコミュニケーション能力を駆使した取り組みが工夫されている。創作過程、そのプロセスが有意義なイベントとなっている。）

・修学旅行

3年生：オーストラリア

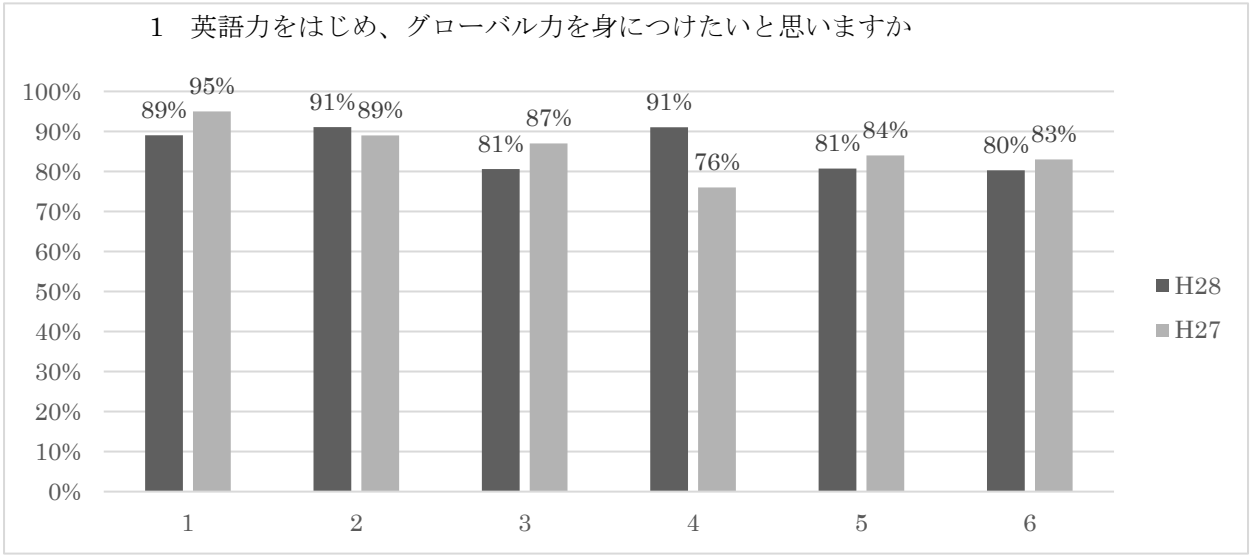
5年生：グアムでの学校交流＆販売体験

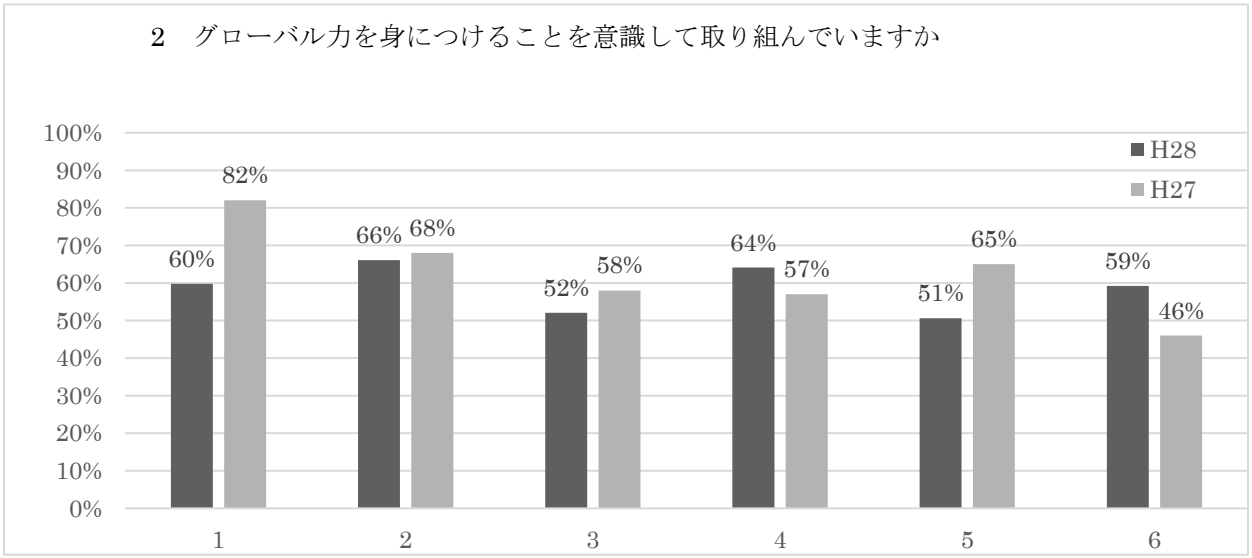
・国際交流デイ

（希望者、前期課程生を対象に実施。）

ナイトマーケット販売体験の様子

成果としては、「英語に対して抵抗なく聞くことができているか。」「グローバル力を意識しながら取り組めているか。」といった質問に対してどの学年も高いアンケート結果が出ている。今後の課題は、「希望者によるプロジェクト行事への参加人数を増やすこと」と「人前で話すことに抵抗がある生徒を減らすこと」である。今ある取り組みを継続しつつ、新しく始めた課題研究とも連携して、人前で自分の意見を述べる機会を増やしていきたいと考えている。





学習及び進路指導部会

「総　括」

新田青雲中等教育学校　教頭

中　井　美　幸

「こころざし高く未来を拓く生徒の育成を目指して」の研究目標の下、本部会の全日程を無事に終えることができました。全国各地からお集まりいただいた先生方に心から感謝申し上げます。

加戸先生の講演「わがまちを愛し、誇れるまちづくりを～みんなでつくろう松山のまち～」では、多くの方が「まちづくり」を学校運営に置き換えて考えられたのではないでしょうか。それぞれの学校が抱えている問題に立ち向かうヒントになる貴重な話を聞かせていただきました。

さらに松山市にある 3 つの中高一貫校の研究発表を行いました。済美平成中等教育学校「論文活動を通した進路指導」をテーマとした発表は、論文活動を通して「書く力」・「考える力」・「伝える力」の育成について、愛光中学高等学校の「進路指導と ICT 教育」をテーマとした発表は、個別指導・主体的な学びのツールとしてのタブレットの活用の実践について、新田青雲中等教育学校の「中高一貫校におけるグローバル力の育成」をテーマとした発表は「日常的に英語に触れる」・「楽しみながら英語を使う」活動を通したグローバル力育成の取り組みについての紹介いただきました。

社会の変化に伴って、学力観も変わり、大学入試もすでに知識・技能に加え、思考力・判断力・表現力や主体性・協働性・多様性を重視する方向へと動き始めています。3 校はそれぞれの特色を生かしながら、義務教育段階からの 6 カ年の系統的な教育を展開していましたが、どの学校も新しい学力観にそった実践・研究であり、加戸先生との講演につながるものがあったと思います。

本大会のテーマにはサブタイトルに「こころざし高く、根は深く」と掲げられています。根は地中にあって見えませんが、根がしっかりしていなければ、植物は育たないですし、美しい花も咲きません。私たちは生徒がそれぞれの花を咲かせるため、しっかりとした根をのばすように導いていかなければなりません。教育の効果は根の成長と同じで、すぐには見えませんが、地道に継続していきたいと思います。皆様も私たちも明日は自分たちの学校へ帰っていきます。学校へ帰りましたら、本日の加戸先生の講演や発表いただいた各校から学んだことを糧として、時代を先取りする私学の教員であることに誇りを持って、未来を拓く生徒たちの教育に携わっていきたいと考えています。

参加者アンケート

第１日「全体集会」

◇愛媛県私立学校活動紹介

- 東京の高校生とは違いのびのび育っていて高校生らしくて良いと感じた。
- 若さ、ひたむきさにあふれて素晴らしかった。
- 笑顔が輝いてとても嬉しく感じた。
- とても活気があり、パワフルなダンスだった。
- レベルの高さに驚いた。今後も頑張って欲しい。
- ヒップホップダンスを部活として見ることは新鮮だった。
- 生き生きとした生徒の表情に感動した。
- 今後も活躍を期待する。素晴らしい演技だった。
- ハイレベルのダンスを披露していただき、雰囲気が盛り上がった。本校もダンス部があるので 40 人以上の部員にしてレベルアップしたい。
- 若者のエネルギーを感じるだけではなく、地元の道後温泉をダンスで表現しようとした取り組みが素晴らしいと思った。

◇報告

- とても参考になるものばかりだった。もう少し多く時間を取っていただきたい。
- 現在私学が抱えている問題点、特に私たちが意識すべき問題点を知ることができ、大変勉強となった。
- 私学に勤める者として、もっと多くの教員が意識しなければと感じた。
- 資料も豊富で、教育政策・現在の私学情勢を理解することができた。
- 私学と公立の格差等、これからも厳しい情勢の続くことを予想はしていたが、再認識させられた。今後も、他校と協力しながら、私学の魅力アップに努めなければと強く思った。
- 吉田会長の「私学が日本の教育界をリードしている」という言葉は、私学で教育をしている者として、誇りと勇気を与えていただいた。また、今の自分はこれで良いと納得を得られた。中川所長の報告は、現状の再確認をすることができた。
- 地方にいる身では知る由もない政治との関係を聞かせていただきよかった。
- 私学と公立学校との違い、そして待遇の差というものを改めて感じた。本大会のテーマである「時代を先取りする」の意味もよく分かった。私学の教員として、高いレベルで教育活動を行えるようになりたい。
- 全体的に分かり易く、私学情勢を理解することができた。今後の私学の在り方について、考えさせられることが多く、どう振る舞っていくべきか、良い導を得ることができたことが本会に参加した中での一番の収穫である。
- とても分かり易く、非常に思いの強さを感じる内容であった。私学の置かれている状況、そして、私学の可能生、強みを更に発揮するために、やるべきこと、やっていかなくてはいけないことのポイントをたくさん教えていただいた。学校に還元できるように実行していきたい。
- 普段、目の前の業務に追われていて、私学の現状を客観的に捉える機会がほとんどないので大変勉強になった。政治との関係は大きいと感じた。
- 現在の公私間格差、文科省との連携状況についてよく分かった。私学経営については、個々の学校だけの問題ではないことや、公立、私立については「教育」のために学校・国がどれだけ取り組むのか、日本の将来は子どもたちに関わる教員にかかっているという点で考えるべきことは多い。私学の存在意義はとても大きく、これからの教育を引っ張る側にあると思う。

- 私学の環境整備が整うため、補助金や支援等に尽力していることもわかり身が引き締まる思いがした。
- 現状、今後における私学を取り巻く環境については、適格な展望を示していただき、大変参考になった。
- 吉田会長、中川所長共に私学という社会的立場・責任を深く理解されていて、いかに私学の地位向上、責任の履行をしていくか、多くの情報をいただいた。
- 私学の現状を改めて確認するとともに、今後の文科省の動向を見ながら素早く対応していくことが必要であると考える機会となった。
- 私学の現状、文部科学省の動きなど日頃、触れることのできない情報聞くことができ非常に良かった。
- 教育行政に関する情報を得て、さらにそれに対する私学としての考え方を学ぶ機会となった。
- 私学と公立の経営上の違い等、初めての内容だったので良く分かった。
- 現状をして今後の未来、どうしていかなければいけないのか現実と向き合いながら取り組まなければならいと感じさせられた。
- とても役立つ話ばかりだった。学校内での研修は、今の最先端の話は全くないため勉強になった。
- 高大接続改革の進捗状況・見通し等を詳しく教えていただき、学校が進むべき方向を考えることができた。
- 「私学は公立の先を行かなければならない。」という言葉に、まさにそうだと感じた。その中で、その学校独自のものを築きあげていく必要があり、工夫がいると改めて考えさせられた。
- 今の日本の教育について、幅広い知識を与えていただいた。資料は自校の管理職や新任研修で使いたい。
- もう少し時間を割いて、質問等の時間も欲しい。
- 国の施策と私学の状況が説明され、良くわかった。特に新テストについての対応は参考になった。
- 私学の現状を知る機会になり、とても有益でした。特に、文科省の方針や財務省とのやりとりなど、この会に出席しなければ得られない情報があったことが良かった。
- 教育政策に関して、じっくり調べる時間が無く、資料はとても助かった。データがあり、分かりやすく、見やすく、持ち帰ってしっかり読みたい。

◇記念講演

- 有意義で自分が変わっていくような気がした。講演後こころに響く本を読みたくなり、本屋を探した。感じること、表現することの大切さを学ぶことができた。
- 松山ならではの（にふさわしい）講師で素晴らしい人選だった。内容も参加型でワクワクドキドキ感の 1.5 時間だった。自校の他の先生に紹介したい。
- 当地での有名人からの講演はどの大会においても楽しみのひとつであり、今回もワークショップ形式の句会ライブという新しいスタイルを十分に楽しませてもらった。講師の語りはやはりプロであるので聞き応えがあった。生徒になったつもりで参加し、今後も俳句が 5 分で一句作れる自信がついた。
- アクティブ・ラーニングの見本のように思えるもので大変感銘を受けた。
- さすがのトーク力でいつの間にか主体的に参加し、多くの人に話す際のスキルとしても参考になった。
- 私自身理系なので、俳句に親しむ機会がほとんど無く、今回俳句の手解きを受け、俳句の奥深さを知ることができた。
- 新学習指導要領の目指す主体的に参加する授業を実演してくれた講演内容が大変参考になった。
- 今まで俳句など殆どタッチしたことがなかった者でも、やる気さえあれば誰でも可能性ありと示していただき、参加して良かった。
- どんどん引き込まれ、あっという間の時間だった。現場でのコミュニケーション技法についても学ばせていただいた。
- 「人をその気にさせる」手法について、教員に絶対必要なスキルだと感じたと共に、参考になった。
- 長い時間でも、楽しく集中して皆が参加しており、授業運営の参考になる内容だった。
- 俳句を通じての学び、物事の見方、心の豊かさを育む実践は必要で、取り入れていきたい。

- 俳句に関する教育のみならず授業における指導手法にも非常に参考になるものだった。今後、何らかの教育活動に活かしていきたい。
- 「言葉を育てることで心を育てる」は心に残った。たくさんの笑いがあり、深い部分で伝える姿に勉強させていただいた。
- 素晴らしかった。夏井先生のパワフルでテンポの良い進行で１時間半があっという間だった。この企画は大会に最適であった。アクティブ・ラーニング、主体的に学びに参加する体験になった。
- まさにアクティブ・ラーニングの手法で、先生の話を主体的に聞くことができた。学校ではできない体験をさせていただき、感謝している。
- 国語科教員として興味深く聴いた。俳句のイメージを一変させる句会ライブは、学習活動としても大変意義深いものだと感じた。
- 600 人を相手にある意味アクティブ・ラーニングの実践だった。話に参加者を引き込む力、臨機応変な対応力、ライブでの皆に知って欲しい、心得て欲しい事柄の確認とアクティブな交流ができた。
- 感動した。あのような授業展開ができれば、生徒は興味を持ち、飽きずに集中できると思う。そのための多くの知識と知恵が必要である。
- 教員としての殻を打ち破るような内容だった。この姿勢は私学の教員として必ず持つべき姿勢である。
- 参加型で楽しく、その上で文学をたしなむ経験を得られたことに感動した。良い意味で適度な緊張感を保ちつつも楽しく学ぶことができる環境だった。
- 記念講演は聴講するまで、今回の研修に組み込まれた意味が分からなかったが、実際は教育に落とし込んだ時に、生徒が季語を意識することで、様々な事象や雲や行事に興味監視を持つより良い機会となり、まさに教育だと直感した。
- 言葉のもつ様々な力を感じ取ることができて、大変素晴らしかった。
- 俳句の面白さ、奥深さを改めて理解でき、教育活動の中での活用についても考えることができた。
- 話術にただ感服するばかりであった。時にユーモラスによどみなく伝えられる技巧は洗練されたものであり人を自分の空気に取り込む感じというものを実感した。今後の教育活動の良き参考にしたい。
- 俳句の作り方は、毎日を見直し視野を広げるためにも、学校で取り入れると効果があると思った。90 分飽きさせずに面白く話されてすごいと思った。
- 日常の何気なく過ごしている中で、少し意識や見方を変えることで感じ方や見え方がかわり、気づきが増える。人生ももっと有意義なものになるのではと思った。
- 俳句の奥深さを教えていただいた。自分自身が数学の教員で、言葉全般に苦手意識を持っていたが、意識を変えていただいた。また、先生の話し方が、人を惹きつける事ができ、自分そのような話し方ができるよう、努力が必要だと思った。
- 脳の活性化、頭の体操、言葉を選んで活用、語彙力の向上などの面から、俳句を考えるのは良いことだなと感じた。担任をしているクラスで、毎日日課として日直の生徒にその日の終礼で一句詠ませて１日を締めくくるというような取り組みをしてみても面白いと考えた。

第２日「部　会」

◆私学経営部会

- 講演Ⅰでは学校の課題を確認でき、また私自身の研究（学ぶ）内容もはっきりした。自校で担当者と打ち合わせて取り組んでいきたい。講演Ⅱでは体験を基に示唆に富んだお話を伺い、私の立場の可能な範囲で法人経営に携わっていきたい。
- 長塚先生の時間（設定として）が、短いように感じた。
- 膨大な資料の批判だけで参考にならなかった。
- 建学の精神を大切にし、それに基づいた教育をすることの大切さを再認識した。
- パネル・ディスカッションでは、教育者として何が大切か立ち戻らねばならないと考えさせられ、これから校長職にどのように取り組まなければならないか再考できた。

- 様々な視点で私学の運営を考える良い機会となり、これからの私学のあり方、理事長としての心構えが参考になった。
- 講演Ⅰでは教育改革の講演は具体的でわかりやすく、数多くのヒントをいただいた。講演Ⅱでは建学の精神、創立者の思いを自らの経験を基に語っていただき原点に戻ることの必要性を実感した。
- 講演Ⅰでは高大接続改革に関するこれまでの断片的な情報をまとめていただき、参考になった。講演Ⅱは建学の精神の継承と私学経営にかける思いに私学教員の心構えを再認識する機会になった。
- 講演Ⅰは、新指導要領の疑問点をわかりやすく解説をしていただき、ありがたかった。
- パネル・ディスカッションではパネリストの方々それぞれの思いが自身のパーソナリティと合わさって大変生々しく興味深くお考えをお伺いすることができた。
- 講演Ⅰ、Ⅱ、パネル・ディスカッションのそれぞれの先生方の切り口が大変興味深く、色々なヒントをいただけた。断片的に聞いている話をまとまって聞くことで、色々整理できる時間となった。

◆教育課程部会

- 聖カタリナ学園高等学校の ICT 活用の発表は参考になった。芝浦工業大学附属中学高等学校の発表では国語での授業が ICT を活用することで可能生がまだまだ広がると思った。開星中学高等学校の発表は SSH を中心に素晴らしい改革だと思った。
- アクティブ・ラーニングの本来のあるべき姿、学習指導要領の考え方のポイントについて、詳細に説明していただけありがたかった。各校の具体的な実践発表も本校でも取り組めるものは、取り組みたいと思う。
- 組織的に取り組む事の重要性と運営の工夫、コツなど参考になった。ICT 活用の実践発表を聞き、その環境（特にタブレット）が、整っていることが前提の内容が多かったように感じたが、実態として学校間の格差が大きいのではないか。特に、費用面でのハードルが高いのではないかと感じた。その当たりのレポートが聞いてみたい。
- AL についての理解、新学習指導要領について詳細な資料を提示していただきながら、とても貴重な内容の講演でした。各校の先進的な取り組みを、是非、参考にさせていただきたい。
- 学習指導要領改訂を詳しく紹介していただき、大変勉強になった。３校の実践発表は、本校の現状と照らし合わせた上で、参考にすることがたくさんあった。
- アクティブ・ラーニングに対する理解は深まったが、問題はそれを実践するスキルが教育学部の大学生ですら不足していることだと思う。現場ではトライ＆エラーのまっただ中にあるのが現状ではないか。
- アクティブ・ラーニングの取り組みについての講演を聞き、多くの学校が本校と同様に個人レベルであることに安心はしたが、学校全体で先進的に進んでいる学校も数校あることを考えると、まだまだ、不十分であることを痛感した。聖カタリナ学園の発表では、ICT はメリットだけではなく、デメリットも充分に考えられるが、使い方によってはかなりの成果が出ることを知ることができた。本校も前向きに検討していきたい。芝浦工業大学付属の発表は、本校では ICT の環境はまだ充分に備わっていないが、参考になった。開成の発表は、同じ県でありながら、知らないこと、勉強になること、刺激になることがたくさんあった。
- 3 校の実践発表はとても学べる内容で参考となった。私学としての独自性や、建学の理念に沿った教育方針の立て方、授業実践など深く聴き入り、学ぶことができた。21 世紀型能力の育成という視点を知ることもでき、大変有意義な研修であった。
- アクティブ・ラーニングの取り組みとどのように導入するのかのヒントをいただいた。学習指導要領の見直し、高大接続改革についても学ぶ事ができた。ICT の現状を知ることができ、「21 世紀型能力の育成に向けて」の話もいただき、色々なアイディアをいただいた。
- アクティブ・ラーニングに学校全体で取り組んでいくために、自分に何ができるか整理し、企画提案していきたいと思う。そのための参考となる実践や報告を学ぶことができた。「ミドルアップダウン」という考え方は是非参考にしたい。

- アクティブ・ラーニングの様々な学校での取り組みの実践発表を聞き、ICT 化の目的・内容を知って、学びの格差がますます広がる危機感を抱いた。
- グループ活動について、なあなあになってしまうことも多々あり、達成感というものを得られない原因・改善を聞くことができた。早速取り組みたい。また、3 校の先生方から学ぶことは多く、特に ICT の有効活用については実践していきたい。
- 山田准教授の基調講演で、これまでよりまた一段高いレベルでアクティブ・ラーニングを考えられるようになった。個人レベルのアクティブ・ラーニング的な授業を脱却するためにも、組織の力で子どもの成長・発達に力を注ぎたいと思った。各学校の実践発表も、先生方の取り組みがよく分かった。本校でもこうした報告を生かした授業デザインをしたい。
- 各学校の具体的な取り組みを知ることができ、勉強になった。ただし、費用面、生徒や教員の姿勢など本校での課題も改めて多く見つかった。
- 具体的な実践報告もあり、たくさんのヒントをいただいた。「生徒に力をつけて伸ばしていく」という永遠のテーマに向かい、カリキュラム・マネジメントに取り組んでいきたい。
- AL の必要性について改めて確認ができた。学内でのカリキュラムへの位置づけをどう進めていくべきか、迷う事は多くある。今までの伝統や（教員個人のも含めての）プライドを守りつつ、如何に生徒の学びをデザインしていくのか、もっと他校の実践を伺いたい。
- アクティブ・ラーニングの重要性や実践について考えさせられた。私学が先頭に立って取り組まなければいけないことであり、学校の独自性も出せるので、しっかりと自校の学校教育に還元したい。ICT やアクティブ・ラーニングなど早くから取り入れている学校は、授業も充実していると感じた。
- アクティブ・ラーニングについては、やはり取り組みが難しく当校でもディベートを含め取り組んではいるものの、やりっぱなしの生徒活動で終わっていることを痛感した。山田先生の話を参考に今後校内で委員会も立ち上げて進めて行きたい。
- 基調講演や講演では、現在進んでいる様々な事柄を確認することができ、学校でのフィードバックに使用することができる。実践発表はどれについても今現在の学校の取り組みに即しており、大変参考になった。
- アクティブ・ラーニングに対する考え方や捉え方など大変参考になった。本校でも ICT 化に向けた取り組みを行っているので、各学校の事例を参考にさせていただきたい。取り組む前のハードルが高かったが、「まずやってみる事が大切」との思いが強くなったので、持ち帰らせていただきたい。
- 午前中のアクティブ・ラーニング、学習指導要領の話は、なかなか深く聴くことができない内容のためたいへん参考になった。聖カタリナ学園高校の ICT 活用の発表は、本校に ICT 推進委員がようやく立ち上がった段階であるため、とても参考になるとともに、大きな刺激を受けた。

◆法人管理事務運営部会

- 現在、本校でも課題としている防災・情報セキュリティ関連についてピンポイントかつ有意義なヒントを得ることができた。情報交換の時間も設けていただいていたので、他校の方々との交流かつ意見交換ができたことも良い時間となった。学校を取り巻く緊急の危機に対し、大いに話し合える場はとても重要であり、今回の部会には大変満足しています。
- 情報交換会の時間がとても参考になりました。昼食時間は、しっかり計画して取っていただきたかったです。全体的にもう少し、ゆとりのある時間配分を考えていただけたらと思います。
- 参考になる話ばかりでした。即実行できること、そうでないこと、色々ありますが、まず知ることができたので、スタートラインには立てたのかなと思います。自分の仕事以外のことに目を向ける大切さ、どうしても私学は自分の学校内に閉じこもりがちだと思うので、こういう意見交換会は貴重だと思いました。生の声が聞けてよかった。
- 紅谷先生は学校での防災について分かりやすく、大変役に立った。小林先生のサイバーセキュリティについては、攻められるのは防げないが、そのための対策はしておかなければならないことをよく理解できた。松原先生の話は子規を通して松山の街づくりは間違いなく進めていくべきと感じた。

- 災害に対すること、情報セキュリティに対することで自校に役立たせることができる内容があった。
- 防災についてとサイバー対策については、リスク管理が大きなテーマですので、やはりルール作りが共に必要不可欠だと改めて感じた。情報交換会は、地域は違っても、運営ついては難しさを抱えていて、人の組織なので共通する部分が多く、参考になる話が聞けた。
- 災害リスク、サイバーセキュリティ、まちづくり、キャリア教育のどのテーマの話しもとても参考になった。一番充実したのは、昼食時の情報交換会でした。自分が、この様な場を企画するときには、このような形式で計画したい。
- 全国の私学の方々と課題を話し合うことができた。どの学校も共通した課題を抱えていることが理解でき、また先進的な取り組みを紹介していただき、大変勉強になった。
- 法人管理事運営部会では、グループワークで具体的に各校の取り組みを拝聴できたことは有意義であった。講演については、テーマを絞り、Q&A なども取り入れってテーマに対する深い理解が得られるようにして欲しい。
- 講演Ⅰは事例に基づく検証とそれをふまえた今後の防災対策を考える機会となり、情報収集と検討のヒントを得ることができた。講演Ⅱは校内で利用する PC 等に対するセキュリティ対策の必要性と方策について理解することができた。情報交換会は他校の状況を知り、本校の取り組みに活用できるヒントを得ることができた。

◆特色教育部会

- 基調講演は、自分の学校がいかに遅れをとっているかを実感した。教員一人ひとりではなく、学校としてどの方向を目指すのかを早く決定し、教育改革を進めることが未来へとつながる唯一の方法と確信した。
- 基調講演は、現在のカリキュラムで伝えなくはならない内容が多すぎて、なかなか考えさせることに時間を取れないのが実状であり、大いに参考になった。研究発表Ⅰの「人間セミナー」は興味を持った。学校の特色を創り出し、発展させていこうとするパワーが素晴らしい。研究発表Ⅱは系列校内での「高大連携」がうまくいきはじめていることが良く分かった。羨ましい環境と感じた。研究発表Ⅲの系列校内での「高専連携授業」は生徒たちに目標を持たせる意味でも素晴らしい取り扱いだと思う。生徒たちと一緒に授業を受け、生徒達と先生の良好な関係が伝わってきた。
- 基調講演は、20 世紀から 21 世紀になり、それに見合った教育・教師と生徒が共に学びあうことが大切だと感じ、これからの授業展開に生かしていきたい。各研究発表では、各校ならではの取り組みがあり、どの校でも生徒を向き合い、一人一人をのばしていく現状が見られた。
- 基調講演は目から鱗が落ちるような話だった。高大接続改革によって教育は必ず変わるということを確信できた。研究発表Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは各校の苦労と工夫を実感することができ、どの学校も特色を持ち学校の発展につなげていて参考になった。
- 基調講演は私学としての誇りを持ち、自らの方向性を力強く切り開いていくことが大切だと感じた。研究発表Ⅰでは学校に応じた工夫と継続的な努力の大切さを学ばせていただいた。聖カタリナ学園の横山先生からは伝統にとらわれず、時代の流れに応じて行動する勇気を、未来高等学校の岡部先生からは自らの特色を最大限に活かす柔軟さを学んだ。すべての学校がそれぞれに個性を取り出す取り組みを行っており、とても参考になった。
- 基調講演は、これからの可能性について、教員の積極的取り組みがいかに大事であるかを考えさせられた。また愛媛県で多くの特色教育がなされ、それぞれの学校での課題克服が参考になった。
- 大学や専門学校と連携した具体的な取り組みを伺い、できるだけ早い段階でキャリア教育を行っていくことが大切だと思った。本校では、興味、関心や適性について考えさせたいと思い、コースや系の充実に努めてきたが、これだけにとどまらず、学習内容や再度検討して行きたい。
- 21 世紀型教育、教員は理解しているようでまだ現実味をおびていないのかもしれないと反省した。産業界と教育界の連携も大切だし、これからどのような世界になったとしても逞しく生きていける力、思考力などとても重要だと思った。

- 学校本来の「教育する」という大元の部分がしっかりしていないと色々新しいことに取り組んでも効果は一時的なものでしかないということがよく分かった。

◆生徒指導部会

- 講師の先生方の熱い想いに明日からまた頑張ろうという気持ちがわき上がる会だった。子どもの将来に責任を持つことの重大さ、そして私学の教員として働ける幸せを感じた。
- 2 の講演では「本根」と「熱意」は昔も今も同じと確認できた。長者先生の話の通り、教師の心がけ（目配り、授業取り組み）が生徒も大人も変えるものと痛感した。青野先生には同調多数だった。
- 澤野氏の「目標に向かっている姿は良い」という言葉がとても良いと思った。長者先生の発表では「早期支援」の必要性、また「授業が変わると生徒が変わる」が印象的だった。
- 澤野氏の話からは人との出会いや縁の大切さ、また言葉の力を学んだ。長者先生の発表からは生徒への手立ての工夫と教員自身が研修等を通して学び続けることの必要性を学んだ。
- 澤野氏のトップアスリートの経験の話は心打つものがあった。浅見先生の講演も、自分の生い立ちから現代の指導について話をされ、非常に良かった。

◆学習及び進路指導部会

- 済美平成中等教育学校、愛光中学・高等学校の取り組みが、探求活動や ICT の活用は本校でも今後取り組むべき問題であったことから、特に参考になった。
- 地方行政とまちづくりの講演は、示唆に富んでおり、学級経営だけでなく、学校経営にも役立つヒントが多かった。他校の取り組みについても、自校の取り組みを深化させるべきだと思いを強くした。
- 総合学習を通して、論文活動を行っている事が、本校も形は違うが論文を重視しているので、参考になった。論を展開する上で、この方法はとても力をつけるものと感じた。ロイロノートは実践したいと思った。会議の短縮化もはかれることに興味を持った。国語の授業でやりとりができること、参加型授業ができるようになるかなと思う。Gacco は活用したことがあるが、中高の学びでつながることに自分自信も共感している。
- 報告では、論文指導についても、大きなプロジェクトをしっかり行っているすごさを感じた。
- 自校とは生徒のレベルに差があるが、論文指導、ICT 機器導入の話を聞き、ぜひ参考にしたい。
- 具体的な実践例を良かった点だけではなく、失敗や課題を隠さず、提示していただき、学校に戻り、自校にあてはめて指導にあたりたい。普段、抱えている教員間の課題や進路の課題などを共有できて、自校だけでないと分かり安心した。
- 学習は時代によって変わっていくので、適したスタイルに変えていかなくてはならない。学校全体でどのように取り入れ、取り組んでいくかが 3 校の取り組みを聞き、考えて行くことができそうである。
- 済美平成の論文活動は非常にレベルが高く、目指すべきところと感じた。愛光中高の ICT を活用した中学生たちの成績がどうなっていくのか興味がある。新田青雲のグローバル力育成のための様々な取り組み例は参考になった。
- 講演、発表はいずれも、先生、学校ともにエネルギッシュに、積極的に考え行動しておられる状況を知ることができ、自分の日々の取り組みの甘さを反省することができた。
- 和田先生の研究発表は楽しく、ロイロノートをぜひ導入したくなった。中矢先生の LGBTQ を取り扱った生徒の発表の映像に度肝を抜かれた。密度の高い教育をされている事が伝わった。藤本先生の語り口に迷いがなく、スラスラと話されているのが印象的であった。上海の留学生のコメントが切り口鮮やかで吃驚した。This week's phrase を実際にやっておられるのは画期的だと思った。
- 論文活動は生徒のみならず、先生の負担が大きいので、しっかりと役割分担をして、かたよらない指導が必要だと感じたが、生徒とともに学び、指導力向上という観点からすると、良い取り組みだと思った。ICT 教育では、紹介されていたロイロノートは生徒との双方向のやりとりがスムーズにできるので良いと思った。現在、リクルートのスタディサプリを活用しているが、併用して使うと良いと感じたが、生徒への経済的負担が大きくなるのでそこが問題と思った。

参　加　者　数

総参加者数　５４２名

参加者数（部会別・都道府県別）

◆部会別参加者数

No.	部会名	参加者数	No.	部会名	参加者数
1	私学経営	１６３	5	生徒指導	６９
2	教育課程	１２０	6	学習及び進路指導	６３
3	法人管理事務運営	６７	7	全体集会のみ	１４
4	特色教育	４６	計		５４２

◆都道府県別参加者数

No.	都道府県	参加者数	No.	都道府県	参加者数	No.	都道府県	参加者数
1	北海道	１１	17	石　川	3	33	岡　山	４２
2	青　森	1	18	福　井	0	34	広　島	４６
3	岩　手	3	19	山　梨	2	35	山　口	１５
4	宮　城	9	20	長　野	0	36	徳　島	１１
5	秋　田	2	21	岐　阜	2	37	香　川	４１
6	山　形	4	22	静　岡	6	38	愛　媛	５２
7	福　島	3	23	愛　知	１８	39	高　知	４７
8	新　潟	5	24	三　重	1	40	福　岡	１４
9	茨　城	1	25	滋　賀	2	41	佐　賀	4
10	栃　木	１２	26	京　都	9	42	長　崎	１０
11	群　馬	2	27	大　阪	２４	43	熊　本	3
12	埼　玉	4	28	兵　庫	3	44	大　分	7
13	千　葉	5	29	奈　良	4	45	宮　崎	6
14	神奈川	7	30	和歌山	2	46	鹿児島	１５
15	東　京	３１	31	鳥　取	２３	47	沖　縄	5
16	富　山	1	32	島　根	２４			
計							５４２	

開催地・研究目標一覧

回数	開催地	主会場	会期	参加人員
1	東京都	宝仙学園中学高等学校	昭和27年 4月27日～ 29日	185
2	東京都	女子聖学院中学高等学校	昭和28年11月20日～ 23日	235
3	東京都	早稲田大学	昭和29年11月20日～ 23日	283
4	東京都	東洋大学	昭和30年11月11日～ 14日	402
5	京都市	立命館大学	昭和31年11月 9日～ 12日	995
6	東京都	明治大学	昭和32年11月22日～ 25日	679
7	名古屋市	椙山女学園大学	昭和33年10月 3日～ 6日	857
8	東京都	法政大学	昭和34年11月20日～ 23日	846
9	札幌市	北海道学園大学	昭和35年 8月20日～ 23日	958
10	東京都	日本大学	昭和36年11月22日～ 25日	954
11	横浜市	神奈川大学	昭和37年11月22日～ 25日	841
12	広島市	進徳女子高等学校	昭和38年11月12日～ 15日	993
13	東京都	学習院大学	昭和39年11月20日～ 23日	612
14	福岡県	中村学園女子高等学校	昭和40年11月21日～ 24日	1,100
15	東京都	明星大学・明星学苑	昭和41年11月 3日～ 6日	750
16	仙台市	東北大学	昭和42年11月 5日～ 8日	1,172
17	東京都	文化女子大学	昭和43年11月22日～ 25日	1,074
18	大阪市	相愛学園	昭和44年11月15日～ 18日	2,294
19	宇都宮市	作新学院	昭和45年11月11日～ 13日	382
20	西宮市	武庫川学院	昭和46年11月11日～ 13日	2,513
21	東京都	昭和女子大学	昭和47年11月23日～ 25日	764
22	静岡市	静岡雙葉学園	昭和49年11月 7日～ 9日	926
23	札幌市	札幌市民会館	昭和50年10月 2日～ 4日	978
24	広島市	広島市公会堂	昭和51年10月26日～ 28日	1,216
25	東京都	千代田女学院中学高等学校	昭和52年11月16日～ 18日	1,054
26	福岡市	福岡市民会館	昭和53年11月 7日～ 9日	1,714
27	埼玉県	埼玉会館	昭和54年11月20日～ 22日	1,043
28	仙台市	仙台白百合学園中学高等学校	昭和55年10月22日～ 24日	1,533
29	京都市	ＫＢＳ京都放送会館	昭和56年11月12日～ 14日	1,923
30	東京都	学習院記念会館	昭和57年11月17日～ 19日	1,370
31	福井市	金井学園	昭和58年10月26日～ 28日	992
32	札幌市	札幌市民会館	昭和59年 9月26日～ 28日	1,040
33	山口市	山口市民会館	昭和60年10月31日～11月 2日	1,210
34	福岡市	福岡市民会館	昭和61年11月12日～ 14日	1,696
35	千葉市ほか4市	千葉県文化会館	昭和62年11月11日～ 13日	1,867
36	新潟市	新潟県民会館	昭和63年10月19日～ 21日	1,651
37	大阪市ほか2市	大阪国際交流センター	平成 元年10月25日～ 27日	2,530
38	東京都	学習院記念会館	平成 2年10月24日～ 26日	1,773
39	愛知県	愛知県勤労会館	平成 3年10月23日～ 25日	1,473
40	札幌市	札幌ガーデンパレス	平成 4年 9月30日～10月 2日	1,123
41	岡山市	岡山シンフォニーホール	平成 5年10月27日～ 29日	1,306
42	熊本県	熊本市民会館	平成 6年10月26日～ 28日	1,170
43	神奈川県	国立横浜国際会議場	平成 7年10月25日～ 27日	2,134
44	山形県	米沢女子高等学校	平成 8年10月16日～ 18日	829
45	京都市	京都会館第一ホール	平成 9年11月12日～ 14日	1,222
46	東京都	東京国際フォーラム	平成10年11月 4日～ 6日	1,422
47	静岡市	静岡県コンベンションアーツセンター(グランシップ)	平成11年11月10日～ 12日	1,042
48	札幌市	札幌ガーデンパレス	平成12年10月 4日～ 6日	862
49	徳島市	徳島文理大学徳島校	平成13年11月15日～ 17日	827
50	宮崎市	宮崎観光ホテル	平成14年11月 6日～ 8日	928
51	水戸市・土浦市	茨城県立県民文化センター	平成15年10月29日～ 31日	1,590
52	福島県	郡山市ホテルハマツ	平成16年10月28日～ 29日	774
53	神戸市ほか3市	神戸ポートピアホテル	平成17年11月10日～ 11日	1,383
54	東京都	新高輪プリンスホテル国際館パミール	平成18年11月 9日～ 10日	1,354
55	石川県	石川県立音楽堂コンサートホール	平成19年10月25日～ 26日	791
56	札幌市	札幌ガーデンパレス	平成20年10月 9日～ 10日	722
57	松江市・米子市	島根県民会館	平成21年10月22日～ 23日	505
58	佐世保市	ウインズ佐世保ゲルックホール	平成22年10月14日～ 15日	621
59	高崎市	群馬音楽センター	平成23年10月27日～ 28日	437
60	盛岡市	ホテルメトロポリタン盛岡NEWWING	平成24年10月11日～ 12日	501
61	大阪市	シェラトン都ホテル大阪	平成25年10月24日～ 25日	621
62	東京都	新高輪プリンスホテル国際館パミール	平成26年10月16日～ 17日	1,023
63	長野市	ホテル国際21	平成27年10月29日～ 30日	592
64	札幌市	京王プラザホテル札幌	平成28年10月27日～ 28日	587
65	松山市	松山全日空ホテル	平成29年10月19日～ 20日	542

回数	研 究 目 標
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	私学教育本質の究明・明日の教育体制の整備・全人教育の再検討
9	私学教育の将来と教育課程改訂
10	中学校及び高等学校の教育課程及び改訂に伴う問題点の研究・現在の世情に即応する青少年の指導のあり方・私学教育の充実振興を目指す諸方策の討議
11	日本の教育を前進せしめる私学の使命を果たそう―新指導要領の適切な展開と私学プランについて―
12	私学の教育を向上させ、日本の教育を前進させよう
13	中等教育革新のために
14	私学における教育はいかにしたらその実効を挙げることが出来るか
15	私学教育の自由とその限界
16	私学教育の特性を発揮し、その内容の質的転換を図る
17	魅力ある私学中高教育の推進のために
18	教育の現代化に適応する私学のあり方
19	新教育課程の私学教育における展開
20	1970 年代の私学教育の展開を如何にすべきか
21	1970 年代の私学教育の展開―特色ある私学教育とその実践―
22	激動期における私学教育の原点を求めて
23	昭和 50 年代の私学教育の展開―私学の自主性を高め教育の充実発展をはかる―
24	創造的私学教育の展開とその充実―ひとりひとりのよい資質をのばすために―
25	教育の転換期に立って私学教育を考える－新教育課程をめぐる今日的課題－
26	新教育課程への移行と実践－私学教育の独自性と充実をはかる－
27	新教育課程実践の道－建学の精神と教師の役割－
28	私学の使命と特色教育－新教育課程の展開－
29	今日の中等教育における私学の役割
30	より豊かな私学教育の創造を
31	次代を担う私学教育の独自性と公共性
32	次代を担う私学教育の充実と発展
33	明日をひらく私学教育－私学の原点に立って－
34	豊かな私学教育の展開
35	国際化と近代化を志向する私学教育の発展
36	時代に対応する魅力ある私学教育を求めて
37	21 世紀に向けての豊かな私学教育の創造を求めて
38	社会の期待に応える私学教育の推進
39	豊かな人間性の育成を目指す私学教育の推進
40	新しい時代に対応する創造的な私学教育をめざして
41	たしかな私学教育をめざして
42	活力ある私学のあり方を探る
43	21 世紀に向かって躍進する私学教育
44	教育改造への試み
45	新しい時代を拓く私学教育の創造と発展
46	民間活力としての私学教育を
47	21 世紀の私学教育の充実を目指して
48	生徒と教師のロマンを実現する私学教育
49	新時代の私学教育－中国・四国からの発信－
50	感性豊かな人間を育てる私学教育
51	明日の私学教育を求めて－伝統と創造－
52	特色ある私学教育を求めて－建学の精神と国際化－
53	魅力ある私学教育の創造を目指して
54	未来を担う人材育成を私学教育
55	特色ある私学教育の創造
56	時代を見すえ、未来を拓く私学教育
57	これからの人材育成をめざして―悠久の地から私学教育の未来を考える
58	時代を創造する人材の育成をめざして―私学教育の挑戦―
59	日本の未来を拓く私学教育
60	未来を拓く私学教育～人間力を養い人格の完成を目指す～
61	私学教育の魅力を探る～夢探し夢実現を目指して～
62	21 世紀の教育を考える～グローバル教育を目指して～
63	新しい時代を担う魅力ある私学教育～安心と信頼に裏打ちされた私学教育の充実を目指して～
64	今こそ私学～明日への挑戦～
65	時代を先取りする私学～こころざしは高く、根は深く～

編　集　後　記

全国の私学から542名もの先生方にご参加いただき、全国私学教育研究集会を盛大に開催することができ、無事終了しました。これも日本私学教育研究所をはじめ、専門委員・客員研究委員、講師等の皆様のご指導のおかげであり、また、終始真摯な態度で主体的にご参加いただいた全国の先生方のご協力のたまものです。深く感謝申し上げます。

足かけ3年準備を進めてまいりましたが、大会が迫った最後の数カ月はあっという間に過ぎ、準備にやり残しがあるのではないかと、不安をかかえたまま当日を迎えました。けれども、開会直後から感じられた先生方の真剣なまなざしや熱気で、その心配は一気に吹き飛んでしまいました。

全体会では、高校生の若さあふれるダンスパフォーマンスに元気をもらい、記念講演「夏井いつきの句会ライブ～認め合う、伝えあう、俳句の力～」で、盛り上がりは最高潮に達しました。「アクティブ・ラーニングのお手本のような実践に引き込まれるとともに、言葉の持つ様々な力を感じることができた。」といった参加者のお声をいただき、企画運営を担当した我々関係者は、とてもうれしく感じました。

また、2日目の各部会においても、豊かな経験や深い研究をもとにした、講演、発表、パネルディスカッションや、密度の濃い研究協議等が行われ、大きな成果を得ることができました。

この度、そうした成果をまとめた研究集録ができあがりましたのでお届けします。今後の学校現場での教育実践に役立てていただければ幸いに存じます。

四国では、お遍路さんをお接待という行為でもてなす生活文化があります。我々運営委員も、おもてなしの心で運営にあたったつもりではありますが、行き届かないところがありましたら、おわび申し上げます。

来年度、鹿児島大会でお会いできることを楽しみにしています。

全国私学教育研究集会愛媛大会
運営総括委員長　永　井　　博
（新田高等学校　校長）

平成 29 年度
全国私学教育研究集会　愛媛大会
研究集録

印　刷　平成 30 年 3 月

発　行　平成 30 年 3 月

発行人　一般財団法人日本私学教育研究所
所　長　　中　川　武　夫

発行所　一般財団法人日本私学教育研究所
〒102-0073　東京都千代田区九段北 4 丁目 3 番地 8　市ヶ谷ＵＮビル 6 階
電話　(03)3222-1621

編　集　一般財団法人日本私学教育研究所
〒102-0073　東京都千代田区九段北 4 丁目 3 番地 8　市ヶ谷ＵＮビル 6 階
電話　(03)3222-1621

この報告の経費の一部は、日本私立学校振興・共済事業団
からの助成金でまかなわれています。

本研究集録についての著作権はそれぞれの講師・発表者・報告者等および一般財団法人日本私学教育研究所に帰属します。私的かつ非商業目的で使用する場合、その他著作権法により認められる場合を除き、複製、公衆送信、改変、切除、ウェブサイトへの転載等の行為は著作権法により禁止されています。